

令和4年度

博士論文（指導教員 丁 鋒）

明治期金國璞編纂北京語教科書
の総合研究

大東文化大学大学院外国語学研究科

中国言語文化学専攻博士課程後期課程

（学籍番号 18231103）

楊 璇

目 次

序論	1
0.1 研究背景	1
0.2 研究範囲と研究意義	2
0.2.1 研究範囲	2
0.2.2 研究意義	5
0.3 先行研究	6
0.3.1 金國璞関連先行研究	6
0.3.2 清末北京語の先行研究	7
0.4 研究方法	9
0.5 論文構成	10
本論	
上編 金氏教科書と著者関連研究	12
第一章 金國璞の教科書とその研究	13
1.1 金國璞編纂教科書	13
1.1.1 《北京官話 談論新編》	13
1.1.2 《士商叢談便覽》(1901、1902)	16
1.1.3 《支那交際往來公牘 北京語直譯附》(1902)	18
1.1.4 《華言問答》(1903)	19
1.1.5 《改訂官話指南》(1903)	20
1.1.6 《虎頭蛇尾》	20
1.1.7 《北京官話 今古奇觀》	21
1.1.8 《摺紳談論新集》(1907)	22
1.1.9 《華言分類撮要》(1907)	23
1.1.10 金氏教科書の内容の特徴	23
1.2 教科書の改編研究	24
1.2.1 《支那交際往來公牘 北京語直譯附》(1902)	24
1.2.2 《北京官話 今古奇觀》(1904、1911)	30
1.2.3 結論	41
1.3 金國璞の生涯とその研究	42
1.3.1 先行研究	42
1.3.2 共編者の研究	42
1.3.3 金國璞活動年表	56
1.3.4 結論	57
第二章 金氏編纂教科書の語法的研究	58
2.1 教科書における北京語特徴	58
2.1.1 「北京語における7項目の特徴」と金氏教科書の言語の比較	59
2.1.2 「北京語に独特と思われる12語」と金氏教科書言語の比較	61
2.1.3 「北京語の文法特点」と金氏教科書言語の比較	64
2.1.4 結論	77
2.2 教科書の語彙研究	78

2.2.1	北京語語彙.....	78
2.2.2	「アル化」語.....	86
2.2.3	歴史語彙.....	90
2.2.4	慣用語.....	94
2.2.5	結論.....	100
上編結論	101
下編	教科書の語学比較研究.....	102
第三章	品詞論：《兒女英雄傳》との比較.....	103
3.1	形容詞の比較研究.....	103
3.1.1	性質形容詞.....	103
3.1.2	状態形容詞.....	117
3.1.3	結論.....	122
3.2	副詞の比較研究.....	122
3.2.1	程度副詞.....	126
3.2.2	範囲副詞.....	129
3.2.3	否定副詞.....	130
3.2.4	語気副詞.....	131
3.2.5	情態副詞.....	133
3.2.6	結論.....	135
3.3	文末語気助詞の比較研究.....	135
3.3.1	“啊”系.....	137
3.3.2	“呢”系.....	140
3.3.3	“麼”系.....	141
3.3.4	“罷”系.....	141
3.3.5	その他の文末語気助詞.....	142
3.3.6	結論.....	144
第四章	構文論：《兒女英雄傳》との比較.....	146
4.1	“叫”構文の比較研究.....	146
4.1.1	“叫”と“教”.....	146
4.1.2	“叫”構文の使役表現.....	147
4.1.3	“叫”構文の受身表現.....	160
4.1.4	結論.....	163
4.2	“讓”構文の比較研究.....	164
4.2.1	“讓”の基本用法.....	164
4.2.2	“讓”構文の使役表現.....	165
4.2.3	“叫”構文との比較.....	170
4.2.4	結論.....	170
4.3	“給”構文の比較研究.....	172
4.3.1	“給”の基本用法.....	172
4.3.2	“給”構文の授与表現.....	176
4.3.3	“給”構文の使役表現.....	180
4.3.4	“給”構文の処置表現.....	181
4.3.5	“給”構文の受身表現.....	183

4.3.6 結論.....	184
下編結論	186
終論	188
1. 本研究の成果.....	188
2. 今後の課題.....	192
引用文献	194
既発表論文と各章関係	199
付録：金氏教科書における「アル化」語種類別で使用頻度と使用割合一覧表 ...	200

序 論

0.1 研究背景

近代日本の中国語教育は時代に応じて変化してきた。「現在の中国語教育に直接のつながりをもつものは明治以降である。」¹。1871年、明治政府は伊達宗城を欽差全権大使として清国に派遣し、大日本大清国修好条規を締結した²。大日本大清国修好条規の発効によって、日清両国の正式な国交が樹立され、交流は盛んになり、外務省内には漢語学所が設置され、通訳養成のための教育機関として中国語教育を行った。

六角恒広の論文「中国語教育史の時期区分」³によると戦前の中国語教育史は7期に分けられ、その第1期が「明治4年(1871)～明治10年(1877)」で、第1期は中国語教育の発足期である。その第1期においては南京官話教育が中心で、教師陣は唐通事からなり、学生のほとんども唐通事の後裔であった。使用された教科書は唐通事時代の物で、教育法は唐話教育であった。そして、「日本政府が清代国駐在公使を派遣するにあたり、北京官話が必要となったことにあった」⁴をきっかけに、第1期の南京語教育から北京官話教育へと転換された「明治10年(1877)～明治19年(1886)」が第2期に当たる。この転換は日本における近代中国語教育への転換であり、六角氏は「日本におけるその後の中国語教育がすべて北京官話の教育へ転換する一つの重要な転折点であり中国語教育において歴史的な意味をもっている。」⁵と指摘している。

突然の切り替えに伴い、当時北京官話のできる日本人が国内にいなかったことを問題視した日本政府は中国から北京官話教師を招聘すると同時に、北京へ東京外国語学校の漢語科の生徒を派遣し、北京官話の学習をさせた。

1876年(明治9年)に、当時唯一の外国語の専門高等教育機関であった東京外国語学校では北京官話の必要性が認識されたため、時代の変化に応じて、漢語科が教師陣や教材などを充実させ、北京官話教育に力を入れ始めた。六角氏は当時の東京外国語学校の様子を以下のように説明している⁶。

「1876年(明治9年)4月、新たに入学した20余名の生徒から、北京語の教育が始められた。これまでの生徒は南京語であったが、それらの生徒の大半も北京語に移り、残り少数の生徒のために南京語の授業がつづけられた。この北京語への転換により、生徒はもとより、教師もあらためて北京語の学習をよぎなくされた。」

このような背景から、1876年に北京出身の旗人である薛乃良が来日した。彼は北京語を教えに来日した最初の教師であった。その年から東京外国語学校は北京官話教育を始めた。1879年には続けて同じく旗人である龔恩祿が着任した。その後も関桂林、張滋昉、

¹ 六角恒広『近代日本の中国語教育』1996、9頁。

² 所蔵：公文書館。請求番号：B13090769300。

³ 六角恒広『中国語教育史論考』1989、9頁-43頁。

⁴ 同上、14頁。

⁵ 同上、14頁。

⁶ 六角恒広、横山宏『中国語への道』1975、54頁。

蔡伯昂などの北京語教師が東京外国語学校に勤務し、当時の中国語教育に大きな貢献をした。

中国語教育史の第3期が「明治19年(1886)～明治28年(1895)」である。第3期の最も大きな特徴は「新しく商業と中国語教育との結びつきが生まれてきた」⁷ことである。1873年に創設された東京外国語学校は1885年に附属高等商業学校、東京商業学校の2校と合併し、東京商業学校となった。これにより、東京外国語学校は廃校した。

「日清戦争後から日露戦争までの約10年間」⁸は中国語教育史の第4期にあたる。日清戦争後、当時外国語を専門に教育する学校がなかったため、近衛篤磨らが第9回帝国会議において、外国語学校の設立を建議した。この建議の採用により、1897年4月に高等商業学校附属東京外国語学校、即ち今日の東京外国語大学の前身が設立された。また、この時期において、北京日本人在住者による「支那語研究舎」(後に清語同學會に改名)も設立され、中国語教科書及び辞典類を専門に出版する田中慶太郎の文求堂が開店した。支那語研究舎と文求堂は何れも金國璞の中国語教育活動に深く関わっている。

金國璞(字卓菴、北京出身、生没年不詳)は1897年高等商業学校附属東京外国語学校の開校に伴い、北京語講師として文部省により招聘され、日本で6年間勤務した。六角氏(1989)は金國璞について「日本の中国語教育で各方面に尽力した中国人教師である。」⁹と評価した。金氏は日本に駐在した6年間、高等商業学校附属外国語学校の他に、台湾協会学校、東京帝国大学、善隣書院などの学校でも仕事を兼任していた。在日期间中、北京語教科書を8冊著し、帰国後も日本及び中国で7冊北京語教科書を出版した。外務省の資料によると、金氏は東京外国語学校で中国語を教え、帰国する前に、勲五等旭日章を受勲した¹⁰。金氏の経歴から、彼は草創期の中国語教育や北京語教科書の編纂に最も貢献し、影響力の大きい中国語教師であったと言える。

先行研究において、明治時代の北京官話教科書の言語について、多くの研究成果が発表されているが、金氏の北京語教科書に関する全般的な語学研究は未だされていない。しかし、金氏により編纂された北京語教科書は北京語の実用例が豊富で、当時の北京語の実態を反映しており、清末北京語研究の好材料である。従って、その中で用いられた北京語は現代北京語の成立経緯の一部と言え、歴史におけるその役割と意義をどのように読み取るかを検討する必要があることは言うまでもない。その上、金氏と関連する共編者や学生群に関する再考察にも深める余地があり、更なる研究が待たれる。

以上の現状を鑑み、本論文は金氏により編纂された北京語教科書についての詳細な語学研究、金氏及び金氏関連者の再研究、清末期に出版された北京語白話文小説《兒女英雄傳》との言語比較研究の3点を研究課題とする。

0.2 研究範囲と研究意義

0.2.1 研究範囲

筆者の調べによると、金國璞は生涯に亘り、13冊に上る北京語教科書を著した。出版時期の順に以下のとおり。

⁷ 六角恒廣『中国語教育史論考』1989、17頁。

⁸ 同上、20頁。

⁹ 同上、103頁。

¹⁰ 所蔵：公文書館。請求番号：勲00118100；件番号：011。

表 0-1. 金國璞の北京語教科書一覧

番号	書名	著者	出版社	出版年月
1	談論新編 北京官話	金國璞・平岩道知	平岩道知	1898年12月
2	士商叢談便覽上巻	金國璞	文求堂	1901年12月
3	士商叢談便覽下巻	金國璞	文求堂	1902年6月
4	支那交際往来公牘 北京語直譯附	金國璞・呉泰壽	泰東同文局	1902年6月
5	支那交際往来公牘訓譯	金國璞・呉泰壽	泰東同文局	1903年3月
6	華言問答	金國璞	文求堂	1903年4月
7	虎頭蛇尾	金國璞著 諸岡三郎編	諸岡三郎	1903年4月
8	改訂官話指南	呉啓太・鄭永邦著 金國璞改訂	文求堂	1903年5月
9	北京官話 今古奇観	金國璞訳	文求堂	1904年6月
10	北京官話 虎頭蛇尾	金國璞	徳興堂印字局 (北京)	1907年1月
11	搢紳談論新集	金國璞・鎌田弥助	文求堂	1907年3月
12	華言分類撮要	金國璞・瀬上恕治	文求堂	1907年3月
13	北京官話 今古奇観 (第二編)	金國璞訳	文求堂	1911年4月

《支那交際往来公牘訓譯》は《支那交際往来公牘 北京語直譯附》の日本語訳で、《支那交際往来公牘 北京語直譯附》に収録されている公牘原文の内容を纏めた上で、「支那交際往来公牘訓譯目次」を付け、日本語訓譯の前に公牘原文の単語説明を補充した教科書である。そのため、本論文では《支那交際往来公牘 北京語直譯附》のみを語学研究対象として取り上げる。また、《北京官話 虎頭蛇尾》(1907)では1903年に出版した《虎頭蛇尾》に出場人物の名前が加えられただけであり、内容の変更はないため、出版時期が早い《虎頭蛇尾》(1903)を語学研究対象として取り上げる。さらに、《改訂官話指南》に関しては、金氏が執筆したのは第一巻のみと判断できるため、第一巻だけを語学研究対象として取り上げる。従って、表1に示した13冊の教科書のうち、本論文の語学研究対象とするのは11冊である。この11冊の北京語教科書について、それぞれの文字数を集計したところ、計28万字あり、筆者により全てデータ化している。

本論文の研究範囲は金氏により編纂された北京語教科書を中心に、以下の3方面からの考察とする。

(1) 先行研究を踏まえながらの金氏の生涯と交友関係の再考察

金國璞は明治30年(1897)に開校した高等商業学校附属東京外国語学校(現東京外国語大学の前身)の中国語講師として、日本文部省により招聘され、日本で6年間勤務して、明治36年(1903)に同校講師を辞して帰国した。帰国後、当時北京に在住していた元支那語学校校長代理の山本滝四郎と金氏の教え子である日本人学生、上田三徳、古賀邦彦、林要五郎の4人が発起人として1903年8月1日北京に「支那語研究舎」(後に「清語同學會」に改名)を設立した。金氏は「支那語研究舎」に住みながら中国語教育

の発展に貢献し続けた。これまでの先行研究では金氏の出身、職歴、出版物、日本での生活、受賞歴などが考察されてきたが、金氏教科書の共編者は計6名で、そのうち鄭永邦、呉啓太、呉泰壽の生涯については、先行研究の考察が詳細であるのに対して、平岩道知、瀬上恕治、鎌田弥助については、簡単な伝記資料しか残されていない。本研究は金氏と関連のある人物、特に共編者を中心に、資料収集に努め、金氏の日本明治時代における中国語教育の発展への貢献を論述し、金氏の人物像をより一層詳しく描写する。さらに、共編者達と金氏が共編した北京語教科書が果たした役割の解明を試みる。

(2) 金氏教科書における言語研究と改編研究

金氏教科書の書名では、「北京語」、「北京官話」が多く使用され、それらの書名が示すとおり、金氏教科書は北京語のテキストとして、世に供された物であり、当然当時の北京語の実態を反映しているものと思われる。また、北京語の語彙が数多く記録されており、北京方言の研究のため、豊富な書面例を提供している。これらの北京語教科書は金氏の在日中に中国語授業で使用されただけでなく、帰国後清語同学会での中国語授業でも使用された。先行研究において、明治時代の北京語教科書について、多くの研究成果が発表されているが、金氏教科書に関する全般的な語学研究は未だなされていない。本研究では、この空白を埋めるために、金氏教科書における品詞と構文の二つの面から整理分析を行い、11冊の金氏教科書の全文を入力し、検索データを作成する。その上で、使用例の統計を運用して、北京語の有する言語特徴を解明する。また、《北京官話 今古奇観》(1904、1911)、《支那交際往来公牘 北京語直譯附》(1902)の3冊の改編教科書における改編研究を行い、原作との関連性、相違点を明らかにする。最後に、金氏教科書の言語実態、学術的価値、明治期の中国語教育史上の位置付けをどのように認識するかを述べる。

(3) 《兒女英雄傳》の言語についての比較研究

《兒女英雄傳》は中国清末期に文康が著した白話文武侠小说、全40回から構成され、晩年期、同治時代(1862-1874)に成書された。初期は写本で流通していたが、光緒4年(1878)に北京聚珍堂から木活字本で出版された。金氏教科書について、現在までに確認できた出版物の中で刊行年が最も早い教科書は1898年に平岩道知により出版された《北京官話 談論新編》であり、最後は1911年に文求堂から出版された《北京官話 今古奇観(第二編)》である。刊行年から見ると、金氏が最後に編纂した会話教科書《北京官話 今古奇観(第二編)》(1911)と《兒女英雄傳》の差は約33年となる。日中両国で《兒女英雄傳》に関する語学研究調査は数多く行われており、最も研究されている北京語白話文小説とも言える。また、金氏と文氏は共に北京出身で、著作も共に「北京語」という言語基礎を共有しており、成書時期も近く、《兒女英雄傳》は本稿の比較研究に最もふさわしい対象だと考える。

金氏教科書は北京語で書かれており、北京語研究の好材料である。しかし、「北京語」という言葉は一つの大まかな言い方である。そのため実際には、「北京語」の内部には、使用地域、使用者の社会的階層などによって、様々な差異が生じる。ここでは、現代北京語の成立の経緯を整理する一環として、共時的な視点からの《兒女英雄傳》の言語についての比較研究を行い、両者における言語使用上の相違点を突き止め、差異が現れた原因を探究する。《兒女英雄傳》との言語比較研究は金氏教科書の言語性格をより明確に見るのに不可欠な研究であり、さらに、日中両国の学者から注目されてきた「北京語」

の内部差異研究に関連しており、清末北京語の実態の揭示及び「北京語」の内部差異問題の解明という点に学術意義がある。

0.2.2 研究意義

本研究の意義は主に以下の2点となる。

第一に、金氏教科書の語学面からの研究の学術的意義。

日本では近代漢語研究の大家太田氏をはじめとする学者達が行った北京語の特徴についての研究以外に、近年では清末北京官話教科書に対する関心度が高まっているが、日本の中国語教育草創期に多大な功績を残した金國璞が編纂した北京語教科書における語彙、文法に対する全容解明を試みた研究はまだ見当たらない。そこで本研究では金氏教科書を語彙、文法、改編、比較の4方面からの総合的な研究を行った。その結果、まず、金氏教科書に用いられた北京語語彙及び北京語文法の考察を通して、金氏教科書は清末北京の鮮明な社会風俗と純粋な北京口語の実態を反映していることが判明した。また、改編教科書の研究を通して、金國璞が会話教科書を編纂する際に難度の高い語彙や文法表現の使用を控え、基礎的な北京語語彙と文法を使う改編方針を取っていたと考えられた。金氏教科書は当時の北京語教科書として典型的な内容であり、当時の北京語を研究する際、貴重な文献材料であることが改めて認識できた。そのため本研究は、金氏の北京語教科書に対する全般的な語学研究の空白を埋めることで、北京語の語学研究、語学教育方法論、語学教材編纂論にも参考価値を与えるものとする。さらに、金國璞が編纂した教科書が当時の中国語教育に果たした役割と位置づけを明確にした。作成した語彙と文法実用例データベースは今後北京語の語学関連研究に参考となる価値があると言える。

第二に、《兒女英雄傳》との比較研究は清末北京語の実態解明及び「北京語」の内部差異の研究に意義がある。

《兒女英雄傳》との言語比較研究は、共時的な視点から行う研究で、現代北京語の成立の経緯を探るための調査作業の一環となる。《兒女英雄傳》は清代北京語の代表的な言語資料とみなされており、金氏教科書との成書時期が近く、同じ北京語で書かれた両者の言語比較は清末北京語の実態解明の点で意義がある。そして本研究では両者における北京語特徴が鮮明な項目を選び、比較分析を行った結果、同じ「北京語」を使用しているものの、使用頻度、使用傾向、使用対象などの言語運用上異なる点が複数存在していることが明らかになった。品詞部分に関しては《兒女英雄傳》で使用された形容詞、副詞、文末語気助詞の種類は金氏教科書より遥かに多い一方で、金氏教科書は《兒女英雄傳》で使用された文語の語彙をほとんど取り除き、日常で最も使われている北京語が取り入れられていた事実を明らかにすることができた。また構文部分に関しては“叫”構文、“讓”構文、“給”構文の分析を通して、両者における“叫”、“讓”、“給”について、運用上の相違点を明らかにした。そこでは、徐々に後退した使い方もあれば、優勢になった使い方もあった。金氏教科書と《兒女英雄傳》における言語の比較作業を通して、これらの言語資料が北京語の系譜に属するものとして価値のあることが再確認できた。

0.3 先行研究

太田辰夫は北京語文法研究の第一人者であり、中国語に関する研究範囲が広く、開拓的な研究を数多く残した。それは『中国語歴史文法』（1958）、「清代の北京語について」（1950）、「北京語の文法特点」（1965）、「近代漢語」（1969）と卢小群《老北京土话语法研究》（2017）の論述にまで及び、本研究の語学研究設定の基礎としている。

0.3.1 金國璞関連先行研究

一 金國璞に関する研究

金國璞の生涯については、六角氏と楊鉄錚の考察が一番詳細である。

六角氏は著作の『中国語教育史稿拾遺』（2002）で1章を設け、金氏を含め10名程度の教師を紹介した。六角氏は「その中でとくにその名を留めておきたい中国人教師は、金國璞と張廷彦の兩人である。」¹¹と述べ、金氏の出身、職歴、出版物、教え子、支那研究舎での活動などに触れている。特に『北京官話 談論新編』の英語版本が出されたことにより、金氏は日本人ばかりでなく、欧米人の中国語学習にも間接的に影響をあたえたと言及した¹²。

楊鉄錚の論文「明治期中国語教育における伝統継承と近代化：金國璞、張廷彦と『官話指南』を中心として」（2017）は金國璞の履歴書、在職歴を示す資料、新聞、雑誌、広告、学生の回顧録、出版物などの資料を集め、それに基づいて金氏の出身、職歴、出版物、日本での生活、受賞歴などを考察した。特に来日する前の生活、来日した後の生活、そして帰国した後の状況を明らかにした。

韓燕《金國璞所編北京官話漢語教科書研究》（2020）は金氏が編纂した《北京官話〈今古奇觀〉》、《北京官話〈談論新篇〉》、《華言問答》、《改訂官話指南》、《北京官話〈虎頭蛇尾〉》5冊の教科書を取り上げ、教科書の構成、内容などを紹介し、また、太田辰夫が指摘した「北京語における7項目の特徴」に基づいて、5冊の教科書の言語特徴の考察を行った。

二 金氏教科書の語学研究

金氏教科書の言語に関する先行研究は山田忠司「『北京官話 今古奇觀』の言語について」（2004）、小路口ゆみ「『北京官話今古奇觀』における“把”構文について」（2018）、徐麗〈日本明治時期漢語教科書研究—以《官話指南》《談論新篇》《官話急就篇》为中心〉（2014）、高育花〈日本明治時期漢語教材《北京官話談論新篇》《官話北京事情》語氣詞研究〉（2017）、董瑞祥〈《談論新篇》词汇研究〉（2017）がある。

山田氏「『北京官話 今古奇觀』の言語について」は金氏の手による『今古奇觀』の翻案本である《北京官話 今古奇觀（第一編）》と《北京官話 今古奇觀（第二編）》の言語特徴を考察した。山田氏は《北京官話 今古奇觀（第一編）》と《北京官話 今古奇觀（第二編）》の言語は太田氏の「清代北京語における7項目の特徴」に適用すると叙述し、さらに、《紅樓夢》、《三俠五義》、《兒女英雄傳》、《燕語新編》、《燕京婦語》、《小額》の6冊の北京語資料および普通語との比較を通してその言語の性格の分析を行い、言語的特徴において《北京官話 今古奇觀》と比較的によく一致しているの

¹¹ 六角恒廣『中国語教育史稿拾遺』2002、114頁-115頁。

¹² 同上、110頁-111頁。

は《小額》であり、この2書が同一の北京語内方言地区の言語によるという推測を出した。

小路口ゆみ「『北京官話今古奇観』における“把”構文について」は『今古奇観』で用いられた“把”構文の考察を行い、その特徴を2点にまとめた。つまり“把”構文の文構造は比較的豊富であること、そして副詞“還”“不”“就”と能願動詞“要”の位置は“把”の前でも可能であるだけでなく、「把+N2」の後・動詞の前でも可能であるという。そしてさらに、この2点の特徴についての理由を論じた。

徐麗〈日本明治時期汉语教科書研究一以《官話指南》《談論新篇》《官話急就篇》为中心〉は《官話指南》《談論新篇》《官話急就篇》の3冊の明治期北京語教科書を中心とし、教科書の用語、内容などの分析を通じて、清代末期の経済貿易、政治外交、文化教育、社会風情などを解明した。また、3冊の北京官話教科書に用いられた語彙と文法の考察を行い、明治期の北京語教科書における歴史的な位置づけを論じた。

高育花〈日本明治時期汉语教材《北京官話談論新篇》《官話北京事情》語気詞研究〉は《北京官話談論新篇》と《官話北京事情》における文末語気助詞の使用状況を分析した上で、同時期に出版された《小額》と《春阿氏》の文末語気助詞との比較を行った結果、《北京官話談論新篇》と《官話北京事情》で使用された文末語気助詞は20世紀初頭の一般的な北京語文末語気助詞であり、普遍性があるが、「吧」「嗎」の使用が控え目であると結論付けた。

董瑞祥の論文〈《談論新篇》词汇研究〉では《談論新篇》(1905、第4版)における北京官話語彙を881個統計し、単音節、二音節、三音節に分類、そして各分類の例積をあげ、語彙の特徴として北京方言色彩、商業色彩が鮮明であることをまとめた。また、HSK各級語彙と比較するため、《談論新篇》に用いられたHSK語彙を948個抽出し、対外中国語教育の視点から《談論新篇》の価値を論じた。この論文は本論文と重なる問題を論じたが、使用する文献資料が異なるため、本論の参考としない。

0.3.2 清末北京語の先行研究

近年、近代中国語教育における研究が盛んになり、特に清末北京語の言語実態などについて、かなり広範な分析が展開され、研究成果が立て続けに発表されている。また、日本明治期に刊行された北京官話教科書に目を向け、特定の文献資料を対象とする研究成果も分散的に多々出されている。

日本において、中国語文法の歴史、特に現代の中国語の文法の歴史を研究するために不可欠な参考書である太田辰夫『中国語歴史文法』(1958)は現代中国語文法がどのように形成されているかを歴史的な観点から考察し、唐から明、清までの中国文法の歴史的発展を詳細に説明しており、現代中国語文法史の先駆的な著作と言える。また、太田氏によって北京語の特徴について探究する論文が3編執筆された。「北京語の文法特点」(1965)は名詞、代詞、数詞・量詞、形容詞、動詞、副詞、助詞の8種類について、北京語、北方語、北方方言、南京官話及び他の方言との差異を考察し、全72項目、100個以上の語彙を挙げた。「清代の北京語について」(1950)は「北京語に獨特と思われる語」の中に、頻用される「兒」、「咱(咱)們」、「您」、「倆(仨)」、「別(禁止)」、「得(děi 須要)」、「多咱」、「給(介詞)」、「的慌」、「是(似)的」、「來着」、「罷咱」の12語を提示した。「近代漢語」(1969)は北京語における7項目の特徴について、「一人称代詞の包括形(inclusive)と除外形(exclusive)を〈咱們〉〈我們〉で区別する。〈俺〉〈咱〉などは用いない。」、「介詞〈給〉を有す

る。」「助詞〈來着〉を用いる。」「助詞〈哩〉を用いず〈呢〉を用いる。」「禁止の副詞〈別〉を有する。」「程度副詞〈很〉を状語に用いる。」「〈～多了〉を形容詞の後に置き“ずっと、はるかに”の意を表す。」と指摘した。「清代北京語における7項目の特徴」は清代北京語研究の基準として北京語の研究に多く取り込まれている。

北京官話の教科書を取り上げ、清末北京語の実態を考察した先行研究に関して、山田忠司が「『北京官話 今古奇観』の言語について」の他に、「清末北京語の一斑『燕語新編』を資料として」（2003）を執筆した。この論文は1906年に日本で刊行された中国語会話教科書『燕語新編』で実際に話されていた北京語を反映している物とし、その言語を太田辰夫（1964、1969）の論考に照らした上、さらに同時代の資料『燕京婦語』との比較も行い、『燕語新編』の言語が北京語であることは疑う余地が無いが、多くの点で『燕京婦語』の言語とは異なっているため、単に北京語といってもそれは均質的なものではないと結論した。

他に北京官話教科書に関する研究として、内田慶市、氷野善寛『官話指南の書誌的研究 付影印・語彙索引』（2016）は研究篇、史料篇、影印本文の3部分の構成からなり、『官話指南』の版本、来歴、派生などを明確し、『官話指南』の全語彙索引、九江書會版『官話指南』双行注対照表、『改良民國官話指南 後附釋義』釋義語彙リストを編集した。また、内田慶市『北京官話全篇の研究 付影印・語彙索引』（2017）は鱒沢文庫に収蔵している19世紀末期、日本人外交官深澤暹が編纂した全378章からなる北京官話テキスト『北京官話全篇』を対象とし、中に用いられている人称代詞、副詞、語気詞、「アル化」語など詳細な考察を行い、全語彙索引を編集した。最新としては、内田慶市『北京官話資料8種「京華襍拾」——解題と影印・語彙索引』（2022）はカリフォルニア大学パークレー校のジョン・フライヤー文庫で見出された『京華襍拾』を取り上げ、解題、索引、影印の3部分から構成しており、北京官話資料8種の影印とそのうちの3種（『京話指南』、『意拾喻言』、『聖諭廣訓京話』）の全語彙索引を編集した。これらの書籍の刊行は北京語研究の資料として極めて貴重なものであり、収録されている影印資料、語彙索引、言語考察は今後北京語の研究に裨益すること大である。

また、古市友子「近代日本における中国語教育に関する総合研究—宮島大八の中国語教育を中心に」（2013）は『官話急就篇』（初版）『急就篇』の語彙を比較考察した結果、北方方言が多く取り入れられていると提示した。さらに『官話急就篇』（初版）、特に「問答」部分に含まれる北京語の文法特徴について、太田氏の「清代北京語における7項目の特徴」に照らして、うちの6つが用いられていることを明らかにした。王雪「明治大正における日本人の北京官話の学習—日本人編纂の北京官話学習書を資料として」（2017）は『清語会話案内』の北京語、『四声標註支那官話字典』の北京俗語、『日華語学辞林』、『井上支那語辞典』、『支那語辞彙』の3冊の北京官話辞典における北京官話の「r化」語の扱いの変化を考察した。孫云偉「明治期北京官話教科書『官話指南』及び学習補助教科書の総合研究」（2019）は日本人が初めて編纂した北京官話教科書『官話指南』の初版に関する語彙と文法を研究した。そこでは『官話指南』に用いられた北京語語彙、「兒化詞」、文語を抽出し、太田氏と周一民による北京語文法特徴を参照し、北京語の特徴が有する文法をまとめた上、詳細な分析を行った。

中国では、最新の北京語研究における力作である卢小群《老北京土话语法研究》（2017）は“绪论”、“形态”、“词类”、“句法”、“表达”、“结语”の6章を設け、中国語文法を基にして、音声、語彙、旧北京方言の文法体系について詳細な研究を行っ

た。全書は1万語以上の“北京土話”を収録し、旧北京方言における造語形態、品詞、特殊文型について探究しながら、表現論の視点から旧北京方言が用いる言語の認知心理的特徴を分析した。また、旧北京方言における鮮明な言語表現方法と表現方式を指摘し、旧北京方言の多様で生き生きとした表現を掲示した。

周一民が著した《北京口语语法（词法卷）》（1998）は北京方言の文法を研究対象とし、詞法の視点から北京語文法の全般的な考察を行った。全書では品詞別で名詞、動詞、形容詞、介詞、量詞など13種類の北京口語が考察された上、北京口語の実用例も幅広く収録しており、北京口語研究に関する貴重な情報を提供した。《現代北京話研究》

（2002）は構詞、言語、語彙、文法、北京語と現代漢語の5つの面から北京語の言語実態を抽出した。これらによって明らかにされた言語実態は北京語に対する認識を塗り替え、現代中国語の研究の学術価値を大いに有する。さらに、掘り出された北京語の言語実態に基づいて研究分析を行い、中国語言語学の新たな領域を開拓し、方言は文化に深く関わっていることを解析した。

胡明揚《北京話初探》（1987）は〈北京、北京人、北京話〉、〈普通話和北京話〉、〈北京話社会調査（1981）〉、〈北京話の語気助詞和嘆詞〉、〈北京話的稱謂系統〉、〈北京話形容詞的再分類〉、〈北京話声母W的音值〉、〈关于北京話的語調問題〉、計8本の北京語に関する論文を収録しており、北京語と普通話（標準語）との差異、北京語の音声、北京語の語法などの北京語研究に大きく寄与した。

張美蘭《明清域外官話文献語言研究》（2011）は日本明治期に刊行された官話教科書を含む、大量の“域外漢語資料”に基づいて、明清代に使用された中国語と比較した上、19世紀末期の南方官話及び北京官話を詳しく考察した。明清代の北京官話の語彙や文法などの地域分部特徴を論じ、新たな視点から明清代の中国語の実態を掲示した。

魏薇《北京官話教科書詞匯研究》（2013）、陳明娥《东亚漢語史書系日本明治時期北京官話課本詞匯研究》（2014）、張美蘭《明治期間日本漢語教科書中的北京話口語詞》（2007）、陳明娥、李无未《清末民初北京話口語詞匯及其漢語史價值—以日本明治時期北京官話課本為例》（2012）、楊杏紅《日本明治時期北京官話課本中的儿化詞》（2013）は共に北京官話教科書の語彙特徴を考察した。張美蘭《清末北京官話的句法特點—以幾部外域北京官話資料為例》（2009）、楊杏紅《日本明治時期北京官話課本語法研究》（2014）、李无未、楊杏紅《清末民初北京官話語氣詞例釋—以日本明治時期北京官話課本為依据》（2011）、李正群《日本明治時期北京官話教材“叫”字句研究》（2019）は北京官話教科書を中心、その文法特徴、文末語氣助詞、“叫”構文を考察した。陳怡嬌《清末民初北京話程度副詞研究》（2020）、金紅梅《清末民初北京話特殊副詞研究》（2015）、陳曉《清末民初北京話里的程度副詞“所”》（2013）、劉云、李卉《清末民初北京話的語法特點》（2015）は清末の北京語の副詞を考察した。

0.4 研究方法

本研究は主に整理法、比較法、分析法、考証法、統計法、製表法などの研究方法を総合的に運用する。

金氏及び金氏の学生群、共編者などに関する再研究は、公文書館、外務省、文部省の公開資料を整理し、考証した上で、使用する。

金氏教科書の語彙研究においては、まず、複数の北京語辞典及び成語辞典と照らし合わせながら、11冊の中の北京語語彙、歴史語彙、慣用語を洗い出し、それぞれを分類し、製表する。

金氏教科書における言語研究では、太田辰夫氏が著した「清代の北京語について」(1950)、「北京語の文法特点」(1965)、「近代漢語」(1969)と卢小群が著した《老北京土话语法研究》(2017)の論述を基にして、金氏教科書の中で北京語の特徴が著しい文法項目を品詞別、構文別で分類し、実用例のデータを作成し、分析を行う。さらに、《儿女英雄傳》との言語比較研究を行う際、前述した太田辰夫(1974、1975)、周一民(1998、2002)、山田忠司(1998、2004、2016)、卢小群(2017)などの研究成果を活用し、両方の使用例を統計し、比較法により両者の言語差異を浮かび上がらせ、それぞれの北京語特徴を解明し、言語使用差異を明らかにする。

0.5 論文構成

本研究は序論、本論、終論の3部分からなり、本論は上編と下編の2編を4章に分けた構成となっている。そして、金國璞の生涯と11冊の北京語教科書における教材研究及び語学研究を中心に詳細な考察を行う。さらに、この11冊の北京語教科書と中国清末期の文康が著した白話文武俠小説である《儿女英雄傳》の言語使用についても比較を行い、両者の言語使用上の差異を突き止める。

まず、序論は5節からなる。第1節は本研究の背景である明治時代の中国語教育史についてと、また、当時金國璞により編纂された北京語教科書がどのような存在であったのかを整理し、先行研究を紹介する。次に第2節では、本研究の研究対象である11冊の教科書と《儿女英雄傳》の研究資料の概略を述べる。そして第3節では、前述の研究範囲に関わる先行研究を金氏についての研究及び清末北京語の語学研究の順で紹介する。第4節では研究方法を叙述し、最後の第5節では、本研究の章節配置及び内容構成を述べる。

本論の上編は「金氏教科書と著者関連研究」で、第一章、第二章に分かれる。金氏教科書と金氏の生涯を全般的に考察し、金氏の中国語教育及び金氏教科書の明治末期の中国語教育について、及びその意義と役割について論じる。

第一章は「金國璞の教科書とその研究」についてで、その第1節は「金國璞編纂教科書」である。ここでは金氏が編纂した13冊の北京語教科書における、教材研究の視点からそれぞれの版本、構成、内容、特徴について詳しく考察する。第2節では「教科書の改編研究」での《支那交際往来公牘 北京語直譯附》(1903)、《北京官話 今古奇觀》(1904)、《北京官話 今古奇觀(第二編)》(1911)、3冊の改編教科書についての編纂目的と改編過程を分析し、原作との比較研究を行う。そして、金氏の北京語教科書が明治末期の中国語教育で果たした役割を突き止め、重要性を論じる。第3節は「金國璞の生涯とその研究」である。本節は金氏教科書の共編者に焦点に当て、金氏と共編者の関連を探ることによって、金氏の人物像をより一層詳しく描写する。そのためまず、先行研究を踏まえて、鄭永邦、吳啓太、吳泰壽の生涯についてまとめる。次に、アジア歴史資料センターによる資料に基づいて、平岩道知、鎌田弥助、瀬上恕治、3人の経歴を考察する。最後に、金氏及び教科書の共編者の履歴書、公文資料、先行研究などの資料の考察により、「金國璞活動年表」を作成する。

第二章は「金氏編纂教科書の語法的研究」。第1節は「教科書における北京語特徴」である。本節は太田辰夫氏の北京語の特徴について3編の論文に提示された北京語特徴項目を基準として、金氏教科書に用いられた言語は太田氏の研究における北京語特徴を有するかどうかを探究する。第2節は「教科書の語彙研究」である。まず、《北京话词典》、《现代北京口语词典》、《北京话词语例释》などの北京語辞典を参考にした上で、

金氏教科書に使用された北京語語彙を取り上げる。次に、金氏教科書に用いられた「アル化」語を抽出し、出現頻度に基づいて分析を行う。そして品詞別でまとめた上で「アル化」語の使用状況と特徴を考察する。また、金氏教科書に用いられた語彙は、時代の変遷につれて、共通語になった語彙もあれば、既に消えた語彙もある。本節では、それらの現代北京語に使われなくなった語彙にも注意を払った。歴史語彙を考察する際に、《清代典章制度辞典》を参考にした上で、歴史語彙を清代典制用語、生活用語、軍事用語の3類にまとめ、歴史語彙のデータベースを作成する。最後に、金氏教科書に使用された慣用語を成語と諺に分ける。以上のようにそれぞれのデータベースを作成し、金氏教科書の北京語の言語的色彩を表出させる。

下編は「教科書の語学比較研究」で、第三章から第四章までである。品詞と構文の発展軌道をさぐることは現代中国語の文法研究と語彙研究の重要な作業である。下編は太田辰夫《中国語歴史文法》、卢小群《老北京土话语法研究》、周一民《北京口语语法》（词法卷）などの著作を参考に、金氏教科書の言語を品詞と構文に分類し、北京語特徴を有する文法を詳細に研究する。その上で、先行研究の成果を踏まえ、これまで最も研究されてきた中国清末期の文康が著した白話文武侠小说《儿女英雄傳》との言語比較研究を行い、両者の言語使用上の差異を考察し、相違点を検討する。最後に、両者の言語差異を突き止め、言語使用上の変化を明らかにする。

第三章は「品詞論：《儿女英雄傳》との比較」についてで、3節を設け、中国語文法を基準として、品詞別に、形容詞、副詞、文末語気助詞の3類についての語学研究を行う。さらに、形容詞を種類別で、性質形容詞と状態形容詞に分類し、副詞は使用義別で、程度副詞、範囲副詞、否定副詞、情態副詞に分類し、文末語気助詞を発音別で、“啊”系、“呢”系、“麼”系、“罷”系とその他の文末期助詞に分類し、計11項目、そして金氏教科書に用いられた形容詞、副詞、文末語気助詞の全面的な考察を行う。11項目の北京語特徴を有する文法を全て取り上げ、それぞれの言語使用状況を分析し、使用特徴を解明する。その上で、《儿女英雄傳》との比較研究を行い、両者での使用頻度を統計にかけ、統計データと比較法を運用し、言語使用上の相違点を解明する。

第四章は「構文論：《儿女英雄傳》との比較」についてで、本章は3節を設け、北京語の言語特徴が鮮明な“叫”構文、“讓”構文、“給”構文についての研究を取り上げる。使用義別で、“叫”を指示義、誘発義、許容義、受身義に分類し、“讓”構文は指示義、誘発義、許容義、そして“給”構文を給予義、使役義、処置義、受身義に分類し、計11項目、各項目の使用頻度、使用傾向、使用特徴などの問題を明らかにする。その上で、《儿女英雄傳》との比較研究を行い、両者の構文使用例を統計にかけ、統計データに基づいて、各構文における使用上の相違点を探究し、使用変化の過程を揭示する。各構文の使用差異を通して、清末北京語における“叫”構文、“讓”構文、“給”構文の使用特徴及び使用変遷の解明を試みる。

そして最後に終論として、研究成果のまとめ、今後の研究課題を示す。

本 論

上編 金氏教科書と著者関連研究

第一章 金國璞の教科書とその研究

本章は金氏が編纂した13冊の北京語教科書におけるそれぞれの版本、構成、内容、特徴について教材研究の視点から詳しく考察する。また、《支那交際往來公牘 北京語直譯附》(1902)、《北京官話 今古奇觀》(1904)、《北京官話 今古奇觀(第二編)》(1911)3冊の改編教科書についての編纂目的と改編過程を分析し、原作との比較研究を行う。

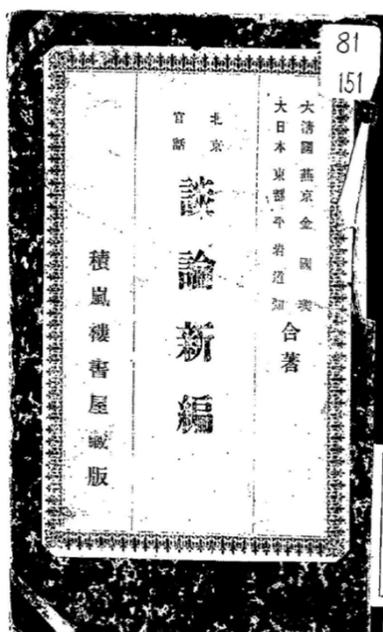
1.1 金國璞編纂教科書

金國璞は生涯数多くの中国語教科書を出版した。教科書の形式によって、辞書類教科書、時文教科書、会話教科書に分けられる。辞書類の教科書は1冊で、単語、フレーズ、諺が数多く収録している。時文教科書は1冊で、公牘は外交文書中心に執筆されていることから、外交関連或いは翻訳を行う必要がある学生の需要に応じて出版したと考えられる。会話教科書は11冊、様々な場面で使える日常会話を中心に作られた。

以下、金國璞の13冊の会話教科書及びその関連教科書を版本、構成、内容、特徴などの方面から紹介する。

1.1.1 《北京官話 談論新編》

(1) 《北京官話 談論新編》(1898)



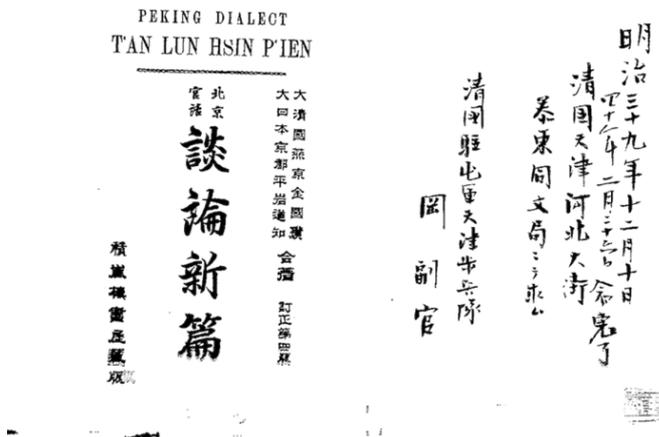
《北京官話 談論新編》(1898)は今までに確認された金國璞の出版物の中で刊行年月が最も早い教科書である。これは金國璞と当時の陸軍省参謀本部平岩道知の共編で、服部宇之吉と張廷彦が序文を著し、1898年(明治31年)12月に平岩道知により出版された。

《北京官話 談論新編》の正文は133ページで、約49,000字、100章からの構成となる。各章は200～600字程度で、一つ的话题を中心に問答式で会話を展開し、官界、外交、商業、農業、文化など様々な会話場面が記録されている。服部宇之吉は序文で「彼此の情を通し彼此の信を堅くせんには言語文章によらざるへからず」とし、本書は「書中載するところの事上は官府の事務より下は商賈の業務に至るまで事々皆刻下の要務にあらざるは無く時務に適切なるに於ては舊来流布の諸書の及ふところにあらず」と推薦している。また、張廷彦も序文で「語言較諸自邇集全部亦有過而無不及」と高く評価した。

(国立国会図書館近代
デジタルライブラリーより)

共編者平岩道知は1879年11月から1881の12月まで、参謀本部が派遣した留学生として、北京公使館で2年間北京官話の学習をした。恐らく、金氏は当時公使館で中国語を教える教師の一人であったことから、平岩道知は金氏と共著で《談論新編：北京官話》を出版したと考えられる。¹³

(2) 《北京官話 談論新篇》(1905)



1905年(明治38年)に出版された《北京官話 談論新篇》(訂正第四版)は書名の「編」を「篇」に変え、服部宇之吉と張廷彦が著した序文の順序も変えた。正文内容は《談論新編 北京官話》と一致する。

(『中国語教本類集成』(第一集第四卷)より)

(3) 《官話談論新篇》(1941)



(『中國文學語學資料集成』(第二篇第一卷)より)

現在は、1941年(昭和16年)6月に刊行された第25版までが確認ができる。

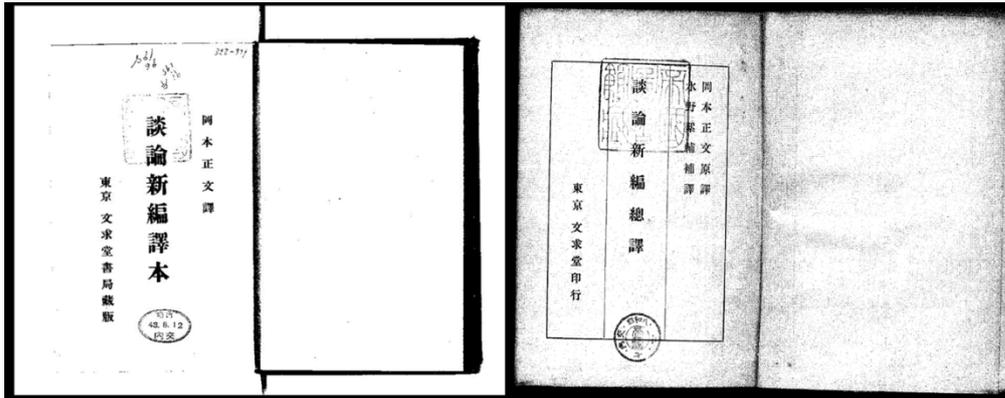
《官話談論新篇》は《北京官話 談論新編》と同じく、100章からの構成となるが、ページ数は133ページから202ページに増えた。董瑞祥(2017)によると、《官話談論新篇》の100章の中で、前75章は僅かな文句の増減以外、初版《北京官話 談論新編》とはほぼ一致するが、第七十六章から第一百章までは全て書き換えたものとなる。

《官話談論新篇》の書名変更と内容変更は何版からあったのか今のところ確認できないが、変更前と変更後の内容を比較したところ、内容変更がなされた大体の時期が伺える。《北京官話 談論新編》に収録された「同文館東語学堂の設立」、「京師大学堂の設立」、「直隸総督の設立」、「戊戌の変法」など清末期のタイムリーな話題が第25版の《官話談論新篇》

では全て削除された、代わりに「新暦と旧暦」、「華僑についてのお笑い話」、「体操教員」など中華民国初期に現れた話題に入れ替えられた。特に、第七十六章の「新暦と旧暦」に記述された「新暦」という言い方は辛亥革命の翌年1912年(明治45年/大正元年)から使用されるようになった。従って、少なくとも《官話談論新篇》の内容変更は1912年以後行われたと推測でき、内容変更と共に書名変更もしたと考えられる。

¹³ 六角恒廣 2002、108 頁。

(4) 『談論新編譯本』 (1910) と『談論新編総訳』 (1933)

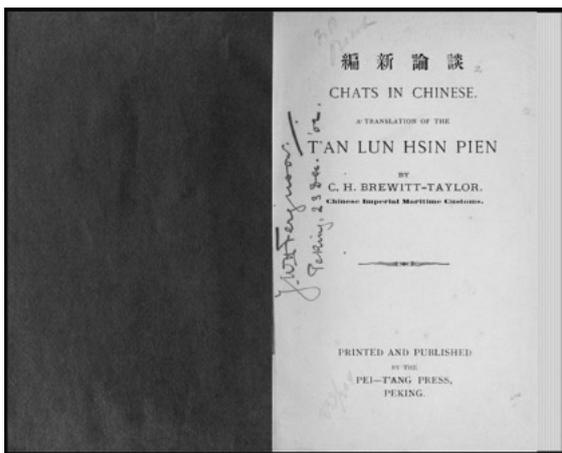


(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより)

筆者が調べたところ、《北京官話 談論新篇》の日本語訳は1900（明治33年）に刊行された『談論新編訳』が最初であり、所蔵は大阪府中央図書館であるが、これは未見である。『談論新編譯本』は《北京官話 談論新篇》が刊行された12年後の1910年（明治43年）に文求堂から刊行された。著者岡本正文は高等商業学校附属外国語学校清語科本科の第一期生である。その後、1933年（昭和8年）、水野絮輔は『談論新編譯本』の補訂を行い、書名を『談論新編総訳』に変え、出版した。

『談論新編譯本』の著者岡本正文は《北京官話 談論新篇》の正文部分を日本語に訳した上で、毎章の最後にその章の新出語彙を羅列し、ウェード式で発音表記し、日本語の意味解釈も加えている。

(5) 《Chats in Chinese A Turanslation of The T' an Lun Hsin Pien》 (1901)



《北京官話 談論新編》の英語版の全称は《Chats in Chinese: A Turanslation of The T' an Lun Hsin Pien》である。六角氏（2002: 110）によると、《北京官話 談論新編》の英語版はC. H. Brewitt-Taylorにより『Chats in Chinese』として1901年（明治34年）にPei-T' ang Pressから出版された。

C. H. Brewitt-Taylorはイギリス人 Charles Henry Brewitt-Taylor (1857-1938) であり、中国名は“鄧羅”と書き、中国に40年間住み、税関職員として勤務していた。鄧羅は《北京官話 談論新編》の英語版を執筆した他に、《三国演义》の英語版《Romance of the Three Kingdoms》も出した。Pei-T' angとはカトリック教会“北京北堂”¹⁴のことである。《北京官話 談論新編》の英語版は《官話指南》

¹⁴ 任继愈《宗教大词典》1998、73頁：“北京北堂，中国天主教堂。在北京西安门内西什库。原址在中海西畔的蚕池口。清康熙三十八年（1699），康熙帝为感谢传教士进药治愈其病，赐地见教堂，并亲撰匾

の英語版¹⁵と共に清末期の税関で勤務する外国職員たちの中国語試験の参考書として採用された¹⁶。

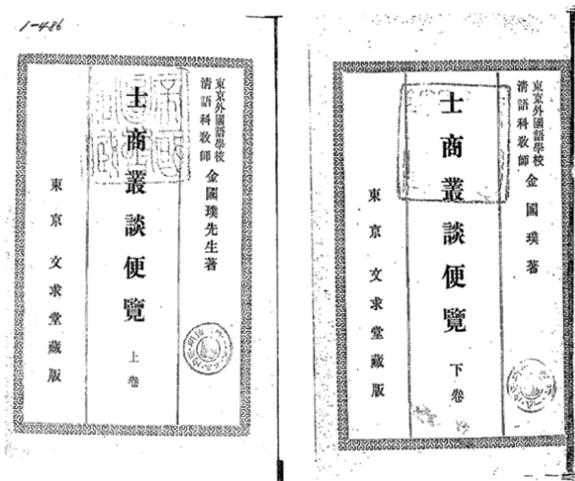
《北京官話 談論新編》は明治時代から昭和初期まで、長年に渡り、日本の中国語教育に深い影響を与えた。《北京官話 談論新編》は東京外国語大学の中国語授業に使用され、さらに、中国に持ち込まれ、東亜同文書院の中級段階の中国語授業にも採用された¹⁷。英語版の刊行によって、《北京官話 談論新編》は日本人ばかりでなく、欧米人の中国語学習にも影響を与えた。『談論新編総訳』の出版は昭和時代に入っても《北京官話 談論新編》が北京語教科書として世に需要が有ることを証明した。

《北京官話 談論新編》は会話式で編纂され、内容が豊富で、実用性が高い。中に用いられた北京語は口語特徴が鮮明で、会話教科書として典型的な物である。張美兰

(2011: 65) は“在角色的设置、话题的编排及语料的选择上注重从生活实际出发，以实用及感兴趣的话题为主，将经贸内容与词汇融入其日常生活语言中，让学习者在真实场景中自然而然地掌握 1890 年前后中国北方通商口岸经贸语言，以经贸话题为纲、突出交际功能的同时，加强商务汉语词汇，在一定程度上体现了编者对商务汉语的教学性质、特点与难点的思考。”と評価した。

1.1.2 《士商叢談便覽》（1901、1902）

(1) 《士商叢談便覽》（上巻 1901、下巻 1902）



(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより)

《士商叢談便覽》は金國璞が東京外国語学校清語科教師として勤務した時期の著作である。全書は1901年（明治34年）12月に出版された上巻と1902年（明治35年）6月に出版された下巻の構成となる。上巻は50章が収録され、下巻は第六十三章が二つあり、51章が収録され、合計101章から成る。タイトルの第六十三章が2回使われており、誤植だと考えられる。上巻は63ページ、下巻は61ページ、上下巻合わせて約31,000字で、各章では短文で構成され、ビジネス関係などの短文が9個から16個までとなる。

《士商叢談便覽》は通常の間答式教科書とは少し異なる。各章は、1つまたはいくつかのトピックを中心に会話を行う。当時の日常的なコミュニケーションやビジネス活動の多くの側面をカバーしており、話題が豊富で有益である。しかし、《士商叢談便

額“万有真原”及长联。四十二年始建成，命名为‘救世主堂’。”

¹⁵ 《官話指南》の英語版《The Guide to KUANHUA》は1895年（明治28年）Hopkins Lionel Charles（金璋）より Shanghai Kelly&Walsh Limited で刊行された。

¹⁶ 朱洪《晚晴海关洋员汉语学习初步研究》2013、24頁。

¹⁷ 六角恒廣『中国語教育史の研究』1988、362頁。

覽》全書において、各章が短文で構成されているため、会話が成り立たない部分が多く見られる。ここでは、上巻の第一章と第十章を例として取り上げる。

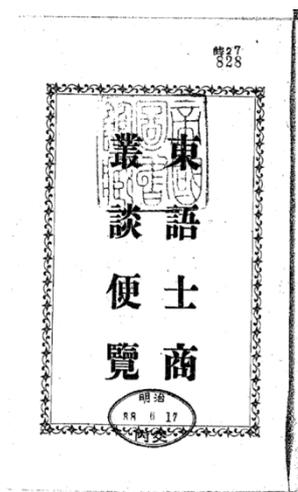
1. 你現在用甚麼功哪。2. 你在那書院裏，用過幾年的功。3. 我用了五年的功，到如今英國話還是說不好。4. 在貿易場中，打頭事會說話要緊。5. 若是在通商口岸上當官差，不會說話不小。6. 你會說英國話，不論事道中國或是南洋印度去，都是很方便的。7. 他不但能和外國人當面交談，就是辦往來的筆墨，也都滿行。8. 他現在事謀一個官差，或是就一個買賣的事情，還沒拿定主意哪。9. 從前我勸過他，當官差或是做買賣，他都懶怠幹。10. 那個時候兒兩國的官員們，往來辦事情都是請他當繙譯。11. 沒有人當繙譯，我們倆人不能交談。12. 那個衙門現在要請清國話英國話的繙譯。13. 衙門裏的人都知道他說的話好，所以請他在軍營裏當繙譯了。（第一章）

1. 他那個舖子並不賠錢，不知道是為甚麼忽然關閉了。2. 你那個院子很寬濶房子太少，為甚麼不再添蓋幾間房呢。3. 他把那個關閉的舖子倒過來了，可是開甚麼買賣，還沒拿準主意哪。4. 好容易把倒價湊齊了給清了，可是還沒錢做買賣哪。5. 那個照相館，這幾年賣像篇兒，賺的錢實在不少。6. 你若是肯供給我貨，我就可以開那個買賣。7. 他說只要有妥實的保家，他就能供給你貨，不論是倆月三月一清帳都行。8. 他認得的朋友雖然不少，可是交情真靠得住的沒多少。9. 你是願意是不願意脆快一句話，別這麼拉絲。10. 那件事，我從前既應承了給他辦，如今怎麼能又推託不管呢。11. 你別當是竟是我一個人兒得便宜哪，這是僭們倆人兩上算的事情。（第十章）

上に挙げた第一章では、2.～7. で「外国語の勉強」というトピックについての会話が取り上げられる。8.～9. のトピックは「仕事」、10.～12. のトピックが「通訳人」である。それぞれの会話が紹介されている。一方、1. の質問文の後に来る文は回答文でなく、質問文であるため、会話としては成り立っていない。

第十章では、文が11個あり、それぞれの文が独立しており、会話としての流れが見られない。したがって、他の金氏教科書に比べ、《土商叢談便覽》は会話性に乏しい教科書と言える。

(2) 《東語土商叢談便覽》 (1905)

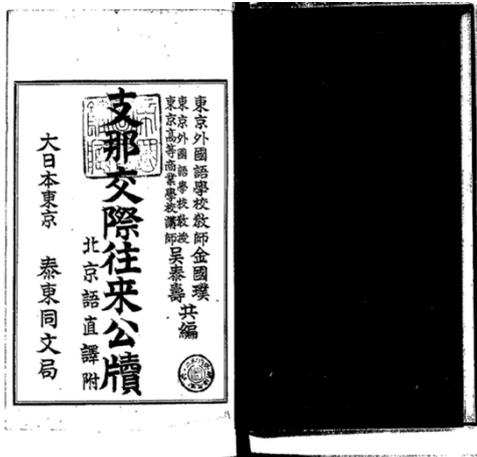


《東語土商叢談便覽》は《土商叢談便覽》の日本語訳版であり、1905年（明治38年）6月に文求堂から刊行された。刊行理由について、著者田中慶太郎は東語土商叢談便覽引に「金卓安先生の將に東京を去らんとするや北京官話土商叢談便覽を邦語に譯して刊行すべき事を我に託せらる」と記述している。

(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより)

1.1.3 《支那交際往来公牘 北京語直譯附》(1902)

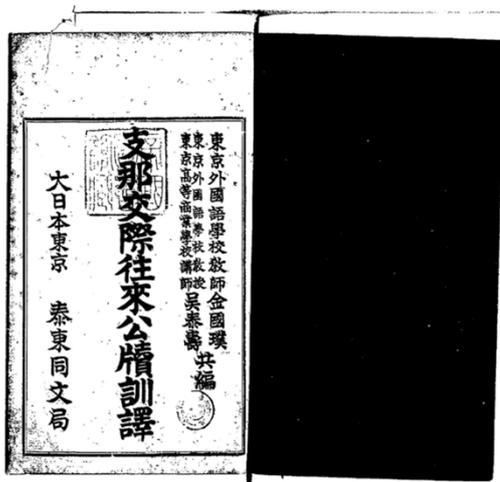
(1) 《支那交際往来公牘 北京語直譯附》(1902)



《支那交際往来公牘 北京語直譯附》は清代の外交往来公牘を改編した上に北京語に訳した著作で、1902年（明治35年）3月に泰東同文局から出版された。全書は112ページで、公牘原文の字数を除き、約10,000字である。六角氏『中国語関係書書目』（2001）に収録された教科書の中で、外交往来公牘を北京語に訳したのは《直支那交際往来公牘 北京語直譯附》が最初である。

（国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）

(2) 《支那交際往来公牘訓譯》(1903)



《支那交際往来公牘 北京語直譯附》が刊行された翌年の1903年（明治36年）3月に《支那交際往来公牘 北京語直譯附》の公牘原文を日本語に翻訳したもの（《支那交際往来公牘訓譯》）が同じく泰東同文局から出版された。

（国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）

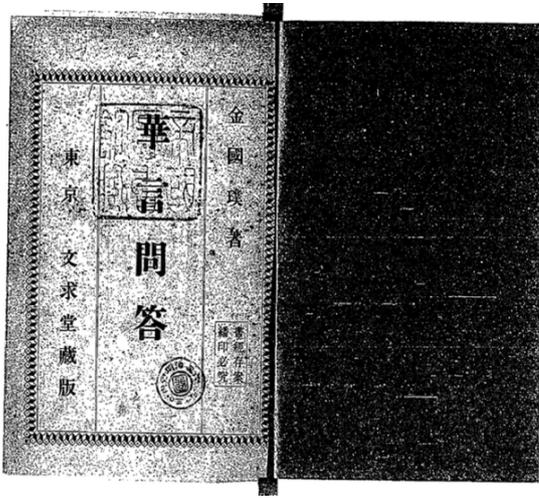
《支那交際往来公牘 北京語直譯附》と《支那交際往来公牘訓譯》の編纂者は共に金國璞と吳泰壽であり、巻首には「東京外国語学校教師金國璞、東京外国語学校教授・東京高等商業学校講師吳泰壽共編」と記載されている。

両書の内容構成について、《支那交際往来公牘 北京語直譯附》と《支那交際往来公牘訓譯》両方で採用した公牘原文は同じ70件となる。《支那交際往来公牘 北京語直譯附》は公牘原文を収録し、北京語に訳された一方で、《支那交際往来公牘訓譯》は公牘原文の要旨を纏めた上で、「支那交際往来公牘訓譯目次」を付け、さらに日本語訳の前に公牘原文の単語説明を補充した。

六角氏（2002：118）は「この本も当時あまり世に出ていない時文の教科書として外国語学校その他で広く使用された。」と評価した。

1.1.4 《華言問答》（1903）

(1) 《華言問答》（1903）



（国立国会図書館近代
デジタルライブラリーより）

《華言問答》1版の成書時間は不詳で、現在保存されているものは第2版である。一つは1903年（明治36年）に出版された全30章の構成からなるもので、もう一つは御幡雅文が明治20年（1887）2月に自ら筆写し、青焼き本で全27章からの構成となるものである。鱒澤彰夫（2019：77）により、青焼き本は「全27章、商業については第17章まで（全冊の約22%）。明治36年4月1日文求堂刊本は全30章で商業についての第18、19、20章を増加した以外、同文である」と指摘している。

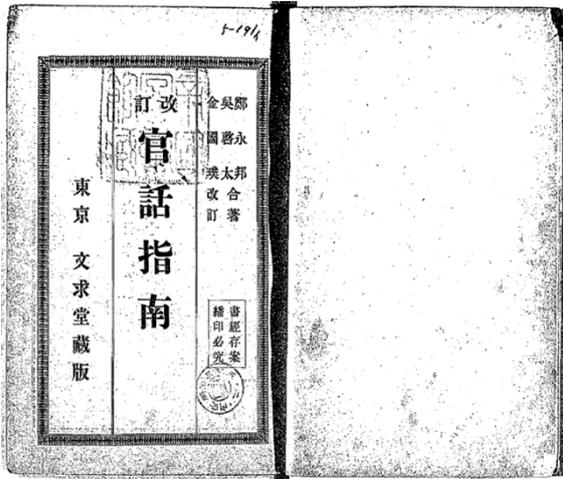
金氏により編纂された教科書について、現在確認できた著作の中で、少なくとも、《華言問答》の成書時間が一番早いと考えられる。《華言問答》は中国語教科書として日本の学校で使用されたことは確認できなかったが、楊鉄錚「明治期中国語教育における伝統継承と近代化：金國璞、張廷彦と『官話指南』」（2017：59）の支那語研究舎の時間割表¹⁸を見る限り、《華言問答》は金氏が帰国後に設立した「支那語研究舎」の二班の中国語教科書として使われたことが確認できた。

御幡雅文は自ら『華言問答』を刊行した理由について、「当時の官話教科書は、公刊、非公刊にかかわらず、官吏生活を中心とした北京の制度・風俗・習慣を題材としていたし、呉啓太・鄭永邦『官話指南』の「官吏吐屬」には、出入りの商人との対話を扱った場面もあるが、商店での会話ではなく、商業会話としては不備なものであった。勿論、御幡雅文の『華言問答』刊行意圖には、社會の全面に渡る中国語教材構想の一環という面はあったにしろ、明治20年初めの中国語教育の状況に呼應したものであったと見るのが妥当であろう。」鱒澤彰夫（2019：77-78）と指摘している。

《華言問答》は問答式で編纂された教科書である。正文部分は198ページで、57,000字程度、全30章からの構成となる。前20章では商品の仕入れ、債務紛争、抵当貸し、銀票兌換、詐欺競売、貿易往来など主に商業関連の話題であり、第20章は“掌柜”と“伙計”の責任を述べていることから、総括的な一章と見られ、21章から30章までは衙門案例、水手喧嘩などの物語となり、長文が多く、前20章より会話性が乏しく見受けられる。

¹⁸ 楊鉄錚（2017：59）：表6. 明治41（1908）付けの時間割。

1.1.5 《改訂官話指南》（1903）



（国立国会図書館近代
デジタルライブラリーより）

《改訂官話指南》は鄭永邦と吳啓太の共編により、金國璞が改訂した官話教科書である。全書約6万字で、鄭永邦と吳啓太が凡例を執筆し、1903年（明治36年）4月に文求堂から刊行された。《改訂官話指》は四巻からの構成となり、目録に「巻之一應酬瑣談、巻之二官商吐屬、巻之三使令通話、巻之四官話問答」と記載している。

《改訂官話指南》と《官話指南》の最大の差異は序文、本文と巻之一「應酬瑣談」の3部分である。その特徴としてまず、田邊太一と金氏、黄裕寿が著した序文が削除され、鄭永邦と吳啓太が執筆した凡例のみが残された。そして、巻之一「應對須知」が全て削除され、「應

酬瑣談」が新しく加えられた。また、巻之二、三、四には語彙の変更が数箇所見られる。

削除された巻之一「應對須知」は全文が約3000字程度、全45段の短文或いは会話文からの構成となる。「應對須知」の来歴については内田慶市、氷野善寛（2016：74）は「14カ所は『正音撮要』第一巻の「問答」の内容と一致していることが確認できた。」と指摘している。改訂で加えられた「應酬瑣談」の全文は約5800字、計20章あり、各章が約300字程度の対話形式で構成されている。

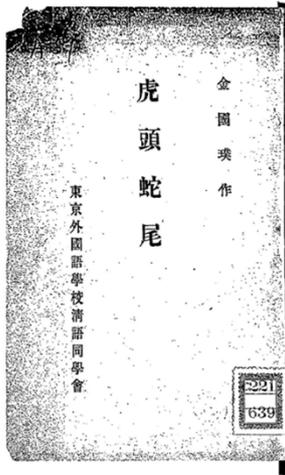
「應對須知」を削除した理由について内田慶市、氷野善寛（2016：74）は「「應對須知」が『官話指南』の中で唯一古いものを残した箇所であったためであり、あえて書き直したと考えることできる。」と指摘した。また、黄薇（2014：242）は“《撮要》词语系统主要载录的是清代中后期的北京官话词语，包括书面语词和口语词，其中也汇集了部分南方官话词汇。”と指摘した。孫云偉（2019）は初版『官話指南』の北京語固有表現と九江版『官話指南』左文表現を比較した結果、巻之一「應對須知」の用語に関して「南京官話と南北通用の用語の使用率は4巻の中に一番高いため、その巻の南方特性が極めて強いと思われる」¹⁹と述べた。

1.1.6 《虎頭蛇尾》

(1) 《虎頭蛇尾》（1903）

《虎頭蛇尾》では、1903年（明治36年）に諸岡三郎により刊行され、表紙に「東京外国語學校清語同學會」と書かれており、正文の前に「明治三十六年四月東京外国語學校講演會清語科講演筋書」と記載されている。全書は7,000字程度で、金氏が著した教科書の中で最も字数が少ない著作である。

¹⁹ 孫云偉『明治期北京官話教科書「官話指南」及び学習補助教科書の総合研究』2019、206頁。

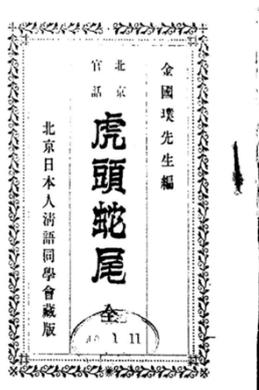


他の金氏教科書と異なり、《虎頭蛇尾》は一つの商業物語を会話形式で記した教科書であり、人物が切り替わる際に“〇〇説”という書き方を初めて用いた。

《虎頭蛇尾》について、六角氏（2002：120）は「この本は一頁八行で四〇頁ほどのもので書名のように金の工面で初めは馬鹿に良い話も終末はおじゃんになってしまうという一種のお笑い話である。これまで金国璞は文求堂から刊行したのであるが、この本は清語同学会を発行所として、この学習会での教科書としたものである。」と述べた。

（国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）

(2) 《北京官話 虎頭蛇尾》（1907）

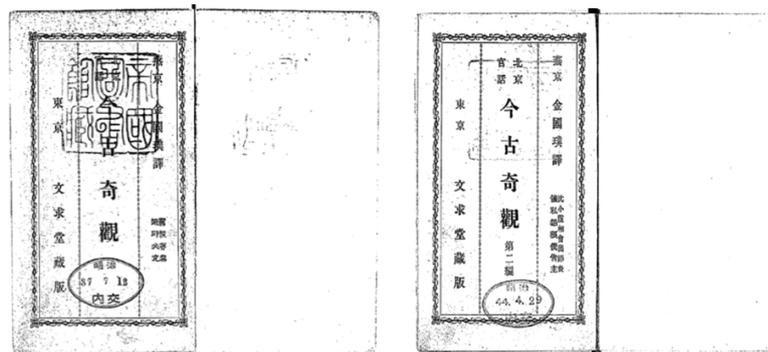


《虎頭蛇尾》は《北京官話 虎頭蛇尾》と書名を変え、1907年（明治40年）到北京徳興堂印字局から刊行された。《虎頭蛇尾》の正文に書かれている登場人物の名前が正文の最初に加えられ、正文内容は《虎頭蛇尾》と一致する。

（国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）

1.1.7 《北京官話 今古奇観》

(1) 《北京官話 今古奇観》（1904）と《北京官話 今古奇観（第二編）》（1911）



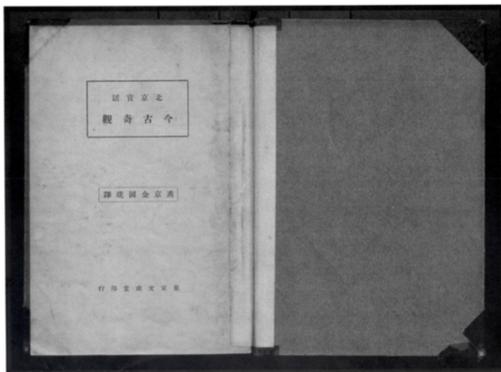
（国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）

《北京官話 今古奇観》（1904、1911）は金氏が中国明代末期の白話文小説《今古奇観》を手本として改編した中国語教科書であり、全4編の構成からなる。1904年（明治37年）に出版された第一編と1911年（明治44年）に出版された第二編がそれぞれ第1版であり、共に文求堂より刊行された。第一編は130ページ、第二編は100ページ、合わせて59,000字程度である。

《北京官話 今古奇観》（1904、1911）は4つの物語が収録され、第一編と第二編に二つずつ配置されている。第一編に“李汧公窮邸遇俠客”と“十三郎五歳朝天”、第二編に“沈小霞相會出師表”と“懷私怨狠僕告主”が収録されている。

《今古奇観》は17世紀中国で編纂された白話小説の選集であり、訂正者は抱甕老人である。収録された40編の物語は全て“三言二拍”²⁰で、198編から選択され、内容は宋明時代の庶民生活や庶民の感情を描いた物語が多い。金氏の《北京官話 今古奇観》はこの《今古奇観》の前半と後半からそれぞれ2つの物語を選び、表現を清末当時の北京語に書き換えたものである。《北京官話 今古奇観（第一編）》²¹の“李汧公窮邸遇俠客”と“十三郎五歳朝天”は《今古奇観》の第16編と第36編に、《北京官話 今古奇観（第二編）》の“沈小霞相會出師表”と“懷私怨狠僕告主”は《今古奇観》の第13編と第29編に見える。

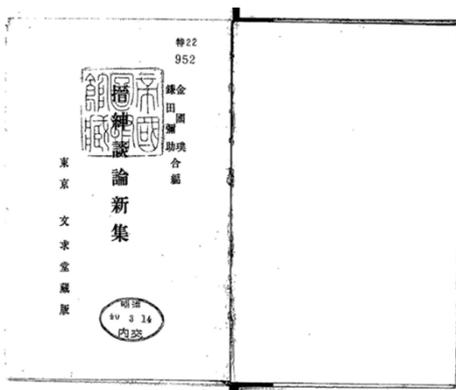
(2) 《北京官話 今古奇観》（1933）



1933年（昭和8年）5月に徳興堂印字局（北京）より刊行された《北京官話 今古奇観》は第2版である。第2版は“十三郎五歳朝天”を削除して3つの物語のみを収録し、漢字の書き方を僅かに改めたが、それ以外は第1版とほぼ一致する。

（国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）

1.1.8 《搢紳談論新集》（1907）



（国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）

《搢紳談論新集》は金氏と鎌田弥助が共著した教科書で、1907年（明治40年）3月に文求堂から出版された。

《現代汉语词典》（第7版）（2017：684）によると、“搢紳”は“縉紳”と同義で、“古代称有官职的或做过官的人”のことである。

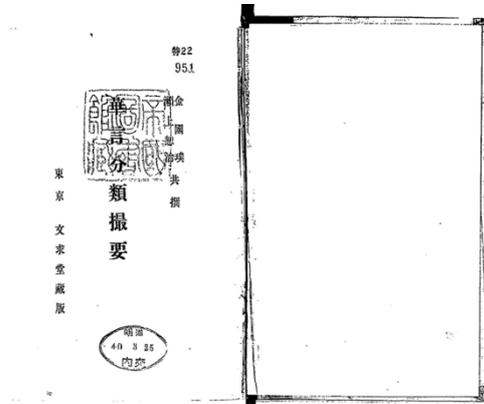
《搢紳談論新集》の正文は156ページ、約37,000字程度であり、60章から構成となる。各章は単語を最初に載せ、その次に、会話形式で官界、外交、商業など様々な会話場面を記録した。単語だけにウェード式で発音表記し、更に漢字の四隅に圈点をつけて四声を表す。金氏

²⁰ 「三言二拍」とは中国の明末に馮夢竜が編纂した『今古小説』（40巻）（後に『喻世名言』（24巻）に改編した）、『警世通言』（40巻）、『醒世恒言』（40巻）と凌濛初が編纂した『初刻拍案驚奇』（40巻）、『二刻拍案驚奇』（40巻）の総称である。凌濛初編に重複1巻、雑劇の戯曲が1巻あるため、計198編の短編小説集となる。

²¹ 《北京官話 今古奇観（第二編）》と区別するため、1904年に刊行された《北京官話 今古奇観》を《北京官話 今古奇観（第一編）》とする。

が編纂した教科書の中で、唯一発音記号が使用された教科書である。

1.1.9 《華言分類撮要》（1907）



(国立国会図書館近代
デジタルライブラリーより)

《華言分類撮要》は金國璞と瀬上恕治が共撰した教科書で、1907年（明治40年）3月に文求堂から出版された。正文部分は113ページ、約24,000字で、天文門、地輿門、身體門、人倫門、宮室門、仕官門、文牘門、武備門、戰務門、商賈門、農政門、衣履門、工藝門、宗教門、飯食門、禽獸門、魚蟲門、花木門、車船門、婚嫁門、喪事門、生死門、災患門、訟獄門、水火門、行旅門、雜役門、貧富門、疾病門、財帛門、書籍門、傢具門、珍寶門の、計33章からの構成となる。

《華言分類撮要》の内容形式として、各章は番号で、収録された語彙、フレーズ、成語、言事、長文などの順番を示し、更に各漢字の四隅に圈点をつけて四声を表す。

《華言分類撮要》と《摺紳談論新集》について、六角氏（2002：120）は「これらは、おそらく日本人のものに金氏が校閲して共著の形で刊行したものであろう」と推測している。

1.1.10 金氏教科書の内容の特徴

北京官話教育の実施開始に応じて、北京官話教科書が差し迫って必要となり、様々な著者によって、数多くの北京官話教科書が刊行されるようになった。その中で欠かせないのが中国人編纂者である。その中でも金氏がその代表として、大きく貢献した。

上文で紹介した金氏教科書における内容の特徴を以下の2点にまとめる。

(1) 使用対象が中級或いは中級以上レベルの北京語学習者であること

金氏教科書において、発音記号が使用された物は《摺紳談論新集》の1冊のみで、しかも発音記号が加えられたのは単語のみである。また漢字の四隅に圈点をつけて四声を表す形式は《摺紳談論新集》と《華言分類撮要》の2冊だけである。《摺紳談論新集》と《華言分類撮要》の何も共編者がおり、執筆者が金氏のみ教科書は初級レベルの中国語学習者が必要な発音記号と四声表記ともに採用されていない。

(2) 会話を重視し、実用性が極めて高いこと

六角氏は日本における外国語の学習を「文化語学」と「実用語学」の2種類に分け、前者が相手国の文化を学習するために生まれ、後者が政治、経済などの社会的活動に役立てるために生まれたとした。近代日本における中国語教育は文化語学として中国語が成り立つ条件が乏しかったため、どうしても実用語としての教育にならざるをえなかつ

た²²。金氏教科書には、商業、官界、日常生活、外交関連などの題材が多く取り入れられている。これらの会話においては、場面を問わず、主に問答式を中心とすることから、金氏が交流できるような会話を習得させることを主眼としていたことが窺える。即ち、金氏教科書は会話を重視し、実用性が極めて高い北京語教科書である。

以上の 2 点を合わせると、金氏教科書はおおよそある程度の中国語の基礎能力があり、外交或いは商業上のニーズを持つ日本人、つまり上流階級の日本人の中国語学習者を対象としたものであったと推測される。代表的な教科書は、例えば《支那交際往来公牘 北京語直譯附》がある。この教科書は明らかに当時の清国政府と外交的な交渉をしていた日本人の官吏を対象としたものである。また、《摺紳談論新集》は教科書のタイトル“摺紳”から使用対象が公職に就いている人、または公職に就いていた人であることがわかる。他には、《北京官話 談論新編》が官界、外交、商業、農業、文化など清末期のタイムリーな話題を中心とする教科書であり、《士商叢談便覽》と《華言問答》は主に商業関連な話題を中心としている。

1.2 教科書の改編研究

1.2.1 《支那交際往来公牘 北京語直譯附》（1902）

「公牘」は中国古代官庁公文書の名称であり、また「公文」ともいう。そこではその内容や官庁・職階の上下関係によって用いるべき文章の種類と形式が定められていた。時代によりそれぞれの書式や用語、文法も独特で、各時代で異なり、官庁と外国駐在機関の間の公文にも適用された。六角恒廣『中国語関係書書目』（2001）に収録された教科書の中で、外交往来公牘を北京語に訳したのは《支那交際往来公牘 北京語直譯附》が最初である。

1.2.1.1 《支那交際往来公牘 北京語直譯附》と《支那交際往来公牘訓譯》

《支那交際往来公牘 北京語直譯附》（以下略称《直譯附》）は清代の外交往来公牘を改編した上に北京語に訳された著作で、金國璞と吳泰壽の共編により、明治 35 年（1902）に泰東同文局で出版された。そして翌年の明治 36 年（1903）に《直譯附》の公牘原文を日本語に訓譯されたものである。《支那交際往来公牘訓譯》（以下略称《訓譯》）も金氏と吳氏の共編で泰東同文局に出版された。

両書の内容構成については、《直譯附》と《訓譯》両方採用した公牘原文は同じ 70 件となるが、タイトル別の件数は次のようになっている。

- | | |
|------------------|-----------------|
| ① 欽差致總署信 14 件 | ② 總署致欽差信 9 件 |
| ③ 總署致參贊信 2 件 | ④ 參贊官覆總署信 2 件 |
| ⑤ 參贊官致總署信 1 件 | ⑥ 總署覆欽差信 7 件 |
| ⑦ 總署新任堂官致欽差信 1 件 | ⑧ 欽差致總署某大臣信 1 件 |

²² 六角恒廣 1989、85 頁-86 頁。

- | | |
|-------------------|----------------|
| ⑨ 欽差覆總署信 2 件 | ⑩ 署欽差致總署信 1 件 |
| ⑪ 欽差函照蘇州撫部院信件 1 件 | ⑫ 新任欽差照會總署 1 件 |
| ⑬ 欽差照會總署 6 件 | ⑭ 總署照覆欽差 4 件 |
| ⑮ 總署照會欽差 4 件 | ⑯ 欽差照覆總署 4 件 |

公牘原文の構成について、《訓譯》第一件の単語「公牘」の説明では「公牘ハ啓牘及照會ノ別アリ即チ本書第一件ヨリ第四十四件其他照會ノ外ハ総テ啓牘ナリ啓牘ハ又啓文トモイヒ半公文ト譯ス官吏相互間ニ行ハルル書簡ナリ公文即チ照會文ノ意義ハ第四十四件に解説ス。」²³と述べられている。つまり、両書に採用された公牘原文は「啓牘」と「照會」2種類となり、「啓牘」は官吏の間で用いられ、「半公文」の書簡となった公文である。又「照會」について、第四十四件の単語「照會」の説明では「官府ノ公文ニシテ官印ヲ押捺スルモノヲイフ。コノ文ハ清國ノ官衙ト諸外國官衙トノ相互間等ニ行ハルル平行文ナリ。」²⁴と述べられている。「照會」は「啓牘」と異なり、官印と押捺が必要で、主に外交往來に使用される官府の正式公文である。

70 件の公牘原文中では、差出人と受取人は大清欽命總理各国事務衙門王大臣と大日本國欽差全權大臣、又、逆の場合もあった公牘原文は「照會」になり、計 19 件（⑫から⑯まで）となる。残りの 51 件（①から⑪まで）は具体的な差出人と受取人は明確に書かれておらず、これらは「啓牘」になる。

《訓譯》では、書簡のタイトルにある官職名についての説明が記載され、欽差は「特命全權公使」、総署は「清國總理各国事務衙門現今外務部ト改称ス」、参贊は「我カ書記官ナリ。参贊トハ参議協贊ノ義ニテ同官ハ常ニ公使ノ下ニアリテ参贊ノ任ニ當ルニ由ル」、堂官は「上官ノコトナリ」²⁵となっている。

1.2.1.2 編纂目的

《直譯附》と《訓譯》の編纂者は共に金國璞、吳泰壽であり、巻首には「東京外国語学校教師金國璞、東京外国語学校教授・東京高等商業学校講師吳泰壽共編」と記載されている。

吳泰壽は明治 16 年（1883）に旧東京外国語学校漢語学科に入学した。そして明治 34 年（1901）11 月に東京外国語学校の清語学科の初代教授に就任し、それと同時に（明治 35 年（1904）まで）東京高等商業学校の講師も務めた。東京外国語学校は在職一年で離職した。

二人が共編した中国語教科書は《直譯附》（1902）、《訓譯》（1903）と《日清往來尺牘》（1903）の 3 冊がある。

六角氏（1988：85-88）によると、東京外国語学校明治十年の課程表には、「翻譯」と「解文」という科目があり、「翻譯」は日本語の文を中国語の文に翻譯する授業で、主に日本の官庁の布達や告示を吏牘文に訳した。そして「解文」は中国文を日本文に訳す科目で、中国の官衙の公文書を日本文に訳した。

「翻譯」と「解文」の授業に使用された教科書は記載されていなかったが、この時期には既に日清往來公文書の翻譯授業が設置されていたことが分かった。

²³ 金國璞、吳泰壽《支那交際往來公牘訓譯》1903、2 頁。

²⁴ 同上、37 頁。

²⁵ 同上、2 頁、4 頁、14 頁に記載されている。

《直譯附》と《訓譯》では、何れも「序」が書かれていない。編纂目的を解明するため、他の参考文献に目を通した所、明治四十年（1907）に出版された『評釈支那時文軌範』の「序」からその編纂目的がみえてくる。

光輝ある日露戦捷の効果をして永遠に其美を濟さしめんとして、帝國臣民の間に熱注し來れる東方問題の討究及び事業の經營は、支那語及び支那事情と共に支那時文研究の機運を促進し、教科用若くは参考用として諸先輩の手に著述せられたる所の書亦た鮮からず、洵とに斯學界の爲め大に慶賀すべきと共に、吾人後學の徒、宜しく深く諸先輩の勞を謝せざる可らざるなり。余や支那研究を以て天職となす者、固とより支那の事情と語言と文章とを擇ばず。明治三十四年東京高等師範學校支那時文講座擔任の命を辱うせしより今に至る六年、偏へに日清兩國諸先輩の啓発迪訓に籍り、其講習と應用とに於て敢へて獨り竊かに信ずる所なきに非らず。今評釈支那時文軌範成る、實に余が斯學攻究の料に資し以て支那語支那事情に於けると共に、又た支那時文に於ける余が畢生の任務を萬一に盡さんとする區々の微衷を以て而已以て序となす。²⁶

『評釈支那時文軌範』の著者青柳篤恒氏は明治三十四年から東京高等師範學校支那時文講座を担当し、諸先輩の著作を参考にした上で、六年に亘って『評釈支那時文軌範』を編纂したのである。この著作には最後の数ページに他の関係書の広告が記されている。そしてそこに金氏と吳氏が共編した《日清往来尺牘》が記載されている。宣伝文には「支那の言語は南北同じからず朝鮮も亦其國語あり、然るに支那十八省及び朝鮮を通じて一様なるは支那尺牘即ち往復文書なり、本書は應用の文例を網羅して和譯を附したれば支那語朝鮮語を知らざる人も紙筆を以て自由に用務を辨じ得るべし、軍隊に行動する人は勿論、朝鮮支那に渡航して起業する人は必ず一本を几上に備ふべし。」²⁷と書いている。

この「序」により、日露戦争を終えて、民間では東方問題に関心が抱かれ、それが支那時文の研究を促進させた。また、《日清往来尺牘》の宣伝文には軍隊で行動する人や朝鮮支那に渡航して起業する人を対象としている。そのことから恐らく、その時期に日本は清國との接触が多くなり、外交往来も増えてきたと考えられる。ここで、外交往来に欠かせないものである「公牘」にも学ばなければならない状況になり、「公牘」或は「支那時文」の需要が高まったため、教材の編纂と共に講座も始まって、《直譯附》は時代に応じて創出され、実際に教科書として使われたのだろう。六角恒廣（1988：238）は「木野村先生も、陸軍教授のかたわら外語別科に出講されて『支那交際往来公牘』を教科書に使い、もっぱら尺牘と商業文件とを教えられました。」と述べている。また、金氏が1903に帰国してから、「清語同学会」で中国語の授業が始められ、楊鉄錚（2017：59）により、「支那語研究舎」の時間割表に『尺牘』とう教科書が記載されている。『尺牘』は恐らく《日清往来尺牘》であり、ここで金氏と吳氏が共編した《日清往来尺牘》も教科書として使われていたと判断できる。

²⁶ 青柳篤恒『評釈支那時文軌範』1907、1頁-2頁。

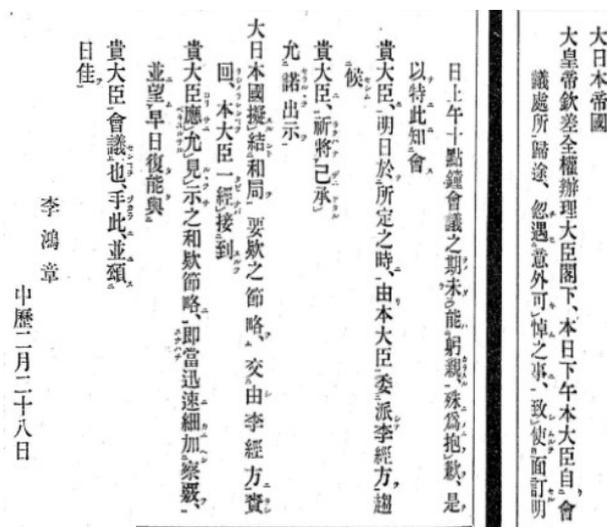
²⁷ 同上、(六)頁。

1.2.1.3 改編過程

中国の公牘は上行文書、下行文書、平行文書の三種類に分けられ、さらに書式により再分類できる。《直譯附》の公牘原文は平行文書の「照会」の書式で、主に外交往来に使われていた。裴燕生等（2003：262）は“光绪5年（1879年），总理各国事务衙门与各国公使议定中外往来公文仪式，督抚与领事，以宾礼相待；遇有寻常公务，依旧照会道台，转申督抚；若事关紧要，彼此无论品级大小，概用照会。（中略）自此之后，照会作为外交文书使用日益广泛，成为清廷中央及地方各官与外国公使、领事交涉往来的主要文种。”と指摘している。

70件の公牘原文は編纂者がどこで入手したのかまだ解明されていないが、編纂者は公牘原文を採用した時は既に一部削除していたことが推察できる。

図1. 清國全權李鴻章馬關に於て遭難の砌 伊藤陸奥兩全權に致せるもの²⁸

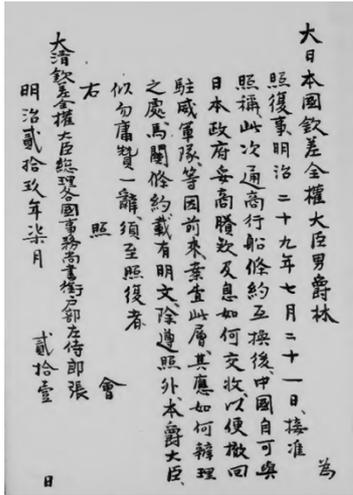


『評釈支那時文軌範』の第九節「公牘」編には「清國全權李鴻章馬關に於て遭難の砌伊藤陸奥兩全權に致せるもの」という公牘が掲載されている（図1）。これを《直譯附》の「啓牘」部分の原文と比べてみると、「清國全權李鴻章馬關に於て遭難の砌伊藤陸奥兩全權に致せるもの」に宛名「大日本帝國大皇帝欽差全權辦理大臣閣下」、差出人「李鴻章」、月日「中歷二月二十八日」と書かれているが、《直譯附》の「啓牘」の原文の方は差出人と月日が記されず、削除されたと考えられる。宛名については「往信」の宛名は「逕啓者」、「返信」の宛名は「逕覆者」となり、何れも具体的な名前が無い。《訓譯》によると、「逕」は「直也至急ヲ要スル意」と説明している。

その一方で、「照會」の削除部分は「啓牘」とは異なる。

図2. 「日清通商航海条約締結ニ際シ彼我全權委員間ノ照会」

²⁸ 青柳篤恒 1907、224 頁-226 頁。



筆者が国立公文書館で明治29年の「日清通商航海条約締結ニ際シ彼我全權委員間ノ照會」（図2）を入手し、『直譯附』の「照會」原文と比べた結果、受取人と差出人の情報が一部削除されていた。ただ所属、官職名と名前を削除し、または具体的な日付が削除し、「年月日」という三文字を残している。その理由としては、『評釈支那時文軌範』は「照會文」の格例について、以下のように述べている。

先づ冒頭に自己の官職及び姓を署し、終りに宛名を書く。而して茲に注意すへきは自他共に官職名及び姓のみに限り之を認ため、名は決して之を書かないといふことである。殊に宛名の下には、我邦にて某殿など書くやうに閣下等の尊稱を決して用ゐないのが通例である。其他

「為照會事」「須至照會者」「右照會」及び年月日等、皆照會文に缺くべからざる字様である。²⁹

「照會」は外交公文とする格例が決まりで、その格例に従って書かなければならなかった。そのため金氏と呉氏は格例だけを残し、関係者の個人情報削除した。

公牘原文の正文内容に元々書いてある官職名と名前を「某官」と「某」または「某某」に変更して、官職がない人はフルネームで書かれている。

公牘原文の書式、用語、文法は独自の特徴があり、日常生活ではあまり使わない言葉を多く使用している。金氏と呉氏は難しい公牘原文を忠実に北京語に直譯した。直譯する際は、「啓牘」と「照會」のどちらも正文部分だけを直訳し、受取人、差出人、年月日を省略し、「照會」の格例となる「右照會」も訳されていない。「啓牘」原文の文末に「順頌日祉」という言葉が書いてある。《直譯附》ではこれも訳されていない。《訓譯》の単語説明には「順ハ序ナガラ。頌ハ頌謳ノ意。日祉ハ當日ノ幸福ヲイフ。清國啓文ノ末尾ニハ順頌日祉等ノ文字ヲ記ス例ナルモ之ヲ邦文ニ翻譯スルトキハ邦文ノ體裁上異様ノ觀アルヲ以テ之ガ譯ヲ省ク。」³⁰と述べられている。このような文末に書かれた祝福の言葉は他にも「順頌升祉、即頌時祉、即請時祉、並候日祉、順請日祉、順頌勛祉、順頌時祉、順請日祉、順頌時祉、順頌日祉、即候勛祉、即頌日祉、順頌暑祉、順頌暑祉、順候日祉、並頌勛祉」があり、合計17種類である。

「照會」原文の最初は「為照會事照得」、文末は「須至照會者」という言葉があり、『訓譯』により、「為照會事」では「公文一定ノ起首語ニシテ公文ヲ以テ本件ヲ申送ル爲ニト下文ヲ呼ヒ起ス意ナリ」、「照得」では「即チ前例ヲ照シ得タリトイフ意ニシテ必ス起首ニ用ユル語ナリ」、「須至照會者」では「公文結尾ノ語ニシテ此公文ノ事件ハ必ス先方ニ申送ルベキモノナリトイフ意ナリ蓋シ公文ノ末尾ニコノ語ヲ用フル所以ハ一ニ該文意ノ終結セルヲ表示スルニアリ」³¹と説明されている。つまり、「為照會事照得」と「須至照會者」は格例となり、この部分は訳されていない。正文部分の直譯はほぼ公牘原文を忠実に直訳されており、改編された所は少ない。《直譯附》は公牘の原文の内容で前後の順序が変えられたのは一ヶ所しかない。³²

²⁹ 青柳篤恒 1907、141 頁-142 頁。

³⁰ 金國璞、吳泰壽 1903、2 頁。

³¹ 同上、37 頁。

³² 「現經貴王大臣共同商酌、訂於明日午後某大臣光臨敝館、面議一切、等因前來查此事既有碍難之處、

『評釈支那時文軌範』は「公牘」と「照會」をまとめて、「時文」といい、時文は中国の古文から進化したものである。第三節「支那時文研究の基礎」で以下の様に指摘している。

當今時文が如何に必要でありとは云へ、畢竟するに古文なるものが時代の必要に迫られ、又時代の思潮に伴って進化せしものに過ぎないのである。古文は本、時文は末、古文ありて而して後時文があるのである。時文なるものは時代の必要に應じ、時世の程度に連れて常に變化するのが、古文は左様でない。(1907 : 7-8)

中国の古文は主語を省略するのが特徴であり、公牘原文で省略された主語が沢山ある。《直譯附》では省略された一部の主語が増加し、その主語はほぼ人称代名詞となる。

例 1. 以便轉覆本國外務省查照是荷。/我好報知本國外務省知道。³³ (第十八件)

例 2. 殊難逆料。/我們可不能先料估出來。(第二十二件)

例 3. 聲稱原領執照，委因遇雨遺失。/他說原領的執照，真是遇雨丟了。(第二十九件)

《直譯附》全書では「咱們」という人称代名詞の用例は2つしかない。そのうち増加用例は1つ、改編用例は1つとなる。

増加例：例 4. 日前公同，面商各事。/前幾天僑們当面商量的事。(第三十一件)。

改編例：例 5. 而我兩國結好年久友誼最殷。/但是咱們兩國相好多年，交情頂厚。(第四十三件)

太田辰夫が「近代漢語」(1969 : 186)に提示した「清代北京語における7項目の特徴」によれば、「代名詞一人稱複数の包括形と除外形を「咱們」「我們」で區別し、「俺」「咱」などは用いない」と述べている。周一民の《北京口語語法・詞法卷》(1998 : 155-156)は“‘我们、咱、咱们’都表示第一人称复数，‘咱、咱们’除了指‘我们’之外，还包括听话人在内，是包括式。‘我们’不包括听话人在内，是排除式。在北京话里这种区别是比较严格的，而在普通话里偶尔可以见到‘我们’用作包括式的例子。”と指摘している。

公牘原文の人称について、一人称を「本大臣」又は「本王大臣」、二人称を「貴大臣」又は「貴王大臣」としている。《直譯附》は「本大臣」を「我」に変更し、「本王大臣」を「我們」または「我們大家」と言い、「貴大臣」を「您」と変更し、「貴王大臣」を「衆位」または「王爺大人們」に変更した。《訓譯》によると、「王大臣」は「親王。中堂。大人等ノ総称ナリ現今ノ官制ニ就イテイハハ親王ハ総理外務部事務。」³⁴とされる。つまり、「王大臣」は総称となり、《直譯附》は「王大臣」を全部複数人称に変更した。周一民(1998 : 157)は“‘您’是第二人称的敬称，在北京话里用得极为普遍。在北京人的交际中，用‘您’还是用‘你’是一个很敏感的问题。‘您’的使用一般受这样几个因素的制约，即辈分、年龄、职位、亲疏和好恶。前三个因素中，处于劣势一方的人要称优势者‘您’。北京人对初次见面或生疏的成年人一般要称‘您’表示礼貌。”と指摘している。

自應再行，從長計議，總期商辦妥協，以昭畫一。/這些話我想既然有難辦的地方，自然應當再好好商量，成妥當樣兒，如今衆位定規明天午後，某大臣來館，當面說一說。」(第二十八件)。翻譯文“如今衆位”の以下は原文の前半部分に当たる。

³³ 公牘原文と改編後の北京語文を「/」で区切る。

³⁴ 金國璞、吳泰壽 1903、2 頁。

1.2.2 《北京官話 今古奇觀》（1904、1911）

《北京官話 今古奇觀》（1904、1911）は金國璞によって中国明代末期の白話文小説《今古奇觀》を手本として編纂された中国語教科書であり、全4編からの構成となる。金氏は原作の内容を短縮して、明末清初の文体や言語を北京官話の口語体と北京語表現に改編した。

《北京官話 今古奇觀》についての先行研究は山田忠司「《北京官話 今古奇觀》の言語について」（2004）の一つである。山田氏（2004）は金氏の手による《今古奇觀》の翻案本である《北京官話 今古奇觀（第一編）》と《北京官話 今古奇觀（第二編）》の言語特徴を考察した。山田氏は《北京官話 今古奇觀（第一編）》と《北京官話 今古奇觀（第二編）》の言語は太田氏の「清代北京語における7項目の特徴」にあたりと叙述した。さらに、《紅樓夢》、《三俠五義》、《兒女英雄傳》、《燕語新編》、《燕京婦語》、《小額》の6冊の北京語資料および普通語との比較を通してその言語の性格を分析した。言語的特徴において《北京官話 今古奇觀》と比較的よく一致しているのは《小額》であり、この二書が同一の北京語内方言地区の言語によるという推測した。

1.2.2.1 《北京官話 今古奇觀》と《今古奇觀》

《北京官話 今古奇觀》は金氏の帰国後に日本で出版された教科書であり、2版まで確認できている。1904年に出版された第一編と1911年に出版された第二編がそれぞれ第1版であり、1933年5月に出版されたものは第2版となる。第1版は4つの物語が収録され、第一編と第二編に二つずつ配置されている。第一編に“李汧公窮邸遇俠客”と“十三郎五歳朝天”、第二編に“沈小霞相會出師表”と“懷私怨狠僕告主”が収録されている。（以下それぞれを“李汧公”、“十三郎”、“沈小霞”、“懷私怨”と略称する）。第2版は“十三郎”を削除して3つの物語のみを収録し、漢字の書き方を僅かに改めたが、それ以外は第1版とほぼ一致する。

《今古奇觀》は17世紀中国で編纂された白話小説の選集であり、訂正者は抱甕老人である。《今古奇觀》は庶民に広く読まれ、多くの版本があり、具体的な成書時期は不明である。石昌渝が主編した《中国古代小说总目》（白話卷）（2004：160）では“今存版本，最早的可能是巴黎图书馆所藏吳郡宝翰樓刊本，又题为《喻世名言二刻》，内封有墨憨斋手定字样，有图四十幅；正文半页十行，行二十字。学者推断其为明末刻本，也有以为是清初印本。”と指摘されている。

1.2.2.2 編纂目的

《北京官話 今古奇觀（第一編）》は金氏の帰国後の翌年1904年に出版されて、7年後、1911年に《北京官話 今古奇觀（第二編）》が出版された。《北京官話 今古奇觀（第二編）》が、7年が経過した1911年に出版された理由は金氏が帰国後に行った、支那語研究舎での中国語教育と関わっていると考えられる。

黄漢青「支那語研究舎の変遷及びその実態：支那語研究舎から北京同学会語学校までを中心として」（2007：164-168）によると、支那語研究舎は1903年8月に設立され、最初の設立目的は学生たちが金氏に恩返しをするためであった。そのため、支那語研究

舎は家塾と金氏の住居として兼用された。設立初期の支那語研究舎は学生数が少なく、金氏が授業を担当し、夜間しか行われなかった。1905年11月、学生数の増加に伴い、支那語研究舎の所在地は金氏の自宅から西へ500メートルほど離れた小紗帽胡同に移転し、名称も清語同学会に変更された。1908年2月19日、清語同学会総会が開かれ、金氏が総教習になり、『談論新編』、『官話指南』、『語言合璧』を用いて授業を行った。1908年3月時点で、清語同学会会員は20数名で、レベルによって3クラスに分けられ、月曜から土曜まで毎晩7時から9時まで授業が行われた。この時の金氏は教務で日頃多忙をきわめていたことが推測できる。1911年6月30日、清語同学会臨時評議員会が行われ、教頭が鄭永邦に決まり、金氏が教習になった。

楊鉄錚（2017：59）の「支那語研究舎」の時間割表³⁵を見る限り、《北京官話 今古奇観》は教科書として使われていなかったため、恐らく《北京官話 今古奇観》は課外読本だったと考えられる。

外国人の中国語学習者向けの課外読本として、《北京官話 今古奇観》の内容は、第一に思想的に積極的であること、第二に魅力的で読み応えのあるものであることが要求された。金氏が選んだ4つの物語は課外の読み物としてひねりのある展開、また生き生きとした内容で、非常に読み応えのある物語であったことが窺える。また、物語のテーマは因果応報を中心に、悪い行いには罰則を与え、善い行いに着目して誉める内容となっている。金氏は国子監の出身で、《論語》《孟子》などの儒教古典を現代文に翻訳したことがあり³⁶、選んだこの4つの物語に宣伝した「遏悪揚善」という主題は当時中国の儒教規範に適すると見受けられる。

1.2.2.3 改編過程

金氏は《今古奇観》から選んだ4つの物語の改編にあたって、原作を非常に尊重しており、内容の骨格は原作とほぼ同じだが、言葉や単語の使い方は原作を大幅に変えているといえる。各物語の文字数から見ると、“李汧公”の原作は約17,900字だが、改編後は約20,400字になる。“十三郎”の原作は約11,100字だが、改編後は約10,500字、“沈小霞”の原作は約18,700字だが、改編後は約12,700字、“懷私怨”の原作約11,500字だが、改編後は約10,600字になる。文字数が最も多く増加しているのは《北京官話 今古奇観（第一編）》の第一話“李汧公”である。“沈小霞”では、金氏が正文と関係のない人物の描写をほとんどが丸ごと削除しており、“沈小霞”は全文の中で最も大幅な字数削減が行われている。

(1) 削除した部分

金氏が改編した4つの物語は全体的に原作に忠実であるが、外国人が使用する北京語教科書向けに、原作の白話小説の特徴のある部分は削除された。中でも最も顕著なのは“墙上題詩”と“入話”の削除である。

“墙上題詩”は特殊な詩歌形式であり、中国古代の“壁提”から派生したものという。明清時代の白話小説は大量の“墙上題詩”が用いられており、“墙上題詩”を通じた物語と小説本文の相互作用は、人物描写や物語表現に重要な役割を果たす。金氏が《今古奇観》から選んだ4つの物語にも46個の“墙上題詩”が用いられ、それぞれの物語で

³⁵ 楊鉄錚（2017：59）：「表6. 明治41（1908）付けの時間割」。その年まで既に《北京官話 今古奇観（第一編）》が出版された。

³⁶ 楊鉄錚 2017、62頁。

“墙上题诗”が物語の重要な部分として登場する。一方、“墙上题诗”は読みにくく、外国人の中国語学習者には不向きである。金氏は物語の内容を理解しやすくするために、これらの“墙上题诗”を白話に改編せず、単純に43個の“墙上题诗”を削除し、“沈小霞”の3つだけを残したのである。削除された“墙上题诗”については、金氏は内容に何も付け加えず、削除後の原文をそのまま利用した。恐らく、金氏は、削除された“墙上题诗”は物語に影響を与えないという理由で、この方法を選んだ。しかし、“沈小霞”に残されている3つの“墙上题诗”は、削除すると物語に影響が出るため、そのままの形で残されたのだろう。残されている3つの“墙上题诗”の内容は以下になる。

沈鍊又作了一篇祭文，帶領著門下弟子，預備了祭禮，望空祭奠，那些箇冤魂，又作塞下詩說：雲中一片虜烽高，出塞將軍已著勞，不斬單于誅百姓，可憐冤血滿霜刀。那楊總督標下，有箇心腹指揮，名字叫羅鎧，就把詩和祭文，都抄好了，暗中給楊順送去了，楊順看了更恨沈鍊了，可就將詩文竄改了幾箇字，說：雲中一片虜烽高，出塞將軍枉著勞，盍以借他除佞賊，不須奏請上方刀。

後來有人給沈鍊作了一首詩說：生前忠義歿猶香，精魂為神萬古揚，料得奸魂沈地獄，皇天果報自昭彰。

“入話”とは、話本小説の中のある種の構造のことである。話本小説の各編の冒頭に用い、その目的は客への挨拶や、場をつなぐためのものであり、また、人を引きつけ夢中にさせたり、小説などに基づいたその事実を際立たせる役割を果たす。“沈小霞”と“李汧公”の“入話”は詩であり、“十三郎”の“入話”は詩のほか、正文内容のプロットも書かれている。金氏は“入話”を削除して、正文から改編を行った。この利点は、物語に厳密な構造を与え、文脈を明確にすることである。

金氏は、“墙上题诗”と“入話”の削除に加え、物語の内容についても、以下のように削除したところが見られる。

まず、“懷私怨”の原作は2つの物語で構成されている。前編は、悪人が悪事を働いても法では罰せられなかったものの、最後には閻魔によって裁かれるという物語が、後編は善人が濡れ衣を着せられたが、最後にはその冤罪を晴らすという物語が描かれている。そして金氏は前編を削除し、後編だけ残した。

さらに、物語に影響を与えない文章も削除した。最も多かったのは、原作の物語の展開に直接関係しない文章や複雑な文章である。例えば、“沈小霞”に裏切り者の大臣嚴嵩を描いた部分：“以柔媚得幸，交通宦官，先意迎合，精勤齋醮，供奉青詞，緣此驟致貴顯。為人外裝曲謹，內實猜刻。”“李汧公”に、李汧公の妻である貝氏の力強い口を描写した部分：“憑你什麼事，高來高就，低來低就，死的也說得活起來，活的也說得死了去，是一個翻唇弄舌的婆娘。”また、“十三郎”に十三郎の帽子を描写した部分：“多是黃豆大不打眼的洋珠，穿成雙鳳的牡丹花樣；當面前一粒貓兒眼寶石，睛光閃爍；四圍又是五色寶石攢簇，乃是鴉青、祖母綠之類。”さらに、“懷私怨”に王生が商人を殴るべきではなかったという嘆き：“大抵為人最不可使性。況且這小人買賣，不過爭得一二箇錢，有何大事？常見大人家，強梁僮僕，每每借著勢力，動不動欺打小民，到得做出事來，又是家主失了體面；所以有正經的，必然嚴刑懲戒。只因王生不該自己使性，動手打他，所以到底為此受累。”がある。

金氏は、原作から個々の単語を削除するというやり方はほとんどせず、古い単語をそのまま新しい単語に置き換えるのが一般的であった。

(2) 増加した部分

① 内容の増加

原作の改編にあたって、金氏は物語の内容に影響を与えない範囲で不要な描写を削除し、原作に忠実であった。金氏は原作への加筆にはより慎重で、正文内容への加筆はごくわずかで、そのほとんどは物語の流れをよりスムーズにするため、そして文章の表現に一貫性と完成度を持たせるためであった。

例 6. 知縣又叫呂大起來問。呂大也將被毆始末，賣絹根由，一一說了。知縣道：“莫非你是劉氏賣出來的？”/知縣聽這話，又問呂大這案事的緣故，呂大就把去年怎麼被王生打昏過去了，又救過來了，怎麼留他吃的酒飯，又送給他一疋白絹，後來到了擺渡上，怎麼那個擺擺渡的周四，把那疋白絹和那個竹籃子買了去的話，細細的說了一遍，知縣聽這話就說，呂大你莫非是劉氏把你買出來的。³⁷（懷私怨）

小文の追加は、金氏が原文を削除した後、改編した内容と文脈とのつながりをよくするために、文脈に沿った文章を追加したり、原作の描写が不明確なところに小文を加えるなどし、読みやすくしたことが主な原因であると考えられる。このような小さな文章の追加は、改編過程で非常に頻繁に行われている。

例 7. 主僕都嚇得了不得，飯也吃不下去，又不敢睡覺，大家就坐着等着那個人回來，看是怎麼樣。（李汧公）

例 8. 趕住了幾天，賈石就和沈公說，您也不用另找住處，就暫且住在我家。（沈小霞）

例 9. 依我的意見，兩位公子該當以宗祀為重。（沈小霞）

例 10. 夫人說我沒見過像老爺這樣兒脾氣的人，孩子丟了不但不快派人找去，倒還說這樣兒的懈怠話。（十三郎）

例 11. 趕到了家門口兒，就瞧見有他的倆底下人，在門口兒正和一個人吵翻哪。（懷私怨）

例 12. 那賣畫的也沒了氣了，就直給王生道謝，然後就拿上來那一疋白絹和他的那個竹籃子，告辭往擺渡口兒去了。（懷私怨）

例 13. 且說王家的童兒在縣衙門裏打聽消息，聽見說王生都據實的招認了，已經下在獄裏了。（懷私怨）

② 主語の追加

主語が省略された箇所は原作の中に大量に存在しており、文語文の重要な特徴である。そして金氏は《今古奇觀》を改編した際、主語が省略された文のほとんどに、前後の文章との関係から主語を加えたのである。

例 14. 說出來可不羞麼？/儂說出這個話來也不害羞麼。（李汧公）

例 15. 却待轉身/他剛要轉身。（李汧公）

例 16. 只為俱是一勇之夫/皆因我們都是一勇之夫。（李汧公）

例 17. 辛苦了一夜/您辛苦了一夜了。（懷私怨）

例 18. 先到家裏知了相公/咱們先回到宅裏去，稟知大人。（十三郎）

例 19. 天性絕飲/那箇人是生來的點酒不聞。（沈小霞）

例 20. 如何卻在你處？/這兩樣兒東西怎麼會到了你手裏呢。（懷私怨）

例 21. 如何是好？/這事該當怎麼辦呢。（懷私怨）

例 22. 也揪了世蕃的耳朵灌去/沈鍊就揪住他的耳朵，把酒給他灌下去了。（沈小霞）

例 23. 勉強應承。/王生也總勉強答應的。（懷私怨）

³⁷ 《今古奇觀》原文と改編後の《北京官話 今古奇觀》(1904, 1911) を「/」で区切り、原作と異なる内容を「 」で示す。

③ 語気助詞の追加

「語気助詞」は主に文末に使用されるが、中心的な主語やフレーズの後に使用されることもある。金氏は原作を改編する過程で、“呢、啊、麼、罷、呀、哪、納、來著、就是了”の合計9種類の語気助詞を追加し、物語全体の感情や口語の色彩を高め、話者の感情を正確に表現し、より感情豊かで口語的な文章を作り上げたのだ。

語気助詞が最も増加した物語は“李汧公”であり、9種類の語気助詞が全て用いられている。

例 24. 如何為盜？ / 怎麼會作了強盜呢。呢。（李汧公）

例 25. 秀才尊姓？ / 秀才貴姓啊。（李汧公）

例 26. 豈不強如做這賤役？ / 不比當那牢頭的差使強麼。（李汧公）

例 27. 速往遠處潛避。 / 叫他上遠遠兒的地方躲著去罷。（李汧公）

例 28. 足下如何行此大禮？ / 足下作甚麼這麼大禮呀。（李汧公）

例 29. 那裏什麼大恩人？ / 那兒這麼個大恩人哪。（李汧公）

周一民（1998：258）が指摘した北京語常用語気助詞³⁸によると、改編された《北京官話 今古奇觀》に収録されている9種類の語気助詞は、“麼”を除き、すべて北京語に属する語気助詞であることがわかる。また、李无未、杨杏红〈清末民初北京官话语气词例释—以日本明治时期北京官话课本为依据〉（2011：99）によれば、“麼、罷、呀”はいずれも明治期の北京官話教科書に多数使用されていた語気助詞である。さらに、“納”を特殊語気助詞と判断し、“你、您、他”と一緒に使うことができるという。語気助詞の“納”は《北京官話 今古奇觀》で以下の3例しか見当たらない、全て“李汧公”にある。

例 30. 李某日夜在心。 / 我黑下白日總惦記着您納。（李汧公）

例 31. 某當秉燭以待。 / 我在衙門裏等候着您納。（李汧公）

例 32. 原文なし / 後來我好重重的報答您納。（李汧公）

④ 「アル化」語の増加

儿化是北京话最重要的语言特点之一。³⁹金氏は《北京官話 今古奇觀》に「アル化」語を大量に加え、物語の全体を口語的な性格を持つ北京語に仕上げた。改編した4つの物語において、増加した「アル化」語は140個⁴⁰である。単音節「アル化」語が16個、2音節「アル化」語が103個、3音節「アル化」語が19個、4音節「アル化」語が2つある。

表 1-1. 《北京官話 今古奇觀》に用いられた「アル化」語（ピンイン順）

音順	「アル化」語
A	暗記兒、岸邊兒
B	包兒、步行兒、半天兒、擺手兒、半道兒、傍邊兒、翅膀兒、擺渡口兒
C	常常兒、出息兒
D	點兒、對面兒、地方兒、大褂兒、打盹兒、東邊兒、打戰兒、等一等兒、多半天兒
G	工夫兒、隔壁兒、跟前兒、鬼臉兒、拐灣兒、逛青兒、拱手兒

³⁸ 周一民（1998：258）は北京語常用語気助詞が“了、的、啊、呀、呢、吗（嘛）、哈、吧、喽、嗒、叻、哪、嘍、啖、呗、嘞、哟、嘿、嘸、哎、哪、啦、來着、着呢、的话”であると指摘している。

³⁹ 丁锋〈《官话萃珍》所见清末北京话儿化现象——兼谈儿化的语体、语法和语义功能〉2000、8頁。

⁴⁰ 重複する「アル化」語は一度だけ統計にかける。

H	花兒、後兒、好好兒、漢仗兒、活路兒、胡同兒、夥伴兒、後半天兒
J	今兒、今兒個、幾天兒、家常兒、舉動兒、幾樣兒、解悶兒、漸漸兒、酒盅兒、紀念兒、街盡溜兒
K	快快兒、空手兒、空地方兒
L	臉兒、涼風兒、老頭兒、兩樣兒、兩下兒、翎毛兒、李頭兒
M	面兒、面龐兒、慢慢兒、門礮兒、明兒個、模樣兒、門口兒
N	那兒、鳥兒、女孩兒、納悶兒、那樣兒
P	旁邊兒、跑堂兒
Q	氣頭兒、雀鳥兒、輕輕兒、起名兒、前邊兒、起頭兒、悄悄兒、強盜頭兒、悄不聲兒
R	人家兒、人群兒、人影兒
S	聲兒、手兒、三下兒、時候兒、俗語兒、說話兒、時不常兒、書香人家兒
T	童兒、偷偷兒、天天兒、土物兒
W	頑兒、瓦塊兒
X	媳婦兒、細細兒、笑臉兒、小聲兒、行兇兒、歇歇兒、小官兒、小女孩兒、小買賣兒、小福貴兒
Y	影兒、一邊兒、一塊兒、一點兒、一步兒、一聲兒、一半兒、一氣兒、一溜兒、一所兒、一會兒、一連串兒、一個人兒、一個樣兒、一說話兒、有點兒、顏色兒、右邊兒、遠遠兒
Z	這兒、昨兒、昨兒個、左邊兒、這邊兒、眨眼兒、早早兒、左右兒、這樣兒、嘴唇邊兒、這宗晚兒、這麼樣兒、這個樣兒、這個窮樣兒

楊杏紅〈日本明治時期北京官話課本中的兒話詞〉（2013）の「アル化」語の研究と比較すると、金氏が取り入れた「アル化」語は明治期の北京官話教科書に多く登場したものであり、その構成方法は当時の北京語の特徴と合致していることがわかる。また、これらの「アル化」語の多くは現在も使用されていることから、金氏は「アル化」語を選ぶ際に、できるだけ一般的な口語を取り入れるように努め、分かりにくい言葉や方言的な風味の強い「アル化」語は選ばなかったと判断できる。

金氏教科書に用いられた全ての「アル化」語については、本論文の第二章、2.2.2で詳細な考察を行った。

⑤ “的”の増加

楊杏紅（2014：132）は、“日本明治时期的北京官話課本中，書面上只有两个结构助詞——‘的’和‘得’，没有‘地’，也就是说，状语和中心语之间的连接成分在书面上还是写作‘的’。中心词和补语的连接可以使用‘的’，也可以用‘得’。”と指摘している。改編後の《北京官話 今古奇觀》にも助詞“地”の用例は見当たらず、“的”を加えた用例がたくさん見られる。

“的”を加えた用例は4種類に分けられる。一つ目は、文中に用い、修飾語の後に置き、名詞を修飾する。

例 33. 奇異兒/異樣的孩子（十三郎）

例 34. 你這負心賊子！/你這負心的賊子。（李汧公）

例 35. 此時京中官員/京裡的官員（沈小霞）

二つ目は、文末に用い、語気を表す。

例 36. 斷然不受。/我一定不收的。（李汧公）

例 37. 死當作犬馬酬恩。/我死之後變狗變馬也要報大恩的。（李汧公）

例 38. 你緊跟著同去，萬無一失。/ 爾同他去，萬無一失的。(沈小霞)

三つ目は、名詞、動詞、形容詞後つき、“的”は名詞の役割を担い、人や物事を表す。

例 39. 眾客長做甚麼生意? / 客人們是做甚麼買賣的。(李汧公)

例 40. 內中一箇家人姓胡。/ 有一個姓胡的。(懷私怨)

四つ目は、文中に用い、副詞的修飾語につく。この用法は現代中国語“地”の用法と一致する。

例 41. 教夫人等眾快回王府。/ 趕緊的叫夫人，帶着丫頭們，先回府裡去。(十三郎)

例 42. 馬給事再三告免。/ 再三的推辭不飲。(沈小霞)

例 43. 以後遂不絕往來。/ 後來王生和呂大倒不斷的來往交接。(懷私怨)

例 44. 時常展視。/ 常常的打開看。(沈小霞)

⑥ 挿入句の追加

“挿入語的作用是使句子表意严密化，补足句意，包括说话者对话语的态度，或引起听话者的注意。”⁴¹。改編された《北京官話 今古奇觀》には大量の挿入句が見られる。例えば：“這麼着、這個時候、這個工夫兒、暫且不提、且說”などがある。《北京官話 今古奇觀》においては、“這麼着”が82回用いられており、使用頻度が最も高い挿入句である。陳明娥、李无未(2012: 58)は“這麼着”を代詞に分類し、口語性と時代性を持つ言葉だと論述した。

《北京官話 今古奇觀》に用いられている挿入語の用例をいくつか挙げて、以下に示す。

例 45. 這麼着就預備酒飯肆款待。(沈小霞)

例 46. 這個時候兒張千李萬就催著他們快動身。(沈小霞)

例 47. 暫且不提，單說楊順自從發了摺子之後，他就派人把沈鍊拿來。(沈小霞)

例 48. 這個時候真珠姬急的正無路可逃。(十三郎)

例 49. 這個工夫兒呂大在傍邊兒跪着也說，回稟太爺，那天小的上擺渡的時候，也看見河岸底下有一個浮屍。(懷私怨)

例 50. 且說這天晚上王太假粧着，家裡有事情要回去。(李汧公)

⑦ 接統詞の追加

《今古奇觀》では単音節の接統詞を多く用いられており、使用頻度が高いのは“卻、但、即、反”などがある。より関連性が明確な文章にするため、金氏は《今古奇觀》の原文にはない2音節の接統詞をいくつか追加した。その中で多く用いられているのは“可就、所以、因為、然後、忽然、況且”である。データをとったところ、《北京官話 今古奇觀》において、“可就”が119回、“所以”が56回、“因為”が58回、“然後”が57回、“忽然”が28回、“況且”が10回、合計328回使用されていることが明らかになった。

表 1-2. 6種類 of 接統詞の使用頻度表

項目	李汧公	十三郎	沈小霞	懷私怨	合計
可就	53	33	15	18	119
所以	33	5	5	13	56
因為	23	5	15	15	58
然後	12	11	9	25	57
忽然	12	6	5	5	28

⁴¹ 黄伯荣、廖序东 2017 下册、78 頁。

况且	0	3	2	5	10
合計	133	63	51	81	328

周一民（1998：232-237）が指摘する北京語の常用接続詞によれば、金氏は接続詞の付加に北京語特有の接続詞を用いず、中国語で最も基本的かつ普遍的な接続詞をいくつか選んでいることがわかる。

⑨ 介詞の追加

改編された《北京官話 今古奇觀》には、“趕、起、解、打、從”の、合計5種類の北京語の特徴を有する介詞が取り入れられている。最も取り入れられているのが“趕”である。

例 51. 且說房德讓李勉進了書房。/趕房德把李勉讓近書房去了。（李汧公）

例 52. 次早坐堂/趕第二天早起。（沈小霞）

例 53. 次日午前/趕到第二天晌午之先（懷私怨）

例 54. 行到宣德門前/趕他走到宣德門前頭（十三郎）

“起、解、打、從”は全て起点介詞である。周一民（1998：217）は“北京口語里表起点的介詞比較豐富，單音節的有‘由、打、從、且’。‘且(qiě)’在風格上更土一些，它還有兩個變體‘起(qǐ)’和‘解(jiě)’，它們的來源有待考察。”と論述している。起点介詞については、本研究の第二章で詳しく考察するため、ここでは使用状況とそれぞれの用例数のみ示す。

改編された《北京官話 今古奇觀》には“從”の用例が7つあるが、その中の3つが原作から移されたのである。

例 55. 揭開地板一塊，有箇地道，從此而下/揭開一塊地板，從地道下去。（沈小霞）

例 56. 有老者從內而出/有一個老者，從裏頭出來。（沈小霞）

例 57. 自從十三日為始。/就從十三日起。（十三郎）

残りの4つの添加用例は全て“沈小霞”から。

例 58. 是老夫偷屍埋葬。/我從獄裏買出來，偷著埋的。

例 59. 主事出廳問道/那馮主事從裏頭出來。

例 60. 自昨日上午到宅。/從昨天晌午頭裡到宅裏來的。

例 61. 他千鄉萬里。/我的丈夫從家鄉萬里迢迢。

“起、解、打”の使用頻度は“從”より多いが、物語によって異なる。“李汧公”和“懷私怨”では“打”の用例はなく、“沈小霞”では“解”の用例がない。それぞれの用例は以下に挙げる。

例 62. 王生將手中之物出來與他。/王生就解袖子裏拿出拿包銀子來。（懷私怨）

例 63. 其禍都因小人而起。/實在是解小的身上起的。（懷私怨）

例 64. 鑽向人叢裏脫身而走//解人群兒裏跑了。（十三郎）

例 65. 問及來由/就問我是起那兒拿來的。（懷私怨）

例 66. 張千李萬初時還好言好語。/那張千李萬起頭兒還好。（沈小霞）

例 67. 在人叢中走了。/他就趕緊的起人群兒裏跑了。（十三郎）

例 68. 你是何處來的？/儂是打那兒來了的。（十三郎）

例 69. 在人叢中。/打人群兒裏就擠出去了。（十三郎）

例 70. 偶然在外經過/他偶然打酒館子門口兒過。(十三郎)

(3) 書き換えした部分

① “似的”

《北京官話 今古奇觀》では類似を表す連語助詞は“似的”を多く使用しており、明治時代の官話教科書によく使われた“一樣”、“一般”の用例はほとんどない。

《北京官話 今古奇觀》にある“似的”の用法は2種類ある。一つは連語助詞として、“仿佛”と一緒に使われることが多い。この場合はほとんど原作の“如、像”を“仿佛……似的”に改編されたと考えられる。

例 71. 賽過刀一般快。/說出話來就仿佛刀子似的。(李汧公)

例 72. 如落葉之聲。/就仿佛掉樹葉子的聲兒似的。(李汧公)

例 73. 驚得身子猶如吊在冰桶裏。/就仿佛起腦袋上澆了一桶涼水似的。(李汧公)

例 74. 猶如逃難一般。/ 仿佛逃難似的。(李汧公)

例 75. 卻像不曉得的。/ 仿佛還不知道似的。(十三郎)

もう一つは状語として、動詞の前に置く。このような用例は少ないが、全て“飛”の比喻用法として“飛似的”に書き換えられた。

例 76. 往常山一路飛馬而去。/往常山那條路，飛似的跑了去了。(李汧公)

例 77. 一行共五個馬，飛跑如雲。/總共五匹馬，飛似的跑了去了。(李汧公)

例 78. 兩箇家人抬着飛走。/那倆家人就抬起來轎子，飛似的走了。(十三郎)

例 79. 飛也似去報了。/飛似的跑到王府裡送信去了。(十三郎)

太田辰夫(1965:54)によると、類似を表す“似的”は北方語、南京官話は“一般”、“一樣”を用いる。《北京官話 今古奇觀》に“一樣”の用例は下記の2例しかなく、“一般”の用例は見当たらない。

例 80. 且是此夜難得一輪明月當空，照耀如同白晝。/恰巧這天晚上又是一輪明月，照得如同白天一樣。(十三郎)

例 81. 當下眾強盜取出火種，引着火把，照耀渾如白晝。/這個時候這夥子強盜，就拿出自來火來點着了火把，照的就如同白天一樣。(李汧公)

② 否定副詞

楊杏紅(2014:97)によると、“古代汉语的否定副词如“莫、勿、否”等，除了引述古语的时候之外，在北京官话课本中很少见到。“休”在较早的白话中经常用来表示禁止(太田辰夫, 1957)，但在明治时期的官话课本中几乎没有用例。“不”、“没”、“別”是官话课本中常见的否定副词，其分工也较为明确，基本用法与普通话没有差异。”という。楊杏紅が指摘した“不、没、別”については、改編後の《北京官話 今古奇觀》には数多く見られる。“不”と“没”は《今古奇觀》の中にも大量に使われていて、改編用例はほとんどない。しかし、“別”の改編用例は豊富で、原作に使われた古代漢語の“莫”から“別”に改編された用例が最も多い。

例 82. 這却莫怪。/您可別怪。(李汧公)

例 83. 列位莫動手。//衆位先別動手。(李汧公)

例 84. 莫說作掌盤。/ 別說是作山寨裡的頭目。(李汧公)。

例 85. 莫要慌。/姑娘別着急。(十三郎)

他にも“別”の改編用例がある。

例 86. 休得指望。/別指望着。(李沂公)

上記の用例は何れも原作に否定副詞がある。もう一種類は原作の肯定文を以下のように“別”の否定文に改編した。

例 87. 小心在意。/你千萬可別大意是要緊的。(十三郎)

“別”の改編用例より“何必”の方がずっと少ない。周一民(1998:210)によると“何必”も北京語口語の否定副詞となる。

例 88. 何勞足下自爲。/何必足下自己動手呢。(李沂公)

例 89. 怎就着惱。/何必着急呢。(李沂公)

例 90. 何消大驚小怪。/何必大驚小怪的。(李沂公)

現代北京口語では、もう一つ常用否定副詞“甬”があり、太田辰夫(1958:303)は“甬”について、「《不用》の合音できわめて新しい。」と指摘している。しかし《北京官話 今古奇觀》には“甬”の用例は見当たらなかった。

③ 語気副詞

《北京官話 今古奇觀》で、最もよく使われている語気副詞は“敢情”である。太田辰夫(1958:291)は「北京語では《敢自》ともいう。また《敢情》も同類の語。《原來》の意味のときと、《自然》《當然》の意味のときとある。」と指摘している。

例 91. 乃是個敗落花園。/敢情是個破花園子。(李沂公)

例 92. 原來我主人曾做過強盜。/心裡說敢情我們主人，先頭裡作過強盜啊。(李沂公)

例 93. 卻被放花炮的失手。/敢情是放花炮的失了手。(十三郎)

例 94. 卻不是自家府門。/敢情不是自己的家門口兒。(十三郎)

例 95. 卻是張千來尋李萬不見。/敢情是張千來了。(沈小霞)

上記の用例から見ると、《今古奇觀》の“原來、卻、乃”などの古代漢語によく使われる語気副詞から書き換えたものが多い。そして“敢自”の用例は1つしかないので、“敢自”は代表的な用例ではないことが分かる。

例 96. 萬分好了。/那敢自是十分好了。(李沂公)

“敢情”、“敢自”以外にもう一つ語気副詞“簡直的”がある。太田辰夫(1958:290)は「現代語の意味は、①率直に、あからさまに、まっすぐ、②いっそ、③まったく、まるで、などがあるが、はじめの意味が基で、②③はそれから派生したものらしい。(中略)③に相当するものは清代にはない。」と指摘しているが、《北京官話 今古奇觀》の“李沂公”には次の用例がある。

例 97. 卻害我們喫屈官司。/這簡直的是害了嚙們了。(李沂公)

ここの“簡直的”の意味は「③まったく」という意味であると考えられる。

④ 程度補語“極了”

“極”について、程度副詞としての用例はないが、程度補語としては用例がある。周一民(1998:195)は“‘极’也表示最高程度，一般用作补语，例如‘好极了、厉害极了’，其后总要加‘了’。‘极’有时也作状语，(中略)不过这种用法属于新派北京话，

老派不这么说。”と指摘している。《北京官話 今古奇觀》ではほぼ“極”の後は“了”となる。

例 98. 甚慰鄙意。/我心裡歡喜極了。(李沂公)

例 99. 此計甚妙。/這個法子妙極了。(李沂公)

例 100. 甚是寂靜。/僻靜極了。(沈小霞)

これらの用例から見ると、原作の古代漢語によく使われる程度副詞“甚”を程度補語“極+了”に変えた用例がほとんどであるが、“了”を付けない用例も見られる。

例 101. 路楷拍手道，妙哉妙哉。/路楷聽這話，就拍著巴掌說，妙極妙極。(沈小霞)

⑤ 特殊疑問詞“多嚕”

楊杏紅 (2014 : 157) は“在日本明治时期的北京官话课本中，出现过‘多嚕’、‘多咱’、‘多偌’、‘多咎’这4种写法，在这4种写法当中，以‘多嚕’最为普遍。在有的教材中出现多种写法，如《官话指南》中就有‘多咱’、‘多嚕’两种写法。と指摘している。《北京官話 今古奇觀》では“多嚕”と“多偌”の表記しか使用されていない。また、書き換えられた用例はそれぞれ6例、1例ある。

例 102. 如何得個好日? /多嚕是個熬出来呀。(李沂公)

例 103. 那得你發積? /多嚕是個發積呀。(李沂公)

例 104. 後會何期。/不知道後來又得多嚕纔能見面了。(李沂公)

例 105. 何嘗有什麼沈公子到來。/多嚕有什麼沈公子到這兒來了。(沈小霞)

例 106. 他昨日何會到我家來。/昨天他多嚕到我家來了。(沈小霞)

例 107. 那張千李萬几時來回復你的說話。/差人是多嚕來回復爾的。(沈小霞)

例 108. 即欲遠出，有一年半載不回。/也不知道多偌纔能回來哪。(沈小霞)

以上の用例から、《北京官話 今古奇觀》に使用された“多嚕”と“多偌”は文頭と文中に置き、何れも状語として用いられたことが分かる。原作の“何期”、“何會”、“几時”は書き換えられた後の“多嚕”の意味と対応するが、原作の“如何”、“那”⁴²、“何嘗”は古代漢語によく使われた疑問詞であり、どちらも“多嚕”の意味にはならない。

⑥ 受身表現に用いられる“叫”

現代中国語の“叫”は使役と受身の両方に用いられる。《北京官話 今古奇觀》にも使役と受身の用例がある。

太田辰夫 (1958 : 248) は、「被動の《教》は唐代より、また被動の《叫》は清代から用いられた。」と指摘している。《北京官話 今古奇觀》で、最も使われた受身動詞は“叫”構文である。その“叫”を用いた受身表現はほとんどが原作の“被”を“叫”に書き換えたものである。

例 109. 房德被搶白了這幾句。/房德叫他數落了這幾句。(李沂公)

例 110. 恐被鄰家聽見。/叫街坊聽見倒怪不好看的。(李沂公)

例 111. 被風吹的颼颼。/叫涼風兒一吹颼颼的響。(李沂公)

例 112. 又被擠住了腳，行走不得。/又叫大家擁擠得寸步難行。(十三郎)

また、上記とは異なる“叫…給…VP”に書き換えられた用例もあるが、用例は少ない。黄伯榮、廖序东《现代汉语》(增订六版)(2017 下册 : 93)によると、これは口語表現である。

⁴² この「那」は疑問詞「哪」である。

例 113. 被打翻數人。/叫人家給打躺下了好幾個人。(李汧公)

例 114. 必然衙內遭了毒手。/可恐怕叫人給害了。(李汧公)

⑦ 使役表現に用いられる“叫”

使役表現は“叫”を中心に展開している。太田辰夫(1958:241)は、「《叫》はもともと呼ぶ意味の動詞である。これが兼語句に用いられ、<……を呼んで……させる>意に用いられ、のち純然たる使役の意味となった。《叫》は去聲であるので、この語が多く用いられるようになると《交》は用いられなくなりがんに去聲のある《教》の字が残った。しかし《教》もだんだん《叫》におされて用いられなくなってきたが、最近はまだ《教》を用いることが多くなった傾向もみえる。」と指摘している。

《北京官話 今古奇観》では、“教”を“叫”に改編した用例が見られる。

例 115. 莫教聚於一處。/別叫他們聚在一塊兒。(李汧公)

例 116. 又教人傳話衙中。/房德又叫人出去傳話。(李汧公)

例 117. 又教家人另放一塌。/又叫家人在旁邊兒放了一張床。(李汧公)

例 118. 教他快去稟官。/叫他趕緊的報知老爺。(李汧公)

原作は明代の言語の特徴を持っており、当時は“教”が使われていたが、清末期の《北京官話 今古奇観》では“叫”に書き換えられたため、“教”には使役動詞の役割がだんだんなくなってきたことが分かる。また、金氏教科書に用いられている“叫”構文については、本研究の第四章で詳しく考察する。

1.2.3 結論

本節は《直譯附》及び《北京官話 今古奇観》の改編を中心に考察することで、両書における編纂目的と改編過程を解明した。

《直譯附》は明治時代の中国語教科書の中で初めて公文を改編した著作であり、新たな教科書の体裁を創出し、選ばれた70件の公牘原文はそれぞれ内容が異なり、それらは「啓牘」と「照會」の2種類に分けられている。金氏と呉氏は当時の日清往来に欠かせない「公牘」では格例部分を削除し、原文内容に忠実な北京語に改編し、世に提供した。

金氏と呉氏は《直譯附》を編纂しただけではなく、それに併せて使う《訓譯》も編纂、そして公牘原文に使用された単語の説明と公牘原文の和譯を提供、《直譯附》の使用附加価値を高めた。セットとなった2冊の著作はのちの編纂者達にも参考にされ、貴重な教科書となっている。

《北京官話 今古奇観》は原作《今古奇観》から4つの物語を選び、原作に用いられている明末清初の白話文を北京官話の口語文に改編した。金氏が選んだ4つの物語は、鮮やかでひねりがあり、且つ深い教えがあり、内容的にも魅力的な課外授業用の本となっている。金氏は改編にあたって、原作を非常に尊重しており、内容の骨格は原作とほぼ同じだが、言葉や単語の使い方は原作を大幅に変えているといえる。改編部分はほとんどが細かい修正であり、中でも文字と単語の修正が多い。

周一民(1998)と比較すると、金氏が改編の過程で、北京語の特徴を持つ語彙を大量に追加していることがわかる。介詞の増加は“趕”をはじめ、“起、打、解、從”も使用した。語気助詞の増加が最も多く、9種類増加し、何れも北京語口語での常用語気助詞である。また、北京語に最も特徴的な「アル化」語を140個増加した。さらに、物語をよりスムーズにするため、また文章の表現に一貫性と完成度を持たせるため、主語、

挿入語、接続詞、助詞“的”も多く加えた。語彙の書き換えにおいて、金氏は1種類のみを用法をメインに使用し、ほかの同義語の使用を控える傾向があったと考えられる。受身表現と使役表現は共に“叫”を中心に使用し、受身表現では、北京語口語は“被”を使用しないため、原作の“被”を“叫”に書き換えた用例が多く見られる。従って、“叫”の多用から《北京官話 今古奇観》に使役表現と受身表現が頻繁に用いられていると判断できる。また、原文を書き換える際に、“多啗（俗）、敢情、似的、極了”などの北京語語彙を用いたことが明らかになった。

《北京官話 今古奇観》の語彙選択では、金氏は訛りが強い北京方言の語彙を使わず、より親しみやすい口語の語彙を使用していることがわかる。これらの北京語語彙を加えることで、分かりにくい白話小説が、北京語の色彩豊かで実用性が高い課外授業用書籍に生まれ変わった。

1.3 金國璞の生涯とその研究

1.3.1 先行研究

金氏の生涯について、楊鉄錚（2017）がその出身、来日後、帰国後、出版物のことについて、詳細に紹介している。以下では楊鉄錚（2017：43-63）の研究に基づいて、金國璞の経歴をまとめる。

金國璞は、字卓菴（卓安、卓庵）、北京出身で、生没年は不詳である。金氏の出身校は同文館であり、日本に来る前に、北京公使館で長期間日本人留学生に中国語を教えていた。明治30年（1897）に開校した高等商業学校附属東京外国語学校（現東京外国語大学の前身）の講師として、日本文部省により招聘され、日本で6年間勤務した。そして明治36年（1903）に同校講師を辞して帰国した。日本滞在中、金氏は高等商業学校附属東京外国語学校のほか、東京外国語大学、東京帝国大学、台湾協会学校、善隣書院でも仕事を兼任していた。帰国する前に、勲五等旭日章を受勲した。帰国後、金氏の教え子である日本人学生が出資人となり明治36年（1903）8月1日、北京に「支那語研究舎」（後に清語同學會に改名）を設立した。その後、金氏は「支那語研究舎」に住みながら中国でも中国語教育に貢献し続けた。金氏は明治14年（1881）から日本人学生に中国語を教え、明治19年（1886）に北京公使館の中国語試験官を務めた。明治21年（1888）に、北京に滞在していた宮島大八に中国語を教えていた。そして帰国した後、少なくとも明治44年（1911）まで、北京に滞在する日本人学生に中国語を教えた。そのため中国語教授歴は30年以上である。又、金氏は生涯数多くの中国語教科書を出版し、一生をかけて中国語教育に従事した。

1.3.2 共編者の研究

これまでの先行研究では金氏の出身、職歴、出版物、日本での生活、受勲歴などが詳しく考察されたが、金氏が出した中国語教科書の共編者達、特に平岩道知、鎌田弥助、瀬上恕治の3人については、僅かな伝記資料しか伝わっていない。そこで本節では共編

者の資料収集に努め、金氏と共編者の関連を探ることによって、金氏の人物像をより一多方面から描写する。

1.3.2.1 鄭永邦、吳啓太、吳泰壽

鄭永邦、吳啓太、吳泰壽の生涯について、先行研究の考察は詳細である。

明治36年(1903)4月に文求堂で刊行された《改訂官話指南》は鄭永邦と吳啓太の共編により、金氏が改訂した官話教科書である。

鄭永邦について、『明治大正人物事典 I 政治・軍事・産業編』(2011:145)は以下のように記述している。

鄭永邦 てい・えいほう 外交官 大使館二等書記官
文久2年(1862)12月28日～大正5年(1916)8月20日。生：肥前国長崎(長崎県長崎市)学：東京外国語学校 歴：家は代々長崎奉行の唐通事として清朝との交渉にあたり、父・鄭永寧も外交官・司法官として活躍。彼も長じて外務省に入り、明治13年北京公使館通訳見習となる。18年第二回北京談判に際して公使館御用掛に任ぜられ、父の代わりに全権大使伊藤博文の通訳を務めた。33年の北清事件では他の公使館員が敵の銃撃に倒れる中で清国との交渉の一切を引き受け、事変後の事後処理でも辣腕を發揮した。38年小村寿太郎全権大使の随員として北京条約の締結に尽力。次いで39年には英国大使館に転じるが、のち再び北京公使館に復帰した。大正2年退官。
父＝鄭永寧(外交官)、兄＝鄭永昌(外交官)

鄭永邦は東京外国語学校を卒業した後、明治13年(1880)に通弁見習として、清国北京公使館に派遣された。中国語教育者井上翠が『松濤自述』⁴³で鄭永邦についての記述で金氏にも言及した。

鄭は明治十四年頃、北京に留學して、金國璞について支那語を學習し、金國璞、吳啓太と共に「官話指南」を著わし、日本の支那語學界に大いに貢献した人であることは、今さら申すまでもないでしょう。

このことから、金氏は明治14年(1881)に鄭永邦に中国語を教えていたことがわかる。

吳啓太の生涯については、『対支回顧録』下巻(1936)に詳しく紹介されている。また、孫云偉(2019)は吳啓太の履歷書を発見し、その履歷書の紹介、吳啓太が北京公使館に派遣される前の中国語學習歴、ブラッセル大学⁴⁴での學習状況の3方面から吳啓太の経歴を補足した。『対支回顧録』下巻の記載と孫云偉(2019:178-201)の研究を合わせて、吳啓太の生涯を以下にまとめる。

吳啓太は安政5年(1858)8月25日生まれの長崎県士族で、旧族籍は肥前長崎である。明治11年(1878)に通弁見習として北京に派遣され、明治14年(1881)に外務

⁴³ 『中国語文資料彙刊』(第5篇第4巻)1995、319頁。

⁴⁴ 現ブリュッセル大学である。

書記生に任ぜられ、北京公使館に在勤を命ぜられた。その後明治18年(1885)に官を辞し、官費留学生となり、明治19年(1886)2月からベリキープリュクセル府⁴⁵の私立大学であるブラッセル大学に留学した。呉啓太のブラッセル大学における学習記録から、呉啓太は少なくともラテン語、英語、中国語の3カ国語に精通していた。明治25年(1892)2月、呉啓太はカンヂターの学位を取り、8月頃帰国した。明治25年(1892)、外務省試補となり、陸奥宗光外相の秘書官に任じられた。呉啓太は日清戦争の前後にかけて貢献するところが多く、その功に依り勲六等単光旭日章及び金圓を賜う。明治28年(1895)11月21日、病死し、享年三十八であった。長崎聖福寺の後山に葬られ、外務秘書官正七位勲六等を授与された。

金氏、鄭永邦、呉啓太の関係について、六角恒廣(2002:106-107)は金氏と黄裕壽が1882年に出版された初版『官話指南』に寄せた「序」から、「呉啓太・鄭永邦の学習に関係のない人が「偶然過訪」と序文に書くわけもない。しかも「爰為之校對一番」と述べている点からも、黄裕壽と金国璞が、編者の北京官話の教師であったといえる。」と述べている。

金氏は呉啓太、鄭永邦の中国語教師であり、来日前に、長い間日本人留学生に中国語を教えていた。楊鉄錚(2017:52)によると、当時日本人に中国語を教える専門機関が北京公使館しかなかった、そのため、金氏は北京公使館の中国語教師として、公使館で鄭永邦を教えたと思われるという。また、明治11年(1878)に呉啓太が北京公使館の外務書記生に赴任していたため、金氏はおそらくその時にも公使館で呉啓太に中国語を教えていた可能性があると思われる。

呉泰壽の生涯については、孫云偉(2019)が詳細に紹介している。以下は孫云偉(2019:96-97)の研究に基づいて、呉泰壽の経歴をまとめる。

呉泰壽は慶応元年(1865)2月、肥前国西彼杵郡下長崎村に生まれた。『官話指南』の著者呉啓太、鄭永邦とはいとこ同士である。父呉敬十郎(後に呉安来に改名)は鄭永寧、呉碩⁴⁶の兄弟であり、「呉家の六駿」と称された。明治4年(1871)、父の元で「漢語」と「清国南話」を学び始め、明治14年(1881)官費生として東京外国語学校漢語学科で北京官話を学び始め、明治18年(1885)3月、天津条約が締結される時、伯父の鄭永寧と共に通訳を務め、伊藤博文大使に随行し天津と北京に行った。明治20年(1887)に呉泰壽は帝国大水産学校教授の職を辞し、大阪内外綿株式会社に就職し、明治27年(1894)7月、日清戦争時に随軍出征し、明治28年(1895)、台湾が日本に占領された後、台湾に入り行政方面の仕事に従事した。そして明治33年(1900)7月、陸軍通訳官を務め、明治34年(1901)6月、北清事変時に再び随軍出征した。明治34年(1901)11月、東京外国語学校の清語学科の初代教授に就任し、東京高等商業学校講師も兼任した。明治36年(1903)4月、「脳神経衰弱症」を患ったため、東京外国語学校教授職を辞した。明治37年(1904)3月、大本營の「清語通訳」に任じられ、同年日露戦争時に3度の出征をした。明治38年(1905)12月、日本に凱旋し、明治39年(1906)大連で「特産物」と「地金銀」の商売に従事した。その後、自ら和泰錢莊を創設すると同時に、「日華興業」、「大連證券交換所」、「大連製油株式会社」で重要な職務に就いた。

⁴⁵ 現ベルギー、ブリュッセルである。

⁴⁶ 鄭永寧、呉碩は『官話指南』の著者呉啓太、鄭永邦の父である。

呉泰壽は明治33年(1900)から明治36年(1903)4月まで東京外国語学校の清語学科の初代教授を務め、金氏と同じ時期に東京外国語学校で働いていたことが明らかである。呉泰壽は《支那交際往来公牘 北京語直譯附》と《支那交際往来公牘訓譯》を編纂した他に、金氏が《日清往来尺牘》の校閲者である《日清往来尺牘》(1904)と《官話指南総訳》(1905)を出版した。出版時期からみると、《支那交際往来公牘 北京語直譯附》と《支那交際往来公牘訓譯》の2冊は全て二人が東京外国語学校に務めていた時の著作である。金氏は日本語がわからなかったため、《支那交際往来公牘訓譯》は恐らく呉泰壽一人で執筆したと考えられる。

1.3.2.2 平岩道知

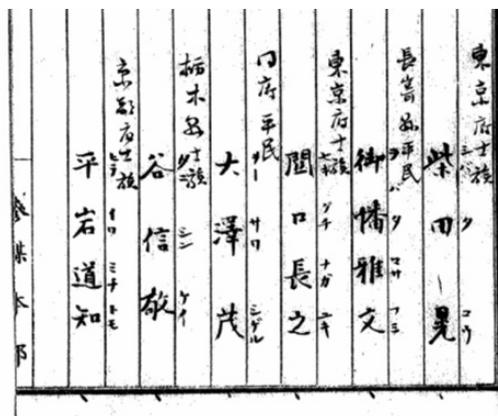
平岩道知に関する資料は限られているが、見つかった数点の資料をプロフィール、清語学習歴、職歴、受賞歴、著作に分類し、以下に紹介する。

(1) プロフィール

資料1. 『新訂増補 人物レファレンス事典 明治・大正・昭和(戦前)編Ⅲ』(2019:1806)は以下のように記述している。

平岩道知(ひらいわ どうち)、江戸時代末期～明治期の人。関東都督府民政署翻訳官。(生:万延1年(1860)10月)

図3. 資料2. 「清国語学生徒旅券の義其筋へ照会の件」(Ref.C04028651900⁴⁷)



平岩道知の名前の右上に「京都府士族」と記載されているため、京生まれと推測できる。

資料3. 「属村上傭吉外1名家族御用船便乗願の件」(Ref.C03027047000)

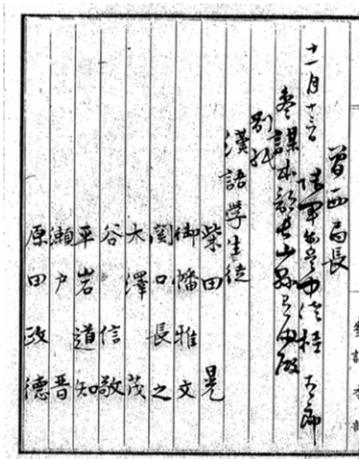
便乗許可願 関東州民政署 通訳官 平岩道知 妻はきく 長男道直 長女延恵 下婢吉田

このことから、平岩道知の家族は妻、長男、長女であったことが分かる。

(2) 清語学習歴

⁴⁷ アジア歴史資料センターの請求番号で、下記も同様。

図 4. 資料 4. 「11_13 支那語学生徒採用伺（柴田晃他 11 名）」(Ref. C07080181200)



明治 12 年 (1879) 11 月、平岩道知は陸軍参謀本部に漢語学生徒として、他の 10 名と共に採用された。

資料 5. 「文部省漢語学生徒 11 名清国語学生徒中付に付通報方申入」(Ref. C04028651700)

二第二七六四号 文部省漢語学生徒柴田晃外十一名之者当本部ニ於テ別紙之通相達候条此旨文部省江御通報方御取計相成度此段申入候也 明治十二年十一月二十八日 参謀本部副官 陸軍歩兵中佐齋藤正言 参八百五号 陸軍歩兵大佐浅井道博殿 柴田晃 御幡雅文 関口長之 大澤茂 谷信敬 平岩道知 瀬戸晋 原田政徳 小川忠弥 沼田正宣 末吉保馬 西山謹三郎 清国語学生徒申付候事 各十二名 清国留学申付候事 但学資金一ヶ年七百元下賜候事 明治十二年十一月二十八日 参謀本部 石川県士族 富池近思 右増加

この資料によると、平岩道知は明治 12 年 (1879) 12 月に文部省清国語官費生として清国へ留学し、年間金七百圓の奨学金をもらっていた。

(3) 職歴

資料 6. 「12_28 関口長之当省御用掛申付他」(Ref. C07080589300)

参進第五八二号 辞第一二二二号 関口長之 富地近思 御幡雅文 杉山昌大 柴田晃 当省御用掛申付候事 准判任月給金二十五円下賜候事 原田政徳 大沢茂 草場謹三郎 谷信敬 川上彦次 瀬戸晋 沼田正宣 平岩道知 末吉保馬 当省御用掛申付候事 准判任月給金二十円下賜候事 右十四名 参謀本部出勤申付候事 別紙之通候条別紙本人へ御達可有之候也 明治十四年十二月二十八日 陸軍卿大山巖 参謀本部長山県有朋殿

平岩道知は明治 14 年 (1881) 12 月に准判任の職で陸軍参謀本部に出勤することになり、月給は 20 円であったことが分かる。

資料 7. 「瀬戸晋外 1 名雇員 2 採用の件」(Ref. C06080715300)

式第三二四一号 陸軍参謀本部 瀬戸晋外一名雇員ニ採用ノ内議 明治二十一年十月十六日 回答案 非職陸軍省准判任御用掛 瀬戸晋 平岩道知 右御部雇員ニ採用相成度ニ付差支之有無御内議之趣了承於当省差支之

明治 21 年 (1888) 10 月に非職陸軍省准判任として採用された。

資料 8. 「4 月 16 日 平岩書記、末吉書記休職を命じたる上は陸軍通訳採用方移牒」
(Ref. C09122001600)

大本營陸副臨人第二九号第一 総長ヨリ陸軍大臣へ案 参謀本部附 陸軍通訳士官平岩道知 同末吉保篤 右休職ヒ命出上ハ清語通訳ニ採用セラレ奏任官仰遇月俸八十円ヲ給シ大本營附命セラレ度及移牒候也 本案ハ人晋第九号ニヨリ

明治 37 年（1904）4 月に陸軍通訳士官を休職し、清語通訳として採用された。月給 80 円であった。

資料 9. 「5 月 14 日 陸軍通訳草場謹三郎外 1 名関東洲民政署通訳に任命方移牒の件」
(Ref. C09122126800)

大本營陸副臨人第五六六号第一 五月十四日 総長ヨリ陸軍大臣へ 高等官六等年俸千二百円ニ 陸軍通訳奏任待遇月俸百二十円草場謹三郎 高等官七等年俸九百円ニ 同奏任待遇月俸七十円平岩道知 右頭書ノ官等俸給ヲ以テ関東洲民政署通訳官ニ任セラレ度及移牒候也 関東洲民政署高等官人名 通訳官（表）現官職 現官等、俸 昇等、俸 姓名 履歴書ノ有無 陸軍通訳 奏任待遇月百二十円 六等年千二百円 草場謹三郎 無 同 同月七十円 七等年九百円 平岩道知 無

翌年（1905）5 月、関東洲民政署通訳官に任じられ、月給 70 円、年収 900 円となった。

(4) 受勲歴

図 5. 資料 10. 「陸軍中将寺内正毅以下四名外国勲章記章受領及佩用ノ件」
(Ref. A10112508300)

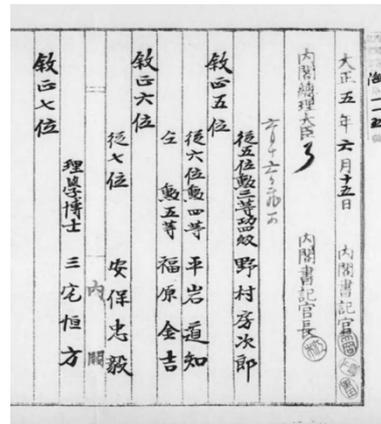
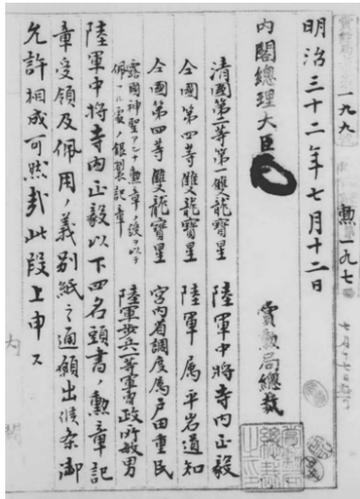
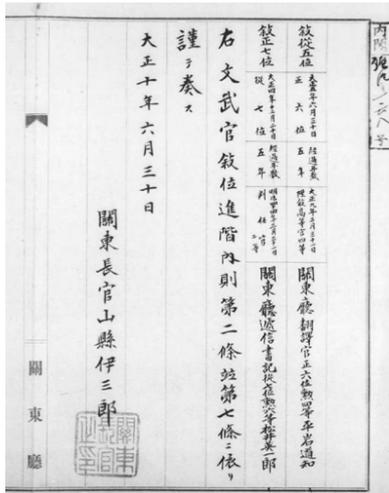


図 6. 資料 11. 「陸軍大佐野村房次郎外四名叙位ノ件／関東都督府翻訳官平岩道知、大阪府警視福原全吉、台湾総督府法院判官安保忠毅、農事試験場技師理学博士三宅恒方」
(Ref. A11112536800)

図 7. 資料 12. 「関東庁翻訳官平岩道知外十六名叙位ノ件○朝鮮総督府検事内田守蔵外十二名」 (Ref. A11112933300)



資料 10、資料 11、資料 12 により、受勲歴は 2 回で、明治 32 年 (1899) 7 月に「清国 第四等雙龍寶星」、大正 5 年 (1916) 6 月に「従六位勲四等」を授与された。さらに、大正 10 年 (1921) 6 月、叙位進階で「従六位勲四等」から「正六位勲四等」になった。

(5) 著作

明治 31 年 (1898) 12 月に金氏と共編で《北京官話: 談論新編》を出版した。それ以外も下記の中国語教科書を 3 冊出した。

番号	書名	著者	出版社	出版年月
1	日清会話	平岩道知	参謀本部	明治 27 年 (1894)
2	兵要支那語	近衛歩兵第 1 旅団 編 平岩道知校	東邦書院	明治 27 年 (1894)
3	日華会話筈要	平岩道知	岡崎屋書店	明治 38 年 (1905)

金氏と平岩道知の共編である《北京官話 談論新編》に服部宇之吉が寄せられた序文にはこう述べている。

高等商業学校附属外国語学校清語教師金先生本国に在り多年本邦の留学生に清語を教授し来りて現職に就く先生官話を学ばむと欲する者の為に適當の書無きを憂へ参謀本部平岩道知君と談論新編百章を合著す。

この序文では金氏と平岩道知の関係については言及していないが、金氏が来日前に、長い間日本人留学生に中国語を教えていたことが分かる。

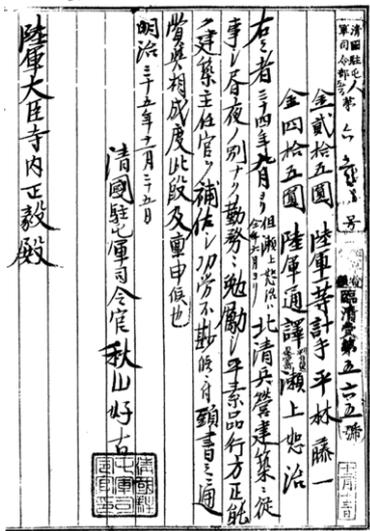
平岩道知は明治 12 年 (1879) 12 月に文部省清国語官費生として清国へ留学し、当時日本人に中国語を教える専門機関が北京公使館しかなかったため、平岩道知は鄭永邦、吳啓太と同じく、北京公使館で金氏に中国語を教わった可能性があると考えられる。

1.3.2.3 瀬上恕治

瀬上恕治、生没年は不詳である。陸軍清語通訳官であり、杭州領事館にも務めていた。瀬上恕治のプロフィール、清語学習歴に関する資料は見つからなかったが、職歴と受勲歴に関する資料が見つかったため、以下に紹介する。

(1) 職歴

図 8. 資料 1. 「駐屯軍 平林 1 等計手以下 2 名賞与の件」 (Ref. C08010304100)



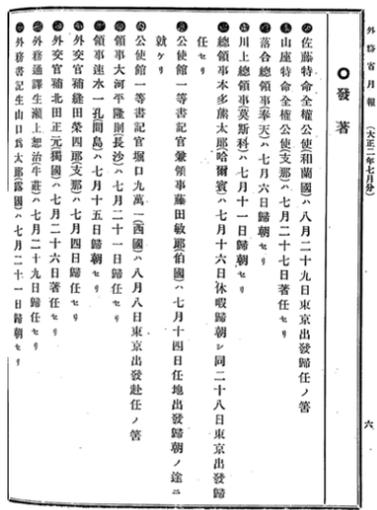
明治 35 年 11 月 25 日の「陸軍省大日記・清国事件」により、瀨上恕治は陸軍清語通訳官であることが分かる。瀨上恕治が陸軍清語通訳官を務めた時期は不明だが、筆者が調べた限り、この記録は瀨上恕治の職歴に関する最も古いものである。

資料 2. 「外務省月報 (明治四十年一月分) / 職員進退 (外・報 3)」
(Ref. B13091306000)

職員進退 叙任及辞令 清国在勤ヲ命ス(一月九日) 外務通訳生 西田 畊一 任外務通訳生 給五級俸 天津在勤ヲ命ス(一月九日) 瀨上 恕治

明治 40 年 (1907) 1 月、瀨上恕治が外務通訳生に任ぜられ、天津在勤に命じられた。

図 9. 資料 3. 「外務省月報 (大正二年七月分) / 発著 (外・報 4)」
(Ref. B13091333700)



大正 2 年 (1913) 7 月の「外務省月報」には「外務通訳生瀨上恕治(牛莊)ハ七月二十九日帰任セリ」と記載されている。筆者が調べた限り、瀨上恕治の外務通訳生としての職歴資料はこれが最後である。

図 10. 資料 4. 「9. 杭州 (B-3-4-2- 50_4_002)」 (Ref. B11100168500)

図 13. 資料 7. 「93. 在外帝国総領事、領事、副領事（15名）の現任地問合 海軍省経
理局 出納」 (Ref. B15100882800)

資料 7 により、大正 7 年（1918）
10 月、元杭州領事館副領事である瀬
上恕治が九江領事館へ転勤し、九江
領事館副領事になったことがわかる。

図 14. 資料 8. 「102. 在外帝国領事館並びに現任官氏名問合 海軍省経理局出納」
(Ref. B15100883700)

館名	現在公館長氏名	前任公館長氏名	備考
九江領事館	日下ノ成	瀬上 恕治	瀬上副領事ハ歸朝中
汕頭領事館	領事 深澤	中田 莊太郎	中田中書記生ハ他へ轉勤セリ
長沙領事館	領事 八木	元 八坂 興三	領事ハ歸朝中
重慶領事館	領事 中村	修書記生 松岡 壽八	松岡書記生ハ不日上海ヨリ 中村領事ハ他へ轉勤シ居リ
盤谷領事館	領事 高橋	清一	
沙市領事館	領事 肥田	好孝	
福州領事館	副領事 森	浩	
南京領事館	書記生 清野	長太郎	
厦門領事館	書記生 市川	信也	
杭州領事館	書記生 荒井	金造	領事 矢田部 保吉 矣 副領事ハ歸朝中

大正 7 年（1919）10 月の海軍省経理局出納人事課の
資料には九江領事館の前任公館長が「瀬上恕治」であ
り、摘要が「瀬上副領事ハ歸朝中」と記載されている。
瀬上恕治の経歴に関する資料はこれが最後である。

資料 9. 黄漢青（2007：165）は瀬上恕治の清語同学会での活動を以下のように述べて
いる。

清語同学会は、名称の変更に伴い、学校の組織も大きく変わった。評議員と幹事が
新たに設けられ、清語同学会の「一切の事」は「評議員と幹事との協議」によって処
理されるようになる。服部、鄭、川島は初代評議員となり、陸軍通訳官瀬上恕治、正
金銀北京支店員古賀邦彦は幹事として、それぞれ学務と庶務を分掌した。

清語同学会とは旧称支那語研究舎のことであり、金氏の帰国後に教え子である日本人
学生 3 人と北京に在住していた元支那語学校校長代理の山本滝四郎が出資人として 1903
年 8 月 1 日、北京に設立された学校である。黄漢青（2007）の研究により、瀬上恕治が
金氏と共に清語同学会で働いていたことが分かる。

(2) 受勲歴

図 15. 資料 9. 「典獄有馬四郎助外三十七名叙位ノ件」 (Ref. A11112620800)

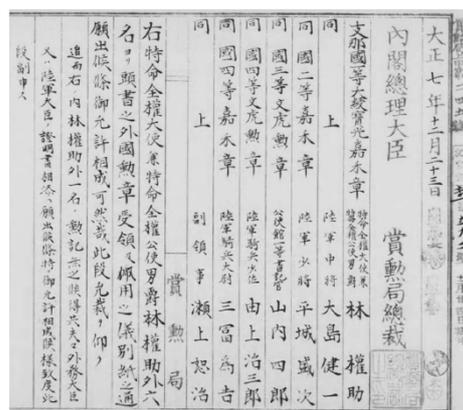


図 16. 資料 10. 「特命全權大使男爵林権助六名」 (Ref. A10112865100)

瀨上恕治の受勲歴は 2 回である。資料 9 の大正 6 年（1917）11 月に「叙従七位勲六等」を授与し、資料 10 の大正 7 年（1918）12 月 23 日に「國四等嘉禾章」を授与された。

(3) 著作

瀨上恕治は明治 40 年（1907）3 月に金氏と共編で《華言分類撮要》を刊行したほか、下記の中国語教科書を 4 冊出した。

番号	書名	著者	出版社	出版年月
1	官話問答新編	瀨上恕治		明治 31 年(1898)
2	北京官話万物声音: 附・感投詞及発音須知	瀨上恕治	徳興堂（北京）	明治 39 年(1906)
3	日文対照：官話問答新編	瀨上恕治	東亜公司	明治 40 年(1907)
4	標準支那語会話編	瀨上恕治	熊本県支那語学校	昭和 14 年(1939)

1 番の《官話問答新編》については、六角恒廣（2001：12）は「74 官話問答新編 瀨上恕治 光緒 24.（上海）」と記載されているが、出版社が不明である。

瀨上恕治が明治 39 年（1906）に刊行した《北京官話万物声音:附・感投詞及発音須知》と明治 40 年（1907）に刊行した《日文対照：官話問答新編》の 2 冊の教科書で、それぞれの「例書」と「例言」に金氏のことが言及されていた。

本書は発音心得感投詞及び所有る萬物の音聲を含める北京官話を記載せるものにて北京大学正教習文學博士服部宇之吉駐北京公使館書記官鄭永邦前東京外國語學校講師現在北京清語同學會首席教習金國璞三先生の校閲を経たるものなり。（《北京官話万物声音:附・感投詞及発音須知》の「例書」）

本書は従頭至尾悉く北京に於ける普通一般の慣用語を記載し支那語研究者をして對話練習をなすの資料たらしむると共に北京地方に於ける風土人情及び官賈の状態等を

知るの便を得せしめんが為め社會に於ける所有る出来事に就來きての甲乙両者の對話問答となしたるものにして前東京外國語学校講師現在北京清語同學會首席教習金國璞先生に請び其校閱を経たるものなり。（《日文対照：官話問答新編》の「例言」）

上記2つの序文を通して、金氏がこの2冊の中国語教科書を校閲したことが分かる。

瀬上恕治の清語学習歴の資料がないため、金氏に中国語を教わったかどうかは不明だが、瀬上恕治は金氏と共に清語同学会に勤務し、さらに2冊の教科書の校閲を依頼していたことから、金氏と良好な関係を築いていたことが推測できる。

1.3.2.4 鎌田弥助

鎌田弥助は《摺紳談論新集》の共編者であり、満鉄奉天公所⁴⁸に務めていた人物でもある。鎌田弥助により刊行された著作は《摺紳談論新集》しか見当たらなかった。

鎌田弥助のプロフィールと清語学習歴に関する記録は僅かであるが、見つかった2点の資料を以下に紹介する。

(1) プロフィール

資料1. 『新訂増補 人物レファレンス事典 明治・大正・昭和（戦前）編Ⅲ』

（2019：633）は以下のように記述している。

鎌田弥助（かまた やすけ）明治7（1874）年～昭和30（1955）年 昭和期の満洲鉄道奉天所長。（生 明治7（1874）年10月）

(2) 清語学習歴

図17. 資料2. 「神田乃武文庫について」『一橋大学附属図書館研究開発室年報』第2号（2014）表2. 神田乃武文書（雑誌、図書を除く）

KN-A	6-1	東京外国語学校別科清語科卒業生及二年生	明治32年7月		1900	14×20cm	1枚	工藤孝(東京神田錦町)社台紙張(張、宮島、坂野竹之助、鎌田弥助、泉水新太郎、藤井金之助、小川運平、加納政太郎)
------	-----	---------------------	---------	--	------	---------	----	---

鎌田弥助の東京外国語学校別科清語科での清語学習経歴は不明だが、上記の資料により、鎌田弥助は東京外国語学校別科清語科の学生であったことが確認できる。金氏は明治30年（1897）から明治36年（1903）まで、高等商業学校附属東京外国語学校（現東京外国語大学の前身）の清語講師として勤務していたことから、おそらく鎌田弥助も金氏の教え子であったことが思われる。

(3) 職歴

国立公文書館アジア歴史資料センターでは、鎌田弥助の職歴に関する資料が幾つか見つかった。下記の資料を通して、鎌田弥助の満鉄奉天公所での職歴が概観できる。

⁴⁸ 満洲奉天公所とは、南満洲鉄道が1909年5月1日に奉天市（現、中国遼寧省瀋陽市）に設置したインフォーマルな情報収集活動のための機関である。

図 18. 資料 3. 「1. 拓殖局、臨時防疫本部、滿鉄、朝鮮総督、其他 自明治四十四年三月／分割 2」 (Ref. B12082374400)



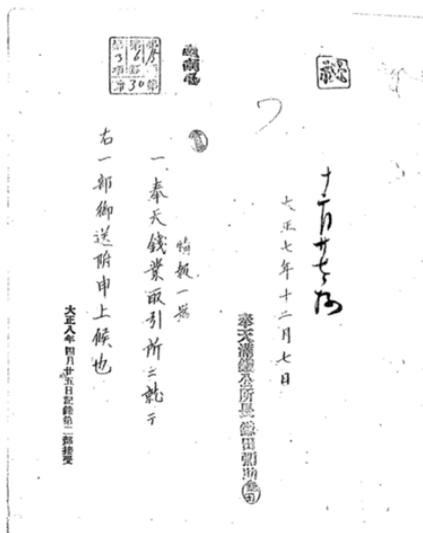
鎌田弥助が滿鉄奉天公所に就任した具体的な時期は不明だが、明治 44 年 (1911) 2 月の「滿洲ニ於ケル『ペスト』病勢及予防措置報告」には「奉天公所 鎌田弥助」という署名があるため、明治 44 年 2 月にはすでに滿鉄奉天公所に就任していたと推測できる。

図 19. 資料 4. 「牛心山『マグネサイト』鉍石」 (Ref. B09041923900)



大正 5 年 (1916) 12 月の「牛心山『マグネサイト』鉍石」に書かれた署名は「奉天公所 鎌田弥助」から「奉天滿鉄公所長代理 鎌田弥助」に変更されていた。

図 20. 資料 5. 「奉天兌換停止問題 (營口西義順破産ヲ含ム)」 (Ref. B11090661300)



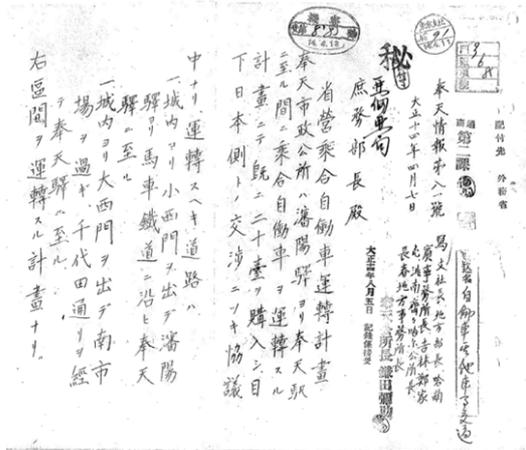
大正 7 年 (1918) 12 月 7 日の「奉天地方貨幣流通情況」に記載されている署名は「奉天滿鉄公所長 鎌田弥助」であり、鎌田弥助の肩書きは「公所長代理」から「公所長」に変わった。

図 21. 資料 6. 「奉天主要官民」 (Ref. C13032538600)

奉天主要官民一覽	
職	氏名
總領事	赤松正助
守備隊長	植田照猪
警務隊長	宮越正良
郵便局長	中村治
分館長	山下定二
病院長	小川勇
警備顧問	町野武馬
地方事務	島崎好直
公債	鎌田彌助
奉天	大塚幸然
居長	皆川秀孝
所長	小西春雄
所長	山田基
所長	張作霖
職	氏名
中學校長	内藤維文
支店長	木柳榮
支店長	小西春雄
支店長	宮岡一資
支店長	中村準輔
支店長	志倉光雄
支店長	伊藤豊治
支店長	鄭炳朝
支店長	オルトン
支店長	バーカー
支店長	バートム
支店長	コロコフ

大正 8 年 (1919) 5 月の「奉天主要官民一覽」には「満鉄公所長 鎌田弥助」と記載されている。その後、鎌田弥助によって出された文件の署名は全て「奉天満鉄公所長 鎌田弥助」或いは「奉天公所長 鎌田弥助」である。

図 22. 資料 7. 「奉天市政公所ノ乗合自動車経営ニ関スル件」 (Ref. B12081089500)



筆者が調べた限りでは、最後に「奉天公所長 鎌田弥助」という署名で出されたものは大正 14 年 (1939) 4 月 7 日の「奉天市政公所ノ乗合自動車経営ニ関スル件」だった。従って鎌田弥助が少なくとも明治 44 年から大正 14 年まで満鉄奉天公所に任職していたことは明らかである。

図 23. 資料 8. 「在外日本人学校教育関係雑件ノ学校調査関係 第三卷 5. 奉天」 (Ref. B04011676000)

奉天同文商業学校 (奉天)	
一、創立年月日 明治四十三年三月一日	
二、管理 長 植田彌助 (昭和三年四月末日現在)	
三、生徒 従 数	
計	種別
男	女
六二	六一
二八	二八
一一	一一
七九	七九
六	六
五	五
三	三

四、職員 費 日本人六名、支那人二名、計八名 (昭和三年度決算) 金四一〇〇圓

五、維持方法 補助金及月謝年額約壹千七百圓ヲ以テシテ

在奉天日本總領事館

昭和 3 年 6 月に「在外日本人学校教育関係雑件」によると、鎌田弥助は奉天公所長を務めたほか、明治 43 年 3 月に開校した奉天同文商業学校の管理者も兼任した。

(4) 受勲歴

図 24. 資料 9. 「海軍少将黒井悌次郎外十三名外国勲章記章受領及佩用ノ件」
(Ref. A10112704800)



受勲歴は1回あり、明治43年（1910）1月13日に「清國三等第二雙龍寶星勲六等」を授与された。

1.3.3 金國璞活動年表

金氏及び教科書の共編者の履歴書、外交資料、公文資料、先行研究などの資料の考察により、以下に「金國璞活動年表」を作成した。

表 1-3. 金國璞活動年表

年 月	活動
明治 11 年 (1878)	呉啓太に中国語を教える。
明治 12 年 (1879)	平岩道知に中国語を教える。
明治 14 年 (1881)	鄭永邦に中国語を教える。
明治 19 年 (1886)	北京公使館の中国語試験の試験官を務める。
明治 21 年 (1888)	宮島大八に中国語を教える。
明治 30 年 (1897)	9 月、高等商業学校附属外国語学校の中国語教師として、文部省に招聘されて来日。 12 月、宮島大八が著した『官話輯要』に『論語』と『孟子』の原文とその現代語訳である文章を載せた。
明治 31 年 (1898)	9 月、東京帝国大学に在職する。 12 月、平岩道知との共著『北京官話 談論新編』を出版する。
明治 32 年 (1899)	附属外国語学校が高等商業学校から独立し、東京外国語学校となった。それによって、金氏は東京外国語学校に移った。 善隣書院に在職。
明治 33 年 (1900)	7 月、東京帝国大学を離職する。 9 月、台湾協会学校に在職する。
明治 34 年 (1901)	善隣書院を離職する。 6 月、台湾協会学校を離職する。 12 月、『士商叢談便覽 (上巻)』を出版する。
明治 35 年 (1902)	6 月、『士商叢談便覽 (下巻)』、呉泰壽との共著『支那交際往来公牘 北京語直譯附』を出版する。
明治 36 年 (1903)	3 月、呉泰壽との共著『支那交際往来公牘訓譯』を出版する。

	4月、『華言問答』、『虎頭蛇尾』を出版する。 5月、『改訂官話指南』を出版する。 6月、東京外国語学校を離職し、帰国する。 7月、「勲五等旭日章」を受ける。 8月、北京に支那語研究舎が開設され、金氏は教習となり、学会内に住みながら中国語を教え続ける。離職時期は不明である。
明治37年(1904)	4月、呉泰壽が著した『日清往来尺牘』を校閲する。 6月、『北京官話 今古奇観(第一編)』を出版する。
明治38年(1905)	3月、瀬上恕治が著した『北京官話：萬物声音 附感投詞及発音須知』を校閲する。
明治39年(1906)	5月、瀬上恕治が著した『日文対照：官話問答新編』を校閲する。
明治40年(1907)	1月、『北京官話 虎頭蛇尾』を出版する。 3月、鎌田弥助との共著『摺紳談論新集』、瀬上恕治との共著『華言分類撮要』を出版する。
明治44年(1911)	4月、『北京官話 今古奇観(第二編)』を出版する。

1.3.4 結論

金氏教科書の共編者計6人のうち、鄭永邦、呉啓太、呉泰壽の生涯については、先行研究の考察が詳細であるのに対して、平岩道知、瀬上恕治、鎌田弥助に関する記述は少ない。しかし、アジア歴史資料センターにはこの3人に関する資料がいくつか保存されている。本節ではこれらの資料に基づいて3人の生涯を考察した。

平岩道知は京都生まれで、明治12年(1879)11月に陸軍参謀本部に支那語学生徒として採用され、12月に文部省漢語官費生として清国へ留学に行き、北京公使館で金氏に中国語を教わった。明治14年(1881)12月に準判任の職で陸軍参謀本部に入り、明治21年(1888)10月に非職陸軍省準判任として採用された。明治37年(1904)4月に書記官を休職し、陸軍通訳官を務め、翌年5月、関東洲民政署通訳官に任じられた。

瀬上恕治は陸軍清語通訳官であり、明治40年(1907)1月、外務通訳生に任ぜられ、天津在勤に命じられた。大正3年(1914)9月14日、瀬上恕治はすでに在杭州領事館事務代理を務め、大正6年(1917)11月の職務進退資料では、肩書きが「副領事」に変わり、長沙在勤に命じられていたが、たった2ヶ月で杭州に戻った。大正7年(1918)10月、元杭州領事館副領事であった瀬上恕治は九江領事館副領事になった。大正7年(1919)10月九江領事館の前任公館長瀬上恕治が帰国を命じられた。

鎌田弥助は東京外国語大学清語科の学生であり、明治40年(1907)に金氏と共編で『摺紳談論新集』を出版したが、それ以外の出版物は見当たらなかった。明治43年(1910)1月13日に「清國三等第二雙龍寶星勲六等」を授与された。その後、長年に渡り、満鉄奉天公所に務めていた。鎌田弥助が満鉄奉天公所に就任した具体的な時期は不明だが、筆者が調べた限りでは、鎌田弥助は少なくとも明治44年から大正14年まで満鉄奉天公所に任職していたことは明らかである。

以上3人の生涯をまとめた上で、彼らと金氏との関連について、さらに先行研究に記載されている鄭永邦、呉啓太、呉泰壽の経歴を参考にしながら、金氏の活動年表を作成した。

第二章 金氏編纂教科書の語法的研究

金氏により執筆・編纂された北京語教科書は日本明治時代の北京官話教科書において非常に重要な位置を占めている。金氏教科書には北京語の実用例が大量に掲載されており、清末北京語研究の好材料といえる。これらの北京語の実用例は清末の北京の社会風情、文化を反映しており、現代北京語の成立経緯の一部として、貴重な参考資料を提供している。

本章は語彙的側面と文法的側面を中心に金氏編纂教科書の語法的研究を全面に考察する。太田氏の北京語文法の諸研究に基づいて、金氏教科書の北京語特徴を考察すると共に、金氏教科書の全語彙を北京語語彙、「アル化」語、歴史語彙、慣用語に分け、各語彙の分析を通して、金氏教科書の言語的性格を検討する。

2.1 教科書における北京語特徴

太田辰夫氏は北京語文法研究の権威であり、中国語に関する研究を広くおこない、開拓的な研究を数多く残した。特に、太田氏の代表的な著作《中国語歴史文法》と《中国語史通考》は中国語の歴史研究に重要かつ深い影響を与えてきた。

太田氏は北京語の研究に関する論文を数多く発表しており、山田氏（2016：18-19）によると、太田氏が北京語の特徴について探究した論文は「清代の北京語について」、「北京語の文法特点」、「近代漢語」の3つである。以下で各論文に論述された北京語特徴を簡潔に紹介する。

(1) 「清代の北京語について」（1950『中国語学』第34号）

太田氏は「北京語に独特と思われる語」の中に、頻用される「兒」、「咱（咱）們」、「您」、「倆（仨）」、「別（禁止）」、「得（děi 須要）」、「多嚒」、「給（介詞）」、「的慌」、「是（似）的」、「來着」、「罷咱」の12語を提示した。

(2) 「北京語の文法特点」（1965『中国研究：経済・文学・語学 久重福三郎先生坂本一郎先生 還暦記念』）

この論文は名詞、代詞、数詞・量詞、形容詞、動詞、副詞、助詞の8種類に分け、北京語、北方語、北方方言、南京官話及び他の方言との差異を考察し、全72項目、100個以上の語彙を挙げた。それは後の研究者に大きな影響を与え、基準とされ利用されている。

(3) 「近代漢語」（1969『中国語学新辞典』第186頁）

山田忠司〈太田辰夫の北京話研究〉（2016：19）によると、「近代漢語」は『中国語学新辞典』の一項目であり、項目名は「近代漢語」であり、実は「清代漢語」を指している。

この論文は北京語の文法特徴について以下の7条が提示された。

- ① 一人称代詞の包括形 (inclusive) と除外形 (exclusive) を〈咱們〉〈我們〉で区別する。〈俺〉〈咱〉などは用いない。
- ② 介詞〈給〉を有する。
- ③ 助詞〈來着〉を用いる。

- ④ 助詞〈哩〉を用いず〈呢〉を用いる。
- ⑤ 禁止の副詞〈別〉を有する。
- ⑥ 程度副詞〈很〉を状語に用いる。
- ⑦ 〈～多了〉を形容詞の後に置き“ずっと、はるかに”の意を表す。

2.1.1 「北京語における7項目の特徴」と金氏教科書の言語の比較

太田氏が「近代漢語」に提示した「清代北京語における7項目の特徴」は清代北京語に関する研究に多く参照されている。本節は金氏教科書の言語が「北京語における7項目の特徴」に当て嵌まるかどうかを考察する。

(1) 一人称代詞の包括形 (inclusive) と除外形 (exclusive) を〈咱們〉〈我們〉で区別する。〈俺〉〈咱〉などは用いない。

金氏教科書では、“咱們”を“僇們”、“咱們”と書き、それぞれの用例は255例、5例となる。“咱們”より“僇們”という書き方が遥かに多い。また、“我們”との使い分けが非常に厳密だと考えられる。“我們”は除外形で聞き手を含めないが、「咱們」は包括形で、聞き手を含む。

- 例1. 我們敝國東京高等商業學校和外國語學校，都有漢語科，請的也是貴國教習，另外還有我們敝國讀書人自己私立的漢語學房，如今僇們兩國彼此互相習學語言，十數年之後，兩國人才輩出，從此邦交自然更親密了。（《談論》-2）⁴⁹
- 例2. 你若是肯照顧我們，那我們是求之不得的呀。僇們若是交買賣，我們可是不能給現錢哪。（《華言》-4）
- 例3. 依我說，您不如和我們在一塊兒，僇們大碗的喝酒，大塊的吃肉，整套的穿衣服，論秤的分金子。（《今古》李沂公）

(2) 介詞〈給〉を有する。

太田氏の「北京語の文法特点」（1965：50）は「介詞の「給」も南京官話では用いず、「替」「和」などによる。」と指摘した。しかし、金氏教科書には介詞“給”の用例が数多く見られる。金氏教科書に用いられている“給”構文については、本研究の第四章で詳しく考察する。

- 例4. 這件事你等我給你想一個好法子，總是給他寄一封信去，借這麼一個大題目，告訴他必得再緩多少日子纔能動身回去哪。（《談論》-26）
- 例5. 有人給姑娘說婆婆家。（《撮要》-20）
- 例6. 你告訴趕車的把他送下，就趕緊的把車趕回來，我還要給人送行去哪。（《便覽》-87）

また、金氏教科書では“給+動詞+補語”という構文も見られる。

- 例7. 我這兒可以先給湊出一半兒貨銀來。（《談論》-29）

⁴⁹ 金氏教科書における例文を引用する際に、それぞれの書名を2文字取り、《談論》、《便覽》、《公牘》、《華言》、《虎頭》、《今古》、《摺紳》、《撮要》、《指南》と略称し、各章数(《公牘》は件数)はローマ数字で表記する。《北京官話 今古奇觀》では、章数がないため、各物語の題目“李沂公”、“十三郎”、“沈小霞”、“懷私怨”で表記する。

例 8. 這麼着他就到殿裡頭，和和尚借了一管筆，蘸好了墨，就過來把那個鳥兒腦袋給畫上了。（《今古》李沂公）

(3) 助詞〈來着〉を用いる。

金氏教科書では“來着”の用例は全部で 33 例あり、全て過去を表すものである。“來着”について、詳細な考察は本研究の第三章で行うため、ここでは用例のみを挙げる。

例 9. 一連四五天，我沒幹別的，竟給人說合事情來着。（《便覽》-42）

例 10. 走在半路上遇見雨了，在雲華寺廟裏避雨來着。（《今古》李沂公）

例 11. 您在誰家換來着。（《華言》-2）

例 12. 給人說合甚麼事情來着。（《華言》-13）

(4) 助詞〈哩〉を用いず〈呢〉を用いる。

金氏教科書では、“哩”を用いることがなく、“呢”の用例が数多く見られ、計 547 例ある。使い方は主に疑問文に添え、疑問文の語気を強める用法となる。その他にも感嘆を表す用例も見られる。

特指疑問文：例 13. 各衙門學堂公司，都是看甚麼新聞紙呢。（《便覽》-7）

選択疑問文：例 14. 可是打算是在飯莊子還是飯館子呢。（《搢紳》-17）

反復疑問文：例 15. 那麼商量商量，俗們交買賣可以不可以呢。（《華言》-4）

反語文：例 16. 何必那麼費事呢。（《虎頭》）

感嘆を表す：例 17. 雖說這不是頭生兒，然而得子可是頭一次呢。（《搢紳》-1）

(5) 禁止の副詞〈別〉を有する。

太田氏（1958：303）は「禁止をあらわす副詞《別》は明代にも若干あるが多く用いられるようになったのは清代である。《不要》の縮約された形であるといわれるが正しくない。」と指摘している。また、「清代の北京語について」は「「別」も北方語で、南京官話では「莫」という。「甬」（beng 2 声）も北方語であるが広く通用する語ではない。」と指摘している。

金氏教科書における“別”の使用に関して、公的な場面では使わず、日常的な場面で使う傾向がある。

例 18. 那個刁頭兒外號兒叫刁不飽，心裏頂歹毒，你們和他們說話可要留神，別惹惱了他們。（《虎頭》）

例 19. 皇后舉行蠶桑禮是表率婦女別忘了織紡的意思。（《撮要》-11）

例 20. 瞧誰有好處，就要跟他學，瞧誰有不好處，就別跟着學，這就是擇其善者而從之的那個道理。（《便覽》-92）

例 21. 衆位先別動手。（《今古》李沂公）

例 22. 爾千萬可別大意是要緊的。（《今古》十三郎）

(6) 程度副詞〈很〉を状語に用いる。

“很”を状語に用いることについて、太田氏（1975：2）は「明代では稀に補語として用いる。明代の北京語では状語として用いられたことが『燕山叢錄』によって知られるが作品中で普通に使われるようになったのは『紅樓夢』など清代北京語文学からである。」と指摘している。金氏教科書における“很”を状語に用いる用例が 509 例見られ、使い方は現代漢語とほぼ一致する。

例 23. 如今我們這位新任的縣太爺人很明白，也很正直，愛民如子。（《撮要》-1）

例 24. 只要你勤慎當差部屬升途也甚寬呢，並且你素日又很愛留心例案，這還不是你用部屬的兆頭兒麼。（《搢紳》-10）

例 25. 這一天到了保安州，異鄉的地方，很覺著淒涼，又搭著連陰天下雨，更淒慘了。（《今古》沈小霞）

例 26. 但是這事很機密。（《公牘》-26）

例 27. 那知縣日子很多，還沒問出頭緒來。（《公牘》-57）

(7) 〈～多了〉を形容詞の後におき“ずっと、はるかに”の意を表す。

太田氏（1965：45）は「比較して「AはBよりはるかに……だ」というばあい、がんらい北京語では形容詞の後に「～多了」を用いた。そして北方語の一部ないし南では「～得多」が用いられた。」と論述している。また、太田氏が「『離婚』（老舎）の語法と語彙」（1974：46）は「「多了」は変化したことをいうもので、純粹の比較とはすこしく異なるようである。」と指摘した。

金氏教科書では純粹な比較に用いられている“～多了”が2例見られ、全て《談論新編 北京官話》からである。“～得多”の用例は見当たらない。

例 28. 至於那犯禁的貨，比私貨又利害多了。（《談論》-14）

例 29. 若是這個風氣開了，倘或後來國家忽然有要緊的用項，借本國民間的錢，比借洋款強多了。（《談論》-88）

2.1.2 「北京語に独特と思われる 12 語」と金氏教科書言語の比較

太田氏は「清代の北京語について」では、北京語に独特と思われる 12 語、「兒」、「嗒（咱）們」、「您」、「倆（仨）」、「別（禁止）」、「得（děi 須要）」、「多嗒」、「給（介詞）」、「的慌」、「是（似）的」、「來着」、「罷咱」を提示した。また、この 12 語について、「即ち、北京語に独特と思われる語の中、頻用される 12 語を選び、各資料にそれが現れるか（○印）、否か（×印）を示した。これによって○印の計が少い資料は北京語資料として不適当であることが分かる。」⁵⁰と指摘した。

本節では、太田氏が提示した「北京語に独特と思われる 12 語」の金氏教科書での使用状況を考察する。ただし、前述した「北京語における 7 項目の特徴」と重なる点があるため、本節は重複を除き、8 項目のみを考察対象とする。

表 2-1. 金氏教科書における「北京語に独特と思われる 12 語」の使用頻度

項目	兒	俺們/咱們	您	倆/仨
数量	474 ⁵¹	256/5	1020	280/0
項目	別（禁止）	得（děi 須要）	多嗒/多俺/多咱	給（介詞）
数量	139	332	22/3/17	561
項目	的慌	是的/似的	來着	罷咱
数量	0	0/32	33	0

表 2-1. の文法表現について詳細分析は以下の通りである。

⁵⁰ 太田辰夫 1950、1 頁。

⁵¹ 金氏により編纂した 11 冊の北京語教科書に用いられた「アル化」語は合計 2808 例、異なりでは 474 種類である。

(1) “兒”

「アル化」語は北京語に最も重要な言語特徴の一つである。太田氏（1965：40）は、「北方語の名詞接尾詞「兒」は南京官話においては用いることが少ない。」と指摘している。金氏教科書では、「アル化」語が大量に見られて、全部で474種類ある。中でも名詞の「アル化」語が一番多く、297個あり、全体の6割以上を占めている。大量の「アル化」語が使われていることから、金氏教科書は会話教科書としての特徴が強いと言える。

例 30. 毛頭兒我這兒有一點兒小意思，你喝盅酒罷。（《虎頭》）

例 31. 外頭現在還有三處住房，兩處小一所兒的，一處大一所兒的，家兒和三舍弟，各住一處小一所兒的，我同四舍弟住那一處大一所兒的，還算是我們兩人同居。（《摺紳》-5）

例 32. 若是今兒個我一個人兒聽戲，自然就在這邊兒一塊兒了。今天是有人請，他們已經在這對面兒樓貼下官座兒了。（《談論》-25）

(2) “您”

“您”について太田氏（1965：41）は「北方語では二人称の敬称として「您」「您哪」（「哪」はまた「納」とも書く、次も同じ）がある。「您」は南京官話でも通じないことはないが「您哪」は用いられない。」と指摘している。

金氏教科書では“您”を敬称として用いる用例が1020例ある。また、“您納”の用例も見られる。“您納”については、本研究の第三章に詳しく考察するため、ここでは用例のみを示す。

例 33. 老爺您看，這個知縣的相貌和前年您放的那個房德，長的一個樣。（《今古》李沂公）

例 34. 現在您要買甚麼東西，可以先由我們櫃上開發錢，趕您多嚕要走的時候兒，僂們再算帳。（《便覽》-15）

例 35. 不到一百兩銀子，我就賣給您納。（《華言》-11）

例 36. 您這是幹甚麼，破費您納。（《談論》-15）

例 37. 好說您納，您把信交給我罷。（《談論》-46）

(3) “兩（仨）”

“兩（仨）”について太田氏（1965：44）は「南京官話には「兩」「仨」など数詞と量詞の合わさった語がなく、「兩個」「三個」などという。ただし北方語の「兩人」「兩個人」に当たるものとして「個」を用いず「兩人」ということがある。」と指摘した。金氏教科書に“兩”を用いた用例は283個で、“仨”の用例は見当たらない。

例 38. 我現在有一件事，要託你們兩人替我辦辦。（《虎頭》）

例 39. 不大的工夫兒，就見住了轎子，那兩轎夫就都走了。（《今古》十三郎）

例 40. 昨天接到來信，說是上海製造局從前請的本國礦師某某兩人，已經滿了三年的限了。（《公牘-55》）

例 41. 前十幾年，僂們兩常一塊兒喝酒逛去。（《便覽》-9）

(4) “得（děi 須要）”

“得”について太田氏（1965：46）は、「北方語では時間や費用がかかるというとき「得」（北京では dei 3 声、北方語で de 2 声にも読む）という。南京官話ではこれを用

いず「要」という。(中略)「得」は「…せねばならぬ」意にも用い、またしばしば「總得」「必得」などともする。このばあい南京官話では「要」または「該」を用いる。」と指摘した。金氏教科書では「時間や費用がかかる」意と「…せねばならぬ」意の用例は両方見られる。

例 42. 他說他有幾千斤蘑菇，還得兩天纔能到哪。(《華言》-5)

例 43. 所商量的都可以行，但是裏頭還有得稍微的斟酌的地方。(《公牘》-24)

(5) “多嗜”

楊杏紅(2014:157)によると日本明治時代の官話教科書には“多嗜”、“多咱”、“多僭”、“多咎”の4種類の表記が使われていたが、中でも多く使われたのが“多嗜”である。“多嗜”は時間を問う意味で、現代中国語の“什麼時候”と訳せる。一般的には状語として使われているが、主語と補語の用例もある。

太田氏(1965:43)は「時間を問う「多僭」や「多會兒」は南京官話では用いない。」と指摘している。また、楊杏紅(2014:159)によると、明治前期の北京官話教科書では殆ど“多嗜”が使われていたが、中期後期の教科書になると“什麼時候”が登場し、使用は少ないものから多いものまでさまざまである。《官話急就篇》のなかでは“多嗜”と“什麼時候”がほぼ均等に使われるようになった。金氏教科書では、“多嗜”、“多咱”、“多僭”の3種類の表記が使われていた。“多嗜”の用例は22個あり、“多咱”は17例あり、“多僭”の用例は3例ある。一方、“甚麼時候”の用例は12例あり、“多嗜/多咱/多僭”より劣勢に用いられていることが明らかである。

例 44. 多僭引見下來的。昨兒個這個十五召的見。(《摺紳》-30)

例 45. 趕回來的時候，在西關外頭大街上，遇見藍貴了，小的見了他，就問他是多僭回來的，他說他回來有倆月了。(《華言》-29)

例 46. 這個亂子一出來，就彷彿天塌了似的，直不知道後來這個禍，到多嗜纔能完哪。(《便覽》-100)

例 47. 那麼您這銀子是多嗜用哪。(《華言》-2)

例 48. 這改鑄銀錢是由多咱起呢。(《談論》-97)

例 49. 您是多咱奉使到外洋去的。(《摺紳》-3)

例 50. 您今兒早起甚麼時候兒進去謝的恩。(《摺紳》-11)

例 51. 爾的丈夫是甚麼時候兒走的。(《今古》沈小霞)

例 52. 您晚上大概得甚麼時候，到我們寓所裡去呀。(《華言》-9)

(6) “是(似)的”

太田氏(1965:54)は「類似をあらわす「…似的」(shide)は南京官話では用いず「…一般」「…一樣」などという」と指摘している。金氏教科書にある“似的”の用法は2種類ある。一つは連語助詞として、“仿佛”と一緒に使う。そしてもう一つは動詞の後ろに置く。どちらも類似をあらわす用法である。

例 53. 就仿佛掉樹葉子的聲兒似的。(《今古》李汧公)

例 54. 說出話來就仿佛刀子似的，翻過來掉過去，誰也說不過他。(《今古》李汧公)

例 55. 往常山那條路，飛似的跑了去了。(《今古》李汧公)

例 56. 如今想起那些個景致兒來，還彷彿在眼前似的。(《談論》-9)

例 57. 一年到頭千辛萬苦的弄來的錢，少爺們就都是花錢如流水似的。(《撮要》-2)

(7) “～的慌”、“罷咱”

太田氏が提示した 12 語の中に、金氏教科書では用いられない語が“～的慌”と“罷咱”である。

太田氏 (1950) は「罷咱」が「…しよう」「軽い希望」という意味を指摘し、考察した 7 冊の清代著作⁵²では《滿漢成語對待》と《兒女英雄傳》のみに使用されていて、計 24 例ある。また、「北京語の文法特点」にも“罷咱”について「やや古く北京語特有の助詞に「不則」「罷咱」などと書かれるものがあった。意味は「罷」に同じ。」⁵³と指摘した。

金氏教科書において、“～的慌”の用例が見当たらないが、“～得慌”の用例が 9 例見られる。“～得慌”については後述する。

2.1.3 「北京語の文法特点」と金氏教科書言語の比較

太田氏の「北京語の文法特点」は明治時代の北京官話教科書を取り入れた研究で、より典型的な北京語の表現を提示している。そこでは北京語、北方語、北方方言、南京官話及び他の方言に使用する全 72 項目、100 個以上の語彙を取り上げ、文法的、語彙的特徴に関する精緻な研究を通じて北京語、また北方語の実態を詳しく説明した。本節では、「北京語の文法特点」で考察された項目と照らし合わせ、金氏教科書に見られる北京語の文法特徴を持つ表現を品詞で分けて、各文法表現について詳細に分析する⁵⁴。また、各文法表現に太田氏の「北京語の文法特点」(1965)での論述を付け加える。

2.1.3.1 代名詞

(1) “甚麼的”

北京語では名詞のあとに「甚麼的」をつけて「等」の意をあらわすが、これも南京官話には無い (1965:42)。

金氏教科書において、“甚麼的”の用例が 74 例ある。

例 58. 我的意思是要預先定幾樣兒大菜，其餘小賣兒甚麼的，那等臨時再現要。(《搯紳》-17)

例 59. 那洋絨駝絨皮張甚麼的，不是天津出口的大宗土貨麼。(《便覽》-5)

例 60. 所有倒價和置買傢具甚麼的那些銀子都有了。(《談論》-10)

例 61. 還有東西兩洋各樣兒的文具，紙張，字畫，照像篇兒，樂器和小孩子玩兒的耍貨兒甚麼的，一概俱全。(《指南》-20)

(2) “這兒”、“那兒”、“哪兒”

場所をあらわす「這兒」「那兒」「哪兒」は南京官話では用いられず、「這裏」「那裏」「哪裏」を用いる (1965:42)。

金氏教科書において、“這兒”と“那兒”の用例しか見当たらない。

例 62. 雷說：就是這兒啊。(《虎頭》)

⁵² 太田氏 (1950) が考察した 7 冊の清代著作は『滿漢成語對待』(1702)、『講解聖諭廣訓』(1730)、『琉球官話問答』(1753)、『程乙本紅樓夢』(1792)、『兒女英雄傳』(1878)、『官話指南』(1882)、『九江書會本官話指南』(1893) である。

⁵³ 太田辰夫「北京語の文法特点」1965、50 頁。

⁵⁴ 本節で考察した北京語の文法特徴は前述した「北京語に独特と思われる 12 語」、「北京語における 7 項目の特徴」と重なる点があるため、重複を取り除き、考察する。

例 63. 我就在大庭廣眾，指桑說槐，罵了他一頓，他從此更惱了，所以也就不上我這兒來了。（《華言》-16）

例 64. 從前那兒的道路不大好，遇見下雨的天氣，泥濘難走。（《談論》-72）

例 65. 這天他正坐在那兒盤算，他男人這麼樣兒的窮，多嚙是個熬出來呀。（《今古》李汧公）

また、金氏教科書は疑問を表す“哪兒”という書き方が用いられず、全て“那兒”と書き、“哪”は文末語気助詞のみ用いる。

例 66. 王太見主人這麼忙，也不知道是上那兒拜客去，心裡頭很疑惑。（《今古》李汧公）

例 67. 那個擺擺渡的瞧來的這幾個人不大對眼，可就盤問他們都是幹甚麼的是要上那兒去。（《談論》-77）

(3) “這程子”

「這程子」も南京官話では用いず「這些時」という（1965：43）。

金氏教科書において、“這程子”の用例が5つ見られる。

例 68. 這程子陸續着直走兵各州縣都預備過兵差哪。（《撮要》-9）

例 69. 我這程子竟在家裡閒坐實在無聊的很。（《談論》-23）

例 70. 我這程子連官差帶私事，都湊在一塊兒了，所脫不開身上那兒去。（《便覽》-16）

例 71. 老弟你怎麼這程子總沒來呀。（《華言》-4）

例 72. 老弟你這程子沒到衙門聽審案的去麼。（《華言》-28）

(4) “這麼”、“那麼”

「這麼」「那麼」を副詞的修飾語として用いるものは南京官話にもないとはいえないようであるが、おおくは「這樣」「那樣」という。また「往這麼來」「往那麼去」のごとくいって方向をあらわすことは南京官話にはない。「這麼着」「那麼着」といって「このようである」「そのようにする」などの意の述詞として用いることも南京官話にはなく、また「そこで」の意味の連詞とすることも南京官話にはない（1965：43）。

金氏教科書では“那樣”と“那樣”を除き、これらの使い方が全て見られる。

例 73. 同是一樣兒的人，怎麼就應當待他們那麼厚，待我們這麼薄呢。（《便覽》-93）

例 74. 在高處一看就見有敵兵哨探往這麼來了。（《撮要》-9）

例 75. 我那個時候兒，往那麼去，正是秋天。（《談論》-9）

例 76. 後來官說，你說實話，是把駱駝又勻給誰了不然我是辦你罪，這麼着李老恆一害怕，就把盛和棧供出來了。（《談論》-89）

例 77. 貝氏更生了氣了就說，那麼着索性湊一千疋怎麼樣。（《今古》李汧公）

(5) “哪麼”

「哪麼」はがんらい北方語の一部で使用されたものが北京語に入ったものかと想像される。北京語では方向を問うときに用い、状態方法を問うときは「這麼」「那麼」と併せて用いることが多い。これは北京語としては不安定なためではあるまいか。いずれにせよ広く用いられる語ではない（1965：43）。

金氏教科書に用いられた“哪麼”は7例あり、“這麼”“那麼”と併せて用いる用例がなく、何も疑問文の文末に置き、現代漢語の文末語気助詞“麼”に相当すると考えられる。

例 78. 丁問說：先生在家裏哪麼。（《虎頭》）

例 79. 那麼你現在是在紙行裏幫夥哪麼。不錯，是在紙行裏幫夥哪。（《華言》-9）

例 80. 你們東家在行裏哪麼。在樓上寫字哪。（《華言》-10）

例 81. 你們老爺在家裡哪麼。是，在家裡哪，您請進來罷。（《華言》-13）

(6) “怎麼着”

「怎麼」は南京官話でも用いるが、「着」をつけて述詞化することはない（1965：43）。

金氏教科書では「怎麼着」の用例が1例ある。

例 82. 你猜怎麼着，我走了足有六刻的工夫兒還沒到哪。（《撮要》-2）

(7) “多麼”

疑問・感嘆をあらわす「多麼」は南京官話では用いない（1965：44）。

金氏教科書において、「多麼」の用例が7つ見られ、全て感嘆を表す。

例 83. 可不是麼，您聽一聽這個情理有多麼可惡。（《虎頭》）

例 84. 您瞧他有多麼可惡，買了我們東西去，說是今兒給錢，趕我們一和他要錢，他不但
不給錢，還張口罵我們。（《便覽》-86）

例 85. 你說這一家子人有多麼難受。（《撮要》-2）

例 86. 況且您又是個頭目，有多麼快樂，有多麼自在。（《今古》李汧公）

例 87. 玉峯他們那位大先生曉峯，那個人有多麼精明，性情也和平，肚子裏的學問外面兒
的談吐，應酬世故真是無一不好。（《談論》-28）

2.1.3.2 数詞・量詞

(1) “這些個”、“那些個”、“好些個”、“些個”

北方語では「這些」「那些」「好些」「些」などの後には「個」をとって、「這些個」
などとすることもある。しかし南京官話では普通「個」を用いない（1965：45）。

金氏教科書においては、「這些個」、「那些個」、「好些個」、「些個」の用例が全
て見られる他に、「這些」と「那些」の用例もある。

例 88. 早已就出過告示，這些個東西，不准商人私買私賣的。（《便覽》-14）

例 89. 他們那些個股商，這幾年總還沒得着股利哪。（《談論》-75）

例 90. 在我說不但彼此通商有這個有無相通的好處，而且各國人彼此來往還能彼此長聰明
長見識，多得好些個本事，多明白好些個事情，你想這個益處還少麼。（《撮要》-
2）

例 91. 他昨天酒後，所說的話很不高興，竟是些個牢騷話。（《便覽》-31）

例 92. 還有請老弟，這些日子常要來幫我料理各樣事情纔好。（《搯紳》-11）

例 93. 昨天我在傍邊兒聽你和他說的那些話，那簡直的是罵他了，然而他始終也沒明白。
（《便覽》-30）

“這些、那些、好些”と“這些個、那些個、好些個”に関しては、厳密な使い分けが
ないように見受けられる。下の例文に“這些事業”、“這些個事業”が両方見られ、
“好些個”、“好些”も両方見られる。

例 94. 這些買賣再下一等的就是駝戶，騾戶，車夫，作這些個事業的人也不少，他們除了
作這些買賣和作這些事業之外，再作那別的事業的人也寔在不多見了。（《搯紳》-
48）

例 95. 那船上管帶官就派水師兵堵住了，幫助拿着好些個海賊。（《公牘》-42）

例 96. 忽然遇見本國官兵遇賊，立刻派水師兵，幫助拿住好些賊，足見義氣很深很重交情。
（《公牘》-42）

2.1.3.3 形容詞に関する比較用法⁵⁵

(1) “更”、“還”

「更」「還」などの副詞を用いて比較するばあい南京官話では副詞の後に「要」を用いるのが普通なようである。北京語ではこれを用いない（1965：46）。

金氏教科書には比較として用いられている“更要”の用例がなく、“還要”の用例が1例ある。“更、還”について、それぞれの用例は84例と13例ある。

例 97. 他老這麼因循着不辦，不是一天比一天更壞了麼。（《便覽》-90）

例 98. 託朋友把近來新出來的要緊的話條子，給您買幾本帶來，不更省事妥當麼。（《指南》-5）

例 99. 小婦人聽這話更不放心了，就又出東關各處一找。（《華言》-24）

例 100. 心比天還高，命比紙還薄。（《撮要》-3）

例 101. 那地方兒比現在還要熱鬧的。（《便覽》-4）

例 102. 你看那富足人家，若是敗落了，可比那原來窮人家還難辦。（《便覽》-22）

(2) “還是…好”

「…したほうがよい」という場合、北方語では例えば「還是自己去好」というが、南ではこれを「還是自己去的好」ということがある（1965：46）。

金氏教科書において、“還是…好”の用例は下記の1例となる。

例 103. 俗們還是到那常買東西熟舖子買去好。（《便覽》-97）

(3) “一天比一天～”

北方語で「日ましに…になる」というばあい、「一天比一天大」のごとくいう。しかし南ではこのいいかたによらないことが多く、「一天大似一天」のごとくいう（王力、中国現代語法 31 節）（1965：46）。

金氏教科書に“一天比一天～”を用いられている用例が12例見られる。

例 104. 那外國的商務，內地的買賣，一天比一天見興旺。（《談論》-4）

例 105. 天下最可慮的是百姓多，生路窄，窮民一天比一天多，謀生的路一天比一天窄。
（《談論》-51）

例 106. 進來風聲一天比一天緊，恐怕不免有戰事。（《撮要》-9）

例 107. 就從前年運氣來了，事情是一天比一天順。（《便覽》-75）

2.1.3.4 動詞

本研究の第四章では、動詞の“叫”と“讓”を詳しく考察するため、本節では“叫”と“讓”を取り除いて考察を行う。

(1) “没”、“没有”

⁵⁵ 太田辰夫（1965：45）は形容詞の項目で論述しており、実際は形容詞と組み合わせる比較用法である。

動詞「没有」は北方語では単に「没」ともいう。しかし南京官話では賓語をとるとき以外には「没」は用いられない(1965:47)。

金氏教科書は“没”と“没有”を両方用いるが、“没”の用例が遥かに多い。また、“没”と“没有”を含む否定副詞についての考察は本研究の第三章で行うため、ここでは、用例のみを挙げる。

例 108. 紅的倒還有比這個厚的，藍的可沒比這個再厚的了。(《華言》-6)

例 109. 偏巧我身上沒浮餘銀子，我這還得回家給他們取這一錢來銀子去。(《虎頭》)

例 110. 這行裏現在沒有，可是上海我們行裏有，我可以打一個電報去，就可以送來了。(《指南》-17)

例 111. 若是天下沒有人耕種，人就沒有飯吃，若是沒有人紡織，人就沒有衣服穿。(《撮要》-11)

(2) “～得慌”

太田氏(1965:48)は「一部の心理・感覚をあらわす動詞につきその程度をあらわす「～得慌」は南京官話にはなく「～得很」といわざるを得ない。」と指摘している。金氏教科書では“～得很”の用例が15例あり、“～得慌”の9例より多く見られる。

例 112. 他肚子裏又真餓得慌，身上又真凍得慌，這兩個難受，比甚麼苦都利害。(《談論》-52)

例 113. 乾着急，拿錢買不出東西來，你說我心裏，怎麼是不焦得慌呢。(《便覽》-86)

例 114. 在家裡閒住着也是悶得慌。(《今古》李沂公)

例 115. 如今我還腆着臉在這兒作官了，寔在是可羞得很。(《今古》李沂公)

例 116. 昨天接到來信，承衆位過獎，寔在慚愧得很。(《公牘》-7)

(3) “上來”

「～上來」を用いて状態の完成への接近をあらわすことは南京官話にはない(1965:48-49)。

金氏教科書に状態の完成への接近を表す“～上來”は4例あり、全て《北京官話 今古奇觀》に見られる。

例 117. 那個雨可就慢慢兒的住上來了。(《今古》李沂公)

例 118. 那天晚上是十三，月亮早就上來了。(《今古》李沂公)

例 119. 又聽說張千已經死了，李萬是逃跑了，拿他的事情也冷上來了。(《今古》沈小霞)

例 120. 趕過了有一個多月了，就漸漸兒的冷上來了，不那麼擱在心上了。(《今古》懷私怨)

(4) “來”、“去”

「來」「去」も用いる連動句(その多くは目的をあらわす)では、南北で次のような語順のちがいがある。(請安去 → 去請安/買去 → 去買)(1965:49)。

金氏教科書に、このような例用が複数見られる。

例 121. 俸米可都是米票，自己持票到祿米倉上領米去。(《摺紳》-52)

例 122. 凡有本省的人到京裏辦功名來，就得託人到本省的結局子裏取印結。(《摺紳》-57)

例 123. 通共算在一塊兒是多少，給我開個賬來。(《便覽》-16)

例 124. 我回頭就見他去。(《便覽》-34)

例 125. 不錯，上京去。(《談論》-14)

例 126. 張二僂們倆出去瞧瞧去。(《虎頭》)

2.1.3.5 介詞

(1) 起点介詞“起”、“解”、“從”、“由”、“打”

起点をあらわす「起」「解」は南では用いない。また「打」も用いることが稀である。南京官話では「從」「由」などを用いる(1965:50)。

金氏教科書に用いた起点介詞について、“起”、“解”、“從”、“由”、“打”の用例が全てあり、太田氏の論述と異なる点が見られる。ここでは金氏教科書におけるこの5つの起点介詞の使用状況を詳しく考察する。

① “起”

太田(1965:50)は起点を表す介詞“起”は「南では用いない。」とも説明している。金氏教科書において“起”の用法は場所の起点として多く使用されているが、経由の起点を表す用例は少ない。また、時間の起点の用例も見られない。

場所の起点：例 127. 他就趕緊的起人群兒裏跑了。(《今古》十三郎)

例 128. 他起外頭喝了個大醉回來，直嚷熱的了不得。(《華言》-17)

経由の起点：例 129. 可巧這個工夫本縣的太爺起那兒過，周自清就和那個人說，你不是要和我打官司麼，現在本縣的太爺來了，僂們倆攔與告狀好不好。(《華言》-25)

② “解”

金氏教科書において、“解”の用法は場所の起点と時間の起点を表す両方が見られる。場所の起点を表す用例は42例あり、時間の起点を表す用例は2例だけある。

場所の起点：例 130. 王生就解袖子裏拿出那包銀子來。(《今古》懷私怨)

例 131. 據元通棧掌櫃的劉玉發，解湖北回來了。(《公牘》-58)

例 132. 可不是麼，我是纔解衙門回來。(《華言》-12)

時間の起点：例 133. 他就解前年由外頭被議回來，直到如今賦閒沒事。(《搢紳》-7)

例 134. 是，兄弟是解從小的時候，就竟是在書房裏念書。(《搢紳》-24)

③ “從”

“從”の使用に関して、太田(1958:252)は「古代語から用いられたが、時間をあらわすばあいには用いられることは稀で、多くは場所をあらわすばあいには用いる。」と指摘している。金氏教科書において、“從”の用例は場所の起点、時間の起点、場所の経由の3種類ある。

場所の経由例が1例だけ見られる。

例 135. 趕我今年又從那個地方過，我一看，那個地方兒的氣象，遠不如從前了。(《撮要》-2)

場所の起点例は67例ある。

例 136. 你從那兒來。(《虎頭》)

例 137. 就連從紫竹林往上去的那一條官道，也都修理的很齊整。(《談論》-4)

例 138. 已經從廣東到了上海了。(《公牘》-10)

例 139. 從水路顧船送來。(《公牘》-34)

時間の起点例は8例ある。

例 140. 從昨天晌午頭裡到宅裏來的。(《今古》沈小霞)

例 141. 從去年秋天,添設貴國語言,館名曰東語館,也是和別國語言館規模是一樣。
(《談論》-2)

例 142. 從過了年,不是這個事就是那個事的,那兒有閒工夫兒出來吃飯聽戲呢。(《便覽》-25)

④ “由”

金氏教科書に用いた“由”の用例は他の起点介詞と異なり、“由”は場所の起点と時間の起点を表す用例がある以外、官職、身分などの抽象的な意義を持つ起点の用例が見られる。

時間の起点：例 143. 這改鑄銀錢是由多咱起呢。(《談論》-97)

場所の起点：例 144. 原是由山西那邊來信,託他給請人是這麼薦妥的。(《搢紳》-4)

例 145. 原來那白米,都是從那一省運來的呢。都是由江蘇浙江兩省運來的。
(《談論》-35)

例 146. 我由旱路往江南去。(《公牘》-33)

例 147. 他由天津本館用的東西。(《公牘》-34)

抽象的な意義を持つ起点の用例は20例ある。

例 148. 他是由翰詹升到閣學,就放了外頭巡撫了。(《便覽》-23)

例 149. 家父原是由吏部放出去的,可惜兄弟晚幾年到的衙門,沒能聽老伯大人的指教。
(《搢紳》-1)

例 150. 您是軍功的保案麼。不是,我是由洋差照例保舉的。(《搢紳》-3)

例 151. 至於春秋和後漢的故事兒,原是由列國志和三國志演出來的戲。(《搢紳》-19)

例 152. 舖子裏的夥計大半由東家舉薦,都是親黨居多。(《搢紳》-38)

⑤ “打”

金氏の教科書において“打”は場所の起点と場所の経由を表す用例があり、それぞれ35例と2例見られる。

場所の起点：例 153. 我打家裏來。(《虎頭》)

例 154. 打天津往這麼來的輪船,所過的各口岸總不免有上貨卸貨的事情。
(《便覽》-6)

例 155. 就問他說,儂是打那兒來了的。(《今古》十三郎)

場所の経由：例 156. 我這一回打那个鎮店上路過,那氣象所大改了。(《便覽》-74)

例 157. 小的要和他到衙門打官司去,正在這兒鬧的不可開交了,可巧太爺打這兒路過,所以小的喊冤。(《華言》-25)

また、金氏の教科書の中には“打…到…”などの組み合わせの用例が見られる。

例 158. 如今若問我那一路上打那兒到那兒是多遠,我全都不記得了。”(《便覽》-4)

(2) “上”

方向をあらわす「上」は南ではおおく「到」または「往」を用いるようである。
(1965: 50)。

金氏教科書において、方向を表す“上”の用例が多く見られる。

例 159. 僂們飯也吃飽了，酒也喝足了，該上戲館子去了罷。（《便覽》-25）

例 160. 現在接到本國外務省電報，叫他快回國去，他上陝西去，自然應當止住了。（《公牘》-14）

例 161. 他說掌櫃的劉玉發上湖北要帳去了。（《公牘》-58）

例 162. 因為有要緊事情，請我上廣東查一查。（《公牘》-5）

例 163. 貴館某官，要上西藏地方去。（《公牘》-22）

(3) “衝”、“衝着”

方向をあらわす「衝」「衝着」も北方語で、南では用いない（1965：50）。

金氏教科書において、“衝着”の用例は4例あり、“衝”の用例は見当たらない。

例 164. 然後就衝着李勉一拱手兒，就上了房了。（《今古》李汧公）

例 165. 後來小的就見他衝着一個糧船上的水手，放了一槍，然後他就跑了。（《華言》-26）

例 166. 後來你就衝着糧船上的一個水手放了一槍，你就走了。（《華言》-26）

例 167. 這麼着小的就拿槍衝着他放了一槍，見他立刻就躺下了，小的就趕緊的抽身跑了。（《華言》-26）

また、“衝著”という書き方が1例見られる。

例 168. 這麼著他就忙忙叨叨的進裏頭去，衝著影壁大聲的一叫，沈公子該走了。（《今古》沈小霞）

(4) “趕”

時間の到達をあらわす「趕」は南では用いず「等」または「到」を用いる（1965：50）。

金氏教科書では、“趕”の用例が大量に見られ、計401例ある。特に大量に用いられたことから、“趕”は北京語の鮮明な特徴の一つだと考えられる。

例 169. 趕會試得意之後，必要大展經綸才情出衆。（《搢紳》-23）

例 170. 趕快開船的時候兒，忽然來了七八個人，都上了擺渡船了。（《談論》-77）

例 171. 趕過幾天遇見甚麼事，他那副脾氣又來了，到底始終老改不了。（《撮要》-2）

(5) “跟”

「跟」（介詞・連詞）も南ではあまり用いない（1965：51）。

金氏教科書において、“跟”が数多く使用されており、普遍的である。

例 172. 我那位薦主還跟我說，那位知府向來辦事有些個任性的地方兒。（《搢紳》-4）

例 173. 小婦人十幾歲的時候，我的母親就死了，並沒有親兄弟親姐妹，就跟着我父親過日子，後來我父親開了這個萬全客店，小婦人就跟着我父親在店裡過日子。（《華言》-30）

例 174. 你去叫店裏一個夥計來，我當面兒跟他商量。（《便覽》-45）

例 175. 姑娘別着急，先跟我來。（《今古》十三郎）

2.1.3.6 副詞

(1) “頂”、“挺”

「頂」は「最も…」ということで「挺」は「とても…」ということであるから意味が異なる。しかし「頂」も往々にして程度の甚だしいことをいうに過ぎないことが多いので、その場合はこの2語は事実上、同じ意味になってしまう。「頂」は北、「挺」は南であるともいわれるが、実際は逆で、「挺」が北方語、「頂」は南で用いられたものかと思われる(1965:51)。

金氏教科書における“頂”の用例が40例見られ、“挺”の用例がない。

例 176. 那王大人有一個頂小的少爺。(《今古》十三郎)

例 177. 先挑那頂要緊的，立刻就得辦，那不很要緊的，還可以緩一緩再說。(《便覽》-92)

例 178. 那三個口岸，那一個算是頂大的呢。頂大的算是天津，其次是烟台，那牛莊算是頂小的口岸了。(《談論》-5)

例 179. 那裏頭的貨物都是頂好的麼。(《指南》-20)

例 180. 但是僂們兩國相好多年，交情頂厚，也是應當辦的事。(《公牘》-43)

例 181. 寔在是頂方便的。(《公牘》-56)

(2) “大”

「大」を程度副詞に用いることは南京官話にはない。もともと北京語でも、それほど自由には用いられない(1965:51)。

金氏教科書において、“大”を程度副詞に用いる用例が1例だけある。

例 182. 寔在勞駕的很了，等我大好了，再到府上謝步去。(《搢紳》-22)

(3) “老”

時間の長いことをいう「老」は南京官話では用いず「綫」などであらわすほかない(1965:51-52)。

金氏教科書において、このような用例が複数見られる。

例 183. 他總說他湊不出那麼些個錢來，可是他老不肯說，他準能湊得出多少來。(《便覽》-83)

例 184. 他那個人這麼些年辦的事情也不少，可老沒瞧見他成過一件事，不知道是甚麼緣故。(《撮要》-2)

例 185. 好極了，那麼我就在家裡老候着您就是了。(《華言》-12)

例 186. 那件事怎麼老沒見新聞紙上說呢。(《便覽》-7)

(4) “直”

「直」を「しきりに」「とめどもなく」の意に用いるのも北方語である。南ではこのように用いない(1965:52)。

金氏教科書では「しきりに、とめどもなく」の意で使われる“直”の用例は70個見られる。

例 187. 趕這個大夫剛進到屋裡坐下，也得了霍亂了，就直吐直拉，不大的工夫，大夫死在這個病人家裡了。(《華言》-24)

例 188. 我就聽見他們兩人直吵嚷，問他們是為甚麼，倆人都不肯說。(《便覽》-19)

例 189. 貝氏聽這話，就直搖着手說，爾已經是這麼大年紀了，還是這個窮樣兒了，多嚙是個發跡呀。(《今古》李汧公)

例 190. 那賣薑的也沒了氣了，就直給王生道謝。(《今古》懷私怨)

例 191. 院子裏又是刀鎗叮噹的響，又是人大聲的直嚷拿賊。(《談論》-53)

(5) “這就”

北方では「これからすぐ」という場合に「這就」というがこれも南にはない(1965 : 52)。

金氏教科書において、このような用例が 11 例見られる。

例 192. 您等我這就上他家裡去。(《虎頭》)

例 193. 老爺現在靠船了，您就下船麼。是，我這就要下船。(《華言》-3)

例 194. 我這就派差，到雙橋站傳蕭豹去。(《華言》-30)

例 195. 那兒的話呢，我這就給您辦去罷。(《指南》-10)

(6) “趕緊的”

「趕緊的」もおおくは北方で用いる(1965 : 52)。

金氏教科書において、“趕緊的”の用例が 99 例見られる。

例 196. 我現在先上源和棧裏去，你趕緊的雇人，把行李抬到棧裏去。(《華言》-3)

例 197. 那個擺渡船上的那個趕車的寶五，瞧事不好，怕受連累，也趕緊的上岸跑了。

(《談論》-77)

例 198. 這麼着第二天他引見下來就趕緊的把那位朋友約來了。(《搢紳》-22)

例 199. 你們幾位先走着，我回頭辦完了事，就趕緊的找你們去。(《便覽》-25)

(7) “乍”

「乍」も北方語であるという(1965 : 52)。

金氏教科書において、このような用例が 2 例見られるが、例 200. の“乍”は状態副詞と思われる。

例 200. 乍一看那個人仿佛荒唐，其實他辦甚麼事最妥當。(《便覽》-27)

例 201. 乍一開辦的時候兒，不能立刻就有成效的，總得過這麼一年的光景，可就看出有甚麼起色來了。(《便覽》-74)

(8) “再三”、“冷不防”、“抽冷子”

「再三」は北方で用い、「再四」は南京官話で用いるという。その他、北方語特有の時間副詞として「跟手兒」(つづいてすぐ)「冷不防」「冷孤丁」「抽冷子」「忽刺巴」(とくに山東)(以上いずれも「忽然」の意)などがある(1965 : 52)。

金氏教科書においては、“再三”の用例が多く見られているが、“再四”の用例は見られない。また、“冷不防”と“抽冷子”の用例はそれぞれ 1 例、3 例しか見られない。

例 202. 這麼着他就同着湯掌櫃的，到我家裡去，再三的求我出去給他們說合。(《華言》-13)

例 203. 趕酒杯到了馬給事中的面前，那箇人是生來的點酒不聞，再三的推辭不飲。(《今古》沈小霞)

例 204. 如今我先一字別露，等著到了那個時候兒，冷不防害爾一下子。(《今古》懷私怨)

例 205. 可是這倆殺人的兇手，若是抽冷子跑了，誰當這個沈重啊。(《今古》沈小霞)

例 206. 那一帶馬賊鬧得是真利害，不但在大道上劫奪過客，並且抽冷子還到鎮店上，搶奪各舖戶去。(《便覽》-74)

例 207. 這本地強盜是沒有，抽冷子不免有挖個窟窿，跳個牆的小毛賊甚麼的。(《便覽》-78)

(9) “動不動”

「動不動」も北方語で、河南や南京官話では「好不好」という。ただし、「動不動」はわりに通用範囲がひろいようであり、あるいは文学言語であるのかも知れない(1965: 52)。

金氏教科書において、“動不動”が1例だけある。

例 208. 遇見有理屈的，不按例治罪，動不動兒就罰銀充公。(《摺紳》-4)

(10) “所”

「所」で「すっかり」「ぜんぜん」などの意をあらわすのも北方語で、この語気に正確に相当する語は南京官話にはないらしい(1965: 53)。

金氏教科書において、このような用例が48例見られる。また、程度副詞“所”については、本研究の第三章で詳細な考察を行う。

例 209. 都盼望他出來當那個鐵路公司的老總，和他商量了好幾回，他所不幹。(《便覽》-30)

例 210. 王生的那個女孩兒已交三歲了，忽然出起花兒來了，求神問卜，請大夫來治，所不見效。(《今古》懷私怨)

例 211. 他現在所沒正經事，也是無聊得很。(《便覽》-23)

(11) “都”

「都」を特指疑問文に用い、問うところのものが何々であるかをきく用法は南にはない。(中略)「都」を北京語では「已經」の意に用いるがこれも普遍的ではない(1965: 53)。

金氏教科書において、“都”を特指疑問文に用いる用例が95例ある。“已經”の意に用いられている用例が見当たらない。

例 212. 現在天津地方兒，都是有甚麼營呢。(《談論》-58)

例 213. 那個地方住着有多少家子百姓，都是作甚麼的。(《華言》-24)

例 214. 蒙古地方兒所出的土貨，都是甚麼人運出口去呢。(《便覽》-80)

(12) “準”

「準」を「たしかに、きっと」の意の副詞に用いるのも北方語で、南にはこれに正確に相当する語がないようである(1965: 53)。

金氏教科書では「たしかに、きっと」の意で使われる“準”の用例は33例ある。

例 215. 凡各省官缺的好歹，以及本官每年準有若干進項，他無不了然於心。(《摺紳》-59)

例 216. 若是櫃上當夥計，都能如此用心，各盡其職，把買賣整理的鐵桶相似，就是每月吃櫃上的勞金，年終得櫃上的謝儀，自己問心準可以安了。(《華言》-20)

(13) “管保”、“敢情”、“敢自”

「管保」は北、「保管」は南で用いるという(1965: 53)。

「敢情」「敢自」は北方語で、南にはこれに正確に相当する語はないようである(1965: 53)。

金氏教科書において、“管保”は9例を使用し、“保管”の用例は見当たらない。また、“敢情”は33例を使用し、“敢自”の用例は3つしか見当たらない。

“管保”、“保管”、“敢情”、“敢自”については、本研究の第三章で詳しく考察するため、ここでは、それぞれの用例のみを示す。

例 217. 小的倒有一個法子，也不用這麼費事，還管保叫他們連一個也跑不了。（《今古》李汧公）

例 218. 王大人說，我管保他一定能自己回來，決不礙事。（《今古》十三郎）

例 219. 是的，閣下若是把英國話學好了，不論到那兒去，和各國人辦甚麼事情，我管保一定是方便極了。（《談論》-1）

例 220. 他準願意麼。我管保他一定願意。（《官話指南》-17）

例 221. 敢情是個破花園子。（《今古》李汧公）

例 222. 那個孩子就打開包袱了給他們一瞧，敢情不是豬頭，是個男人腦袋。（《華言》23）

例 223. 看他那外樣兒長得那麼聰聰明明兒的，敢情他心裏不大聖明。（《便覽》-43）

例 224. 王太說若是老爺肯收留我，在衙門裡頭當個跟役，那敢自是十分好了。（《今古》李汧公）

例 225. 那好辦，我現在往西長泰給客人送行李去，我就手兒帶了去好不好。那敢自好，勞你駕罷。（《談論》-46）

例 226. 那敢自是好極了，不過是這麼勞動您我真過意不去。（《指南》-5）

(14) “橫豎”

北方語で「横豎」のことを「左不過」といもう。「横豎」も北京語とする説があるが疑わしく、北京語に限ったものではない。ただし「横是」とするのは北方だけではなくか（1965 : 54）。

金氏教科書は“横豎”の用例が3つあり、“左不過”と“横是”の用例が見当たらない。

例 227. 和我轉了半天文，我也不大明白，横豎總是稱讚大哥的意思。（《虎頭》）

例 228. 這話確不確，我也不敢說一定，横豎總有因，不能無故的有這個傳言。（《談論》-79）

例 229. 人家也說過，南至甚麼地方兒，北至甚麼地方兒，我也都記不清了，横豎比原定的地方兒又大些個就是了。（《談論》-86）

(15) “也許”

「也許」「行許」など「許」によって推測をあらわすのも北方語である。「也許」は北京語で用いるが「行許」は河南あたりに多い。南では「想是」「或者」「敢是」など用いる（1965 : 54）。

金氏教科書は“也許”のみが使われており、12例ある。

例 230. 這麼商量，我料估着他們也許答應。（《談論》-29）

例 231. 我是遠支近辦，雖說是得過一個月，纔能給哪，可也許到不了一個月就還的。（《便覽》-65）

例 232. 蕭豹說，天下一樣兒牲口多着的呢，也許這個小黑驢和喬山的那個驢一樣，也未可知。（《華言》-30）

例 233. 您等那串店做買賣的來了，可以託他們給找一找，也許買得着。（《便覽》-18）

例 234. 怕是各省的辦法都不同，定的章程也許都不一樣。（《談論》-71）

(16) “巧了”

「巧了」も北京語で推測に用いるが、あまり広く通用しないようである。あるいは「恰巧」の意もあるかも知れない(1965:54)。

金氏教科書において、“巧了”は10例あり、すべて推測に用いる。“恰巧”の意で用いるのが“偏巧”である。

例 235. 東西不少啊，巧了總得賣一天纔能完哪。(《華言》-14)

例 236. 現在剛動手收拾門面，巧了還得過一個多月，纔能定日子開張哪。(《華言》-18)

例 237. 倆看見路信了麼，支成說小的沒看見他，巧了他是跟着李老爺出外頭遛達去了罷。(《今古》李汧公)

例 238. 巧了這個掌櫃的，還得給狗穿孝了罷。(《虎頭》)

2.1.3.7 助詞

(1) “是”、“是的”、“要”、“要的”

単に確言するとき北京語では文末に「的」を用いないが、官話地区でこれを用いるところがある(1965:55)。

金氏教科書において、“是”、“是的”、“要”の用例が見られるが、“要的”の用例が見られない。また、“是”の用例が多く見られるが、“是的”と“要”の用例がそれぞれ13例と、2例しか見られない。

例 239. 老爺現在靠船了，您就下船麼。是，我這就要下船。(《華言》-3)

例 240. 您說的洋商販運內地土貨出口麼。是的。(《談論》-36)

例 241. 還有耀峯前幾天來的那封信裏頭，說是叫我這兒給您撥兌六百塊錢，是不是。不錯是的。(《談論》-47)

例 242. 若是我們所辦不下去，我們不管就是了，刁頭兒，你想這話是不是。刁說：不錯，是的。(《虎頭》)

例 243. 有昨天晚上剩下的一個豬頭，問我要不要，我說我要。(《華言》-23)

例 244. 小的就問韓雲要不要，他說他要。(《華言》-23)

(2) “得了”

「得了」に関する使い方を3つ提示した。

① 「…得了」を文末に用いることがあるが、南京官話では動詞後の「～得了」を用いないのと同様に、この場合も使用しない。(中略)同様な「…就結了」「…就有了」もやはり北方語に特有のものであろう(1965:55)。

金氏教科書では“…就結了”が13例、“…就得了”が15例あり、“…就有了”の用例は見当たらない。

例 245. 您把行李交給我們就得了。(《談論》-46)

例 246. 後來僂們再見面的時候，您就叫我床下義士就得了。(《今古》李汧公)

例 247. 打發人拿摺子，到舖子裏取去就得了。(《華言》-4)

例 248. 我告訴看園子的，為丟這麼點兒菜，不犯打架鬪歐的，後來多留神就結了。(《談論》-85)

例 249. 他既走了，就把這件事，都推在他身上就結了。(《今古》李汧公)

例 250. 下剩那六兩五錢銀子，叫他認個苦子就結了。(《華言》-21)

② 可能不可能をあらわす複合動詞「～得了」「～不了」(「了」はliao 3声)は南京官話では用いられず「得掉」「不掉」その他の語を用いるのが普通である(1965:47-

48)。

金氏教科書では“～得了”、“～不了”両方ともに用い、それぞれの用例が12例と62例ある。“得掉”、“不掉”の用例が見当たらない。

例 251. 跑得了僧跑不了寺。(《撮要》-14)

例 252. 大夫治得了病治不了命。(《撮要》-29)

例 253. 這倒是寔話，瞞不了老世台你的。(《搢紳》-10)

例 254. 這個事情是一個雷天下響是瞞不了人的。(《撮要》-1)

例 255. 他在此地做買賣多年了，甚麼事都瞞不了他。(《便覽》-14)

例 256. 我料估着他也躲不了很遠的地方去。(《今古》李汧公)

③「でき上がった」意をあらわす「～得了」（「得」はde 2声，「了」は轻声）は南京官話では用いられず、「～起來了」「～好了」「～成功了」などを用いる（1965：48）。

金氏教科書は「～得了」のみ用いられている。

例 257. 趕是時候兒，叫他做得了給送到這店裏來。(《談論》-16)

例 258. 沔得了茶拿到書房裡來一看，李勉沒在那兒坐着，他就滿屋裡一找所沒有。(《今古》李汧公)

2.1.4 結論

本節は金氏教科書に用いられた言語と太田氏の研究における北京語の特徴、計58項目の比較対照を行い、金氏教科書に用いられた言語と太田氏の北京語特徴の関連性について探究した結果、以下にまとめられる。

(1) 太田氏が提示した「北京語における7項目の特徴」と対照したことを通じて、金氏教科書が使用した言語では、7項目の特徴を全て有することが判明した。さらに、“來着”と“多了”以外、5項目における用例がそれぞれ100を超えたことから、金氏教科書は北京語の特徴が鮮明であるため、北京語で書かれていると判断でき、この5項目は北京語の特徴を正確に反映していることが分かる。

(2) 太田氏の「北京語に独特と思われる12語」に提示された8語との比較対照を行った結果、金氏教科書では“～的慌”と“罷咱”を用いず、他の6語全てを用いていることが明らかになった。また、“罷咱”は、太田氏(1965)によると、やや古い北京語特有の助詞である。「清代の北京語について」により、《兒女英雄伝》(1878)での用例はあったが、金氏教科書よりやや早い時期に刊行された《官話指南》(1882)と《九江書会本官話指南》(1893)での用例は見当たらない。そのため、「罷咱」は時代の変遷につれて、使われなくなった、或いは地域性が強い北京語語彙であることが推測出来るものの、更なる検証が必要である。

(3) 太田氏の「北京語の文法特点」で考察した項目に基づいて、代名詞、数詞・量詞、形容詞に関する比較用法、動詞、介詞、副詞、助詞の7類に分け、計38項目を取り出し、金氏教科書の言語特徴をさらに詳しく考察を行い、38項目で提示された北京語の特徴が殆ど当て嵌まることから金氏教科書は北京語の特徴が極めて強い教科書であることが分かる。

金氏教科書に用いられた言語の基準が北京語であることは疑い得ないが、太田氏が提示した北京語特徴項目の中には金氏教科書の言語と一致しない部分も存在する。例えば、金氏教科書は“～得很”、“～得慌”両方ともに用例がある。また、“…就結了”と

“…就得了”の用例はあるが、“…就有了”の用例はない。山田忠司「『北京官話 今古奇観』の言語について」(2004:113)は「當然，“北京話”也是一种比較籠統的稱呼。其實“北京話”内部，因為地域、使用者的社會階層等等的不同因素而形成諸多差異。

(中略)通過對比我們發現跟《北京官話 今古奇観》比較接近的是《小額》。《今古》和《小額》也許出自同一個方言區的作家之手。這個問題比較複雜。在充分考證之前不能輕易下結論。」と指摘した。つまり、金氏教科書の言語の太田氏の北京語特徴に当て嵌まらない部分については、山田氏が提示した北京語の内部差異が一つの原因だと考えられる。

2.2 教科書の語彙研究

語彙は教科書の重要な構成要素であり、教材の性質がどうであれ、学習者が短期間で基本的なコミュニケーション能力を習得できるよう、適切及び適量の語彙を取り入れることが大切である。金氏教科書は商業、官界、日常生活、外交関連などの題材が多く取り入れられ、北京語、「アル化」語、慣用語などが多く見られる。これらの語彙は清末北京の商業外交、社会風情、日常生活、習慣文化などを反映している。従って金氏教科書に使用されている語彙を考察することによって、語彙面から金氏教科書の特質を一層浮き彫りにできると考える。

そこで本章は金氏教科書の語彙を全面的に考察するため、(1)北京語語彙、(2)「アル化」語、(3)歴史語彙、(4)慣用語、この4部分に分類して分析を行う。

2.2.1 北京語語彙

本節では、金氏教科書に使用された北京語を全面的に考察するため、傅民・高艾军《北京话词典》(2013)をはじめ、9冊の北京語辞典を利用し、金氏教科書で用いられた北京語語彙の精査作業を行い、北京語辞典に収録されている語彙を表2-2.に列挙する。ただし紙幅の関係上、例文は省略する。括弧の内容は意味解析した数で、用いた意味解析は上記した北京語辞典の①から⑨の中で最も理解しやすいもので、対応する番号を最初に付けた。

金氏教科書における北京語語彙の考察に利用した北京語辞典は以下の9冊である。

- ① 金受申 《北京话语汇》(1964)
- ② 宋孝才、马欣华 《北京话词语例释》(1982)
- ③ 陈刚 《北京方言词典》(1985)
- ④ 徐世荣 《北京土语辞典》(1990)
- ⑤ 陈刚、宋孝才、张秀珍 《现代北京口语词典》(1997)
- ⑥ 齐如山 《北京土话》(2008)
- ⑦ 王子光、王薇 《老北京方言土语》(2008)
- ⑧ 董树人 《新编北京方言词典》(2010)
- ⑨ 高艾军、傅民 《北京话词典》(2013)

表 2-2. 北京語辞典に収録されている語彙（ピンイン順）

音順	北京語語彙（意味解釈）
A	礙事（⑨对某人某事有妨碍）、暗含着（⑨不明显表示，隐含）、熬出來（⑨度过艰难困苦的岁月）、八下裡（⑨泛指多方面，处处）；
B	本家（⑨对第三者称当事人）、本主兒（⑨当事者本人或物主）、寶局（⑨赌场）、巴結（⑨努力，奋进，追求）、不差甚麼（⑨又作“不差嘛兒”，“不差麼兒” ① 差不多 ② 在一般情況下。用作插入语）、不礙（⑨也常说“不礙的，不礙事（兒）”。没关系，不要紧，不妨碍）、被窩（⑨被子）、背（④运气不好）、背地（⑨暗中，不当着他人）、背運（⑨运气不好，倒霉）、背黑鍋（⑨比喻替人担罪名）、把式（⑨ ① 武术 ② 有某种专门技术的人）、掰（⑨双手分别向反方向用力，将物品分开）、白事（⑨丧事）、拜匣（⑨木制的小匣子，呈长方形）、辦事（⑨结婚）、拌嘴（⑨争执，辩驳）、薄餅（⑨薄薄的烫面儿烙的白面饼）、傍黑（⑨天将黑的时候）、貝勒（⑨满文 beile 的音译，清宗室封爵之一，早期相当于酋长，部落长一类，地位低于汗（hán））、貝子（⑨满文 beise 的音译。清朝早期为“貝貝勒”的复数，义为众贝勒。后演变为一个单独的名词，成为清宗室封爵中的第四个等级。）、本兒（泛指簿、冊）、本等（⑨ ① 本分，职责 ② 资格，权利）、閉眼（⑨死）、變顏變色（⑨神情不自然，神色惊恐、惶恐）、撥兒（⑨批、群）、饽饽（⑨ ① 糕点 ② 用白面或玉米面做成的面食 ③ 饺子）、饽饽舖（⑨糕点店）、不成材料（⑨素质较差，没真本事）、不湊手（⑨手头金钱短缺）、不大好（⑨不好的委婉说法）、不犯（⑨又作“不犯着”。没必要，用不着）、不防頭（⑨冒失，不适当）、不含糊（⑨又作“不含忽，不含乎”。 ① 不马虎，叫真儿 ② 不示弱，不畏惧）、不即不離（⑨又作“不紧不离兒”，差不多，达到一定程度）、不開眼（⑨缺乏见识，没见过世面）、…不來（⑨缀于动词后，表示对某种动作或事情不习惯、不胜任等）、不離（⑨差不多，不錯）、不理會（⑨没留意，不觉察，未经心）、不饒人（⑨不肯示弱，不宽恕）、不是頑兒的（⑨“頑”又作“玩”。不是儿戏）、不順（⑨遇到麻烦、倒霉的事）、不易（⑨不容易，艰难）、不言語（⑨不說話）、布碟兒（⑨酒席上供布菜用的小碟儿）；
C	湊手（⑨手里钱宽裕）、吃食（⑨吃食兒，吃的东西）、從先（⑨从前，早先）、抽冷子（⑨ ① 猛然，突如其来，不及防备 ② 偶然，偶尔）、沉重兒（⑨责任）、出恭（⑨婉语，上厕所）、成衣舖（⑨裁剪缝制衣服的店铺）、出外（⑨到外省市去）、蹭（⑨ ① 慢慢地走 ② 不花费钱财或靠手段得到某种好处）、茶房（⑨ ① 旧时旅馆、饭店、车、船等服务人员的统称 ② 红白事中雇请的负责招待的服务员，除了端茶送水，上菜斟酒，还兼管司仪等。尊称“茶师傅”）、潮（⑨技艺低劣）、抄（⑨抢夺，捞取）、吵嚷（⑨ ① 议论纷纷 ② 声张）、嗔（⑨埋怨，责怪）、成色（⑨本指金银的含量，转指质量、水准。）、吃着碗裏的看着鍋裏（⑨又作“吃着碗裏的惦着鍋裏，吃着碗裏的瞧着鍋裏”。贪得无厌）、衝（⑨ ① 对着，向着，朝着 ② 猛，急，厉害）、抽抽（⑨动物、植物体缩短，枯萎）、出花兒（⑨出天花）、出門（⑨外出）、出門子（⑨出嫁）、出外（⑨到外省市去）、穿換（⑨又作“串换、川换”。交换，钱财上互相帮助；人与人之间结交、往来）、吹風（⑨有意透漏情况、消息）、春餅（⑨白面烙的小薄饼，形似荷叶，称荷叶饼；因两张相合，又称合叶饼。北京风俗，立春那天吃这种饼，因此得名春饼）、存項（⑨储蓄，积蓄）、矮（⑨矮，引申指降低身份，地位）、錯翻了眼皮（⑨又作“错睁了眼儿”。小看了人，看错了对象）、粗胳膊拗不過大腿去（⑨又作“胳膊拧不过大腿去”。比喻身单力薄的人敌不过强的势力或人）；
D	搭（⑨数量的增加，财物的损耗）、打（⑨从）、打抽豐（⑨利用各种关

	<p>系或机会索取财物)、打點(⑨^①筹办,准备^②用钱财贿赂,以打通关节,买得人情)、打盹兒(⑨打瞌睡,睡一小会儿)、打哈什(⑨人困乏时张嘴深深地吸气和呼气)、打呼(⑨睡觉时发出鼾声)、打價兒(⑨估价。给价。打折扣,减价)、打更(⑨旧时一种夜间报时的方法,一夜分五更,一更约一个半小时,每到一更,更夫敲一次梆子和铜锣)、打鳴兒(⑨雄鸡放声啼叫)、搭着(⑨^①外带着,加上^②搭配)、搭幫(合伙,结伴)、定規(⑨商定,决定)、…得慌…(⑨又作的慌。缀与某些形容词之后,表示人的身心某种不快慰的感觉)、多偌(⑨又作“多嚙”,“嚙”是“早晚”两字的合音,什么时候)、底下人(⑨僕人,随从)、道乏(⑨口头或宴请,向为自己辛劳的人致谢,或向亲友,客人致意)、打哈哈(⑨开玩笑,不是正经地做某事)、得了(⑨又作“得嘞”,“得咧”。行了,表示慨叹,时含无可奈何的意味)、短禮(⑨礼节上有欠缺。亲朋好友之间常用于表示自谦)、得意(⑨如意,如愿)、打頭(⑨原本、首要的)、賭氣子(⑨气恼,愤怒,常伴有某种果敢、决断的行动)、打人别打臉,罵人别揭短(⑨喻不要触及别人的短处,不要损害他人的尊严)、大兵(⑨旧时对士兵的称呼,因其多侵扰祸害百姓,含有粗野、骄横的意味)、大菜(⑨西餐的菜)、大號(⑨大名)、大教(⑨汉族,汉民。区别于回民)、大拇指頭(⑨拇指)、大奶奶(⑨旧时对已婚女子,奴仆对主妇,多房妻妾中居首位者的称谓)、大爺(⑨旧时仆人等雇佣者尊称主人)、歹毒(⑨阴险狠毒)、帶累(⑨人的言行对他人产生消极的影响或带来不良的后果)、帶理不理兒(⑨义同“带搭不理儿”。对人态度冷淡,勉强应付)、待承(⑨招待,对待)、當中間兒(⑨正中,中间)、刀螂(⑨螳螂。用以表形状,架势)、當是(⑨以为是)、叨叨(⑨没完没了地说)、倒(⑨转手,转卖)、到頭(⑨达到终点,极限)、得(⑨完成,竣工,做好)、得人(⑨得人心,人缘儿好)、提溜(⑨又作“嘀溜”、提掇。提,提着,提起)、地面兒上(⑨^①一定的社会势力范围^②特指一定范围的管理机构及人员)、定更(⑨入夜到天明分五更,定更即初更,大约晚八时左右。)、定準(⑨准头儿,固定。确定)、冬寒時冷(⑨冬季寒冷的时候)、鬪牌(⑨打紙牌)、肚臍眼兒(⑨肚脐)、短禮(⑨义同“短礼缺情”。礼貌、人情上愧对于人)、短住了(⑨一时缺钱)、對付(⑨^①敷衍应付^②勉强为之,维持)、多兒(⑨多少);</p>
E	<p>訛(⑨找借口,向人敲诈财物或委以罪责)、耳朵底子(⑨耳内有炎症,脓水时常流出)、耳根台子(⑨又作“耳跟台子”。耳朵后面底部突出的骨头)、耳軟(⑨心无定见,很容易被他人的话左右)、二哥(⑨兄弟中排行第二的男子。“哥”读轻声);</p>
F	<p>犯事(⑨触犯法律,犯罪)、法子(⑨方法,办法)、乏(⑨没力气,没精神,疲劳)、發毛(⑨害怕,惊慌)、發引(⑨旧时丧葬仪式,出殡时亲友送灵柩出家门)、翻騰(⑨思绪起伏)、煩心(⑨烦恼,忧心)、放定(⑨旧时婚俗,订婚时,男方赠送女方礼品)、費話(⑨斥责对方胡言乱语,说没根据,没意思的话)、分大小兒(⑨分清辈分,讲究礼数)、分心(⑨费心,劳神。对自己帮忙办事的人客气的表示)、分子(⑨又作“份子”。办红白喜事时,亲友赠送的钱)、婦道(⑨妇女。时含轻蔑或自轻意味);</p>
G	<p>管保(⑨肯定,保证)、敢保(⑨肯定,保证)、櫃上(⑨店铺,商店)、敢情(⑨又作赶情,原来,自然)、敢自(⑨当然,原来)、擱(⑨放,放置,闲置)、趕到(⑨到,等到)、蓋碗兒(⑨考究的饮茶用具,带盖儿的碗儿)、乾果子舖(⑨出售干果等的店铺)、趕檔子(⑨旧时缝集市、庙会时,小贩和曲艺、杂技等江湖艺人纷纷赶来做买卖、卖艺)、趕明兒個(⑨未来的某时,将来,以后)、趕着(⑨抓紧时间)、告病(⑨请病假)、告假(⑨先离开,早退席时的敬语)、胳膊折了往袖裏掖(⑨又作“胳膊折了王袖子里藏”、“胳膊折了往袖子里褪”。喻家</p>

	<p>丑不外扬)、胳肢窩(㊟腋窝儿)、跟班的(㊟旧时官吏役使的仆从)、跟前(㊟身边)、跟人(㊟跟随的仆人)、共總(㊟所有的, 整个)、狗嘴吐不出象牙來(㊟比喻人品次, 说不出好话)、估摸(㊟估量, 估计)、姑奶奶(㊟对已嫁的女儿的称呼)、估衣(㊟半新不旧的衣服)、官面兒(㊟有一定官职地位的人, 官方的, 官府)、官樣(㊟式样, 陈设等雅致。样子好看)、官衣(㊟旧时指官制的官吏、警察等穿的有明显职别、品级特征的服装, 现借指或戏称警察等职业的制服)、逛燈(㊟闲逛, 游玩)、歸齊(㊟总共, 结果, 到底)、歸着(㊟又作“归置”。收拾, 拾掇, 整理)、鬼臉兒(㊟假面具)、過行(㊟本行中人收买打硬鼓的收购来的贵重物件)、過了這個村兒没有這個店兒(㊟比喻机不可失, 时不再來)、過去了(㊟婉言, 去世了)、過於(又作“过逾”。超出一般程度, 过分, 太);</p>
H	<p>好容易(㊟好不容易)、好些個(㊟很多)、橫(㊟粗暴, 凶蛮)、橫豎(㊟无论如何, 不管怎样, 反正)、護庇(㊟保护, 袒护)、幌子(㊟店铺招牌)、會子(㊟①一段时间②不大会兒)、夥計(㊟旧时商家、厂里雇用的员工)、行市(㊟①市面商品价格②转指趋势、境况)、黑下(㊟夜晚)、回頭(㊟待一会儿)、哈什(㊟哈欠)、海碗(㊟特大的碗。旧时宴席上多用这种碗盛热菜)、含糊(㊟又作“含忽、含糊”。①含混不清, 故意遮掩②马虎, 敷衍)、合不着(㊟不值得, 不上算, 没必要)、合式(㊟符合某种情况, 要求)、和美(㊟关系亲密, 感情融洽)、盒子(㊟类似馅儿饼的面食品, 两张白面擀的皮儿中间包大量菜馅儿捏合, 圆形扁平, 用饼铛搁少许油烙熟)、黑更半夜(㊟夜已很深)、黑下(㊟夜晚)、黑早(㊟大清早)、橫打鼻樑兒(㊟无所顾忌, 敢于承担)、橫針不知豎線(㊟形容妇女不会做针线活)、紅貨(㊟珠宝钻石之类)、後半晌(㊟下午)、後腦杓子(㊟腦袋後部)、後兒(又作“后几个”。后天)、候(㊟迎候)、候一候兒(㊟又作“候候兒”。稍等一会)、糊(㊟粘贴)、花子(㊟乞丐)、懷抱(㊟指婴儿时期)、踝子骨(㊟内踝和外踝的统称)、換季(㊟随季节变化更换衣着)、回(㊟禀报)、回頭(㊟待一会儿)、會齊兒(㊟集结、会合在一起)、會說的不如會廳的(㊟不管说的多么巧妙, 真正用意别人也听得出来)、囫圇着(㊟含混不清, 不明确。敷衍, 不较真)、混混(㊟游手好闲, 不务正业或干小偷小摸之类坏事的人)、火燎眉毛(㊟喻极为紧急、紧迫);</p>
J	<p>進項(㊟钱财收入)、腳行(㊟搬运行业)、儘自(㊟又做紧自。总是, 老是, 一个劲儿)、見天(㊟天天儿, 时常)、解(㊟从, 由)、解悶兒(㊟缓冲, 冲淡或消除寂寞、苦闷、无聊的情绪)、今兒個(㊟今天)、今兒(㊟今天)、就結了(㊟就算了)、局子(㊟又作局, 旧时某些行业)、講究(㊟①某种道理、习俗②在意, 注重)、家當兒(㊟家产)、舉薦(推荐某人做某事)、覺着(㊟①自我感觉②认为)、將就(㊟因条件、情况不理想而勉强、凑付做某事)、結了(㊟完了, 行了)、街坊(㊟邻居)、街坊四鄰(㊟泛指群众)、街面兒上(㊟又作“街面儿”。①市面上, 社会上②指一定地区的行政治安管理机构)、就手兒(㊟顺便, 顺手)、犄角兒(㊟角儿, 两个边沿相接的地方)、擠對(㊟又作“挤兑”。逼迫, 迫使, 难为等)、家(㊟置于人称名词词尾, 表示身份与实务、情况的不协调, 时含责备、怪罪等意味)、傢伙(㊟①武器②餐具、厨具、酒具、茶具、卧具等日常生活用品)、家務(㊟家庭内部事情、矛盾)、價碼兒(㊟价目, 价钱)、交派(㊟分派, 吩咐)、脚底下没鞋窮半截(㊟俗语。形容穿不穿鞋及鞋的优劣可以显示出人的富贵贫贱)、叫起兒(㊟休息后喊集合。皇宫的宦官奉皇帝之命, 召集群臣议事。叫人按时起床。让人离席)、轎車(㊟木制带棚儿载人的骡拉车)、接三(㊟旧时丧事习俗。人死后第三天, 举行祭祀仪式, 焚烧纸人、纸马等)、隔手(㊟又作“接手儿”。中间通过某人或某种关系办某事)、借</p>

	光(⑨询问或请求别人给与方便的客气话)、借花獻佛(⑨将他人的东西转送人。转指借某个机会。)、借…吉言(⑨常说“借您吉言”，也可有具体指称。对别人的好话表示好感的客套话，愿您的吉祥话给我带来好运气)、隔壁兒(⑨又作“间壁儿、借壁儿、界壁儿”。紧邻或近邻)、金店(⑨经营金银制品的上的，如金银首饰等。同时也兼营贷款、抵押等)、禁(⑨又作“经”。用于动词前，表示某动作可以承受、可持续较长时间)、就便(⑨顺便)；
K	可就(⑤意思接近“就”，但往往用于没有意识到的情形下出现某种情况或到达某个时间)、可不是(⑤也可以说“可不”。在对话中，表示随声附和或表赞同)、寬綽(⑨①空间大，范围广②钱财富裕)、炕(④旧时，北方人习惯睡炕，系用土垒成的平台，几乎占一间屋子的一半，是家庭生活中重要的处所，除坐卧以外，吃饭、做针线活、写字、算账，都在炕上)、考較(⑨研究，考察)、克食(⑨原为皇上赏赐功臣的的点心，也指祭祀的供品，祭毕分赏于人吃)、頰落膝(⑨又作“頰啦膝”。结喉，也叫喉结。)、可(⑨尽着某个范围、空间、可能，按一定数量、大小)、空場(⑨空旷的地方)、口話兒(⑨口气，口吻，话语蕴涵的意味)、口兒挪肚兒攢(⑨义同“口积肚儿攢”。形容在吃食上极力节约、俭省)、口子(⑨某行手藝人集中得地方)、苦子(⑨苦头，使人痛苦、苦恼的事情)；
L	來着(⑨用于句尾，表示曾经发生过什么事情)、了不得(⑨不得了，表示惊讶语)、臉軟(⑨礙於情面，不得不答应他人的某些要求，或不好意思苛求他人)、料估(⑨预料，估计)、拉倒(⑨作罢，算了)、勞駕(⑨请求他人给予方便或帮助时，对人表示歉意或谢意的客气语)、老米(⑨粮仓陈米)、懶怠(⑨懒得，不愿意)、勞動(⑨劳累、辛苦。客气语，用以对自己辛劳的人表示过意不去)、冷不防(⑨突如其来，不及防备)、兩下裏(⑨两方面)、遛達(⑨又作“溜躡”“溜達”“溜達”。信步走、散步)、拉手兒(⑨满族旗人表示亲近的一种礼节)、攬(⑨承接，包揽)、老太太(⑨一般人尊称女性长者，含亲切意味)、落脚兒(⑨可以住宿，休息)、播磚(⑨旧时一种乞丐，在街头巷尾跪着，袒胸抡砖打得青紫血红，以此悲苦惨状向路人乞讨)、連三桌(⑨一种老式桌子，并排有三个抽屉)、靈便(⑨灵活，轻捷)、樓庫(⑨旧时迷信，请冥衣铺为己故者扎制在阴间享用的住所、库房及金银财宝等，焚化以表孝心。也可以作为送给生者大寿的寿礼，称“寿生楼库”)、露白(⑨钱财显露出来)、爐房(⑨清代收验、化铸银子的行当。后也存现银)、滷(⑨本为菜肴的浓汁或肉、蛋等做成的浇在面条上的汤汁)、路(⑨种，类。时含贬义)、理會(⑨感覺，察覺。多用否定式)、亂(⑨慌乱，搅乱)；
M	買賣人(⑨商人)、明兒個(又作“明儿格”，“明日格”。义同“明儿”)、茅房(⑨旧式简陋的厕所)、茅廁(⑨又作“毛厕”。义同“茅房”)、悶得慌(⑨心情抑郁，不舒畅)、麻俐(⑨迅速，赶紧)、買賣不成仁義在(⑨买卖即使不成交，买主和卖主的情谊还是存在的)、滿打(⑨作某种最大可能的考虑)、滿應滿許(⑨满口答应、承诺)、忙忙叨叨(⑨忙乱，慌急，紧张)、毛窩(⑨棉鞋)、沒吃過豬肉還沒瞧見過豬跑麼(⑨又作“没吃过猪肉，也见过猪跑”。比喻对某种食物总会有点儿接触，不管怎么说也应该有一定的知识)、沒有金剛鑽兒不敢攬磁器傢伙(⑨“磁器”又作“瓷器”。又金剛鑽兒：铜破碎瓷器必备的额打孔工具。比喻没有真本事，就不会承做某事)、沒落子(⑨生活没有着落。喻束手无策)、沒偏沒向(⑨不偏向，不偏袒)、沒日子(⑨遙遙無期)、沒有不透風的籬巴(⑨又作“没有不透风的墙”。比喻任何事情都不可能绝对保密、长久隱瞞)、煤舖(⑨专门出售煤炭及煤球、煤饼的铺子)、美(⑨欣喜，自得)、昧(⑨暗中将不属于自己的财物据为己有)、迷糊(⑨头脑混乱)、蜜裡調油(⑨形容关系极为亲密，敢情深厚)、冥衣舖

	<p>(⑨制作和销售丧葬祭仪用的一应物品, 如寿衣、花圈及其他纸扎的供焚化的车马、楼库、役使人等的店铺)、木廠子(⑨旧时京城承接土木工程估工、包工或批发、零售木料、桌椅等粗制木器的厂子);</p>
N	<p>您呐(⑨又作“您哪”。客气语, 向对方表示尊敬、亲热等)、腦門子(⑨额头, 前额)、娘兒們(⑨称成年女子。含轻蔑义。表单数)、弄(⑨作, 或相当于其他动词)、那兒的話(⑨对他人的话表示否定。常含客气、谦恭的意味)、那兒的事(⑨又作“哪儿的事情”。对他人的的言行表示否定)、那塊兒(那里, 那儿)、納悶兒(⑨想不出事情的原由, 心里疑惑)、南邊人(⑨南方人)、南邊兒(⑨指江南或江浙一带地方)、難纏(⑨不好好对付, 不好惹)、撓頭(⑨棘手, 难办, 伤脑筋)、鬧心(⑨心绪不宁)、那麼(⑨那里, 那边)、那點兒(⑨形容量小)、能耐(⑨本事、技艺。时用以讥讽人没真本事)、你瞧(⑨轻微的责怪他人或自责语。时含客气意味)、攆(⑨追赶)、牛不喝水強按頭(⑨比喻强迫、强逼。含不能奏效义)、努嘴兒(⑨双唇相合、噘嘴示意)、女孩兒(⑨女兒);</p>
O	<p>愜氣(⑨又作“呕气”。因发生矛盾而生气);</p>
P	<p>跑外(⑨側重负责外务方面的事情)、跑堂兒的(⑨饭馆儿、酒店里为客人吃、住服务的人)、旁邊兒(⑨方位词, 左右两边, 靠近的地方)、刨(⑨去除)、片子(⑨名片或呈请等用的长帖子)、破(⑨❶表示对某人、某事、某物的轻蔑、厌恶❷舍得付出, 花费)、破費(⑨花费金钱。有时用作受益者的客气话)、蒲子(⑨蒲草);</p>
Q	<p>起(⑨从)、前兒個(⑨前天)、前兒(⑨前天)、整齊(⑨又作“齐正”。美观, 漂亮)、輕省(⑨轻松, 省劲儿)、俏貨(⑨价廉物美的货物)、騎馬找馬(⑨比喻一边做眼下的工作, 一边寻找更如意的)、旗下(⑨旗人, 满族人)、氣迷心(⑨轻度神经失常)、氣嗓(⑨气管)、前人洒土迷後人眼(⑨喻一个人做了不好的事, 致使其他有关的人受到不应有的对待)、錢串子(⑨清代用以穿铜钱的麻绳。借喻吝啬的人)、錢糧(⑨❶本指赋税❷旗人每月领取的银两。转指酬金, 酬劳)、錢舖(⑨兑换钱币的私人商号)、腔子(⑨人或动物头一以下的中空部分)、雀朦眼(⑨又作“雀蒙”。夜盲)、親上做親(⑨有亲戚关系的人家再结亲联姻)、勤謹(⑨又作“勤紧”。勤快)、擎受(⑨轻易得到, 白白享用)、請安(⑨满族旗人礼节, 男子请单腿儿安, 女子请蹲儿安)、蚰蚰兒(⑨蟋蟀)、蚰蚰兒不吃螞蚱肉(⑨比喻不伤害同类或周围的人)、娶親太太(⑨结婚当天, 代表男方到女方家迎娶新娘的妇女);</p>
R	<p>人家兒(⑨住戶)、人家(⑨別人)、繞灣子(⑨说话不直截了当)、人緣兒(⑨招人喜欢的性情, 风度等)、嚷嚷(⑨吵嚷, 争吵; 泄露, 张扬)、讓行不讓利(⑨买卖中, 成批量地买, 给以批发价优惠, 而零买的则按较贵的零售价)、繞(⑨用言语或计策, 算计、戏弄人)、人受一口氣, 佛受一炷香(⑨又作“人受一句话, 佛受一炷香”。对佛上香表虔诚。比喻对人若说诚心而和气的話, 也能温暖人心)、人有臉樹有皮(⑨人都爱面子, 有自尊)、日頭(⑨太阳。北京人一般不说, 常用与谚语、熟语之中)、肉爛在鍋裡(⑨本比喻没有损失; 转指或者有损, 或者有益, 都在一定的范围之内, 不单单是个人的得失);</p>
S	<p>耍貨兒(⑨玩具)、傷財(⑨损失钱财)、失閃(⑨意外不幸的事)、說開了(⑨说真相, 表明态度)、撒潑打滾(⑨大哭大闹, 不肯罢休)、撒開了(⑨尽情, 无拘无束)、三隻手(⑨小偷儿)、散(⑨解除协议、中止某种关系; 解雇)、齷刻(⑨苛刻; 吝啬)、晌午(⑨中午)、上房(⑨四合院里的正房, 坐北朝南)、上供人吃, 心到神知(⑨给神上的供品, 最后还是人吃掉。比喻心意到了就可以)、上緊(⑨加紧, 抓紧)、燒鍋(⑨制造酒的作坊)、燒活(⑨旧时迷信品, 用纸张、秫秸等为死者</p>

	<p>扎制的车马、役使人等、生活用品之类，丧礼时焚烧。借喻身体虚弱）、烧羊肉（⑨京味肉食，选用羊的“排岔”、“腱子”等，加多种调料，经多道工序，精制而成）、舌头底下压死人（⑨又作“舌头板子压死人”“舌头根儿地下压死人”“舌头根子地下压死人”。形容人言可畏，造谣中伤、流言蜚语给人造成极大苦恼，甚至置人于死地）、甚麽的（⑨省略语，包含不详细列举的内容，相当于“等等”）、升腾（⑨事业发展，职位提升）、生意口（⑨泛指各行各业买卖）、聖明（⑨称赞他人有见地，会处事）、失迷（⑨丢失，遗落）、時不常兒（⑨时常）、拾掇（⑨收拾，整理；修理）、使絆子（⑨又作“使绊儿”。趁人不备绊倒之。比喻暗中使坏害人）、使喚（⑨①使用②支使）、使喚丫頭（⑨旧时听凭主人役使的女孩，一般年岁较小，有的已卖身为奴。借喻听人支使的人）、是時候兒（⑨适当的时机）、手不穩（⑨婉言偷窃）、手大遮不過天去（⑨比喻少数人智慧、能力有限）、手黏（⑨偷偷地在钱财上占便宜）、首飾樓（⑨制造并出售金银首飾的店铺）、受（⑨遭受、忍受不快或痛苦的事情）、受等（⑨客套話，久等）、舒坦（⑨又作“舒泰”“舒疼”。舒服，舒适，快慰，坦然）、數落（⑨列举错处，责备，训斥）、樹大招風（⑨比喻有钱财，有名声，容易招来祸害）、耍手藝（⑨靠自己的技艺赚钱吃饭）、水飯（⑨蒸熟的米饭加水煮成）、水過地皮濕（⑨比喻因经手而得到一定好处）、水牛兒（⑨蜗牛）、順治們（⑨宣武门。元、明时称顺承门）、說好了（⑨事先把话说明。伴有某种约定或承诺。）、說開了（⑨说明真相，表明态度）、四不像子（⑨本为麋鹿，用以比喻难以归为，某类的事物）、四下（⑨四周，周围）、送親/送親太太（⑨旧时婚俗，女子出嫁时，须有娘家人随迎亲花轿送其到婆家，陪送者，一般请体面的，懂得礼仪习俗，善于张罗、应酬的人，男的称为送亲老爷，女的称为送亲太太）、接三/送三（⑨旧时迷信习俗，人死第三天，作佛事祭祀，称为“接三”。傍晚，亲友手执香烛，孝子捧着僧人准备好的“疏”，众僧陪着送至路口焚烧，同时烧纸钱，孝子下跪行礼，称为“送三”）、隨手兒（⑨时常，随时）；</p>
T	<p>退身步兒（⑨回旋的余地）、頭裏（⑨①从前，以前②先头，此前③開始，起先）、頭年（⑨本年的前一年）、塌架（⑨形容败落；精神极恐慌，甚至崩溃）、太陽（⑨太阳穴的简称）、躺箱（⑨老式的长方形的大木箱子，上面开盖儿，木板较厚，较长且宽，里面可存放东西，上面可供人坐卧）、添箱（⑨又作“填箱”。旧时习俗，为亲友将出嫁的女儿增添嫁妆，即赠送钱物）、挺（⑨竭力支撑）、頭兒（⑨旧时对在衙门当差的或中年以上男子的尊称）、投緣對勁（⑨性格、情趣、爱好等有相同或相似之处，说得来，相处融洽）、透着（⑨①显着②觉着）、土埋了半截兒了（⑨喻一生过半，岁增人老）、團龍（⑨一种圆形的蟠龙花纹，多绣在衣服上，或绘制在器皿上）、腿肚子（⑨小腿后侧肌肉丰满的部位）、褪（⑨①回缩②藏在袖子里）、托咐（⑨委托，请求别人帮忙、照应）、駝戶（⑨清末京西、京南等地，饲养骆驼并用作运载工具的人家）；</p>
W	<p>外帶（⑨附带加上）、望山跑死馬（⑨谚语。看着山似乎就在眼前，而要到达山下，还要经受相当长一段路程的鞍马劳顿。比喻道路漫长，难到达目的）、穩（⑨使人情绪稳定，不急于采取某种行动）、無賴子（⑨软磨死缠、令人厌恶的人）、無心中（⑨无意的，不经意的）、机登兒（⑨面呈方形的凳子）；</p>
X	<p>些個（⑨一些，前加修飾，表示量大）、新進（⑨最近）、新親（⑨成婚的男女方的家人，在结婚时及婚后的一段时间内，相互指称）、先前（⑨以前，从前）、先頭裏（⑨又作“先头儿”。开始，起初，从前）、下夜（⑨夜间值班巡逻）、瞎（⑨盲目的随意的，没有章法，缺乏经验）、閒錢（⑨生活必须花销之外的余钱）、閒在（⑨空闲，悠闲）、錫鑼（⑨又作“锡拉”。锡）、戲單兒（印有演出剧目和演员名字的单子）、匣子</p>

	<p>(⑨劣质棺材)、下巴頰兒(⑨下巴)、下得去(⑨说得过去,情况比较好,达到一定水平)、下剩(⑨其他,剩余)、嫌(⑨令人讨厌,厌烦)、現世報(⑨自己造的孽,现时受到惩罚)、響動兒(⑨声响,动静)、消停(⑨清静,安稳。有“消消停停”“消停消停”两种重叠形式)、小繒(⑨小偷小摸的人)、小工子(⑨泥瓦活儿中做粗活的壮工,卖力气,没技术)、小雞子(⑨鸡)、小意思(⑨微薄的心意)、歇着(⑨上床睡觉,或泛指歇息。常用作问候语)、謝儀(⑨用以表示感谢的钱)、懈怠(⑨不正经,不严肃。言语带讥讽、挖苦意味)、尋死(⑨自杀)、尋宿兒(⑨找住处过夜)、行人情(⑨有喜事、丧事时,亲朋好友,前往庆贺或吊唁,送份子礼,帮着张罗,参加仪式,吃宴席)、行走(⑨供职,任职)、學房(⑨家塾,私塾);</p>
Y	<p>銀號(⑨比钱庄、钱铺大的小银行)、爺們(⑨男子的俗称)、一會兒(⑨较短的一段时间)、一節(⑨一样儿,一点)、一清早(⑨清晨)、一般兒(⑨一样)、一撥兒(⑨一批)、一層(⑨一方面)、一程子(⑨一段时间,一阵子)、一黑早兒(⑨一大早,一清早)、一來二去(⑨①泛指时间推移,多次过往②某事多次重复)、一溜兒(⑨一行,一排。“溜儿”相当于“行”、“排”等量词)、一溜煙(⑨形容跑得快)、一腦門子(⑨整个前额或面部。常用于描绘人的神情)、一片嘴,兩片舌頭(⑨爱说闲话,好搬弄口舌是非)、一氣兒(⑨不停顿地,连续,接连)、一生日(又作“一生儿”。一周岁)、一個人兒吃飽了一家子不餓(⑨戏言单身一人)、一天雲霧散(⑨比喻矛盾解决,事端平息,气氛缓和,恢复常态)、一根繩兒拴倆蚂蚱(⑨又作“一根绳儿上的俩蚂蚱”“一条绳儿拴俩蚂蚱”。蚂蚱:蝗虫。比喻利害相关)、一準(⑨肯定,一定)、一總(⑨一起,一块儿;总共)、營生(⑨可做的事情,工作,职业)、野貓(⑨野兔)、野牲口(⑨虎狼之类的野兽)、亞賽(⑨极像)、眼不見麼,心不煩(⑨看不到某人某事,心里不产生与之有关的烦恼)、眼見(⑨亲眼所见)、眼離(⑨眼镜迷离,看不清晰)、殃榜(⑨旧时迷信,人死之后,阴阳先生写明死者生卒年月、死因等的一张纸)、羊毛出在羊身上(⑨喻看似得到好处,实际上是以一定的付出、损失、牺牲为代价的)、羊羣裏頭跑駱駝(⑨又作“羊群里出骆驼”。比喻年岁、身材、才能等超群出众。时含讥讽义)、洋廣雜貨(⑨外国货和广东货,清末百货店以之为招牌,表示其货时新)、養濟(⑨修养,调养)、吆喝(⑨义同“吆唤”。街头巷尾摆摊儿的、走街串巷的小贩儿的叫卖声,是富有浓厚京味的“市声”)、要飽還是家常飯,要暖還是粗布衣(⑨家常便饭吃得饱,粗布衣服穿着暖和,越是普通的东西越实惠)、噎膈(⑨又作“噎膈”。食道瘤。比喻麻烦的事儿)、已然(⑨已经,强调发生过的事情、情况)、陰山背後(⑨喻生僻)、引見(⑨又作“引荐”。当面介绍他人互相认识)、引逗(⑨逗弄,招惹,引诱)、鷹嘴鴨爪(⑨形容人不会料理生活)、應(⑨事情发展或结果,与预言相符)、油鞋(⑨雨鞋旧称。布鞋涂抹桐油而成的防水鞋)、油鹽店(⑨卖油盐酱醋等副食品的店铺)、有今兒個沒明兒個(⑨又作“有今儿,没明儿”。什么朝夕不保。或指某事不长久)、有人緣兒(⑨招人喜欢,旁人愿与之交往,或予以帮助)、有一得一(⑨有一个算一个)、言語(⑨说话)、圓墳兒(⑨死者入葬第三天,其子孙在墓前祭奠)、原本(⑨原来,早先)、約摸(⑨估计)、勻(⑨①腾出,分出②让给,转让);</p>
Z	<p>作派(⑨本指戏曲表演中的动作、神态,借指人平常的言谈举止、仪表风度)、字號(⑨商店、饭店、茶馆儿等的名字)、張羅(⑨主动做某事。常有赶时间的意味。①筹措准备②料理安排③应酬,招待)、這程子(⑨最近一段时间,这些时候,这些日子)、住店(投⑨宿旅店、宾馆、酒店)、怎麼着(⑨用作对话导语)、在旗(⑨家庭属旗籍)、早半天兒</p>

	<p>(㊟上午, 午前)、早晚兒(㊟泛指现在或将来某个时候)、造(㊟替代其他动词)、扎挣(又作“拮挣”。勉强支撑; 坚忍)、宅門(㊟深宅大院, 多为有钱有势的人家)、撮布(㊟用以擦拭碗筷等餐具的布)、張不開嘴(㊟难以启齿)、章程(㊟主意, 辦法, 规矩)、掌櫃的(㊟商店老板, 负责人, 也用于尊称一般店员)、仗着(㊟多亏, 幸好; 依仗, 依靠)、賬主子(㊟旧时称债主)、賬局子(㊟似钱庄, 靠存钱、放账获利)、招護(竭力、尽情地做某事, 支撑, 应付某种局面。随境可代不同的动词)、找補(㊟补上其他欠缺、不足)、着落(㊟頭緒, 下落)、着了(㊟作动词的补语, 表示行动的结果或程度)、照(㊟①看②往)、折變(㊟变卖)、這山望那山高(㊟形容在选择工作时, 一再挑拣; 人无恒心矢志, 不踏踏实实从事本职工作)、這是那兒的話(㊟否定他人的看法。或对他人的做法表示难为情、客气等)、這是怎麼說呢(㊟感叹, 对某事感到惊讶、不解。否定他人的看法)、這一程子(㊟这段时间)、爭競(㊟争执, 计较)、睜一隻眼閉一隻眼(㊟敷衍, 不严格要求, 不认真对待)、知會(㊟通知, 告知)、執事(㊟婚丧嫁娶的仪仗)、紙裏包不住火(㊟比喻多么隐秘的事情也会传扬出去)、指(㊟指望, 依靠)、粥廠(㊟旧时熬粥施舍给穷苦人的地方)、主兒(㊟前加其他修饰语, 表示某种类型的人)、主事(㊟负一定的责任, 有职有权)、住家(㊟①居住, 住所②住户)、轉年(㊟第二年)、賺(㊟挣(钱)。常指用不正当的手攫取钱财)、嘴皮子(㊟口齿, 嘴上的功夫)、嘴強身子弱(㊟形容人嘴上不认输, 内心虚弱)、嘴硬(㊟不肯服输, 极力反驳)、作賤(㊟糟蹋)、昨兒個(㊟又作“昨儿格”。昨天)、左不是(㊟反正就是, 肯定就是, 还不是)、做臉(㊟露脸, 增添光彩、体面);</p>
--	---

上述の考証の結果、金氏教科書には合計 585 個の北京語語彙が採用されていたことが明らかになった。従って、金氏教科書は強い北京語の特質を持つと判断できる。

2.2.2 「アル化」語

「アル化」語は北京語における極めて特徴的な言語現象である。金氏教科書には大量の“兒化詞”が使用されており、これらの「アル化」語がどのように記述されているのかを明らかにすることが本節の考察目的である。

金氏教科書に用いられた「アル化」語を 2808 例抽出し、異なりでは 474 種類あった。種類別で使用頻度と割合を付録にまとめる。

2.2.2.1 出現頻度から見る「アル化」語

金氏により編纂された 11 冊の北京語教科書の本文約 28 万字の中で用いられた「アル化」語は合計 2808 例、異なりでは 474 種類がある。即ち、約 100 文字に 1 例の割合で出現する。

表 2-3. 金氏教科書における上位 10 例の「アル化」語種類別で使用頻度一覧表

語彙	那兒	時候兒	一點兒	地方兒	這兒
使用頻度	234	212	180	174	131
語彙	工夫兒	一塊兒	點兒	今兒個	今兒
使用頻度	86	86	77	65	60

金氏教科書に用いられた「アル化」語において、個別の「アル化」語の用例数には偏りがあることが明らかになった。表 2-3. に示している上位 10 例の“那兒”“時候兒”“一點兒”“地方兒”“這兒”“工夫兒”“一塊兒”“點兒”“今兒個”“今兒”だけで 1305 例あり、「アル化」語全用例の 46.5%を占めている。その一方で、474 種類のうち、用例が一つしかないものが 274 種類、これだけで全種類の半分以上を占めている。また、用例が 2 つのものが 70 種類、用例が 3 つのものが 40 種類、用例が 1 つしかないものを含めると、計 384 種類で、全種類の 81%、用例数も 534 例で全用例数の 19%を占めることから、使用頻度が極めて少ない「アル化」語も多いことが分かる。

音節数からみた「アル化」語の使用傾向について、“哥兒倆”“多兒錢”“今兒個”“小人兒科”など真ん中に“兒”がくるものを取り除き、一音節の「アル化」語は 54 種類、三音節の「アル化」語は 76 種類で、それぞれは全種類の 11.4%、16.0%を占めている。また、二音節の「アル化」語の種類が一番多く、312 種類あり、全種類の 65.8%を占めている。四音節の「アル化」語が 9 種類で、“大卸八塊兒”“原封兒不動”などの成語が「アル化」されたものがある。

「アル化」語の構造について、“哥兒倆”“多兒錢”など真ん中に“兒”がくるものは非常に少なく、計 23 種類で、全種類の 4.9%を占めている。また、語根が同一の「アル化」語が数多く見られる。この特徴について、楊杏紅 (2013: 43) は“从统计的数据看, 明治时期的北京官话课本儿化词的出现频率较高, 但如果计算不重复的儿化词, 数量并不多, 造成这一现象的另外一个原因就是词根相同的双音节词大量产生。”と指摘している。

様：雜様兒, 各様兒, 外様兒, 模様兒, 幾様兒, 窮様兒, 一樣兒, 妥當様兒
 點：一點兒, 小點兒, 有點兒, 這點兒, 那點兒, 這麼點兒, 差一點兒
 面：櫃面兒, 外面兒, 官面兒, 當面兒, 地面兒, 街面兒, 對面兒, 浮面兒
 邊：旁邊兒, 岸邊兒, 前邊兒, 東邊兒, 南邊兒, 兩邊兒, 嘴唇邊兒, 水坑子邊兒
 主：買主兒, 本主兒, 棄主兒, 借主兒, 地主兒, 存主兒, 薦主兒, 置主兒
 數：件數兒, 個數兒, 樣數兒, 路數兒, 歲數兒
 房：帳房兒, 下房兒, 住房兒, 櫃房兒

2.2.2.2 品詞別に見る「アル化」語

(1) 名詞

周一民 (1998: 10) は“‘兒’后缀是名词的构词标志。绝大多数带‘兒’后缀的词都是名词。一些动词、形容词加上‘兒’后缀以后也就变成了名词。”と指摘している。金氏教科書で最もアル化されているのは名詞であり、計 297 個見られる。

①物事：棗兒紅、顔色兒、上等兒、中等兒、外號兒、籬笆門兒、響動兒、人緣兒、活話兒、價兒、手兒、件數兒、總碼兒、兩邊兒、意見兒、歲數兒、略節兒、沈重兒、妥當様兒、工夫兒、規模兒、像篇兒、路數兒、道兒、官座兒、座兒、笑容兒、退身步兒、官面兒、地皮兒、事兒、外様兒、收條兒、長法兒、耍貨兒、書香人家兒、像聲兒、面兒、俗語兒、家當兒、書本兒、嚼過兒、房架兒、實地兒、錯兒、大號兒、好年成兒、吉利兒、頭生兒、兆頭兒、小事兒、叫起兒、名兒、燈節兒、一禮兒、眼圈兒、神情兒、小賣兒、桌兒、春捲兒、戲單兒、故事兒、中間兒、小説兒、戲名兒、熱鬧兒、方兒、産業兒、帶肚兒、官兒、主麻兒、響動兒、様兒、拴馬椿兒、地名兒、下巴頰兒、眼犄角兒、嗓子眼兒、肚臍眼兒、卵子兒、眼色兒、手式兒、鼻樑兒、念頭兒、眼兒、眼珠兒、口兒、肚兒、

大脳門兒、夜班兒、黑道兒、準兒、鳥兒、便衣兒、便帽兒、官帽兒、餃兒、瓜子兒、羊羔兒、白兔兒、松鼠兒、猴兒、寒鴉兒、藤楷棍兒、貓兒、蝴蝶兒、蠅蠅兒、蝟蝟兒、水牛兒、魚兒、玉簪棒兒、指甲草兒、陰涼兒、綠葉兒、大鞍兒車、小鞍兒車、人家兒、八字兒、帖兒、大小兒、圓墳兒、尺頭兒、災病兒、戲法兒、銅碗兒的、卦攤兒、行次兒、三病九痛兒、古兒詞、唱本兒、杌欏兒、茶几兒、炕琴兒、茶碟兒、蓋碗兒、熾爐兒、布碟兒、火碗兒、酒盅兒、蒼蠅刷兒、金剛鑽兒、味兒、班兒、沉重兒、數兒、準兒、出息兒、耐心煩兒、手縫兒、台階兒、勁兒、單張兒、前兩篇兒、景致兒、笑話兒、小意思兒、草帽兒、成衣兒、衣兒、紀念兒、中路兒、地面兒、客座兒、樣數兒、浮面兒、滋味兒、段兒、銀滴珠兒、長方形兒、漢仗兒、大褂兒、活路兒、氣頭兒、窮樣兒、涼風兒、門礮兒、雀鳥兒、翎毛兒、翅膀兒、瓦塊兒、面龐兒、臉兒、笑臉兒、家常兒、包兒、小官兒、人群兒、影兒、暗記兒、半截兒、夥伴兒、舉動兒、嘴唇邊兒、鬼臉兒、閑話兒、人影兒、小買賣兒、小富貴兒、花兒、小人兒科、土物兒、模樣兒、那家兒、一家兒、口話兒、紙戴兒、老爺兒（太陽）などがある。

②身分：媳婦兒、哥兒倆、買主兒、老頭兒、本主兒、置主兒、棄主兒、借主兒、地主兒、原告兒、被告兒、薦主兒、姪女兒、姪兒、小姪兒、頭目人兒、哥兒倆、娘兒們、頭兒、存主兒、強盜頭兒、小女孩兒、女孩兒、童兒などがある。

太田氏（1958：90）が「現代北京語でも、どちらかといえ《兒》は小さなもの（あるいは愛すべきもの）をあらわし、（後略）」と指摘する。金氏教科書にはこのような名詞の「アル化」語の用例が極めて多く見られる。例えば：店兒、座兒、臉兒、花兒、魚兒、白兔兒、綠葉兒、女孩兒、瓜子兒などがある。また、身分を表す「アル化」語については、上述した詞根“主”を用いたものが多く見られる他に、“頭兒、女孩兒、娘兒們、本主兒”など北京語に属するものもある⁵⁶。

③方位詞・場所：地方兒、門口兒、跟前兒、胡同兒、東邊兒、西邊兒、南邊兒、外面兒、櫃面兒、水坑子邊兒、竹杆巷兒、珠寶巷兒、旁邊兒、北邊兒、地兒、賬房兒、村莊兒、前邊兒、隔壁兒、街面兒、四至兒、燈市口兒、遠處兒、下場門兒、店兒、莊兒、半道兒、酒舖兒、後門兒、東頭兒、傍邊兒、前面兒、村兒、岔道口兒、山頂兒、要路口兒、下房兒、對過兒、當中間兒、河沿兒、街儘溜兒、擺渡口兒、岸邊兒、上面兒、對面兒などがある

方位詞は上述した同じ詞根を用いる「アル化」語を多く用いる他に、“燈市口兒、竹杆巷兒、珠寶巷兒”などの固有地名の用例が見られる。

④日時：今兒、今兒個、昨兒、昨兒個、明兒個、明兒、前兒個、前兒、大前兒個、後兒、後半天兒、後兒、早晚兒、五下兒鐘、三下兒多鐘、兩下兒鐘、四下兒來鐘、三下兒鐘、時候兒、多半天兒、早半天兒。

表 2-4. 金氏教科書における一部の日付表現の種類と使用頻度

～日		～天		～兒		～兒個	
大前日	0	大前天	0	大前兒	0	大前兒個	2

⁵⁶ “頭兒、女孩兒、娘兒們、本主兒”は北京語諸辞典に収録されている語彙である。

前日	2	前天	5	前兒	1	前兒個	11
昨日	2	昨天	67	昨兒	36	昨兒個	50
今日	6	今天	21	今兒	60	今兒個	65
後日	0	後天	4	後兒	2	後兒個	0
合計	10	合計	97	合計	99	合計	128

日付表現については、計 21 個ある。“前日”“昨日”“今日”が文語で、金氏教科書には 10 例だけ用いられた。“～天”、“～兒”、“～兒個”の出現頻度はほぼ同じで、“～兒個”だけが若干多いため、金氏教科書においての日付表現は「アル化」語に統一されていないことが分かる。これは発話者、場面などの要因で使用差異が生じるからだと考えられる。例えば清代の外交往来公牘を改編した上に北京語に訳した著作《支那交際往来公牘—北京語直譯附》に用いられた日付表現は全て“～天”で、“～兒”、“～兒個”の使用例が見当たらない。

時刻表現については、上に羅列した“五下兒鐘”、“三下兒多鐘”、“兩下兒鐘”、“四下兒來鐘”などの他に、“點鐘”が 10 例、“多鐘”が 4 例用いられた。使用差異の原因は日付表現と同様だと考えられる。

(2) 動詞

歩行兒、有空兒、放出兒、歇一歇兒、坐一坐兒、候一候兒、等一等兒、打鳴兒、一竅兒不通、復原兒、歇歇兒、會齊兒、說話兒、納悶兒、努嘴兒、打牙涮嘴兒、該班兒、下班兒、上班兒、叫大小起兒、聽信兒、家做兒、尋宿兒、唱咄兒、出花兒、站人兒、帶理不理兒、大卸八塊兒、空手兒、取笑兒、復元兒、拐彎兒、頑兒、玩兒、落脚兒、解解悶兒、住房兒、解悶兒、拉手兒、躡等兒、眨眼兒、打戰兒、打盹兒、擺手兒、拱手兒、行兇兒、逛青兒、起名兒、拍手兒、還價兒、打價兒、看熱鬧兒、跑堂兒などがある。

動詞の「アル化」語について、単音節動詞がアル化される例は“頑兒、玩兒”2種類だけで、二音節の動詞のアル化の多くは“拉手兒、出花兒、打盹兒、起名兒”などの動詞目的語構造“VO+兒”の用例である。また、動詞の重ね型の後ろ側の動詞がアル化されたのも見られるが、“VV+兒”の種類は“解解悶兒、歇歇兒”の2種類、他の全ては“V—V+兒”の型になる。

(3) 数量詞

四塊兒、兩樣兒、三樣兒、一溜兒、一家兒、一聲兒、兩股兒、一分兒、一段兒、一所兒、一撥兒、一頭兒、三下兒、些兒、一半兒、多一半兒などがある。

数量詞については、“兒”を取り除き、使用することは可能で、現代北京語にも存在する。

(4) 副詞

一點兒、就手兒、細細兒、慢慢兒、好好兒、輕輕兒、差一點兒、儘量兒、當面兒、賤賤兒、趁早兒、天天兒、年年兒、慚慚兒、早早兒、快快兒、並排兒、偏偏兒、遠遠兒、準準兒、常常兒、時不常兒、一氣兒、悄不聲兒、空手兒、嚴嚴兒、打頭兒、起頭兒などがある。

副詞の「アル化」語について、“早早兒、快快兒、賤賤兒、常常兒、偷偷兒”などの重

ね型のタイプの副詞の用例が数多く見られる。そして、後に“的”を伴う場合も非常に多い。もう一つのタイプは“因为双音副词的后一个词根经常‘儿’化，使得具有这些词根的副词也儿化”⁵⁷という「アル化」語である。例えば“當面兒、悄不聲兒、空手兒、一連串兒、一氣兒”などの用例が見られる。

(5) 形容詞

小點兒、大宗兒、打糙兒、好兒、雜樣兒、不遠兒、一樣兒、一個樣兒、一般兒、整宗兒、差不多兒、現成兒、爽爽快快兒、聰聰明明兒がある。

(6) 疑問詞

甚麼樣兒、多兒錢、怎麼樣兒、幾樣兒がある。

金氏教科書においては、疑問詞の「アル化」語が4つと最も少なく、形容詞は疑問詞の次に少なく、12個であった。

(7) 代詞

那兒、這兒、這邊兒、那邊兒、這一邊兒、那一邊兒、這樣兒、那樣兒、這麼樣兒、這一步兒、這面兒、這撥兒、這一半兒、那一半兒、那一樣兒、這宗樣兒、這撥、那莊兒、這宗晚、兒那點兒、這點兒、這麼點兒などがある。

表 2-5. 金氏教科書における一部代詞の種類と使用頻度一覧表

項目	数量
這兒/那兒 ⁵⁸	234/127
那裏(裡)/這裏(裡)	0/0
這邊兒/那邊兒	13/40
這邊/那邊	0/2
這樣兒/那樣兒	38/20
這樣/那樣	7/3
這麼樣兒 ⁵⁹	8
這麼樣	1
甚麼樣兒	2
甚麼樣	0

「ここ」、「そこ、あそこ」、「どこ」について、金氏教科書は全て“這兒”“那兒”を用い、“這裏(裡)”“那裏(裡)”の使用例が見当たらないため、場所を表す代詞は全てアル化されたことがわかる。

2.2.3 歴史語彙

言葉と文化の関連性について、蒋绍愚《汉语历史词汇学概要》(2015)では以下のよう述べている。

⁵⁷ 杨杏红《日本明治时期北京官话课本中的儿话词》2013、43頁。

⁵⁸ “哪兒”の意味を含む。

⁵⁹ “這麼樣兒”は全て動詞或いは名詞の前に置き、「このように/このような」という意味を表す。同じ使い方では“這麼樣”の用例が1例のみ。

语言和文化有很密切的关系。一方面，语言反映文化，一方面文化影响语言。（中略）在语言系统的语音、语法、词汇几个方面，词汇和文化的关系最密切（2015：423-425）。

即ち、文化と最も関連性が強いのは語彙である。

金氏教科書に記述された清末期の北京語では北京語の言語実態研究に豊富な情報を提供しただけでなく、清末当時の北京の独特な文化風俗も詳しく描写した。本節は金氏教科書に用いられた歴史語彙を抽出し、これらの歴史語彙に反映された清末北京の社会、風習、文化などを探究する。

2.2.3.1 清代典制用語

金氏教科書は外交交渉の会話が多くあり、清代の典制用語を大量に使用している。本節は《清代典章制度辞典》（2011）を参照した上、金氏教科書に用いられている清代典制用語を 381 個抽出し、以下の 15 類に分ける。

(1) 官制：丁憂、參奏、保舉、欽差、捐納、俸滿、京察、捐項；

(2) 官職名：翰詹、閣學、巡撫、局差、北洋大臣、參贊、欽差、南洋大臣、知縣、大人、領事官、縣太爺、問官、特派委員、遊歷官、蒙古王公年班、督糧道、駐藏幫辦大臣、總理鐵路大臣、總署、聽差、府尹、知州、營官、全權大臣、三品銜候補知府、御史、王爺大人、兼尹、通判、道府、候補同知、郎中、庶常、庶吉士、試差、直隸省長、監政、兵部侍郎、通商大臣、海關道、督糧道、監法道、茶馬道、兵備道、巡道、奉官、大帥、汎官、縣官、武官、參將、管學大臣、總教習、侍郎、候選巡檢、候選縣丞、外任官、江蘇候補道、知府、員外幫印、侍衛、廕生、襲世爵、副都統、候補知州、洋差、科道、工部筆政、封疆、少卿、京秩、臬司、專閩大員、擎車都尉、司官、漕運總督、督撫、中州、軍機章京領班、軍機大臣、尚書、外任知府、總理衙門王大臣、屬員、掌印、司道、佐雜、司事、雜職、章京、四五品京堂、綠營的副將、鑾儀衛、營官、參遊、都司、守備、文官、武職、督撫司道、州縣佐雜、京官外官、大吏、內閣、京卿翰詹科道、世襲、世職、司員、漢司員、滿司員、捐官、員外郎、學政、門上、簽押、辦差、班次、禁子、巡檢、官醫、捕廳、汎官、把總、縣丞、典史、師爺、宰相、京兆府尹、畿尉、主簿、跟役、長史、太守、節使、牢頭、監察御史、中書門下平章事、大臣、中貴、侍臣、內監、中貴大人、大學士、工部侍郎、錦衣衛、廕生、宣大總督、總督、中軍官、蔚州衛、解官、巡按御史、管獄官、獄官、司獄、解差、兵科給事中、通政司參議、吏部尚書、制台、巡按、直隸總督、會辦、幫辦、督辦、缺分；

(3) 機構：工部局總辦、招商局、製造局、北京同文館、國子監、宗人府、六部、戶部、刑部、吏部、工部、兵部、軍機處、內務府、外館、上海製造局、巡檢衙門、官書局、海關道、糧台、都察院、總督衙門、釐捐局、昭信局、兵備道衙門、欽天監、太醫院、理藩院、會辦、選司、釐局、翰林院、蠶桑局、刑名錢穀、京倉、南漕、漕糧、祿米倉、釐卡；

- (4) 封号：士大夫、王貝勒、貝子、世爵、五等爵、公侯伯子男、四等世職、輕車都尉、騎都尉、世爵世職、四等爵、侯爵、恩騎尉、雲騎尉、承恩公、衍聖公、延恩侯、郡主、郡王；
- (5) 政制：開印、保甲；
- (6) 地名：蘇州府、順天府、奉天、奉天省、湖北黃州府、東三府、登州府、萊州府、青州府、保定府、松江府、永平府、太原府、西安府、上海縣、上海道、福建延建邵道、山西朔平府、湖州府、宣化府、昌平州、開封府、保安州、紹興府、濟寧府、直隸省；
- (7) 吏役：馬快、書差、書辦、書吏、地保、仵作、科房、衙役、小牢子、差役、獄卒；
- (8) 呼称：小京官、生員、年兄、年伯、撫台、足下、中堂、言官、官學生、京官、外官、相國、堂官、道台、藩司、狀元郎、治生、宗室公、老父臺、奴才、縉紳、旗人、帝裔；
- (9) 文書：甘結、上諭、奏摺、略節兒、咨文、催呈、病呈、訴呈、同鄉京官印結、印結、聖旨、諭旨、諭帖、密稟帖、宮門抄、奏章、書啓、白簡、稟帖、保結；
- (10) 財政：養廉銀、俸米、俸祿、甲米、廉俸、春季俸、秋季俸、俸廉、俸銀、邊俸、半俸、恩俸、官俸、資俸、飯銀、錢糧、官項、餉銀、京餉、解餉、官吏債；
- (11) 賦役：丁漕、斗稅、蘆課、國課、抽釐、勇糧、釐金、部飯、稅課、地稅、正稅；
- (12) 金融通貨：滙票莊、票莊、滙項、串、紋銀、足色紋銀、松江銀子、元寶銀、元寶錠、洋錢、銀票、昭信股票；
- (13) 司法刑律：夾棍、打板子、班房；
- (14) 科舉試驗：會試、鄉試、科考、舉人、進士、殿試、會榜、登科、制藝、八股文章、考差、下科鼎甲、廩生、秀才、貢院、大魁天下；
- (15) その他：萬壽節、吏治、勝朝。

以上で、金氏教科書に数多く、かつ豊富な種類の清代典制用語が記録されていることがわかる。これらの用語は、現在では使われていないが、当時の清朝の政治体制の一端を垣間見ることができる。また、これらの用語を通して語彙は金氏が清国の政治に精通していたことが傍証される。

2.2.3.2 生活用語

罗常培の《语言与文化》（1989：88）は“一时代的客观社会生活，决定了那时代的语言内容；也可以说，语言的内容足以反映出某一时代社会生的各面影。社会的现象，由经济生活到全部社会意识，都沉淀在语言里面。”という。

清代典制用語の他、金氏教科書に大量な生活用語も記録されており、これらの生活用語を通して、清末の社会や庶民の生活などを窺うことができる。本節は金氏教科書に用いられている生活用語を158個抽出し、以下の6類にまとめる。

- (1) 交通機関：火輪船、火輪車、駝脚、騾脚、火船、廣船、糧船；
- (2) 職業：舌耕、牙行、脚行、小絡、馬賊、號商、鐵路工師、挑脚、商董人、洋商、商民、業戶、化學師、錢商、家丁、書生、會匪、教匪、佃戶、騾戶、駝戶、車夫、米商、長隨、底下人、猪客、買賣客、賣叫貨的、棉花客、打更的、趕脚、雁戶、報行市的、媒婆子、獵戶、長工、趕大車的、裱糊匠、油漆匠、莊客、親隨、樂妓、人牙子、牙婆子、响馬、船戶、童兒、訟師、賣線的、中人；
- (3) 物事：新聞紙、英國話、西洋菜、中西大飯館子、客座兒、官座兒、洋法、租界、新法、電報、話條子、印字機器、彙報、新聞紙館、洋報、京報、京報房、義學社學、洋書、洋鐵、哈喇大呢、洋藥、洋布、洋刀、西學、洋針、洋學、馬表、東洋油漆碎貨、殘洋布、洋標布、落棧、火船票、米票、鋪保；
- (4) 機構：新嘉坡華商會館、上海電報局、大直沽機器東局、上海製造局、辦館、養濟院；
- (5) 店舗：洋貨鋪、廣行、洋行、木廠子、寶局、烟（煙）館、銀號、烟土局子、綢緞（緞）鋪、首飾行、綢緞局子、洋貨局子、米碓房、猪店、烟錢鋪、洋貨行、茶棧、洋貨鋪、駝店、錢鋪、錢酒店、玻璃鋪、織布局子、湯鍋、煤鋪、餉餉鋪、蠟鋪、雜貨局子、發莊、發行、錢行、放帳局、賬局子、首飾樓、乾果子鋪、印局子、土局子、油坊、襪貨棧、紙鋪、紙棧、小飯鋪子、放賬局子、成衣鋪、燒鍋、信局子、冥衣鋪、顏料鋪；
- (6) 地名：牛莊口岸、西單牌樓、紫竹林租界、南洋通商口岸、北洋通商口岸、山西歸化城、安徽燕湖縣、太倉州、熱河平泉州、赤畧縣、紫竹林馬頭、汴梁京城、北番。

金氏教科書に記述された生活用語に関しては、“洋布、洋鐵、洋藥、西洋菜、洋針、洋法、洋報、洋貨局子、火輪船”など西洋から伝わった物事が多く、“洋貨鋪、廣行、洋行、新嘉坡華商會館、放賬局子、南洋通商口岸、北洋通商口岸”など商業貿易に関連する用語も豊富である。金氏教科書は主に当時最新な事物とビジネスに焦点を当てており、食事や娯楽など、他の生活面はあまり描かれていない。

2.2.3.3 軍事用語

金氏教科書において、軍事用語の収録は最も少なく、全部で27個である。

教場、亮子、馬歩隊、馬隊、營兵、新式後膛槍砲、交仗、虎威兵船、水師兵、洋槍、洋砲、練軍、護衛營、水師營、開花營、教軍廠、槍隊砲隊、克虜伯小砲、阿姆斯特朗小砲、大桿來福槍、新式後膛毛瑟槍、軍器、兵端、旗營、綠營、額設、火槍。

生活用語と同様に、金氏教科書に記録した軍事用語も“洋槍、洋砲、阿姆斯特朗小砲、大桿來福槍、新式後膛毛瑟槍、克虜伯小砲”など西洋から伝わった物事が記述されている。また、北洋艦隊に関わる用語“水師兵、水師營、虎威兵船”が見られる。

2.2.4 慣用語

卢小群（2017：574）は“土语是北京土话语汇的最大特点。（中略）在老北京土话中存在着大量生动活泼的词语，它们由老北京特有名词、隐语、俗语、四字格成语、谚语、歇后语、外来语等构成，创造了老北京人俗白浅显的口语。”と指摘している。卢小群が提示した隠語、俗語、四字成語、諺、洒落言葉、外来語などが金氏教科書にも記録されており、特に成語と諺が大量に存在している。本節は金氏教科書に用いられた成語及び諺を抽出し、製表する。これは金氏教科書に使用された語彙を全面的に考察する一環として不可欠の作業である。

2.2.4.1 成語

成語は漢民族の独特な表現体系である。あるものに対し、それに関連する故事や伝典などに由来する成語、特に四字成語を用いた場合、文字数に比べて情報量が多く、表現の幅を広げることができる。

本節では、郑薇莉・周谦《中华成语大词典》（2016）をはじめ、5冊の成語辞典を利用し、金氏教科書で用いた成語を抽出し、諸辞典に収録された四字成語を434個、四字成語以外の成語を38個、合わせて成語を472個検出した。紙幅の関係上、例文を省略して、検出した成語を音順で表2-6.に列挙する。

金氏教科書における成語の考察に利用した成語辞典は以下の5冊になる。

- ① 陈壁耀主编 《新编成语大辞典》（2009）
- ② 郑薇莉、周谦主编 《中华成语大词典》（第2版）（2016）
- ③ 商务印书馆辞书研究中心编 《新华成语词典》（第2版）（2015）
- ④ 宋永培、端木黎明主编 《汉语成语词典》（第7版）（2017）
- ⑤ 《成语大辞典》编委会编 《成语大辞典》（最新修订版 单色本）（2020）

表2-6. 成語辞典に収録されている成語（ピンイン順）⁶⁰

音順	成語
A	安富尊榮、愛民如子、安分守己、安居樂業、閻無天日、愛財如命。
B	不求甚解、不腆之儀、拜相封侯、不足掛齒、病魔纏身、不堪言狀、不即不離、不義之財、報仇雪恨、不祥之事、不計其數、不義之財、不可開交、拔刀相助、不三不四、捕風捉影、不計其數、必爭之地、不毛之地、班門弄斧、避重就輕、杯水車薪、閉口無言、撥雲見天、不成敬意、病急亂投醫、不可同日而語、病來如山倒病去如抽絲、不到黃河不死心、不入虎穴焉得虎子。
C	察言觀色、稱孤道寡、粗茶淡飯、寸步難行、朝野側目、寸步不離、垂頭喪氣、綽綽有餘、層見疊出、晨昏定省、從長計議、愁眉不展、柴米

⁶⁰ 個々字の書き方が異なる場合、括弧内に示す。

	夫妻、差之毫釐謬之千里。
D	大節凜然、獨當一面、大展經綸、大驚小怪、打抱不平、東逃西竄、大庭廣眾、丟三落四、大卸八塊、大富大貴、顛沛流離、大行打市、大模大樣、道聽途說、點頭之交、滴水成冰、跌腳捶胸（捶胸跺腳）、當務之急、多嘴多舌、大難不死必有厚福（大難不死必有后福）。
E	恩將仇報、二虎相爭（斗）必有一傷。
F	福薄災生、負屈含冤、非同小可、粉身碎骨、飛簷走壁、翻來覆去、父慈子孝、夫唱婦隨、浮生若夢、風雨無阻、富而好禮、凡事豫則立、放下屠刀立地成佛。
G	功成身退、國計民生、高下其手、寡不敵眾、骨軟筋酥、沽名釣譽、孤苦零丁、詭計多端、官官相護、供認不諱、功名富貴、改過自新、高姓大名、光陰似箭、各有所長、各有所短、固不待言、瓜田不納履、李下不整冠、割雞焉用牛刀、狗嘴吐不出象牙來、狗不嫌家貧、隔行不隔理、恭敬不如從命、敢怒而不敢言、工欲善其事必先利其器。
H	恨相見晚、何足掛齒、後會有期、胡作非為、悔過自新、花枝招展、和顏悅色、禍從天降、狐朋狗友、毫不相干、轟々烈々、侯門似海、虎視眈眈、鶴立雞羣、虎口餘生、汗牛充棟、合浦珠還、貨賣識家、含含糊糊、橫躺豎臥、橫打鼻樑兒、貨真價實、虎父無犬子、狐羣狗黨、河東獅吼、鶴知半夜、畫虎不成反類犬矣（畫虎不成反類犬）、畫虎畫皮難畫骨。
J	建功立業、金榜題名、九死一生、吉人天相、金石良言、盡善盡美、嫉賢妒能、盡心竭力、金玉良言、降尊臨卑、濟困扶危、舉止大方、金碧輝煌、居心叵測、家敗人亡、家常便（粗）飯、絕處逢生、借花獻佛、雞犬不寧、井底之蛙、鏡花水月、家徒四壁、盡情盡理、酒足飯飽、驚濤駭浪、九霄雲外、金枝玉葉、見義勇為、進退兩難、進退兩難、借題發揮、精衛填海、街談巷議、家貧如洗、酒肉朋友、酒囊飯袋、經天緯地、濟世安民、鞠躬盡瘁死而後已、救人一命勝造七級浮屠。
K	口齒伶俐、哭哭啼啼（哭々啼々）、寬洪大量、口碑載道、開源節流、口說無憑、口是心非、枯魚之肆。
L	濫竽充數、來歷不明、狼心狗肺、來路不明、魯衛之政、絡繹不絕、勞民傷財、狼狽為奸、理屈詞窮、兩世為人、亂亂闐闐、攬權納賄、狼子野心、狼多肉少、老弱殘兵、流芳千古、立賢無方、籬牢犬不入、路遙知馬力日久見人心、癩蛤蟆想吃天鵝肉。
M	漠不關心、賣官鬻爵、名聞天下、眉清目秀、眉開眼笑、明媒正娶、名利兼收、木雕泥塑、末路窮途、美酒佳肴、貓鼠同眠、門當戶對、米珠薪桂、默默無聞、忙忙叨叨、名垂竹帛。
N	弄璋之喜、男女老幼、男大當婚、女大當嫁、輦轂之下。
P	攀轅臥轍、迫不及待、平白無故、平安無事、蓬頭垢面、品學兼優、牝雞司晨、飄洋過海、剖腹臧珠、披頭散髮。
Q	權宜之計、起死回生、奇珍異寶、七嘴八舌、遣兵調將、求神問卜、起死回生、七擗八湊、輕舉妄動、窮家富路、親上作（做）親、欺人之談、權衡重輕（权衡轻重）、清清白白、犬牙相錯、千辛萬苦、勸善懲惡、切切實實、清官難斷家務事、千里送鷲毛。
R	日坐愁城、燃眉之急、人之常情、人云亦云、燃眉之急、人急計生、人困馬乏、如狼似虎、任性妄為、人才輩出、日增月盛、人多嘴雜、耳軟心活、入土為安、肉山酒海、入木三分、人不知鬼不覺。
S	適逢其會、手足情深、隨聲附和、隨遇而安、尸位素餐、束手待斃、身臨其境、束手無策、身家性命、視財如命、隨聲附和、是非顛倒、三教九流、素不相識、歃血為盟、死心塌地、市井無賴、四海為家、殺氣騰騰、善罷甘休、死於非命、世態炎涼、死去活來、手忙腳亂、傷天害

	理、損人利己、始末根由、數一數二、水落石出、山珍海味、勢成騎虎、水性楊花、水長船高、雖死猶生、生不如死、死而後已、水火無情、室如懸磬、食古不化、雙喜臨門、生生世世、書香門第、書香人家、世代書香、是是非非、士農工商、四通八達、順者為孝、損下益上、鼠竊狗偷、樹大招風、死生有命、隨珠彈雀、損己利人、生死不明、食毛踐土、食不充飢、首善之區、生於憂患死於安樂、上樑不正下樑歪、瘦死駱駝比馬大、死馬當活馬治（醫）、三天打魚兩天晒網、樹倒猢猻散、水能載舟亦能覆舟（水可載舟亦可覆舟）、師傅領進門修行在各（個）人。
T	徒勞往返、天作之合、徒勞無益、徒負虛名、同惡相濟、天從人願、天理昭彰、天理不容、圖財害命、天長日久、天下太平、天打雷劈、同舟共濟、兔死狐悲、聽其自然、貪生怕死。
W	無足輕重、無稽之談、無計可施、亡羊補牢、忘恩負義、威風凜凜、文武全才、萬無一失、萬里迢迢、為非做歹、妄自尊大、畏首畏尾、無濟於事、無賴之徒、五穀豐登、五方雜處、無所不為、無中生有、剝肉補瘡、完璧歸趙、無可奈何、無能之輩、無惡不做（作）、聞所未聞、烏合之衆、物傷其類、望山跑死馬。
X	學富五車、虛張聲勢、謝天謝地、先見之明、虛張聲勢、梟首示衆、心忙意亂、信以為真、心投意合、血氣之勇、血口噴人、細水常流、先見之明、心虛胆怯、心癢難撓、小康之家、心病難醫、先下手的為強、星星之火可以燎原。
Y	言簡意賅、陽奉陰違、飲食起居、庸庸碌碌、怨聲載道、有求必應、一勇之夫、一勞永逸、於心何忍、一臂之力、一五一十、咬牙切齒、義氣相投、于心何忍、以絕後患、遠害全身、一面之詞、一口同音、咬牙切齒、異路功名、以身試法、一望無際、一德一心、一馬平川、牙白口清、一德一心、言無二價、魚目混珠、玉石俱焚、溢美之詞（辭）、貽笑千古、一不做二不休、烟花柳巷、一年到頭、養生之道、愚公移山、搖頭晃腦、眼饞肚飽、一轟而散。
Z	子虛烏有、忠心耿耿、左右為難、自鳴得意、走漏風聲、足智多謀、自作自受、在天之靈、植黨營私、指桑說槐、知情不舉、作福作威、瞻前顧後、衆擎易舉、自食其力、嘴大舌長、嘴聒心苦、嘴尖舌快、忠君愛國、在官言官、整舊如新、照貓畫虎、掌上明珠、智勇兼備、執鞭隨鐙、忠臣義士、張口結舌、仗義疏財、重於泰山、智珠在握、只可意會不能言傳、知人知面不知心、擇其善者而從之。

2.2.4.2 諺

諺は古くから言い慣らわされ、日常生活の真理をうがった簡潔な表現である。主として庶民生活の体験的な知恵から生み出されたものが多いが、古典に含まれた格言や故事などから出て、いつのまにか民間に流布したものも含まれている。諺は成語に似ているが、口語的で理解しやすく、一般的に完全な意味を表し、ほとんどの場合、1つか2つの短い文章の形で表現される。

金氏教科書において、成語の他、諺も数多く収録されている。本節は5冊の諺語大辞典を利用し、抽出する。

金氏教科書における諺の考察に利用した辞典は以下の5冊になる。

- ① 张鲁原 2011《中华古谚语大辞典》
- ② 温端政主编 2011《中国谚语大辞典》（辞海版）
- ③ 温端政主编 2011《中国俗语大辞典》（新一版）
- ④ 翟建波 2013《中国古代小说俗语大辞典》
- ⑤ 温端政主编 2015《俗语大辞典》

表 2-7. 諸辞典に収録されている諺（ピンイン順）

音順	諺
A	挨着大樹有柴燒。
B	閉門家裏坐，禍從天上來；不見可欲，使心不亂；寶劍贈與烈士；冰凍三尺不是一日之寒；不到一處，一處迷；不到黃河不死心；百聞不如一見；百善孝為先；不必文章高天下，只要文章中試官；不怕官只怕管；不怕仇扳就怕仇官；兵可百年不用，不可一日不備；敗將休言當年勇；敗軍之將不談兵；飽漢子不知餓漢子飢；白馬紅纓彩色新不是親者也是親；拔了蒿子顯出狼；別指着一棵樹吊死人；不受苦中苦難為人上人；不見可欲，使心不亂；不打不成相與；白刀子進去紅刀子出來。
C	吃遍了天下鹽好，走遍了天下錢好；滄海變桑田；長江後浪催前浪，一番新人換舊人；扯着耳朵顫顫動；腸子癢癢撓不得；粗胳膊拗不過大腿去；臣不彰君非子不談父過；菜裏虫菜裏死；廚中有剩飯，路上有飢人；茶來張手，飯來張口；吃着碗裏的看着鍋裏的；吃飯穿衣看家當兒；吃飯要飽，做活要了；出肚兒的牛不怕虎，長出犄角倒怕狼；豺狼當道安問狐狸；船多不礙港車多不礙路；船家不打過河錢；船倒江心補漏遲；吃水別忘淘井的；出外一里不入家裏；常將有日思無日，莫到無時想有時；草裡說話路上有人聽。
D	道路不平旁人鏟；打牙往肚子嚙；打人一拳防人一脚；打人別打臉罵人別揭短；弟兄彼此如火；打虎還是親兄弟，上陣還是父子兵；大履千間夜眠七尺；得了屋子就想炕；淡葷強如素；打得驢子馬也驚；多病方知健是仙；大夫治得了病，治不了命。
F	逢山開路，遇水疊橋；腹中有劍笑裡藏刀；糞草堆出靈芝；父母之命媒妁之言；傳真方賣假藥；富而好禮，窮而守分；犯病的不吃，犯法的不作；豐年玉荒年穀。
G	各掃門前雪休管他人瓦上霜；官情如紙薄；過了這個村兒沒有這個店兒；過耳之言不可聽；胳膊折了往袖裏掖；官大有險樹大招風；公門之中好修行；官憑印信科憑文約；狗咬破的人敬富的；孤木不成林；官滿如花謝。
H	黃泉路上無老少；橫打鼻樑兒不含糊；火燎眉毛顧眼前；好的（兒）不用多，一個頂十個；火到豬頭爛錢到公事辦；換官不換吏；會買不如會賣的；虎老雄心災年邁力剛強；鶴知半夜雞知將旦；好樹結好菓子；活有生日死有忌日；好死不如賴活着；火烈民畏水懦民玩；火大無濕柴；好漢子不怕出身低；橫針不知豎線。
J	井裡打水往河裡倒；井水不犯河水；君行制臣行義；將在外君命有所不受；君命召不俟駕而行；君臣無仇父子無獄；君憂臣勞君辱臣死；君死社稷大夫死封疆；君命在身不能及私；君不仁則臣去，父不慈子奔他鄉；酒肉朋友柴米夫妻；家貧出孝子，國亂顯忠臣；家有賢妻，男兒不做橫事；君子相交淡淡如水，小人相交蜜裡調油；腳底下沒鞋窮半截；賤年餓不死手藝人；見神說神見鬼說鬼；酒不醉人人自醉；飢一頓飽一頓，吃一頓挨一頓；酒要少喝事要多知；酒逢知己千盃少；飢則附人飽則颺去；家裏打車外頭合轍；家無隔宿之糧；君子身窮志不窮；久病牀前無孝子；君子居易以俟命；既醉以酒既飽以德；盡信書則又不如無

	書；盡其人力，聽其天命。
K	靠河的吃水，靠山的燒柴；口是風筆是踪。
L	雷聲大雨點小；良言一句三冬暖，惡語傷人六月寒；留得青山在依舊有柴燒；老父奔忙無孝子；良馬比君子；狼行千里吃肉狗行千里吃屎；驢唇不對馬嘴；駱駝鞍子象的牙一生就得骨頭長就得肉；老鴿落在豬身上了一竟瞧見人家黑了沒瞧見自己黑；良禽擇木而棲，大丈夫擇主而事；落花流水兩無情；樂得河水不洗船。
M	買賣好做，夥計難搭；明修棧道暗渡陳倉；沒有過不去的河；面合心不和；門內有君子門外君子至；沒有不透風的籬笆；滿朝朱紫貴盡事讀書人；買起不買落；買賣爭毫厘；買賣不成仁義在；麥收三月雨；沒吃過豬肉還沒瞧見過豬跑麼；馬倒鞍子轉災禍一齊來；蔴楷棍兒打狼一兩頭兒害怕；貓兒哭耗子假慈悲；民離水火不能生；沒有賠麵錢的廚子；沒有金剛鑽兒不敢攪磁器傢伙。
N	寧走十步遠，不走一步險；惱在心裏，笑在面上；寧叫父母缺兒女，不叫兒女缺父母；內無糧餉外無救兵；能吃開眉粥不吃愁眉飯；牛不喝水強按頭；寧作太平不作離亂民；寧在花下死，作鬼也風流；南人操舟北人乘馬；寧在世界挨不在土裏埋。
P	僻鄉出好酒；貧賤之交不可忘，糟糠之妻不下堂；貧乃士之常；跑得了僧跑不了寺；貧而無怨難，富而無驕易。
Q	前不巴村兒後不巴店；前人開路後人行；前人洒土迷後人眼；顴骨高殺夫不用刀；親戚遠來香，街坊高打墻；妻賢父禍少，子孝父心寬；求忠臣必於孝子之門；千里搭棚，沒有不散的筵席；清官難脫猾吏手；清官不愛財；巧媳婦兒做不出沒米的粥來；騎上老虎下不來；千里馬還得千里人兒；騎馬找馬，騎着驢找驢；前門進虎後門進狼；千里送鷲毛，禮輕人義重；千朵桃花一樹生；前頭有車後頭有轍；娶妻要不如我家，嫁女要勝似我家；求生不得生求死不得死；七十三八十四閻王不叫自己去；屈死不告狀餓死不作賊；窮不離卦攤兒，富不離藥舖；窮居鬧市無人問，富在深山有遠親；錢是英雄膽；錢壓奴婢藝壓當行；錢出急家門；秋水共長天一色；蚰蚰兒不吃螞蚱肉。
R	人能興地，地能興人；人是地理仙，十天不見走一千；若知山前路須問過來人；人不辭路虎不辭山；肉賤鼻子聞；人樂有賢父兒；讓行不讓力；人是衣裳馬是鞍；人是舊的好衣服新的好；人受一口氣佛受一股香；肉肥湯也肥；人貧志短馬瘦毛長；人走時運馬走臄；人不辭路虎不辭山；人無害虎心，虎有傷人意；人死如虎虎死如羊；人活一世留名，雁過留聲；人死留名，虎死留皮；人見利而不見害，魚見食而不見鈎；人無千日好，花無百日紅；人不知死車不知翻；人生一世草活一秋；人生七十古來稀；人有生死物有損壞；人敬富的狗咬破的；人有臉樹有皮。
S	勢敗奴欺主，時衰鬼弄人；死店活人開；生行莫入，熟行莫出；是非只為多開口，煩惱皆因強出頭；三年出一個狀元，十年歷練不出一個買賣人來；隨年穿衣，隨年吃飯；三山六水一分田；山高遮不住太陽，大水漫不過橋去；山河容易改，秉性最難移；三年河東三年河西；生有處，死有地；舌頭底下壓死人；十胖九富，就怕胖子沒屁股；說書的嘴唱戲的腿；死腸子好離活腸子難離；十個指頭不能一般兒長；食指日繁度日艱難；手大遮不過天去；三拳難敵四手；食君祿報君恩；順者為孝；紗帽底下無窮漢；勝要相讓敗要相救；聖人門前賣對子；善者升天惡者墜地；僧不言姓道不言壽；生米做成熟飯；獅子搖頭百獸驚；上山擒虎易，開口告人難；三虎出一豹，九狗出一獒；水清無大魚；蛇鑽的窟窿蛇知道；歲寒知松柏之後彫也；樹大陰涼兒大；生死自有定數；生死皆有命定；生有處死有地；三分氣在千般用；生死不明存亡不保；水過地

	皮濕；受人點水之恩當以湧泉之報；生意人不過生意口；食不充飢衣不遮寒；守不得窮耐不得富；三分治病七分養濟；捨命不捨財；十年讀書十年養氣；書有未曾經我讀；書到用時方恨少；守多大碗吃多大飯；生為忠臣死為神明；山高月小水落石出；所得者少，所失者多；三人同行必有我師。
T	天有晝夜陰晴，人有旦夕禍福；天下人交天下友；跳到黃河洗不清；聽景不如見景；桃李盡在公門；堂前生瑞草好事不如無；天不生無祿之人，地不長無根之草；藤蘿繞樹生樹倒藤蘿死。
W	我將此心托明月，誰知明月照溝渠；吳牛喘月蜀犬吠；為君難為臣不易；未見其人先觀其友；文官動動筆，武官跑折腿；萬般皆下品，惟有讀書高；未入三尺土雖保百年身，自入三尺土難保百年墳；未曾造生先造死；無病休嫌瘦身安莫怨貧；無針不引換；無面目見江東父老；無風樹不動。
X	心比天還高，命比紙還薄；心有力養千口，肩有力養一口；伸手是禍，蹠手是一福；餉不虛糜兵歸實用；笑破不笑補；心到神知，上供人吃；閒時不燒香忙時抱佛腳；現念佛現燒香；行次兒不怕賤就怕沒本事；小富由勤，大富由天；喜聚不喜散。
Y	運氣低，上廣西；一塊石頭往平處端；一片嘴，兩片舌；搖頭不算點頭算，坐在人間只點頭；眼是別珠寶，嘴是試金石；眼斜心不正，鼻歪意不端；眼觀六路耳聽八方；眼不見嘴不纔，耳不聽心不煩；眼見是真耳聞是虛；眼是心中苗；有是君有是臣，有是父有是子；有功歸君有過歸臣；養兒防備老；一世為官七世打甄；一落孫山之外文章處處可譬；一輩為官十輩插磚；一字入公門，九牛拽不出；養兵千日，用在一時；一路貨警一路主道；要飽還是家常飯，要煖還是粗布衣；運旺人欺鬼，時衰鬼弄人；一人成佛九祖升天；一個人兒吃飽了一家子不餓；一飲一啄莫非前定；養貓所以捕鼠，畜犬所以吠盜；一馬不備雙鞍子，忠臣不事二主；羊毛出在羊身上；一個槽上拴不下倆叫驢；與虎同行焉有善獸；夜貓子不能生鳳凰；羊羔肉雖美眾口難調；鷹嘴鴨爪會吃不會拿了；鷓蚌相持漁人得利；一遭經蛇咬三年怕井繩；一根繩兒拴倆螞蚱一飛不了你進不了我；一枝不動百枝不搖；有錢難買靈前弔；有生就有死；有今兒個沒明兒個；一旦無常萬事休；閻王造定三更死誰能留到五更天；一人不當二役，一卦不問二事；養病如養虎；有錢使得鬼推磨；銀錢如糞土，臉面值千金；一文錢慳倒英雄漢；一竅通百竅通；一箭射雙鷗。
Z	這山望那山高；築室道謀，三年不成；早歇頂早歇心；睜一隻眼閉一隻眼；嘴強身子弱；嘴裏說好話，腳底下使絆子；嘴上無毛說話不牢；子孝父心寬；忠臣不事二王，烈女不嫁二夫郎；在家敬父母，何必遠燒香；忠臣不怕死，怕死非忠臣；作一日官辦一日事；宰相肚子撐得開船；在京的和尚出外的官；眾志成城寧死不退；種瓜得瓜種豆得豆；造弓的弓灣，造箭的箭直；煮熱了鴨子飛了；沾酒就醉離酒不行；芝蘭君子性，松柏古人心；紙裏包不住火；知者不為榮，不知者不為辱；斬草不除根，來春萌芽生；走了的魚兒是大的。

以上で、金氏教科書における諺を 381 個抽出した。金氏はより口語的で生き生きとした教科書を編纂するため、大量の諺を取り入れようと工夫していたことが見受けられる。これらの諺は高い口語性の特徴を持ち、当時清末期の北京庶民に広く浸透していたことが推測できる。

2.2.5 結論

本節では金氏教科書の全語彙を考察することによって、金氏教科書の北京官話教科書として特徴を明らかにすることができた。

(1) 金氏教科書の北京語語彙

金氏教科書に用いられた北京語語彙を徹底的に検討するため、9冊の北京語辞典と対照しながら、金氏教科書に用いられた北京語語彙の全調査を行った結果、北京語辞典で検索できた北京語語彙が585個である。金氏教科書を編纂する際に難しい語彙やあまり人に知られていない語彙の使用を控え、基礎的な北京語語彙を使うという編纂方針だと考えられる。

(2) 金氏教科書の「アル化」語

金氏教科書に用いられた「アル化」語は合計2808例、異なりで474種類がある。即ち、約100文字に1例の割合で出現し、大量の「アル化」語が使われていることから、金氏教科書は北京語教科書として会話性が強いと言える。また、金氏が教科書に用いた「アル化」語において個別の「アル化」語の用例数には偏りがある。例えば日付表現の“今兒個”、“今兒”、“昨兒個”、“大前兒個”の使用頻度はそれぞれ65例、60例、50例、2例である。これは金氏が教科書を編纂する際に、口語性の高い語彙を選ぶことを心がけているためと考えられる。

(3) 金氏教科書の歴史語彙

金氏教科書には大量の歴史語彙が記録されており、例えば“火輪船、洋貨局子、銀號、租界、舌耕、牙行、脚行、會試、鄉試、養廉銀、奉天省、兵備道、國子監、直隸總督、馬快、奏摺、京報房、信局子”などである。筆者が検出した金氏教科書に用いられた歴史語彙は全部で566個あり、これらの歴史語彙は当時北京の各階層の生活実態を再現し、清末の北京の経済状況、日常生活、社会風情なども如実に反映している。

(4) 金氏教科書の慣用語

成語、諺を含めて、金氏教科書に用いられた慣用語を精査し、慣用語を合計853個抽出した。慣用語は中国語の1つの特徴であり、それらのある程度を学習しなければ、日常コミュニケーションや文学作品を読む際に支障が出る恐れがある。金氏教科書は中級レベルの教科書であるため、金氏が執筆する際に、これらの一般的な慣用語を取り入れる必要があったと思われる。一方、これらの慣用語は中国語学習者に中国の習慣、文化、歴史、文学について、見識を深めてもらうためにも不可欠である。金氏が編纂した北京語教科書は「官話」だけではなく、慣用語も多い事実が明らかである。

上編結論

本編は金氏教科書について、その版本、内容構成、共編者から文法、語彙まで、多方面にわたる徹底的な考察を行った。整理分析を通しての、結論は以下の通りである。

(1)教科書の研究として、金氏により執筆・編纂された13冊の教科書の版本及びそこから派生した教科書の精査を行い、内容構成を整理し、各版本の相違を比較した。これらの作業によって、教科書内容の側面から金氏教科書は中級或いは中級以上レベルの上流階層の日本人中国語学習者に向け、会話を重視し、実用性が極めて高い北京語教科書であることを判明した。

(2)《支那交際往来公牘 北京語直譯附》は日露戦争を終えて、日本と清代の外交往来が増えてきた時期に生まれたもので、明治時代の中国語教科書の中で初めて公文を改編した著作である。《北京官話 今古奇観》は原作《今古奇観》から4つの物語を選択し、原作の白話文を北京官話の口語文に改編した著作である。両書の改編を中心に考察することで、両書における編纂目的と改編過程を解明した。

(3)アジア歴史資料センターの資料より、金氏による中国語教科書の共編者、平岩道知、鎌田弥助、瀬上恕治の三人の経歴を整理した。その上で、金氏との関わりが推測できた。平岩道知は明治1879年12月に文部省清国語官費生として清国へ留学に派遣され、北京公使館で金氏に中国語を教わった可能性があると考えられる。鎌田弥助は東京外国語学校別科清語科の学生であり、ちょうど金氏が高等商業学校附属東京外国語学校の清語講師として勤務した時期であることから、おそらく鎌田弥助は金氏の教え子であることが思われる。瀬上恕治は金氏と共に清語同学会で勤務し、さらに2冊の教科書の校閲を依頼したことから、金氏と良好な関係を築いていたと推察できる。

(4)金氏教科書の語彙に関する考察は、9冊の北京語辞典、《清代典章制度辞典》、5冊の成語辞典、5冊の諺語辞典を利用して行った。抽出した北京語語彙585個、歴史語彙が566個、慣用語が853個である。さらに北京語語彙の重要な一要素である「アル化」語を2808例抽出し、異なりで474種類があることを明らかにした。その上、使用頻度と使用割合を統計にかけ、詳細な分析を行った。これらの作業によって、語彙使用の側面から金氏教科書は当時清末北京官話教科書としての口語性、実用性、時代性を持つことが実証した。

(5)金氏教科書の文法に関しては、北京語文法研究の第一人者である太田辰夫(1950、1965、1969)の論説を基準とし、計53項目をめぐって、詳細に考察した。考察した結果、金氏教科書の文法表現は太田先生が提示した53項目の北京語特徴に殆ど当て嵌まることを明らかにした。金氏教科書は北京語の文法特徴が極めて強い教科書であることが実証できた。

下編 教科書の語学比較研究

第三章 品詞論：《兒女英雄傳》との比較

《兒女英雄傳》は中国清末期の文康が著した白話文武俠小説、全40回から構成される。馬從善の序によれば、作者の燕北間人こと文康は字を鉄仙といい、満洲八旗の鑲紅旗人の家に生まれだが、正確な生没年は未詳である。《兒女英雄傳》が成書されたのは作者文康の晩年の頃で、最初は写本として流通していたが、光緒4年(1878年)になって、北京聚珍堂から木活字本で出版された。《兒女英雄傳》の用語について、王静(2010:109)は“《红楼梦》面世一百年后, 满人文康以极纯熟地道的北京口语, 俚俗民谚写出了《儿女英雄传》, 这两部作品被誉为两部绝好的京语教科书。”と述べている。

現代北京語の成立の経緯を整理する一環として、共時的な視点からの《兒女英雄傳》との言語についての比較研究は、金氏教科書の言語性格文法特徴をより明確に見るのに不可欠な研究であるだけでなく、日中両国の学者から注目されてきた「北京語」の内部差異研究にも関連しており、清末北京語の実態の揭示及び「北京語」の内部差異問題の解明には学術的意義があると考えられる。

3.1 形容詞の比較研究

本節は金氏教科書を中心に、中で用いられた形容詞を取り上げ、先行研究を踏まえ使用状況と特徴を考察する。さらに、その用法と《兒女英雄傳》の形容詞を比較し、それぞれ使用上の差異を突き止めたいと考える。また、本節は北京語言大学中国語コーパス(BCC)を使用し、《兒女英雄傳》に関するデータを統計にかけ、例文を引用する。

中国語の形容詞は事物の属性を表し、事物の発話時点の具体的な状況を生き生きと描写する役割を果たしている。黄伯荣、廖序东(2017下冊:12)では形容詞を状態形容詞と性質形容詞を2類に分類し、それぞれを“性质形容词单纯表示性质。状态形容词所表示的性质有量的成分, 即表示程度加深, 有较浓的主观评价的意味, 是一种生动形式所体现的状态。”と定義している。

周一民(1998:105)では形容詞を状態形容詞、性質形容詞、区別形容詞の3類に分類している。そして区別形容詞について、“简称区别词, 又称非谓形容词。在北京口语里比较少, 几乎构不成一类, 但是随着口语中书面语成分的增多, 区别词也有逐渐增多的趋势。”と指摘している。

卢小群の《老北京土话语法研究》(2017)では朱德熙の《现代汉语形容词研究》(1956)に基づいて、形容詞を状態形容詞と性質形容詞の2類に分類している。

上述した形容詞分類に基づき、金氏教科書における形容詞の使用状況と合わせ、本節で考察する形容詞⁶¹を状態形容詞と性質形容詞の2類に分ける。

3.1.1 性質形容詞

卢小群(2017:269)は“性质形容词是表示人和事物的性质或形状的, 反映的是事物的基本属性。”と指摘している。金氏教科書は日常生活での交際場面を中心とする教科書

⁶¹ 本節で考察する形容詞の範囲は性質形容詞と状態形容詞のみで、区別詞、擬音語、成語は含めない。

であり、人または物事の性質が数多く記録されている。そのため、金氏教科書においては、性質形容詞が大量に存在する。

張斌の《現代漢語描寫語法》（2010：125-129）は性質形容詞の文法機能について、以下の5点にまとめた。

- ①能受“不”和“很”的修飾，後面不能帶賓語；②許多性質形容詞可以按一定的方式重疊；③性質形容詞可以修飾名詞；④一部分性質形容詞可以修飾動詞或動詞短語；⑤大多數性質形容詞可以做補語；⑥一部分性質形容詞可以充當主語和賓語。

本節では金氏教科書に用いられている性質形容詞を抽出し、音節別に表出する。そして各形容詞の後に用例を括弧内に示し、張氏の論述に基づいて、抽出した性質形容詞の文法機能を考察する。

3.1.1.1 単音節性質形容詞

金氏教科書において、用いられている単音節形容詞はすべて性質形容詞であり、計203個抽出した。音順別で以下にまとめ、各単音節性質形容詞の後に用例を括弧内に示す。

表 3-1. 金氏教科書に用いられている単音節性質形容詞とその用例（ピンイン順）

音順	単音節形容詞
A	暗（作為是 <u>暗</u> 記兒。）；矮（知縣抬頭一看是個 <u>矮</u> 身量。）。
B	白（就露出那塊 <u>白</u> 顏色來了）；博（江蘇省是地大物 <u>博</u> 。）；飽（僂們飯也吃 <u>飽</u> 了。）；背（房德是因為自己運氣 <u>背</u> 。）；薄（命比紙還 <u>薄</u> 。）；弊（兵丁的 <u>弊</u> 病有在營裏吃烟耍錢的。）；敝（ <u>敝</u> 處是直隸省。）；暴（走起來就如同粗風 <u>暴</u> 雨似的。）。
C	粗（一臉的油泥，長得很 <u>粗</u> 。）；長（我是怕他睡多了夢 <u>長</u> 。）；脆（ <u>脆</u> 骨軟骨。）；錯（可就把這話傳 <u>錯</u> 了。）；次（成色比本洋畧 <u>次</u> 一點兒。）；稠（天津地方兒本來是地窄人 <u>稠</u> 。）；殘（有 <u>殘</u> 洋布，有磁器，還有玻璃。）；矮（小鬍子 <u>矮</u> 胖子。）；遲（船倒江心補漏 <u>遲</u> 。）。
D	大（因為四川地方兒很 <u>大</u> 。）；短（穿着 <u>短</u> 衣裳。）；低（俗語兒說的運氣 <u>低</u> ，上廣西。）；毒（然後遇事好施其 <u>毒</u> 計。）；多（ <u>敝</u> 營所練的兵雖然不多）；對（您說這話實在是 <u>對</u> 。）；歹（好人 <u>歹</u> 人全有。）；淡（比從先的 <u>淡</u> 月徵收的數目所多無幾。）。
E	餓（他肚子裏又真 <u>餓</u> 得慌。）；惡（所作的 <u>惡</u> 事。）。
F	富（我是 <u>富</u> 賣呀。）；肥（草地水草很 <u>肥</u> 。）；煩（眼不見嘴不纔耳不聽心不煩。）；繁（事務不 <u>繁</u> 。）；乏（李勉此時走路也覺着 <u>乏</u> 了。）；瘋（他是去年得的 <u>瘋</u> 病。）。
G	乾（這麼着他就勉強一氣兒喝 <u>乾</u> 了。）；貴（怎麼是不 <u>貴</u> 呢。）；古（或有說僂們原有 <u>古</u> 法。）；廣（所以 <u>廣</u> 開言路。）；孤（ <u>孤</u> 木不成林。）；高（真是天分 <u>高</u> 。）。
H	好（這麼辦很 <u>好</u> 。）；紅（有 <u>紅</u> 緞子沒有。）；黃（那兒的 <u>黃</u> 土不埋人哪。）；寒（像這冬 <u>寒</u> 時冷。）；早（那個意思說的是天下 <u>旱</u> 地少）；黑（有四十多歲， <u>黑</u> 鬍子。）；壞（他自己也知道外頭聲氣太 <u>壞</u> 了。）；厚（還是販回土貨去賣利 <u>厚</u> 呢。）；慌（房德見他媳婦兒着了急了，他更 <u>慌</u> 了。）；和（尊府上向來是內 <u>和</u> 外順。）；活（可也要留一點兒 <u>活</u> 話兒。）；狠（並且他的心腸還最 <u>狠</u> 。）；荒（是一片 <u>荒</u> 郊。）；混（僂別 <u>混</u> 疑惑人了。）；花（眼

	睛也 <u>瞧</u> 花了。))。
J	急(誰知道他窮 <u>急</u> 了); 近(萬不可以圖 <u>近</u> ,起那懸地方兒走。); 精(他們本國裏近來鐵軌造的是極 <u>精</u> 。); 舊(這改變 <u>舊</u> 法。); 尖(他的眼睛 <u>尖</u> 。); 緊(雖然我的事情這麼 <u>緊</u> 。); 賤(<u>賤</u> 姓黃。); 謹(操守不 <u>謹</u> 。); 久(我 <u>久</u> 聞義士心懷忠義。); 假(您聽的那話並不 <u>假</u> 。); 吉(他正趕上修萬年 <u>吉</u> 地。); 佳(現在也有點兒後力不 <u>佳</u> 了。); 驚(又 <u>驚</u> 又喜。); 靜(趕到夜 <u>靜</u> 的時候。); 奸(就因為朝廷錯用了一箇 <u>奸</u> 臣。); 淨(多咱把錢賠 <u>淨</u> 了。))。
K	苦(去年散在了家裡間的很 <u>苦</u> 。); 快(不但寫的又 <u>快</u> 又好。); 寬(您暫且把心放 <u>寬</u> 了。); 空(要在那塊 <u>空</u> 院子裏添蓋五間房。); 愧(失迎很 <u>愧</u> 。); 濶(再沒有比延平門王元寶家 <u>濶</u> 的了。); 困(那個時候大家走的是人 <u>困</u> 馬乏。); 朗(天 <u>朗</u> 氣清。))。
L	藍(我今天給您拿了一疋 <u>藍</u> 緞子。); 綠(<u>綠</u> 呢轎車。); 冷(<u>冷</u> 手抓熱饅頭。); 累(他見天不但官差太 <u>累</u> 。); 老(常說某人是 <u>老</u> 江湖了。); 聾(鼻子有點兒 <u>聾</u> 。); 懶(不可以手 <u>懶</u> 。); 亂(我瞧太 <u>亂</u> 。); 牢(嘴上無毛說話不 <u>牢</u> 。); 涼(小婦人聽這話就嚇了一身 <u>涼</u> 汗。); 亮(能照得見人那麼 <u>亮</u> 。); 濫(又有因案 <u>濫</u> 罰的事。); 樂(心裏很 <u>樂</u> 。); 良(纔遇見這樣良醫。); 廉(價 <u>廉</u> 工省。); 靈(算的卦很 <u>靈</u> 。))。
M	明(<u>明</u> 君在位,天下大平。); 滿(而且兒孫 <u>滿</u> 堂。); 慢(不但各樣兒東西做的 <u>慢</u> 。); 美(<u>美</u> 的了不得。); 妙(求您給我想一個 <u>妙</u> 法。); 睦(妯娌也就從此不 <u>睦</u> 了。); 密(然後皇上就降了一道 <u>密</u> 旨。); 悶(這又是一件 <u>悶</u> 事。))。
N	難(四川的出產運到外國去夜市很 <u>難</u> 。); 暖(今兒天氣太 <u>暖</u> 。); 怒(那個周先生聽這話很 <u>怒</u> 。); 凜(地下可還是 <u>凜</u> 。))。
P	平(一塊石頭往 <u>平</u> 處端。); 僻(這不是正道是一條 <u>僻</u> 道。); 破(這個 <u>破</u> 家直顧不上。); 胖(十 <u>胖</u> 九富。))。
Q	謙(老伯大人這話太 <u>謙</u> 了。); 勤(差使上倒很 <u>勤</u> 。); 淺(人愛耍錢實在受害不 <u>淺</u> 。); 窮(皆因家裡 <u>窮</u> 沒錢。); 青(那一疋是 <u>青</u> 緞子。); 清(又是 <u>清</u> 官。); 晴(雲來霧去的老不 <u>晴</u> 天。); 強(嘴 <u>強</u> 身子弱。); 輕(價本既然比他們 <u>輕</u> 。); 齊(趕股份都招 <u>齊</u> 了。); 巧(小的就說 <u>巧</u> 極了。); 確(可不知道這話 <u>確</u> 不確。); 奇(通商貿易西洋各國製造越出越 <u>奇</u> 。); 趣(他說的那不過是 <u>趣</u> 話。); 全(特恩賞食 <u>全</u> 俸或賞食半俸。); 俏(他去年買了不少的 <u>俏</u> 貨。))。
R	熱(可以不覺甚 <u>熱</u> 。); 軟(耳 <u>軟</u> 心活。); 弱(他是嘴強身子 <u>弱</u> 。); 疏(<u>疏</u> 放監獄。))。
S	順(他這兩年事情太 <u>順</u> 。); 少(他們嫌 <u>少</u> 不願意。); 深(窮居鬧市無人問富在 <u>深</u> 山有遠親。); 實(您說的雖然是趣話可倒也是 <u>實</u> 情。); 俗(說着不是彷彿很 <u>俗</u> 麼。); 善(如今我們從他的 <u>善</u> 法。); 盛(自然人才日 <u>盛</u> 。); 熟(都是他辦 <u>熟</u> 了的。); 碎(腳下各棧裏都沒有東洋油漆 <u>碎</u> 貨。); 濕(火大無 <u>濕</u> 柴。); 酸(後來擠得他腿也 <u>酸</u> 了。); 酥(累得骨軟筋 <u>酥</u> 。); 生(搜查面 <u>生</u> 可疑之人。))。
T	話(嘴 <u>話</u> 心苦); 妥(令友已經招 <u>妥</u> 了有多少股子了。); 疼(不然他們怎麼早起起來都覺着有點兒腦袋 <u>疼</u> 呢。); 土(換些個蒙古 <u>土</u> 貨運到內地來賣。); 痛(俗們彼此 <u>痛</u> 飲一醉。); 透(所把我惱 <u>透</u> 了。))。
W	晚(到那個時候備後悔可就 <u>晚</u> 了。); 歪(鼻 <u>歪</u> 意不端。); 穩(他那個人手不 <u>穩</u> 。); 旺(詭詐那裏頭的煤又 <u>旺</u> 又好。); 微(些須 <u>微</u> 物。))。
X	細(前次僑們匆匆一見也沒能 <u>細</u> 談。); 小(他就靠他那一點兒 <u>小</u> 聰明,小見識。); 新(那個 <u>新</u> 報館。); 險(他就說病雖甚 <u>險</u>); 孝(家貧出 <u>孝</u> 子。); 斜(眼 <u>斜</u> 心不正。); 虛(眼見是真耳聞是 <u>虛</u> 。); 閑(他恐怕 <u>閑</u> 談的時候。); 賢(人樂有 <u>賢</u> 父兄。); 喜(又 <u>驚</u> 又 <u>喜</u>)。); 鮮(還有 <u>鮮</u> 菓子甚

	麼的。); 凶(他這個人性情又兇又很又有力氣。); 詳(然後我們年兄把這案詳報上司。); 響(說什麼都不響。); 幸(今日幸得會面。); 香(親戚遠來香街坊高打墻。); 懸(萬不可以圖近起那懸地方兒走。))。
Y	嚴(嚴霜出毒日。); 遠(看情形恐怕戰事不遠了。); 陰(陰天。); 硬(嘴尖舌快臉硬。); 冤(你說我冤不冤。); 勇(皆因我們都是一勇子夫。); 易(為君難為臣不易。); 義(這也是朋友們一番的義舉。); 益(這不是興國計民生兩有益處麼。); 愚(依我的愚見。); 迂(有一位朋友說我你纔迂哪。); 優(說是那位侍郎文學最優。); 勻(家裏所存的現銀子也是均攤勻。); 悅(聖心大悅。); 雅(既承雅情。); 啞(嗓子也喊啞了。); 幼(然不知此幼孩是何人之子。); 瞎(瞎鬧了一場。))。
Z	鑿(那未免的也太鑿一點兒了。); 窄(現在各國總是用金子的多銀子用項太窄。); 早(他說小的本來是起的太早了。); 正(上樑不正下樑歪。); 足(他說話氣足。); 雜(人多嘴雜。); 重(禁不住這麼重的打。); 真(可不知道這話真不真。); 準(你說個準日子罷。); 尊(尊府上向來是內和外順。); 忠(可就引出一箇忠臣來。); 壯(只可招募壯勇演習打仗。))。

上述した単音節性質形容詞の一部は“量度形容詞”（量的観点を持つ形容詞）に属する。陆俭明《说量度形容词》（1989：46）は“从意义上看，这些形容词有的是用来说明体积或面积的，如‘大、小’；有的是用来说明长度的，如‘长、短’；（中略）概括起来，这些形容词都是表示量度的，含有〔+量度〕的语义特征，所以我们称之为量度形容词。”と指摘している。さらに、“量度形容词”は基本的単音節形容詞であり、全て対になると論述した。

卢小群（2017：269）は旧北京方言に用いられている“量度形容词”を“厚——薄、冷——热、松——紧、宽——窄、快——慢、粗/顽粗——细、多——少、大——小、长——短、深——浅、迟/晚——早、高——低/矮、贵——贱、远——近”とまとめた。

卢小群が指摘した31個の“量度形容词”において、金氏教科書では、“松”が形容詞として用いられている用例はない。また、金氏教科書と《兒女英雄傳》のどちらにも“顽”という語は見当たらない。

“量度形容词”の他、卢小群（2017：270）は旧北京語方言に用いられている基本的な色彩形態素を“红、黄、白、绿、黑、蓝、灰、紫、青”の7つにまとめた。この7つの色彩形容詞について、《兒女英雄傳》では全て用いられていることに対して、金氏教科書では、“灰”の用例は見当たらない。“灰鼠”という単語は1つあったが、これは鼠の1類と認識するのが妥当だと考える。

3.1.1.2 単音節性質形容詞の文法機能

上述した金氏教科書に用いられている203個の単音節性質形容詞を《兒女英雄傳》テキスト上で検索してみたところ、“背、敞、脆、矮、生、險、懸”の計7個あり、形容詞としての用法は見当たらない。そしてその中に、“矮”という漢字自体がなく、他の6個は何れも名詞、動詞として使われているか、或いは他の語と組み合わせ、単語の形で使われている、その中には形容詞の役割を果たしている用例もあれば、そうでない用例も存在する。それぞれの用例と使い方を以下に列挙する。

敞：例1. 邓九太爷便是敞东人。（《兒女》-14）⁶²

⁶² 《兒女英雄傳》の例文を引用する際に、《兒女》と略称し、各章数はローマ数字で表記し、〈缘起回首〉は「0」と表記する。

例 2. 才望了望敞老师，来迟了一步。（《兒女》-13）

脆：例 3. 再不想大远的从德州憋了这么一个干脆的招儿来。（《兒女》-23）

例 4. 那琵琶弹得来十分圆熟清脆。（《兒女》-18）

险：例 5. 儿子险些儿不得与父母相见。（《兒女》-12）

例 6. 自然该想起从前那番颠险艰难。（《兒女》-29）

例 7. 那边是一个把定自己的金玉姻缘，还暗里弄些阴险。（《兒女》-34）

《兒女英雄傳》では、“敞、脆、险”の何れも単独で形容詞として用いられている用例がなく、どれも他の語と組み合わせて用いられている。

背：例 8. 便忙忙的收拾行李，背上牲口，帶了两个骡夫，竟自去了。（《兒女》-5）

例 9. 在背后举起刀来，照他的右肩膀一刀。（《兒女》-6）

生：例 10. 不愿留的叫他们各自谋生。（《兒女》-21）

例 11. 我两家生生世世也感激不尽。（《兒女》-26）

例 12. 金、玉姊妹各生一子。（《兒女》-40）

例 13. 你我不幸托生个女儿，不能在世界上轰轰烈烈做番事业。（《兒女》-8）

《兒女英雄傳》では、“背”と“生”が形容詞として用いられている用例がなく、どちらも名詞或いは動詞の役割を果たしている。

悬：例 14. 人家得悬多少心，费多大神？（《兒女》-26）

例 15. 偏我那把刀因公公道是新房不好悬挂，不在跟前。（《兒女》-31）

例 16. 他早不禁不由口似悬河。（《兒女》-16）

金氏教科書で、形容詞として用いられている“懸”は危険である意を表す。そして《兒女英雄傳》では、“悬”が動詞の役割を果たしている。また、“口似悬河”という形で用いられている用例が2例あり、《現代汉语词典》（第7版）（2019：1484）は“〈书〉指瀑布：口若～。”と記述している。

金氏教科書の単音節性質形容詞において、述語、補語、連用修飾語、連体修飾語の4類の使い方が見られる。そしてこれらは《兒女英雄傳》にも同様に用いられている。

(1) 述語

例 17. 家裡很窳，十分的命苦。（《今古》李汧公）

例 18. 他近來耳朵有點兒背。（《撮要》-3）

例 19. 他這兩年事情太順，未免的有點兒高興。（《便覽》-11）

例 20. 操守不謹。（《撮要》-6）

例 21. 他的眼睛尖。（《撮要》-3）

例 22. 这山里的道儿黑了，可不好走。（《兒女》-20）

例 23. 只是鼻梁儿塌些，嘴唇儿厚些。（《兒女》-15）

例 24. 你不必慌，只管起来，明明白白的说。（《兒女》-12）

例 25. 酒凉了，咱们换一换。（《兒女》-15）

卢小群（2017:277）は単音節性質形容詞が述語として機能することは旧北京語方言によく見られるものだと指摘し、また“単音节形容词前后需附上能愿动词或时态助词、程度副词、否定副词等成分才能成立。但是少数单音节形容词也可以直接作谓语。”と論述している。例文 21. の“尖”は直接述語にあたる用例であるが、この使い方は金氏教科書では極めて少ない。

(2) 補語

- 例 26. 招齊兵勇便可開練。（《撮要》-8）
例 27. 小的的母親就信了真了，可就把銀子和布都收在箱子裡了。（《華言》-24）
例 28. 您暫且把心放寬了。（《今古》懷私怨）
例 29. 我就說我們的貨都到齊了。（《談論》-90）
例 30. 令友已經招妥了有多少股子了。（《談論》-31）
例 31. 我直不知道是怎麼得罪他了，所把我惱透了。（《便覽》-63）
例 32. 把圈口給他招緊了。（《兒女》-34）
例 33. 他便忙忙的回到房中，催着打掃淨了屋子。（《兒女》-30）
例 34. 如今將及五十歲，考也考了三十年了，頭髮都考白了。（《兒女》-1）
例 35. 直洗到太太打發人叫他，才忙忙的擦干了手上来。（《兒女》-37）
例 36. 把一應的東西鋪墊平了，叫他娘兒兩個好坐。（《兒女》-10）
例 37. 便叫人把箱子打開，一件件的收清。（《兒女》-24）

(3) 連体修飾語

- 例 38. 穿着一件黃衫，騎着一匹白馬。（《今古》李沂公）
例 39. 那地方官巡查地面，彈壓百姓，不免要煞費苦心的。（《談論》-81）
例 40. 問了一間飲食起居，俱各照常如是，真是好福氣。（《摺紳》-13）
例 41. 甚麼大洋大海，他全走過了。（《便覽》-40）
例 42. 所作的惡事，也都不記得有多少件了。（《今古》十三郎）
例 43. 有殘洋布，有磁器，還有玻璃。（《華言》-14）
例 44. 早有本号的号军从那个矮栅栏上头伸手把那人扛着的考具接过去。（《兒女》-34）
例 45. 咦，这就是方才那秃贼灌我的那毒药酒！（《兒女》-8）
例 46. 还是这样忙叨叨疯婆儿似的？（《兒女》-22）
例 47. 对着屋门往里一看，果见公子一脸怒容。（《兒女》-31）
例 48. 益发觉得这人不但是个热人，并且是个趣人了。（《兒女》-22）
例 49. 强将手下无弱兵。（《兒女》-30）

(4) 連用修飾語

- 例 50. 雖不寬綽可是每月必滿給的。（《撮要》-8）
例 51. 現在我是忙着要出門，不得細談。（《談論》-37）
例 52. 這麼著他就站起來說，老父臺有公事，我也不敢久留。（《今古》沈小霞）
例 53. 然後我們年兄，把這案詳報上司。（《華言》-27）
例 54. 也防他父亲的脾气靠不住，正在窗后暗听。（《兒女》-15）
例 55. 这全仗你老人家，我再无可说的了。（《兒女》-17）
例 56. 公子这才收了泪痕，换出笑脸，详问父亲的起居室食。（《兒女》-12）
例 57. 人家不奉父母之命，姐姐就可以硬作主张。（《兒女》-26）
例 58. 那先生且不答话，依然坐在那里干笑。（《兒女》-18）

胡明扬的《北京话初探》（1987：133）は“北京话形容词大多数可以直接用作定语，一般只有少数不能用作定语。”と指摘しており、その上で、直接連用修飾語に用いられない単音節形容詞をまとめている。

“背（重听）、草、差、沉、次、逗、对、多、浮、滑、抠、累、密、木、囊、膩、粘、齐、轻、少（上声）、少（去声）、松、烫、通、透、险、严、阴、油、匀。”

张斌（2010：127）は“有些单音节性质形容词与单音节名词的结合，习惯上可以看作词，因为有些形容词的意义已经虚化了。”と指摘している。金氏教科書においては、これらの語彙が多く存在する。例えば：雜糧大宗的是穀子玉米白高粱，其次是紅高粱黃豆紅豇豆綠豆黑豆黃米芝麻甚麼的。がある。この例文では“白、紅、黃、綠、黑”の5つの単音節形容詞が用いられており、いずれも農作物を表している。

3.1.1.3 二音節性質形容詞

金氏教科書において、二音節性質形容詞を402個抽出すと、二音節性質形容詞は単音節性質形容詞より数多く使用されていることがわかる。抽出した二音節性質形容詞を音順別で表3-2.に列挙し、各二音節性質形容詞の後にその用例を括弧内に示す。

表3-2. 金氏教科書に用いられている二音節性質形容詞とその用例（ピンイン順）

音順	二音節形容詞
A	安詳（舉止一切都很 <u>安詳</u> 。）；安穩（夜間也睡得 <u>安穩</u> 了）；安分（平常是很 <u>安分</u> 。）；哀痛（勸老弟不可以過於 <u>哀痛</u> 。）；懊喪（心裏 <u>懊喪</u> 極了。）；礙事（決不 <u>礙事</u> 。）。
B	臃壯（馬隊的兵還精強馬匹有不很 <u>臃壯</u> 的。）；不平（是見了 <u>不平</u> 的事。）；不離（是，也算 <u>不離</u> 。）；不錯（收成的也 <u>不錯</u> 。）；不安（心中 <u>不安</u> 的很了。）；不良（ <u>不良</u> 之心了。）；不俗（談吐 <u>不俗</u> 。）；不便（不但各國輪船上貨卸貨 <u>不便</u> 。）；不凡（真是 <u>不凡</u> 之相。）；不同（與春秋左傳後漢史書本就多有 <u>不同</u> 。）；不祥（以鎮 <u>不祥</u> 之事。）；不恭（實在草率 <u>不恭</u> 。）；便當（那邊兒一切都還 <u>便當</u> 。）；便捷（那是頂 <u>便捷</u> 的。）；霸氣（做事沒比他那麼 <u>霸氣</u> 的了。）；卑賤（沒有 <u>卑賤</u> 的行為。）；卑鄙（還有次一等的 <u>卑鄙</u> 的小人。）；卑微（應酬人要和美不露 <u>卑微</u> 。）；別致（他那個人脾氣很 <u>別致</u> 。）；邊遠（都是中國 <u>邊遠</u> 的地方。）。
C	聰明（心裏很 <u>聰明</u> 。）；淳樸（而且風俗也 <u>淳樸</u> 。）；沉重（他纔知道我病的很 <u>沉重</u> 。）；粗重（屋裏就剩了有幾件 <u>粗重</u> 的傢伙。）；粗笨（那個賣薑的本來是個 <u>粗笨</u> 的人。）；粗愚（像那 <u>粗愚</u> 之人。）；粗心（凡作官的人，大要小心，不可以 <u>粗心</u> 。）；草率（不可以 <u>草率</u> 規定）；充足（等將來軍餉 <u>充足</u> 了）；吃緊（那必得軍務到了十分 <u>吃緊</u> 。）；暢快（心裏倒覺着 <u>暢快</u> 。）；稠密（人烟 <u>稠密</u> 。）；倉促（倉促之間不及備辦。）；促急（我說這也未免的過於 <u>促急</u> 。）；慚愧（相形之下實在自覺 <u>慚愧</u> 的很了。）；淳樸（而且風俗也 <u>淳樸</u> 。）；稱心（公事是有甚麼不 <u>稱心</u> 的呢。）；蠢動（不免有 <u>蠢動</u> 的事。）；長久（究竟不是 <u>長久</u> 之道。）；長遠（究竟不是 <u>長遠</u> 之道。）；誠實（言語 <u>誠實</u> 。）；從容（所以各官當差都覺着 <u>從容</u> 。）；脆快（你是願意是不願意 <u>脆快</u> 一句話。）；湊手（因為銀子不 <u>湊手</u> 。）；湊巧（纔這麼不 <u>湊巧</u> 。）；成樣（實在不 <u>成樣</u> 的很。）；出眾（他自己覺着他才幹 <u>出眾</u> 。）；詫異（我聽這話很 <u>詫異</u> 。）。
D	歹毒（心裏頂 <u>歹毒</u> 。）；得意（我已經聽見說了 <u>得意</u> 的很了。）；得當（用人也都 <u>得當</u> 。）；得法（辦理的是真 <u>得法</u> 。）；對眼（那個擺擺渡的瞧來的這幾個人不大 <u>對眼</u> 。）；端方（所有交往朋友先得察其品行 <u>端方</u> 。）；大方（如今這麼 <u>大方</u> 。）；斗胆（所以我斗胆來拜。）；大意（儻千萬可別 <u>大意</u> 是要緊的。）。
F	豐富（不打的工夫兒就擺上酒席了，很 <u>豐富</u> 的。）；豐厚（館金還 <u>豐厚</u> 啊。）；豐盛（酒席是非常的 <u>豐盛</u> 。）；繁興（無奈軍務 <u>繁興</u> 。）；繁華（看見那街上很

	<p>繁華。); 繁盛 (必然是一天比一天繁盛了。); 富貴 (不但富貴成了, 連名望都有了。); 富足 (這樣的人原是富足之家。); 富強 (國家富強的根本, 是在是在這上頭。); 富厚 (若果原是富厚之家。); 費解 (不至於叫人看着擋眼費解。); 費手 (因為太費手。); 費事 (也不用這麼費事。); 放心 (這就是我放心的地方兒。); 方便 (再沒比那麼方便的了。); 煩心 (而且家務煩心。); 菲薄 (還不算甚麼菲薄。); 煩雜 (自然是更煩雜了。)</p>
G	<p>古怪 (說是這夥子人有些個古怪。); 古道 (人情都還古道。); 高大 (房屋客廳都很高大。); 高超 (我聽說老兄的文章高超得很了。); 高興 (所說的話很不高興。); 乾淨 (客位也很乾淨。); 孤單 (遇見一個孤單客人。); 公正 (只要人心地公正能訓練兵丁。); 公平 (辦事公平。); 詭詐 (我告訴你說那個王鳳亭為人可是很詭詐。); 詭秘 (行蹤詭秘。); 隔膜 (實在隔膜得很。); 過激 (這固然是過激之談。); 高邁 (年紀高邁。); 穀受 (就是來往這個路程, 也很穀受的。); 固執 (若是一定固執。); 固力 (房架兒可很固力。); 冠冕 (談吐之間要冠冕。)</p>
H	<p>頷磣 (並且畫的還不很頷磣。); 含糊 (您這話還是有點兒含糊。); 糊塗 (貝氏說爾也太糊塗了。); 荒唐 (你辦的也未免太荒唐。); 荒涼 (前邊兒若是有荒涼地方。); 荒旱 (今年那個地方兒荒旱的利害。); 和睦 (夫妻兩個倒都很和睦。); 和美 (那很和美。); 和氣 (並且他們小兩口子從來沒打過架拌過嘴, 很和氣的。); 和平 (人情也很和平。); 合宜 (倘或辦理的不很合宜。); 合式 (可惜總沒有合式的。); 合算 (還是俸減成有津貼合算呢。); 合體 (他辦事有不合體的時候兒。); 合例 (總是若遇見他辦事有不合例的時候兒。); 合理 (那纔合理哪。); 寒苦 (因為我念其你們母子寒苦); 好看 (他看着很好看。); 好聽 (與買賣的聲氣也不大好聽啊。); 好勝 (他原是個好勝的脾氣。); 活便 (做買賣總得活便會應酬纔行哪。); 寒微 (倘或是由寒微出身。); 惶恐 (臉上可就露出那惶恐的樣兒來了。); 狠毒 (這樣兒狠毒的人跟他有甚麼益處啊。); 歡喜 (心裏很歡喜。)</p>
J	<p>鞦韆 (那個帳目也很鞦韆。); 艱難 (百姓過日子是很艱難。); 艱險 (不辭艱險。); 拘謹 (就是人太拘謹。); 檢點 (總是他自己有不檢點的地方。); 儉樸 (並且以儉樸為主); 儉省 (又勤謹又會儉省。); 精細 (到那時最精細不過的。); 精明 (人是最精明了。); 精壯 (砲隊兵丁人都精壯。); 精強 (不用說操練精強。); 精巧 (因為他們所造的貨都很精巧。); 健壯 (想您身體很健壯。); 機密 (他們辦的很機密。); 緊要 (偏巧兄弟都有緊要差使。); 堅固 (因為石頭太堅固。); 僥倖 (據我看這也就僥倖的很了。); 謹飭 (三舍弟素日最謹飭不過的。); 奸猾 (寔是在是奸猾的了不得。); 拮据 (可就不免諸事拮据了。); 結實 (跳板搭結實了麼。); 潔淨 (器具潔淨。); 簡決 (我有個簡決的法子。); 奸詐 (那正是他奸詐的地方。); 驚訝 (心裏很驚訝。); 近便 (道路又近便。); 吉祥 (別人大概都嫌他不吉祥。); 見佳 (就是做菜實在不見佳。); 近便 (道路又近便。)</p>
K	<p>寬綽 (我們這個官座兒不過四個人很寬綽。); 寬濶 (你那個院子很寬濶房子太少。); 寬大 (蓋一所兒寬大的房子。); 魁偉 (就是房德相貌魁偉。); 狂傲 (你竟敢這麼狂傲無知。); 康健 (您身體都康健。); 開通 (做事很開通, 夥計們都佩服他。); 可觀 (那風景很可觀。); 可愛 (那個鳥兒画的還真可愛。); 可憐 (聽聞氏說的話很可憐。); 可惜 (實在是很可惜的事情。); 可怕 (人情冷暖寔是在是件可怕的事。); 可靠 (就以為事事的都實在的可靠。); 可疑 (這個事情可真有點兒可疑。); 可惡 (您事不知道頂可惡了。); 可慘 (那是最可慘的事。); 可羞 (寔是在是可羞得很。); 可恥 (實在是件可恥的事情。); 可喜 (實在可喜之至); 可氣 (提起這個緣故來很可氣。); 可笑 (我聽見說更可笑了。); 可以 (這一次若能過斑保個候選縣丞那就很可以的了。); 懇切 (信裏頭措詞可真得要婉轉又要懇切。); 快捷 (一切靈活快捷。); 刻薄 (多有說他居心刻薄的。); 快活 (保全終身快活一輩子。); 快樂 (有多麼快樂。); 空曠 (到了這麼一個空曠的地方兒了。); 曠達 (您原是</p>

	曠達的人。); 抗直 (就因為他性情抗直。))。
L	伶俐 (取其口齒伶俐。); 老實 (若是他平常不犯病的時候兒, 人很老實。); 累贅 (倒抱怨我們辦事情累贅。); 冷清 (那個地方很冷清。); 冷靜 (街上也冷靜得很。); 良善 (長得很良善。); 靈通 (還要耳目靈通。); 靈便 (裝藥放槍都還靈便。); 靈活 (砲車旋轉裝藥施放都要靈活。); 亂雜 (因為人多亂雜。); 利害 (奢侈的習氣是很利害。); 亂騰 (現在路上亂騰。); 樂意 (我很樂意。); 離奇 (我聽着有點兒離奇。); 勞苦 (能耐勞苦。); 零星 (不賣零星貨物); 零碎 (像這些零碎事。); 老年 (竟死守着那老年的規矩。); 老成 (內中有一個老成的人。); 臉軟 (那總是你們臉軟的緣故。); 臉硬 (偁們這買賣總得練成臉硬心狠纔行哪。))。
M	敏捷 (就能記得個大概並且人又很敏捷。); 明亮 (砲口砲膛都擦抹的乾淨明亮。); 麻俐 (又省事, 又麻俐。); 美貌 (長得十分美貌。); 命苦 (十分的命苦。); 滿意 (未免的心裏有點兒不甚滿意。); 明白 (經手的人把這本月所收的某項結費若干兩都一欸一欸的開明白了。); 冒失 (未免辦的太冒失。); 猛烈 (用偁們舊日的兵器要敵那猛烈的軍火。); 茫然 (就連風俗人情也是一概茫然。); 忙亂 (現在正是忙亂的時候兒。); 明亮 (砲口砲膛都擦抹的乾淨明亮。))。
N	能幹 (挑選了兩個有能幹的差人。); 懦弱 (王杰是一個懦弱的書生。); 難纏 (皮氣狠難纏。); 難受 (你說這一家子人有多麼難受。); 難過 (我想大哥心裏不定時怎麼樣兒難過了。); 泥濘 (遇見下雨的天氣泥濘難走。); 泥古 (那未免的太泥古了。); 鬧心 (怎麼能叫我不鬧心呢。); 年輕 (看見了一個年輕的小夥子在院子裡一個舖上。))。
P	偏僻 (譬如有一個地方官在當年原是個偏僻之地。); 僻靜 (爾也認得那個地方很僻靜。); 便宜 (小的看這匹驢八吊錢很便宜。); 樸厚 (風俗原來樸厚。); 貧賤 (貧賤之交不可忘。); 漂亮 (一場漂亮官司。); 平穩 (人走路纔要排那平穩的地方兒走。); 平安 (在平安的時候兒。); 平坦 (把道路都收拾平坦了。); 平順 (托福算都還平順。); 平和 (糧價還平和。); 平靜 (江水平靜。); 偏枯 (未免的總覺偏枯。))。
Q	淒慘 (我看他那神情兒淒慘。); 淒涼 (很覺著淒涼。); 清廉 (做官很清廉。); 清靜 (趕走到了一個清靜地方。); 清淨 (您瞧這院裏清淨。); 清雅 (鋪設的十分清雅。); 清朗 (言語清朗。); 齊整 (所以這麼樣兒的齊整。); 齊全 (也很齊全。); 窮苦 (窮苦之家。); 輕浮 (好在還不染輕浮的習氣。); 牽強 (此話未免牽強。); 氣派 (比先頭裡更氣派了。); 清苦 (他們是深知京官的差使清苦。); 巧妙 (若看那巧妙真有出人意外的。); 強壯 (精神也見強壯了。); 清楚 (今天彼此都交代清楚了。); 勤慎 (只要差使勤慎, 將來必有升騰的。); 勤謹 (後來小婦人的父親看着小婦人的男人很聰明又勤謹。); 慳吝 (就是那極慳吝視財如命的商人。); 親近 (若是有一個親近人跟著我去。); 親熱 (比先頭裡更覺着親熱了。); 切實 (就求您給寫一封切實的信罷。); 勤苦 (若是都能勤苦認真。); 強盛 (那國家再沒有不強盛的。); 氣忿 (這不過是小的一時間氣忿的話。); 輕省 (忽然他覺着身上輕省了些個了。); 奇怪 (很以為奇怪。))。
R	仁義 (這當舖素日做買賣頂仁義了。); 軟弱 (無奈我就怕我身體這麼樣的軟弱。); 熱鬧 (更是熱鬧非常。); 容易 (這都容易辦。); 認真 (辦理的都很認真。); 任性 (或是他有任性的脾氣。))。
S	爽快 (我想各國人頂爽快的一件事。); 生疎 (人地生疎, 而且言語又不通。); 善靜 (長的眉清目秀很善靜的。); 慎重 (為得是很慎重。); 瘦小 (別瞧他那麼瘦小。); 順當 (自然你的事情就順當了。); 順心 (想必諸事順心。); 順眼 (偁們看他那幾個夥計不順眼。); 順手 (樣樣兒都很順手。); 寔在 (又見他讓的很寔在。); 熟習 (於各國交際的事情很熟習。); 熟練 (騎馬躡濠跳澗都很熟練。); 熟悉 (必是很熟悉的。); 省事 (若是省事的

	活。)；舒服(聽見說坐江輪船很 <u>舒服</u> 。)；爽神(豈不 <u>爽神</u> 麼。))；上好(這把刀雖然不能說是 <u>上好的</u> 。))；實惠(實惠不能及民。))；奢侈(原來是 <u>奢侈</u> 慣了。))；衰弱(若是葉子 <u>衰弱</u> 無力。))；守分(若是有什麼偷竊打架毀壞街道這些個不 <u>守分</u> 的事。))；傷感(我勸大哥總還要保重身體不可以過於 <u>傷感</u> 。))；勝強(他實在比我 <u>勝強</u> 十倍。))；瑣碎(所有外洋市井 <u>瑣碎</u> 的事。))；奢華(不染 <u>奢華</u> 的習氣。))；衰微(到了本朝道教也就很 <u>衰微</u> 了。))；聖明(這是一位 <u>聖明</u> 人。))；掃興(他也就 <u>掃興</u> 了。))；水乳(彼此都很 <u>水乳</u> 。))；善靜(長的眉清目秀很 <u>善靜</u> 的。))；舒坦(這麼着連氣帶急就不 <u>舒坦</u> 了。))；鬆快(可就 <u>鬆快</u> 多了。))。
T	通順(文理要 <u>通順</u> 。))；妥當(其實他辦甚麼事最 <u>妥當</u> 。))；妥靠(原來一點兒毛病沒有很 <u>妥靠</u> 的。))；妥實(邀請熟練商賈公正 <u>妥實</u> 的商人。))；體面(我們年兄看那個婦人長的很 <u>體面</u> 。))；投緣(就很 <u>投緣</u> ，就把他收留下了。))；透徹(我始終沒能 <u>透徹</u> 深知。))；通快(所以他心裡更 <u>通快</u> 了。))。
W	威重(相貌長的很 <u>威重</u> 。))；危險(最 <u>危險</u> 的地方就是從湖北往四川去走那棧道。))；為難(心裏有一點兒 <u>為難</u> 。))；婉轉(那信裏頭總要把話說 <u>婉轉</u> 點兒。))；無窮(既打算要爭萬年 <u>無窮</u> 之利。))；無聊(他現在所沒正經事，也是 <u>無聊</u> 的很。))；無味(也實在 <u>無味</u> 的很。))；無趣(未免的一切生疏倒覺着 <u>無趣</u> 了。))；無妨(他嘴裏雖然說大局 <u>無妨</u> 。))；無知(不過念其他是粗笨無知的人。))；無私(總要辦得公正 <u>無私</u> 。))；無能(實在是 <u>無能</u> 之輩。))；委頓(精神也很覺 <u>委頓</u> 。))；維艱(近年來小民度日本就 <u>維艱</u> 。))；旺實(這蘿蔔白菜這麼 <u>旺實</u> 。))。
X	辛苦(那幾個底下人這幾天很 <u>辛苦</u> 的了不得。))；稀少(也就很覺 <u>稀少</u> 了。))；賢慧(況且人又是極 <u>賢慧</u> 。))；細微(然而其中有那 <u>細微</u> 的地方兒。))；細密(人心思 <u>細密</u> 。))；興旺(行棧林立商務是最 <u>興旺</u> 不過的了。))；興盛(至於道教在漢宋明三朝的時候也很 <u>興盛</u> 。))；詳細(上司據稟再 <u>詳細</u> 體察。))；兇惡(一個個的都是腰粗脖英一臉的 <u>兇惡</u> 。))；迅速(光陰 <u>迅速</u> 。))；心酸(不由得一陣好 <u>心酸</u> 。))；小心(我總想着王太當差很 <u>小心</u> 。))；相宜(若是您肯就這個事情倒是很 <u>相宜</u> 的。))；腥臭(你們不信出來聞一聞 <u>腥臭</u> 的利害。))；消停(現在路上不大 <u>消停</u> 。))；細心(不過 <u>細心</u> 考察。))；蕭條(各行的買賣手藝全 <u>蕭條</u> 。))；現成兒(不但要批甚麼 <u>現成兒</u> 的貨物。))；虛假(還不 <u>透虛假</u> 。))；小器(談吐之間要冠冕，不 <u>透小器</u> 。))；蕭索(那倆夥計見買賣 <u>蕭索</u> 了。))；羞愧(臉上 <u>羞愧</u> 的了不得。))；响亮(說話 <u>响亮</u> 。))；賢良(儂這不 <u>賢良</u> 的婦人。))；懈怠(倒還說這麼樣兒的 <u>懈怠</u> 話。))；心慌(也不言語也不 <u>心慌</u> 。))；兇殘(可嘆兩個 <u>兇殘</u> 惡徒全死在杖下了。))。
Y	英俊(實在是少年 <u>英俊</u> 。))；淵博(學問也 <u>淵博</u>)；庸愚(我雖然是個 <u>庸愚</u> 的人。))；嚴肅(所以舖規 <u>嚴肅</u> 。))；嚴厲(如今新任的上海縣知縣很 <u>嚴厲</u> 。))；嚴密(而且他們辦事 <u>嚴密</u> 。))；嚴明(號令 <u>嚴明</u> 。))；義氣(這夥子人倒很 <u>義氣</u> 。))；遺憾(在無可 <u>遺憾</u> 。))；要緊(其實那裡頭並沒甚麼 <u>要緊</u> 。))；有趣(<u>有趣</u> 有趣。))；有名(那是一位 <u>有名</u> 的大手筆先生)；有害(若看明白了事有 <u>害</u> 的事。))；有利(若是遇見 <u>有利</u> 的事。))；有限(所餘也 <u>有限</u> 了。))；叢茂(遠看樹木 <u>叢茂</u> 。))；有理(你猜的很有 <u>理</u> 。))；一樣(就如同貴國各衙門堂官 <u>一樣</u> 。))；意外(那寔在不敢作此 <u>意外</u> 之想。))；裕如(經濟自然更是 <u>裕如</u> 的了。))；油猾(而且 <u>油猾</u> 習氣最深。))；遠大(您這個前程 <u>遠大</u> 。))；踴躍(買的人不很 <u>踴躍</u> 。))；用心(貝氏說這也是他 <u>用心</u> 的地方兒。))；眼熟(也覺着有點兒 <u>眼熟</u> 。))；異樣(像這樣兒的 <u>異樣</u> 的孩子。))；冤枉(小的主人是真 <u>冤枉</u> 。))。
Z	從容(所以各官當差都覺着 <u>從容</u> 。))；糟朽(全都 <u>糟朽</u> 不堪了。))；正直(那巡查人都很 <u>正直</u> 。))；正經(一點兒 <u>正經</u> 的也不學。))；正好(而且您現在的運氣又 <u>正好</u> 。))；重大(就要辦那麼 <u>重大</u> 的事情。))；真切(所有花燈看得都很 <u>真切</u> 。))；整齊(兵器也鮮明隊伍也 <u>整齊</u> 。))；周密(實在設立的都很 <u>周密</u> 。))；周到(他說的話都很 <u>周到</u> 。))；窄小(那個地方兒的砂綫 <u>窄小</u> 。))；着急(夥計

<p>們自然是沒不着急的。)；支絀(軍餉到了萬分支絀的時候。)；自由(來去自由。)；自在(有多麼自在。)；知足(無奈他心裏老不知足。)；忠義(我是久已仰慕閣下忠義。)；忠厚(可是心地很忠厚。)；忠貞(素性忠貞。)；忠正(李勉是個忠正的人。)；忠直(上帝念其我忠直。)</p>

上列されている二音節性質形容詞では、種類別に単純式、複合式、附加式の3類に分けられる。

卢小群(2017:267)は単純式形容詞が連綿語と疊音語の2類あり、さらに連綿語は“由双声、叠韵、非双声叠韵联绵词构成”と指摘している。金氏教科書において、“联绵词”が少数見られる。例えば、伶俐、累贅、荒唐、麻俐、頷疹、糊塗などがある。“疊音词”も少数見られるが、状態形容詞で詳述する。

金氏教科書に用いられている二音節性質形容詞で、最も種類が多いのが複合式の性質形容詞で、構造別に以下の7類に分けられる。また、構造によって、“形容詞+形容詞”の構造を取る形容詞が一番多い。

(1) 形容詞+形容詞

正直、高大、賢慧、細微、魁偉、冷清、平穩、平靜、強壯、清雅、粗重、細密、嚴密、良善、軟弱、沉重、稀少、歹毒、狂傲、兇惡、亂雜、窮苦、寒苦、明亮、年輕、奇怪、虛假、窄小、整齊、忠義、忠正、賢良、詳細などがある。

(2) 形容詞+名詞

美貌、古道、粗心、細心、小心、順眼、順手、順心、滿意、固力などがある。

(3) 形容詞+動詞

難纏、熱鬧、難過、老成、簡決、好看、好聽などがある。

(4) 名詞+形容詞

臉軟、臉硬、心酸、心慌、眼熟、年輕、命苦などがある。

(5) 名詞+名詞

體面、水乳などがある。

(6) 動詞+名詞

投緣、有名、有理、省事、費手、費事、放心、用心などがある。

(7) 動詞+形容詞

吃緊、得意、得法、見佳、知足などがある。

附加式の形容詞は4類見られ、接頭辞が“可”、“精”、“不”、“無”、“氣”の5つで、合計44個ある。

(1) 接頭詞が“可”

可觀、可愛、可憐、可惜、可怕、可靠、可疑、可惡、可觀、可慘、可羞、可恥、可喜、可氣、可笑、可以。

(2) 接頭詞が“精”

精細、精明、精壯、精強、精巧。

卢小群 (2017:186) は接頭詞“精”は旧北京語に属するものであり、“附着在形容词性语素前表示极、特别、十分、非常等义, 通常用于不好的消极的形语素前。(中略)有时还可附着在量词前构成形容词: 精点儿极小、很小。”と指摘している。金氏教科書において、“精点儿”の用例は見当たらない。また、盧氏が提示した接頭詞“精”がネガティブな形態素の前に用いられることとは異なり、金氏教科書に用いられている“精細”、“精明”、“精壯”、“精強”、“精巧”の何れもポジティブな形態素である。

(3) 接頭詞が否定副詞“不”、“無”

不平、不離、不錯、不安、不良、不俗、不便、不凡、不同、不祥、不恭；無力、無窮、無聊、無味、無趣、無妨、無知、無私、無能。

(4) 接尾詞が“氣”

霸氣、和氣、義氣。

卢小群 (2017:191) は接尾詞“氣”は旧北京語に属するものであり、“附着在形容词性语素后构成形容词, 表示某种性质、状态。”と指摘している。

3.1.1.4 二音節性質形容詞の文法機能

上述した金氏教科書に用いられている 402 個の二音節性質形容詞を《兒女英雄傳》テキスト上で検索してみたところ、《兒女英雄傳》に用いられていない形容詞が 147 個あり、約 36.6% を占めていることがわかる。これらの形容詞を以下に羅列する。

哀痛、懊喪、礙事、臃壯、霸氣、便捷、卑賤、卑鄙、卑微、便當、邊遠、粗愚、充足、稠密、倉促、促急、蠢動、脆快、湊手、成樣、得法、斗胆、豐富、繁興、富足、富強、富厚、費手、煩心、煩雜、孤單、詭詐、隔膜、高邁、穀受、固力、頷磣、和美、合例、合理、寒苦、活便、寒微、狠毒、轆轤、艱險、拘謹、儉樸、儉省、精壯、精強、健壯、堅固、奸猾、拮据、簡決、奸詐、見佳、魁偉、狂傲、開通、可恥、可羞、快捷、刻薄、空曠、抗直、良善、靈活、亂雜、勞苦、麻俐、美貌、猛烈、懦弱、泥濘、鬧心、偏僻、樸厚、平坦、平順、平和、偏枯、清靜、輕浮、強壯、勤慎、輕省、慳吝、勤苦、強盛、清雅、清朗、仁義、軟弱、善靜、瘦小、順眼、熟習、熟練、熟悉、爽神、實惠、奢侈、衰弱、勝強、奢華、衰微、善靜、舒坦、妥靠、妥實、投緣、透徹、通快、威重、危險、婉轉、委頓、維艱、旺實、賢慧、細微、興旺、興盛、腥臭、虛假、蕭索、兇殘、淵博、庸愚、嚴明、遺憾、有害、有利、叢茂、裕如、踴躍、眼熟、糟朽、重大、周密、支絀、自由、忠義、忠貞、忠正。

また、個々の形容詞は検出されたが、《兒女英雄傳》における使い方、或いは形が金氏教科書と異なることが判明した。これらの形容詞は計 14 個あり、それぞれの用例と使い方を以下に列挙する。

称心：例 59. 这件事交给姐姐，保管你称心如意。（《兒女》-9）

草率：例 60. 限一月修复，无得草率偷減。（《兒女》-2）

冠冕：例 61. 公子这几句开门炮儿，自觉来得冠冕堂皇。（《兒女》-28）

守分：例 62. 他那分家计只安分守己的也便不愁温。（《兒女》-40）

公正：例 63. 小人们的家堂佛一般，真真廉明公正。（《兒女》-11）

“称心、草率、冠冕、守分、公正”について、金氏教科書では形容詞として単独で用いられているが、《兒女英雄傳》ではそのような用例がなく、何れも四文字の形を取る。

不离：例 64. 直到一病垂危，我还同你父亲在那里服侍汤药，早晚不离。（《兒女》-19）

《兒女英雄傳》では“不离”の用例が 22 例あり、全て動詞として使われている。金氏教科書において、“不離”が動詞として用いられている用例はあるが、形容詞として用いられている用例は 1 例のみであり、悪くない、まあまあであるという意となる。

合算：例 65. 派了叶通合算顷亩造具册档。（《兒女》-33）

检点：例 66. 他说着，便带了叶通亲自替学生检点考具。（《兒女》-34）

《兒女英雄傳》では“合算”と“检点”の用例がそれぞれ 1 例、4 例あり、何れも動詞の役割を果たしている。また、金氏教科書では、“合算”が動詞として用いられている用例はあるが、形容詞として用いられる際には、勘定に合うという意となる。一方、金氏教科書では“检点”の用例が 2 例あり、全て“不检点”の形となり、品行のふしだらさ、不始末であるという意となる。“检点”が動詞として用いられている用例は見当たらない。

细心：例 67. 这要搁在我家乡，聘十个女儿也用不了，却是姐姐不叫我空手儿进婆家门儿的一番细心。（《兒女》-26）

响亮：例 68. 及至听得铜旋子掉在石头上，镗的一声响亮。（《兒女》-6）

例 69. 随着便是地坼山崩价一声响亮，吓得他一步踏空云脚。（《兒女》-0）

例 70. 及至猛然间听得那铜旋子锵啷啷的一声响亮，心中吃那一吓。（《兒女》-6）

《兒女英雄傳》では“细心”と“响亮”の用例がそれぞれ 1 例と 3 例あり、何れも助数詞の後ろに置かれ、名詞の役割を果たしている。金氏教科書では、“细心”と“响亮”の用例がどちらも 2 例あり、形容詞として用いられている。

义气：例 71. 大家就一口同音说：“以义气为重。”（《兒女》-21）

《兒女英雄傳》では“义气”の用例が 11 例あり、全て名詞として用いられている。金氏教科書では、“義氣”が形容詞、名詞としての両方の用例が見られる。

乱腾：例 72. 这一向那些书还不曾归着清楚，乱腾腾的。（《兒女》-33）

明亮：例 73. 不怕夜黑天阴，看着那人家是明亮亮的。（《兒女》-31）

凄惨：例 74. 这青云山分明是凄惨惨的几间风冷茅檐，怎的霎时间变作了暖溶溶的春生画图？（《兒女》-20）

例 75. 公子只随了一个店伙、两个骡夫，合那些客人一路同行，好不凄惨！（《兒女》-4）

金氏教科書で用いられている二音節性質形容詞“亂騰”、“明亮”、“凄惨”は《兒女英雄傳》にも同様に形容詞として使われているが、形が AB から ABB に変わり、状態形容詞となっている。そして“凄惨”だけが AB と ABB の用例が両方見られる。

金氏教科書の二音節性質形容詞においては、述語、目的語、補語、連用修飾語、連体修飾語の 5 類の使い方が見られる。

①述語

- 例 76. 所出產的東西很多，也很齊全。（《談論》-38）
例 77. 這夥子人倒很義氣。（《今古》李沂公）
例 78. 心裏頂歹毒。（《虎頭》）
例 79. 人心思細密，成本也大。（《搢紳》-40）
例 80. 和那道台見了好幾回面了，商量公事，那很和美。（《公牘》-61）
例 81. 那個地方很冷清。（《今古》李沂公）
例 82. 里面房间高大，屋瓦鱗鱗。（《兒女》-14）
例 83. 要你护在头里，倒是我荒唐了？（《兒女》-23）
例 84. 舅太太道：“好看了。可叫妹妹给你梳头罢。”（《兒女》-27）
例 85. 咱一来是为行好，二来也怕脏了我的店。真要死了，那就累贅了。（《兒女》-3）

②目的語

- 例 86. 把相公快救出來是要緊的。（《今古》懷私怨）
例 87. 事情只有衰敗的，不能興旺的。（《便覽》-92）
例 88. 然而在我看，吉人天相，大局總是無妨的。（《搢紳》-22）
例 89. 倒是这国帑民命是要緊的。（《兒女》-2）
目的語として用いられている場合は、“形容詞+的”の形を取る。

③補語

- 例 90. 倒抱怨我們辦事情累贅。（《談論》-13）
例 91. 把手上的血和寶劍上的血，都擦乾淨了。（《今古》李沂公）
例 92. 只是他来的古怪，去的古怪，以至说话行事无不古怪。（《兒女》-12）
例 93. 幸喜得他家庄上有个大马圈，另开车门，出入方便。（《兒女》-21）
例 94. 我拿咱那个木盆给他把那个溺裤洗干净了。（《兒女》-11）
例 95. 公子又看那匣儿，是盘百八罗汉的桃核儿数珠儿，雕的十分精巧。（《兒女》-37）

④連体修飾語

- 例 96. 那個真珠姬正看得很高興的時候，就瞧見有一個尼姑，進帷幙裡來了。（《今古》十三郎）
例 97. 不過兄弟看小婿還在那謹飭一路雖沒甚麼大才幹，好在還不染輕浮的習氣。（《搢紳》-7）
例 98. 民間可以買一點兒便宜東西。（《談論》-37）
例 99. 不但農桑是俗們從古時到如今一件衣食根本要緊的事情。（《談論》-40）
例 100. 姑娘在车里借着灯光看那座门时，原来是座极宽大的车门。（《兒女》-24）
例 101. 醒来一场繁华大梦，思之无味，说也可怜。（《兒女》-38）
例 102. 将来自己到了吃紧关头，难道就靠写两副单条对联、作几句文章诗赋便，好去应世不成？（《兒女》-38）
例 103. 我们德州这地方儿古怪事儿多着咧！（《兒女》-22）
例 104. 那个当儿怎的来了个异样女子。（《兒女》-12）

⑤連用修飾語

- 例 105. 這都容易辦。（《虎頭》）
例 106. 我們因為這件事，關係那個地方的釐金稅課，不可以草率定規。（《公牘》-67）

例 107. 那些個匪徒，全不管這些個，就隨便搶人家的蘆葦。（《談論》-85）

例 108. 現在先挑選這麼幾個有能幹的人，到各處去細心考察。（《便覽》-91）

例 109. 大家便認真吃起飯來。（《兒女》-28）

例 110. 姑娘納着氣從容問道：“尹先生，我先請教，你从那處見得我是個‘尋常女子’？”（《兒女》-17）

例 111. 便僥幸中了，父親現在這個地方，兒子還何心顧及功名末節？（《兒女》-12）

例 112. 你本是習《禮記》專經的，五個題目都還容易作。（《兒女》-35）

胡明揚（1987：133）によると、直接連用修飾語として用いられない二音節形容詞は“含糊、厚实、滑溜、孤单、光溜、近乎、可惜、模糊、平安、平稳、奇怪、齐全、齐心、齐整、清楚、软乎、随便、稳重、细腻、显眼、详细、匀称、运气、扎实、周到”がある。

3.1.2 状態形容詞

張斌（2010：130-133）は状態形容詞の文法機能について、以下のように5点に分類した。

①状態形容詞一般不能受“很”之类的程度副词的修饰，一般也不能受“不”修饰；②状态形容詞可以修饰名词；③有些状态形容詞可以做状语；④大部分状态形容詞做谓语时，后面要加“的”；⑤状态形容詞做宾语时一般要加“的”，做补语时动词后一般要加“得”。

盧小群（2017:273）によると、状態形容詞はAB型、AA型、AABB型、ABB型、A里AB型、A不XY型、A了XY型、ABCD型などの形態に分類できる。金氏教科書に見られる状態形容詞の用例は限られている。式別で以下に纏める。

3.1.2.1 AB型状態形容詞

金氏教科書では、AB型の状態形容詞は“通紅、緋紅、刷白、紫色、紅青、棗兒紅”の計6つ見られる。《兒女英雄傳》では、“刷白”と“紫色”の用例は見当たらないが、前文で述べたように単音節性質形容詞“紫”の用例が見られる。例えば：紫的竟比珍珠姑娘脸上紫的还紫。（《兒女》-40）がある。

例 113. 抬頭看見了呂大，不由得滿臉通紅。（《今古》懷私怨）

例 114. 那個有鬚子的，急的臉緋紅，直往下流眼淚。（《華言》-30）

例 115. 那個沒鬚子的，嚇的臉刷白，也說不出話來了。（《華言》-30）

例 116. 上頭有紫色的單褂。（《搢紳》-47）

例 117. 你瞧，這一匹是紅青緞子。（《華言》-6）

例 118. 一匹是棗兒紅的，一匹是白的。（《華言》-11）

例 119. 被張姑娘一愜，不覺羞得小臉兒通紅。（《兒女》-29）

例 120. 俩人却只羞得緋紅了臉，低頭而笑。（《兒女》-38）

例 121. 看那人，約略不上三十歲，穿着件棗兒紅的絳色棉襖。（《兒女》-15）

例 122. 只見他着一件簇簇新的紅青布夾襖，左手攥着烟袋荷包，右手攥着一團藍綢絹子。（《兒女》-12）

上述した AB 型の状態形容詞は全て、卢小群 (2017:270) が提示した 7 つの旧北京語方言に用いられている基本的な色彩形態素が含まれている。《兒女英雄傳》ではこれらの形態素が用いられている色彩語彙が幾つか記録されている。例えば：“大红、朱红、鲜红、猩红、桃红、青绿、漆黑、煞白、杏黄、焦黄、黑黄” などがある。

3.1.2.2 AA 型状態形容詞

金氏教科書では、AA 型の状態形容詞は“紛紛、匆匆、暗暗、嚴嚴、重重、默默、準準兒、早早兒、輕輕兒、慢慢兒、遠遠兒、賤賤兒、快快(兒)、細細(兒)、好好(兒)” の計 15 種類、18 個が見られる。その中で、“細細(兒)”、“好好(兒)”“快快(兒)” の 3 つだけ、「アル化」される用例とそうでない用例が両方見られる。

例 123. 聽說各處紛紛調兵，這還不是要打仗麼。(《撮要》-9)

例 124. 前次僂們匆匆一見也沒能細談。(《搢紳》-3)

例 125. 房德聽他說到這兒就暗暗的點頭。(《今古》李沂公)

例 126. 地方官能這麼嚴嚴的整頓，那些個不守分的百姓也就得斂跡些個，不敢任意橫行了。
(《談論》-82)

例 127. 總得重重的報答他纔行哪。(《今古》李沂公)

例 128. 竟默默的往天上看着。(《今古》李沂公)

例 129. 叫他一看，準準兒的是盡情盡理。(《談論》-26)

例 130. 老弟這一過年早早兒的換頂戴升外任罷。(《搢紳》-13)

例 131. 在門上輕輕兒的拍了兩下兒。(《今古》李沂公)

例 132. 要了一壺酒兩樣兒菜，就慢慢兒的喝着酒。(《華言》-24)

例 133. 遠遠兒的見呂大在堂上跪着了。(《今古》懷私怨)

例 134. 我打算把舖子裏所有的殘貨，都賤賤兒的快賣出去。(《便覽》-45)

例 135. 吩咐關道催知縣快快⁶³要出銀子來。(《公牘》-57)

例 136. 告訴刑部，快快兒的議覆上去。(《今古》沈小霞)

例 137. 現在他要細細的訪察。(《便覽》-96)

例 138. 是為甚麼事情來告狀，你細細兒的告訴我說。(《華言》-29)

例 139. 請吩咐好好改正，成一個妥當的樣子，是要緊的。(《公牘》-62)

例 140. 好好兒的一個人，就怕是叫窮給擠壞了。(《便覽》-51)

上述した 18 個の AA 型状態形容詞において、《兒女英雄傳》では“賤賤兒”だけ見られない。また、金氏教科書では「アル化」の形で用いられている“準準兒”、“早早兒”、“輕輕兒”が《兒女英雄傳》では「アル化」されていない形で用いられていることがわかる。そして、金氏教科書では“快快”と“快快兒”のどちらも用いられていることに対して、《兒女英雄傳》では「アル化」されていない形で用いられていることがわかる。

例 141. 大家便告辞归号，这号里的人也纷纷回来。(《兒女》-35)

例 142. 他匆匆一揖，便催公子道：“我们少刻再谈，老翁候久了。”(《兒女》-36)

例 143. 及至听见公子小小年纪说了这一番大道理，心中暗暗欢喜。(《兒女》-1)

⁶³ “快々”とも書く。例：勞您駕，給我催他一聲兒，叫他快々の出來。(《今古》沈小霞)

- 例 144. 只見里面是五寸来长一个铁筒儿，一头儿铸得严严的。（《兒女》-31）
- 例 145. 但求重重的治罪，并罚鍰报效。（《兒女》-13）
- 例 146. 公子只是腹内寻思那传话人是谁，默默不答。（《兒女》-23）
- 例 147. 糙米串细米，有一得一，准准的得折耗二成糠秕。（《兒女》-39）
- 例 148. 打发他们早早回山倒也罢了。（《兒女》-21）
- 例 149. 不觉的轻轻啐了他一口。（《兒女》-23）
- 例 150. 这便是我那位恩官安太老爷，你我快快叩见！（《兒女》-21）
- 例 151. 且等借了银子来，咱们慢慢再讲去的话。（《兒女》-3）
- 例 152. 求老爷先别生气，容奴才慢慢儿的回。（《兒女》-40）
- 例 153. 一过北道，便远远望见褚家庄。（《兒女》-14）
- 例 154. 里间儿的内眷也在那里远远儿的从玻璃里望外看。（《兒女》-37）
- 例 155. 转正了细细的一看，画的那三副脸儿。（《兒女》-29）
- 例 156. 且沉着心，捺着气，细细儿的想想再说话。（《兒女》-30）
- 例 157. 珍珍重重的赏给我说，叫我好好用功。（《兒女》-10）
- 例 158. 把身子养得好好儿的，好去见老人家。（《兒女》-3）

AA型の状態形容詞に関して、“AA兒”の形で用いられている用例が複数見られる。この用法について、胡明扬（1987：136）は“‘儿化’似乎有使形容词重叠式转为‘副词’的作用。”と指摘している。また、周一民（1998：112）は“AA兒”と“AA兒de”について、“两种重叠方式是纯粹的北京话，带有浓厚的方言色彩。这两种重叠式由于儿化的作用，大都带有褒义。明显带有贬义的单音形容词一般不能按此式重叠，如‘脏、臭、坏、臊’等。如果在特定语言环境中偶尔按此式重叠，则是贬义褒用的修辞用法。”と論述している。

3.1.2.3 ABB 型状態形容詞

金氏教科書において、ABB型状態形容詞は下記1例のみである。また、この用例は《兒女英雄傳》では見当たらない。

氣橫橫：例 159. 氣橫橫的把袖子掙開，就坐在傍邊兒了。（《今古》沈小霞）

3.1.2.4 AABB 型状態形容詞

金氏教科書では、最も種類が多い状態形容詞がAABB型状態形容詞である。具体的には“含含糊糊、清清白白、真真切切、轟々烈々、惶々張々、慌慌張張、哭哭啼啼⁶⁴、乾乾淨淨、曲曲灣灣、忙忙叨叨、亂亂闐闐、瘋瘋癲癲、坑坑窪窪、切切實實、迷迷糊糊、平平安安、懇懇切切、庸庸碌碌、妥妥當當、聰聰明明兒、爽爽快快兒”があり、計21個ある。

《兒女英雄傳》では、金氏教科書に用いられている“含含糊糊、轰轰烈烈、慌慌張張、忙忙叨叨、平平安安、妥妥當當、爽爽快快”の7つが見られ、全体の3割しか用いられていないことがわかる。また、“爽爽快快兒”の用例がなく、“聰聰明明兒”に関しては、“聰聰明明”と、どちらも用例が見当たらない。

⁶⁴ “哭々啼々”とも書く。例：這話還沒說完哪，就見聞氏哭々啼々的，伸出兩隻手來。（《今古》沈小霞）

- 例 160. 他們兩人這個合同上的話語，說的也不很切實，全都是那麼含含糊糊的。（《便覽》-83）
- 例 161. 我是一個清清白白的人。（《今古》李沂公）
- 例 162. 小僧說的話，都是真真切切的，萬不敢撒一句謊。（《華言》-28）
- 例 163. 他如今正在轟々烈々的時候兒，有錢就隨便花一點兒，後手兒不留。（《撮要》-1）
- 例 164. 手裏拿著一個竹籃子一疋白絹，惶々張々的樣子。（《今古》懷私怨）
- 例 165. 臉上帶着慌慌張張的樣子。（《華言》-29）
- 例 166. 那個婦人哭哭啼啼的說，回稟太爺，小婦人今年十八歲了。（《華言》-27）
- 例 167. 不多幾年，把那家當兒，花了個乾乾淨淨。（《便覽》-68）
- 例 168. 曲曲灣灣的拐過去一看，是一個半塌不倒的亭子。（《今古》李沂公）
- 例 169. 這麼著他就忙忙叨叨的進裏頭去，衝著影壁大聲的一叫，沈公子該走了。（《今古》沈小霞）
- 例 170. 無奈人多亂亂闐闐的，那兒能聽得見呢。（《今古》十三郎）
- 例 171. 我看他說話，怎麼那麼瘋瘋癲癲的。（《華言》-15）
- 例 172. 地下坑坑窪窪的不好走。（《便覽》-74）
- 例 173. 我已經切切實實的囑咐他們了。（《便覽》-83）
- 例 174. 他那個人迷迷糊糊的，到了那兒，說不清道不明的，倒就悞事。（《便覽》-95）
- 例 175. 我管保您一路上，平平安安的到牛莊，決沒失閃的。（《談論》-70）
- 例 176. 他懇懇切切的和我說，屈尊您些日子，緩一緩再動身。（《談論》-12）
- 例 177. 似愚兄庸庸碌碌，尸位素餐，相形之下，寔在自覺慚愧的很了。（《搢紳》-20）
- 例 178. 同江蘇巡撫妥妥當當的，細一商量，斟酌着細定章程。（《公牘》-68）
- 例 179. 看他那外樣兒長得那麼聰聰明明兒的，敢情他心裏不大聖明。（《便覽》-43）
- 例 180. 若不是您和委員靠得住，就能這麼爽爽快快的完了麼。（《談論》-43）
- 例 181. 连我问着也是含含糊糊的。（《兒女》-14）
- 例 182. 从纪大将军那等轰轰烈烈的时候，早看出纪家不是个善终之局。（《兒女》-18）
- 例 183. 爬起来慌慌张张的也给舅太太磕了个头。（《兒女》-40）
- 例 184. 这会子可叫我忙忙叨叨的那儿给他现抓人去？（《兒女》-40）
- 例 185. 你瞧这个瓶，愿你闔家平平安安的。（《兒女》-28）
- 例 186. 他却那里晓得人家娘儿三个早把计议得妥妥当当了呢！（《兒女》-40）
- 例 187. 我是个急性子人，你有话爽爽快快的说，不许恹我。（《兒女》-9）

金氏教科書で“AABB 兒”の形で用いられている用例は“聰聰明明兒”と“爽爽快快兒”の2例がある。この形を取る状態形容詞について、周一民（1998：115）は“这种重叠式是地道的北京方言，按此式重叠的形容词多带褒义或喜爱色彩，可做状语、谓语、补语和定语。”と指摘している。

3.1.2.5 状態形容詞の文法機能

卢小群（2017:280-282）によると、状態形容詞は述語、目的語、補語、連体修飾語、連用修飾語の文法機能を果たしている。金氏教科書と《兒女英雄傳》の状態形容詞において、この5類全ての文法機能が取られている用例が見られる。

① 述語

- 例 188. 我看他說話，怎麼那麼瘋瘋癲癲的。（《華言》-15）
- 例 189. 他那個人迷迷糊糊的，到了那兒，說不清道不明的，倒就悞事。（《便覽》-95）

例 190. 况且人家的话正正堂堂，料著一时驳不倒。⁶⁵（《兒女》-30）

例 191. 你们路上匆匆的，自然也不曾放个定。（《兒女》-12）

②目的語:

例 192. 他們兩人這個合同上的話語，說的也不很切實，全都是那麼含含糊糊的。

（《便覽》-83）

例 193. 一匹是棗兒紅的，一匹是白的。（《華言》-11）

例 194. 连我问着也是含含糊糊的。（《兒女》-14）

金氏教科書と《兒女英雄傳》において、状態形容詞が述語、目的語の文法機能を果たしている用例は僅かである。卢小群（2017:280-282）は“状态形容词作谓语词时后面一般要加上‘的’，（中略）状态形容词作宾语必须要加‘的’。”と指摘している。

③補語

例 195. 不多幾年，把那家當兒，花了個乾乾淨淨。（《便覽》-68）

例 196. 看他那外樣兒長得那麼聰聰明明兒的，敢情他心裏不大聖明。（《便覽》-43）

例 197. 他却那里晓得人家娘儿三个早把计议得妥妥当当了呢！（《兒女》-40）

例 198. 两个眼皮儿还睡得楞楞兒的，从卧房里出来。（《兒女》-38）

例 199. 只见张姑娘两只眼睛揉得红红兒的。（《兒女》-23）

例 200. 凡是应有的，公婆都给办得齐齐整整。（《兒女》-28）

卢小群（2017:281）は“状态形容词作补语往往要加‘得’。”と指摘している。例

195. では、“得”の代わりに“了個”が用いられていることがわかる。

④連体修飾語

例 201. 你瞧，這一匹是紅青緞子。（《華言》-6）

例 202. 臉上帶着慌慌張張的樣子。（《華言》-29）

例 203. 我是一個清清白白的人。（《今古》李汧公）

例 204. 瞧瞧，人家新新兒的靴子，给踹了个泥脚印子。（《兒女》-38）

例 205. 我正有一句要紧要紧的话要问他老人家。（《兒女》-27）

例 206. 我老老实實兒的一个妹妹，怎么一年来的工夫学坏了？（《兒女》-29）

卢小群（2017:281）は“状态形容词一般不能直接作定语，修饰名词作定语时通常要加上‘的’。”と指摘している。

⑤連用修飾語

例 207. 我管保您一路上平平安安的到牛莊，決沒失閃的。（《談論》-70）

例 208. 房德聽他說到這兒就暗暗的點頭。（《今古》李汧公）

例 209. 可就直擺手兒，不叫大家嚷他，就慢慢兒的問真珠姬。（《今古》十三郎）

例 210. 輕輕兒的把屋門開開了。（《華言》-30）

例 211. 王太遠遠兒的看見，前頭有一個人。（《今古》李汧公）

例 212. 他懇懇切切的和我說，屈尊您些日子，緩一緩再動身。（《談論》-12）

例 213. 匆匆忙忙的吃了一顿饭。（《兒女》-17）

⁶⁵ 文法機能を検証するため、《兒女英雄傳》についての用例は金氏教科書に用いられていない状態形容詞が含まれる例文も取り入れる。

例 214. 爬起来慌慌张张的也给舅太太磕了个头。（《兒女》-40）

例 215. 他便安安稳稳的穿好了衣服，先把嬷嬷丫鬟们叫起来。（《兒女》-31）

例 216. 请出老爷的家法来，结结实实打他二十板子，再带进来见我！（《兒女》-36）

例 217. 只有褚大娘子只管在那里坐着默默出神。（《兒女》-16）

例 218. 公子关了门，倒招呼了半夜的嬷嬷爹，这才沉沉睡去。（《兒女》-3）

卢小群（2017:281）は“状态形容词作状语，通常要带上‘地’，（中略）状态形容词也可以直接做状语。（中略）状态形容词作状语时如果出现在多层状语结构中，往往要加上助词‘的’。”と指摘している。金氏教科書において、助詞“地”の用例がなく、全て“的”となり、“的”が付けられている用例と付けられていない用例が両方見られる。

3.1.3 結論

本節では、黄伯荣、廖序东（2017）、周一民（1998）、卢小群（2017）に基づいて、金氏教科書に用いられている形容詞を性質形容詞と状態形容詞の2類に分類し、それぞれを605個と46個抽出した。性質形容詞と状態形容詞の数から、金氏教科書において、状態形容詞の使用が極めて乏しいことが見受けられる。

《兒女英雄傳》との比較対照を通じて、金氏教科書と《兒女英雄傳》の両書における形容詞の使用状況を考察し、使用差異を突き止めた。

まず、性質形容詞では、金氏教科書に用いられている単音節性質形容詞を203個、二音節性質形容詞を402個抽出した。したがって、二音節性質形容詞の数量は単音節性質形容詞の倍になることがわかる。個々の形容詞は検出した結果、《兒女英雄傳》における使い方、或いは形は金氏教科書とは異なることが判明した。

また、《兒女英雄傳》に用いられていない単音節性質形容詞が金氏教科書には7個あり、用いられていない二音節性質形容詞が金氏教科書には147個あることが判明した。そして、その用いられていない二音節性質形容詞に関しては、ほとんどが“形容詞+形容詞”の形になる。したがって、金氏教科書における“形容詞+形容詞”の形を取る二音節性質形容詞では、他の形を取る二音節性質形容詞に比べ、組み合わせやすく、比較的自由に運用しているといえる。

次に、状態形容詞では、金氏教科書に用いられているものが46個あり、その中で最も用例数が多いのはAABB型状態形容詞である。《兒女英雄傳》に用いられていない状態形容詞が金氏教科書には18個あり、約4割を占めていることがわかる。しかし、《兒女英雄傳》では、金氏教科書には用いられていない状態形容詞が数多く存在する。その一つの要因としては《兒女英雄傳》が武俠小説であり、形容詞を使用すればするほど生き生きとした物語が描かれるためであると考えられる。

最後に、性質形容詞と状態形容詞の文法機能についての考察を通して、金氏教科書と《兒女英雄傳》が同じ文法機能を持つことを明らかにした。

3.2 副詞の比較研究

本節は金氏教科書を中心に、中で用いられた副詞を取り上げ、先行研究を踏まえ使用状況と特徴を考察する。さらに、その用法と《兒女英雄傳》の副詞を比較し、それぞれの使用上の差異を突き止めたいと考える。

中国語の副詞は述語部分を修飾する重要な役割を果たしている。文に付け加えることによって、述語の内容をより一層詳しく伝えられる。黄伯荣、廖序东（2017 下冊：17）では“副詞限制、修飾动词、形容词性词语，表示程度、范围、时间等意义。”と指摘している。また、副詞を“①表示程度；②表示范围；③表示时间；④表示处所；⑤表示肯定、否定；⑥表示情态。”6類に分類している。

太田辰夫（1958）では副詞を「①接尾辭⁶⁶；②程度副詞；③時間副詞；④範圍副詞；⑤情態副詞；⑥否定副詞；⑦疑問、感嘆、反詰副詞；⑧指示副詞。」の8類に分類している。

周一民（1998）では副詞を“①程度副詞；②范围副詞；③时间副詞；④处所副詞；⑤量度副詞；⑥频率副詞；⑦语气副詞；⑧情状副詞；⑨否定副詞。”の9類に分類している。

上述した副詞分類に基づいて、金氏教科書における副詞の使用状況と合わせて、本節の考察する副詞を7類に分ける。三者の共有分類は程度副詞、範圍副詞、時間副詞、否定副詞、情態副詞と周一民（1998）の語気副詞、頻度副詞となる。

金氏教科書に使用された副詞を種類別で表3-3.にまとめ、各副詞の後に用例を括弧内に示す。

表3-3. 金氏教科書に用いられている7類副詞とその用例

種類	副詞
程度副詞	很（嚴世蕃聽這話很詫異。）；極（況且人又是極賢惠。）；頂（那裏頭的貨物都是頂好的麼）；怪（叫街坊聽見倒怪不好看的。）；太（貝氏說你也太糊塗了。）；更（他更生氣了。）；最（並且他的心腸還最狠。）；深（深知他屋裏的這個底。）；至（我有兩位至好的朋友。）；足（自己疑惑足可以壓倒群賢。）；頗（頗有成效。）；甚（這麼着甚好。）；越（越做越老實了。）；也（我也聽見說。）；非常（酒席是非常的豐盛）；十分（沈煉十分過意不去。）；稍微（如今不過稍微的盡一點兒心。）；略（房德說您略等一等兒。）；有點兒（他說脉有點兒起色了。）；畧微（畧微的歇一歇兒。）；不大（我有一件事不大明白。）；極其（地方是極其繁華熱鬧。）；格外（承您格外分心，謝謝。）；稍（稍有差別。）；所（他因為看見房德所沒個活路兒，竟靠着吃死飯。）；打頭（打頭那個棧房是個要緊的工程。）；足（哭了足有兩個時辰。）；差一點兒（您這幾天沒在家，差一點兒出個大亂子。）；大（等我太好了，再到府上謝步去。）。
範圍副詞	都（都是什麼貨物。）；總（李勉說我黑下白日總惦記着您納。）；竟（竟等着那個人回來。）；全（這案事沈重兒全在你們倆人身上。）；單（我怎麼能單放他一個人呢。）；單單（就單單的沒畫腦袋。）；至少（那畿尉至少也得送五百疋罷。）；全都（各樣兒東西全都減一成價出賣）；共總（共總五匹馬飛似的跑了去了。）；總共（總共八個人在河西大街一個寶局上耍錢來着。）；通共（通共是三個口岸。）；只（不怕官只怕管。）；只可（只可看自己的運氣怎麼樣罷。）；通盤（通盤合計起來。）；一併（本利一併還清的。）；也都（也都輸完了。）；各斷兒（我看見街上各斷兒都有巡查。）；一概（他一概不知道。）；一齊（就一齊動手。）；一塊兒（爾爲甚麼不跟着我一塊兒到常山去呢。）；滿處（必然是當做新聞滿處傳說。）；滿地（滿地直瞧。）；另（另設立一位道台。）；另外（皇上另外也有賞賜）；凡事（凡事都得有因。）；各自（便可以各自獨當一面

⁶⁶ 太田辰夫（1958：268）は接尾辭について「副詞の接尾辭は多く文語の系統をひくものであるが、古代語には無く、中近世にいたって出来たものが多い。また、古代語にあるものでも、單に文字上的一致にとどまり、その用法は異なるものである」と解釈している。

	了。)
時間副詞	直(後來李勉直作到中書門下平章事。); 快(我快告訴王獄長去罷。); 剛(他剛走到門口兒。); 正(這天他正坐在那兒盤算。); 老(怎麼老沒退堂啊。); 先(我先到館子來了。); 還(我還聽見說。); 初(我們是初會。); 一(只要帳一下來。); 乍(乍一開辦的時候兒,不能立刻就有成效的。); 已經(支成已經不再門礪兒上打盹兒了。); 打頭兒(打頭兒先得選好將。); 起頭兒(剛一起頭兒辦的時候兒。); 正在(他心裡頭正在胡思亂想七上八下。); 剛纔(我剛纔解床底下來的。); 趕緊(陳顏趕緊進來告訴了房德。); 趕緊的(所以他趕緊的逃跑出來了。); 隨時(隨時都可以供的那一層。); 偶然(即或偶然得着點兒酒肉。); 永遠(我永遠記着這話就是了。); 再也(從今以後再也不敢了。); 暫且(暫且支持這個門市。); 立刻(立刻就起了一身雞皮疙瘩); 起初(起初都是胆子小。); 早已(我們早已就惦記上他了。); 早就(月亮早就上來了。); 原先(原先同文館是有幾國的語言館呢。); 冷不防(等著到了那個時候兒,冷不防害爾一下子。); 抽冷子(若是抽冷子跑了,誰當這個沈重啊。); 回頭(等回頭到店裏消停的時候兒,我再告訴您那細話。); 仍舊(仍舊回奉天去了。); 一時(一時不能就回國來。); 漸漸兒(漸漸兒的就往小裏抽抽了。); 早早兒(老弟這一過年早早兒的換頂戴升外任罷。); 從前(從前也請日本國礦師。); 從來(從來沒打過架拌過嘴。); 當初(說出他當初作賊的那件事情來。); 近來(近來添設日本國話學堂。); 纔(這個紙行是去年纔開的。); 現在(我現在忙着寫信哪。); 將來(將來總有個出頭的日子。); 後來(後來若是運氣好。); 時時刻刻(他心裡時時刻刻總惦記着那個姑娘。); 姑且(那都姑且不論。); 尋常(拿吃喝嫖賭全當做了是尋常朋友們的應酬。); 忽然(如今忽然遭這個事。); 依然(依然默默無聞。); 還是(從此以後你們倆誰耶不准忌恨誰,還是照舊的相好。); 仍然(可是仍然不改其教); 這就(我這就派差到雙橋站傳蕭豹去。); 已然(老弟已然功成名就了。); 脚下(脚下各棧裏都沒有東洋油漆碎貨。); 早先(我早先可聽見老前輩談過,說是養蠶先得種桑。); 先頭裡(就是先頭裡救我命的那位畿尉李老翁。)
否定副詞	不(向來不圖人家的禮物。); 沒(他向來就沒穿過。); 別(衆位先別動手。); 不要(足下不要認錯了人哪。); 何必(何必大驚小怪的。); 不必(也不必都得那麼費事。); 未必(兄台也未必深知兄弟家中的詳細。); 不免(不免要煞費苦心的。); 非(他和爾非親非故。); 莫(生行莫入熟行莫出。); 未(未領教您怎麼稱呼。); 休(敗將休言當年勇。)
情態副詞	白(就說我看爾白是個爺們了。); 胡(我就跟他們這麼胡混一場。); 特意(特意來找他。); 親自(他親自給鋪好了。); 一同(一同起身回家去了。); 極力(爾這麼極力的款待他。); 偷偷兒(偷偷兒的出了衙門); 賤賤兒(我打算把痞子裏所有的殘貨都賤賤兒的快賣出去); 連忙(可就連忙答應說。); 只顧(只顧在屋裡爲絹疋拌嘴。); 細細兒(把房德上下細細兒的看了一看。); 偏偏兒的(偏偏兒的望這邊兒一說就碰了。); 空手兒(我就這麼空手兒到縣裏報去。); 快快(吩咐關道催知縣快快要出銀子來。); 快快兒(爾快快兒的打發他起身就結了。); 慢慢兒(就慢慢兒的問真珠姬。); 不由的(不由的也動他的心哪。); 照舊(就把禮物照舊的那回衙門去了。); 貿然(就貿然的動手辦。); 暗中(把李老恆暗中找了去了。); 故意(他就故意的問房德說。); 小聲兒(陳顏小聲兒的回答說。); 暗含着(暗含着是告訴他們說你們別打算挾制我們。); 嚴嚴兒(就應當快嚴嚴兒的禁止。); 悄不聲兒(悄不聲兒的告訴他說。); 隨手兒(玉器和人隨手兒用的東西。); 悄悄兒的(悄悄兒的刨個坑。); 偷偷兒

	<p>的（也不騎馬，<u>偷偷兒</u>的出了衙門。）；儘量兒（他就讓那個客人<u>儘量兒</u>一喝。）；輕易（不但禁止吃豬肉，連豬之一物，豬之一字都不<u>輕易</u>說的。）；好容易（<u>好容易</u>等到天亮，張千又來了。）；一連串兒（騎着馬<u>一連串兒</u>進城。）；一氣兒（這<u>一氣兒</u>就走了有三十多里地。）；並排兒（兵隊都要<u>並排兒</u>走。）；互相（如今咱們兩國彼此<u>互相</u>習學語言。）；就手兒（<u>就手兒</u>瞧瞧那兩匹馬。）；輕輕兒（<u>輕輕兒</u>的褪在袖子裏。）當面兒（我<u>當面兒</u>跟他商量）。</p>
語氣副詞	<p>必（回頭<u>必</u>打發人來叫備去。）；決（<u>決</u>不是推託。）；準（寫的是今日<u>準</u>演什麼新戲。）；可（他<u>可</u>不敢害人）；未（將來可以弄個大事業也<u>未</u>可定。）；倒（一路上<u>倒</u>沒遇見甚麼鬧天氣。）；豈（豈敢。）；並（也<u>並</u>不是他告訴我說你把他告下來的。）；便（<u>便</u>有許多的害處呢。）；硬（就有說俗們<u>硬</u>把天泰棧雇的船搶過十幾隻來。）；非（<u>非</u>到天亮。）；本（起初他<u>本</u>是由勞績保舉了一個小京官。）；絕（那是<u>絕</u>聽不進去的）；偏巧（<u>偏巧</u>那個天又和他作對頭。）；偏（<u>偏</u>是這幾年境遇不佳。）；恰巧（<u>恰巧</u>遇見一個舊日的朋友。）；巧了（東西不少啊，<u>巧了</u>總得賣一天纔能完哪。）；索性（如今<u>索性</u>這麼辦罷。）；一定（我<u>一定</u>重賞你們。）；準準兒（賣出去<u>準準兒</u>的有對合子利。）；管保（還<u>管保</u>叫他們連一個也跑不了。）；果然（如今<u>果然</u>作了官了。）；實在（我<u>實在</u>是出於無奈。）；多麼（那個人有<u>多麼</u>精明。）；只管（<u>只管</u>騎了去就是了。）；竟管（您竟管去罷。）；本來（他<u>本來</u>要發作來着。）；必然（他<u>必然</u>是知道備是個強盜頭兒。）；敢情（抬頭一看<u>敢情</u>是那個義士回來了。）；敢自（那<u>敢自</u>是十分好了。）；簡直的（這<u>簡直的</u>是害了俗們了。）；未必（也<u>未必</u>有一個肯周濟我的。）；莫非（<u>莫非</u>是一覺睡死了麼。）；莫若（<u>莫若</u>還是挪過來做罷。）；大概（<u>大概</u>還可以多漲出幾兩銀子來哪。）；豈不（豈不<u>疑惑</u>麼。）；難道（房德說<u>難道</u>他還是假意麼。）；幸虧（<u>幸虧</u>這位老爺把他命救了。）；多虧（也是<u>多虧</u>李勉審出寃情來。）；千萬（可<u>千萬</u>別說我當年的事情來。）；竟敢（備<u>竟敢</u>私自挪用。）；竟（如今世上<u>竟</u>會有這樣這樣義膽俠腸的英雄。）；還許（我想秋後<u>還許</u>往下落罷。）；自然（我們<u>自然</u>要想法子給你們擇脫的。）；如何（<u>如何</u>敢做那個夢呢。）；固然（<u>固然是</u>省得單預備出買貨的銀子。）；可就（我<u>可就</u>說。）；總算（也<u>總算</u>是碰了一半兒。）；反倒（<u>反倒</u>弄成大不得意了。）；原本（我<u>原本</u>打算老弟府上辦喜事之前可以趕回來。）；究竟（在我看來，<u>究竟</u>所得者少，所失者多。）；不免（<u>不免</u>有些個窒礙。）；其實（<u>其實</u>已經有人告訴我說了。）；到底（<u>到底</u>有這件事沒有。）；怕是（<u>怕是</u>五百個駱駝湊不出來。）；務必（<u>務必</u>要把這案賊辦着。）；何苦（<u>何苦</u>叫朋友疑惑我惱我。）；本來（那<u>本來</u>是以貨換貨的意思。）；未免（那<u>未免</u>的太泥古了）；幸虧（<u>幸虧</u>多慎重。）；無故（不能<u>無故</u>的有這個傳言。）；恐怕（一時還<u>恐怕</u>不能就完案。）；居然（<u>居然</u>成了一個繁華市街了。）；決（<u>決</u>頂不住外頭的欠項。）；的確（<u>實在的確</u>如此。）；橫豎（<u>橫豎</u>總是稱讚大哥的意思。）；好在（<u>好在</u>還不染輕浮的習氣。）；倒也（您說的雖然是趣話可<u>倒也</u>是實情。）；可也（<u>可也</u>沒有像他所選來的夥計，都是那木雕泥塑的人。）；幾乎（我同三舍弟<u>幾乎</u>昏暈倒地。）；或者（他心裡說，<u>或者</u>我命裡該當有些個造化。）；或是（<u>或是</u>把孩子的眼睛給弄瞎了。）；真（身上又<u>真</u>凍得慌。）；真正（凡作官的只要能給百姓開養生之道，那就是<u>真正</u>愛民了。）；左不是（<u>左不是</u>花錢受累罷。）；大約（王生就拿了一包碎銀子，<u>大約</u>有二十多兩。）；怕是（<u>怕是</u>路上有失閃。）；最好（<u>最好是</u>隨遇而安聽其自然。）；難免（怕是有軍務的時候兒<u>難免</u>悞事的）；果真（若是<u>果真</u>有商情苦累的，實在不能如數輸捐，那也只可從長計議的。）；也許（我料估着他們也<u>也許</u>答應）；好好兒（<u>好好兒</u>的照應着）。</p>
頻度副詞	<p>再（備等會子<u>再</u>出去罷。）；又（<u>又</u>把主意改了。）；常（他<u>常</u>說。）；還（昨兒個在堂上<u>還</u>撒謊。）；常常兒的（玄宗皇上也<u>常常兒</u>的召見他。）；</p>

<p>天天兒（他們<u>天天兒</u>吃完早飯）；年年兒（那豐收是<u>年年兒</u>必得有的）；時不常兒的（他<u>時不常兒的</u>來勒索爾）；動不動兒（<u>動不動兒</u>就罰銀充公。）；總是（<u>總是</u>開大一點的買賣。）；屢次（我也<u>屢次</u>的說他。）；往往（<u>往往</u>的有那很不出名的人忽然運氣來了。）；向來（那位知府<u>向來</u>辦事有些個任性的地方兒。）；見天（<u>見天</u>吃飽了就睡。）；再三（<u>再三</u>的求我出去給他們說合）。</p>
--

以上で、金氏教科書に用いられている程度副詞を 29 個、範囲副詞を 26 個、時間副詞を 54 個、否定副詞を 12 個、情態副詞を 36 個、語気副詞を 82 個、頻度副詞を 15 個、計 254 個の副詞を抽出した。

本節では、程度副詞、範囲副詞、否定副詞、情態副詞の 4 類に焦点を当て、《兒女英雄傳》との比較対照を行い、それぞれの使用状況、使用頻度、使用特徴などを考察する。また、本節は基本的に北京語言大学中国語コーパス (BCC) を使用し、《兒女英雄傳》のテキストデータを統計にかけ、例文を引用する。《兒女英雄傳》に関する一部のデータについて趙質群〈《兒女英雄傳》副詞研究〉(2011) を参考にした。

3.2.1 程度副詞

(1) 11 個単音節程度副詞

程度副詞の考察について、まず、金氏教科書に用いられた 11 個の単音節程度副詞を基準として、《兒女英雄傳》で同じく用いられた程度副詞を取り上げ、その使用頻度を表 3-4. に示す。

表 3-4. 金氏教科書と《兒女英雄傳》における 11 個単音節程度副詞の使用頻度⁶⁷

作品	很	太	怪	最	頂	更	深	極	頗	甚	越
金氏教科書	509	110	5	97	40	84	18	69	11	58	35
《兒女英雄傳》	72	16	35	70	3	252	125	73	13	41	87

表 3-4. から、11 個の単音節程度副詞の中で、金氏教科書で最も使用頻度が高いのは“很”であるのに対して、《兒女英雄傳》では「更」の使用が一位であることが分かる。

“很”について太田辰夫の「『兒女英雄傳』の副詞」(1975: 2) は「明代では稀に補語として用いる。明代の北京語では状語として用いられたことが『燕山叢録』によって知られるが作品中で普通に使われるようになったのは『紅樓夢』など清代北京語文学からである。」と指摘している。金氏教科書であろうと、《兒女英雄傳》であろうと、“很”の使い方は現代漢語とほぼ一致する。

金氏教科書において、“很”のほかに、“太”の用例も多く見られるが、《兒女英雄傳》では“太”の用例が僅か 16 例しか見られない。周一民 (1998: 191) によると、“太”と“怪”は北京語の常用程度副詞である。“怪”について、太田氏 (1958: 270) は「《怪》はいうまでもなく<怪しい><怪しむ>意であるが、これが<不思議に><ひどく>の意に転じたものである。おそらく明以後に副詞となったものらしい。」と指摘している。金氏教科書と《兒女英雄傳》において、どちらも“怪”が用いられている用例が少数見られる。

⁶⁷ 表 3-4. に示している《兒女英雄傳》のデータは趙質群 (2011) より引用。

また、比較を表す際に、金氏教科書と《兒女英雄傳》共に“更”が用いられている。また、“最も”、“一番”という意味を表す際に、両方とも“最”、“頂”、“極”が用いられている。周一民(1998:194)は、“‘最、頂’表示程度达到极端，胜过所有其他的。”と指摘している。しかし、“最”より“頂”の用例が少ない。“頂”について、太田氏(1958:269)は「このような副詞の《頂》はその後、長い間、ほとんど用例をみない。清代の北京語でも普通には使われなかったが、後期からみえるようになった。あるいは南方の方言であったものかともおもう。」と指摘している。北京語で“頂”をあまり使用しないことは太田氏が指摘した「南方の方言であったもの」が一つの原因だと考えられる。

そして、金氏教科書では“極”の使い方が程度副詞と程度補語2種類あり、程度補語の用例は例えば、您說的話，全是我們北京的口音，清楚極了。(《華言》-18) //所有那幾個大城池大鎮店，都是一家兒挨一家兒的舖戶，繁華極了。(《便覽》-52)などがある。《兒女英雄傳》にも同じ用法の例文が見られる。例えば：我听说还有雅座儿，好極了。(《兒女》-32)がある。

《兒女英雄傳》で使用された“深”、“頗”はやや文語的で、金氏教科書では殆ど使用されず、現代中国語では書き言葉として使用されている。

“越”について、周一民(1998:194)は“‘越’表示程度的加深，总是两个以上呼应使用，即随着某情况程度的加深，另一情况的程度也相应加深。”と指摘している。

金氏教科書では“越”だけを使用する用例はなく、“越……越……”が17例あり、うち1例は“越……越……越……”である。《兒女英雄傳》に用いられた“越”の使い方は両方ある。

例 219. 於是乎日子越久，嫌隙越深，彼此嫌隙越深，可就倆屋裏變成水炭之勢了。(《摺紳》-5)

例 220. 待了會子越聚人越多。(《今古》十三郎)

例 221. 知縣越說越有氣。(《今古》懷私怨)

例 222. 趕越鬧膽子越大了，可就十個八個人約會在一塊兒，半夜裏上財主人家兒裏去打搶。(《談論》-76)

例 223. 小的越想越可疑，可就翻來覆去的所睡不着了。(《華言》-30)

例 224. 越是遇見這等賢內助，他越不安本分。(《兒女》-27)

例 225. 配着那粉白雪亮的光綾地兒，越顯黑白分明得好看。(《兒女》-29)

金氏教科書における11個単音節程度副詞の用例は表3-3.に示しているため、ここでは、《兒女英雄傳》における11個の単音節程度副詞の用例を以下に示す。

很：例 226. 奴才这个续妹妹却待奴才很亲热，竟像他哥哥一般。(《兒女》-14)

太：例 227. 这话大约是九兄你嫉恶太严，何至说得如此！(《兒女》-32)

怪：例 228. 我怪不舒服的，家里躺躺儿去。(《兒女》-40)

最：例 229. 他最嫌人斗牌，他看见人斗牌，却也不言语。(《兒女》-29)

頂：例 230. 那俩更夫一个生的顶高细长。(《兒女》-4)

更：例 231. 三无庚帖，四无红定，更不可行。(《兒女》-25)

深：例 232. 深望你这番乡试一举成名。(《兒女》-3)

極：例 233. 尽西一所，是个极大的院落。(《兒女》-24)

頗：例 234. 但是要作到这个地步，却也颇不容易。(《兒女》-0)

甚：例 235. 至于我的家乡，离此甚远。(《兒女》-8)

越：例 236. 耳边厢带着两个硬红坠子，越显得红白分明。（《儿女》-4）

(2) 所

太田氏（1965：53）は“所”で「すっかり」、「ぜんぜん」などの意を表すのが北方語だと指摘している。金氏教科書において、このような用例が 48 例見られる。

陈晓（2103：163）により、《紅樓夢》と《儿女英雄傳》には程度副詞“所”の用例が見当たらない。また《北京官話 今古奇觀》において、〈沈小霞相會出師表〉、〈李沂公窮邸遇俠客〉、〈懷私怨狠僕告主〉から程度副詞“所”の用例を 14 例抽出したが、〈十三郎五歲朝天〉に程度副詞“所”の用例が見られないという。筆者は 1 例を検出した。

例 237. 誰知道他們都能挺刑，所不肯招。（《今古》十三郎）

《北京官話 今古奇觀》以外、金氏教科書に用いられている用例を一部示す。

例 238. 那麼您北方所沒有桑樹麼。桑樹也有，止於是不少就是了。（《談論》-39）

例 239. 我那個底下人是個聾子，叫他拿什麼東西得打手式兒，說話是所聽不見。（《撮要》-3）

例 240. 心裡很害怕，躺在床上翻來覆去的所睡不着。（《華言》-27）

例 241. 他們也不肯把姑娘給人家作妾，這麼着他聽這話，所沒了指望了。（《華言》-27）

例 242. 令親的病症，如何。看光景所不見好。（《搢紳》-29）

例 243. 他從當學生起，後來當教習，直到如今，所沒離開那學堂。（《便覽》-2）

例 244. 我這程子連官差帶私事，都湊在一塊兒了，所脫不開身上那兒去。（《便覽》-16）

例 245. 如今各舖子都短人，好手所沒閒着的，是閒着的可又沒好手。（《便覽》-67）

例 246. 這件事早就定規了，你怎麼纔聽見說麼，難道這些日子，所沒人和你提過麼。

（《便覽》-78）

例 247. 趕到下月，就該我們棧裏走貨的時候兒了，那可就得一天忙到晚了，所沒一點兒閒工夫兒了。（《便覽》-85）

陈晓（2103：166）は程度副詞“所”の VP について、褒義或いはネガティブな意味を表すことが稀だと述べ、用例を 5 つ挙げた。挙げられている例文（47）他的买卖所做起来了。（《中国語常用虚詞典》鈴木直治 等）と例文（52）他这些年所发了财了，家里盖的房子实在很多了。（《支那語捷徑》石橋哲尔）は“筆者推測，日集語料の单个例句主要来自实录北京口语，但多半也有一些是作者根据多年所学自造出来的。”⁶⁸と論述している。

金氏教科書には、程度副詞“所”の VP が褒義或いはネガティブな意味を表す用例は 5 例見られ、全て《士商叢談便覽》からである。例 249. は陈晓が挙げている例文（47）に類似しているため、恐らく 1956 に刊行された《中国語常用虚詞辞典》に収録されている例文（47）は“自造”ではなく、“实录北京口语”から取り入れたものだと考えられる。

例 248. 這兩年買賣所做大了，一年也販不少的土貨出口哪。（《便覽》-36）

例 249. 不到一年的工夫，就把買賣所做起來了。（《便覽》-67）

例 250. 從前那條街上，地下坑坑窪窪的不好走，再遇見下雨的天，不是泥就是水，難走極了，如今全都墊好了，所是坦平大道了。（《便覽》-74）

例 251. 僭們北邊大莊稼，再得兩場好雨，秋收就所可望了。（《便覽》-99）

⁶⁸ 陈晓 2103、167 頁。

他にも例 245. は陈晓 (2103) に挙げられている例文 (39) 如今各铺子都短人, 好手所没闲着的, 所有闲着的都没有好手。(《中国语惯用语句例解》⁶⁹三原増水) とほぼ一致することがわかる。したがって、日本人が編纂したこの 2 冊の著作が金氏教科書を参考にした可能性があると思われる。

3.2.2 範囲副詞

(1) “竟”、“淨”

“竟”と“淨”は“只”の意味を表す範囲副詞である。太田氏 (1975: 5) は「北京語で「淨」「竟」は同音であるが、同音でない地方では「淨」を用いるようである。「竟」はもと時間副詞でこれが範囲副詞「淨」と混用されるようになったものか。『紅樓夢』などには無く、《兒女英雄傳》が初出かとおもわれる。《兒女英雄傳》では「竟」は時間的な意味をもち、「常に…ばかり」の意であるらしい。「淨」は“…だけ”で、時間的な意味は無い。『官話指南』の例では、この差異がなくなっている。」と指摘している。ここでは、太田氏が挙げている例文を引用する。

例 252. 別竟靠奶媽。(《兒女》-20)⁷⁰

例 253. 這事竟靠媳婦兩個也弄不成。(《兒女》-33)

例 254. 淨嫁妝就是十萬黃金十萬白銀。(《兒女》-31)

金氏教科書では“淨”は範囲副詞として使用されず、形容詞として使用され、“干淨”の意味を表す。

例 255. 几榻整齊, 器具潔淨。(《今古》李汧公)

例 256. 路信就叫掌櫃的給他們找一間乾淨房子住。(《今古》李汧公)

また、“竟”は時間副詞と範囲副詞として使用され、「常に…ばかり」の意として用いられる用例と「…だけ」の意として用いられる用例両方ある。

「常に…ばかり」の意:

例 257. 他把真珠姬留在他家裡, 竟拿好話安慰他。(《今古》十三郎)

「…だけ」の意:

例 258. 河裏竟剩了十幾隻糟朽不堪的船了。(《談論》-90)

太田氏の指摘から、“竟”と“淨”が範囲副詞として使用される際に中国の白話小説でも、日本の北京語教科書でも、既に混用現象が生じていたと推測できる。しかしながら、金氏が編纂した会話教科書では“竟”を時間副詞、或いは範囲副詞として、また“淨”を形容詞として使い分けている。この理由は金氏が会話教科書を編纂する際に、日本人学習者たちに分かりやすくするため、意識して言葉の混用現象を最低限にしようとしたと考えられる。

⁶⁹ 陈晓 (2013:165) は《中国语惯用语句例释》と記載しているが、実際は《中国语惯用语句例解》(1948, 第三書房)。

⁷⁰ 太田辰夫 1975、5-6 頁。

3.2.3 否定副詞

(1) “没”と“没有”

周一民 (1998 : 210) は“‘不’和‘没’都表示否定，是两个主要的否定副词。北京话里几乎不说否定副词‘没有’，一般都说‘没’。”と指摘している。金氏教科書では“没”も“没有”も、“無”と“未”の意味として両方用いられる。

“無”を表す：例 259. 連一個人也沒有了。(《今古》李沂公)

例 260. 我們那舖子裏，直沒有一個會辦事的人。(《便覽》-85)

例 261. 一洗手不幹了，大概也沒人知道。(《今古》李沂公)

例 262. 皆因本主兒有好事出外去了，家裏沒人照管買賣，纔租給我做了。(《指南》-7)

“未”を表す：例 263. 這件事現在本國沒有來文書，所以此時不可以商量辦。(《公牘》-25)

例 264. 路楷想了半天就說，我想竟殺了沈鍊，沒有連累上他的兒子，嚴相國有不滿俗們的意思。(《今古》沈小霞)

例 265. 張千李萬兩人受不過刑了，就直哀求說，沈襄實在沒有死，求大老爺給我們限期，我們找沈襄去。(《今古》沈小霞)

例 266. 如今廠子裏也沒收着那個合同和圖樣。(《談論》-78)

例 267. 您那位令親，沒來找您評理來麼。(《談論》-62)

例 268. 我當是他已經找您來評過理了，敢情他還沒來哪。(《談論》-62)

《兒女英雄傳》では“無”の意味を表す際に金氏教科書と同じく、“没”と“没有”が両方用いられている。

例 269. 招出事来，弄的我两头儿照顾不来，你可沒有两条命！(《兒女》-6)

例 270. 邓九公喝起来更是鲸吞一般的豪饮，沒有吃菜的空儿。(《兒女》-15)

例 271. 大家趁此胡掬了些细软东西，只剩了四个张口货的驮骡沒人要。(《兒女》-11)

例 272. 你歇歇儿也就回去罢，家里沒人。(《兒女》-22)

一方、“未”の意味を表す際にも“没”と“没有”が両方用いられているが、“没有”は例外だという。

太田氏 (1975 : 13-14) は「『紅樓夢』や『品花宝鑑』では、どちらも用いるが、『兒女英雄傳』では「没」に限られ、「没有」は例外と認むべきである。筆者が検出し得たのは下の2例にとどまる。(中略) 那部書竟沒有載這句方言。(《兒女》-4) //果然沒有看見。(《兒女》-38)」と指摘し、また、「なお、『小額』では「没」のみを用い「没有」はない。『北京』では「没」が多く、「没有」はきわめて稀。「未」の意味に「没」を用いるのは旗人語ではあるまいか。」と指摘している。

《兒女英雄傳》で“未”の意味として用いられた2つの用例を例外と認めるべきであることは金氏教科書に“没有”という語彙が“未”の意味を持つ用例が見られることから両書において“没”の語彙機能の変化が窺える。

(2) “不要”と“别”

周一民 (1998 : 211) によると、北京語で禁止を表す際は“甬”と“别”を用いる。金氏教科書では“甬”の用例がなく、“别”が139例、“不要”が4例を用いられている。

また、《兒女英雄傳》では“甬”の用例もなく、“別”が138例、“不要”が64例となる。両方とも“不要”より“別”の用例数が多い。それぞれの用例を以下に示す。

例 273. 老爺千萬不要大聲的說話。（《今古》李沂公）

例 274. 足下不要認錯了人哪。（《今古》李沂公）

例 275. 我聽見說僭們各省兵營裏所用的槍，全要改成一律，不要一省用一樣兒槍，怕是有軍務的時候兒，難免悞事的。（《談論》-61）

例 276. 遇見鬧天氣犯潮的時候兒，該挪的挪，該晾的晾，總不要叫貨物受了潮濕。（《華言》-20）

例 277. 昨兒個來了倆馬快，央求我先別遞催呈。（《談論》-67）

例 278. 彼此彼此，我今兒是造次來奉訪，請兄台別見怪。（《虎頭》）

例 279. 每逢我和他商量什麼事情，你別旁邊兒多嘴多舌的。（《撮要》-3）

例 280. 我給你去問一問，成了你也別喜歡，不成你也別惱。（《華言》-16）

例 281. 你不要把他擱在門兒外頭，把他約在這前廳里。（《兒女》-17）

例 282. 這往后都是活路了，母親可不要再着急伤心了。（《兒女》-12）

例 283. 別管那些，咱們踹開門進去瞧瞧。（《兒女》-6）

例 284. 你別走，我同你商量。（《兒女》-4）

“不要”と“別”について、太田氏（1958：303）は「禁止をあらわす副詞《別》は明代にも若干あるが多く用いられるようになったのは清代である。《不要》の縮約された形であるともいわれるが正しくない。」と指摘している。また、《兒女英雄傳》に用いられた“不要”と“別”については、“不要”が普通語で、“別”が口語的に用いられている⁷¹。

金氏教科書に用いられている“不要”の4つの用例に関して、例 273. は使用人が家主にアドバイスを提供する場面で、例 274. は官職の持つ二人の会話場面で、例 275. と例 276. は公的な場面である。用いられている場面から、“不要”がより正式的な言い方だと考える。また、“別”の用例数が139例に対して、“不要”が僅か4例しか用いられていないことから、金氏教科書は口語性が強い教科書だと言える。

3.2.4 語気副詞

(1) “敢”組

金氏教科書と《兒女英雄傳》に用いられた“敢”組語気副詞は“敢情”、“敢自”、“敢則”、“敢是”の4つとなる。周一民（1998：207-209）は“敢情”を“肯定语气副词”と“醒悟语气副词”に分類しており、“敢情”は現代北京口語に属する副詞であると判断できる。

“敢”組語気副詞の中で、金氏教科書で最も使用頻度が高いのは“敢情”である。太田氏（1958：291）は「北京語では《敢自》ともいう。また《敢情》も同類の語。《原來》の意味のときと、《自然》《當然》の意味のときとある。」と指摘している。金氏教科書では、“敢則”と“敢是”の用例が見当たらないが、“敢情”の用例が33例で、“敢自”の用例が3例ある。それぞれの用例を以下に示す。

例 285. 房德聽這話，可就嚇了一跳，心裡說敢情這群人，是一夥子強盜啊。（《今古》李沂公）

⁷¹ 太田辰夫 1975、14 頁。

例 286. 有一個底下人說出實話來了，敢情那天是胡阿虎在路上喝醉了，把請帖丟了。

(《今古》懷私怨)

例 287. 趕他們來到跟前兒我一瞧，敢情是一群打圍的。(《便覽》-56)

例 288. 王太說若是老爺肯收留我，在衙門裡頭當個跟役，那敢自是十分好了。(《今古》李沂公)

例 289. 那好辦，我現在往西長泰給客人送行李去，我就手兒帶了去好不好。那敢自好，勞你駕罷。(《談論》-46)

例 290. 那敢自是好極了，不過是這麼勞動您我真過意不去。(《指南》-5)

金氏教科書においては、“敢情”の用例が全て“原來”の意味を表す、“敢自”の用例が全て“自然”“當然”の意味を表す。したがって、“敢情”と“敢自”が使い分けられていることが見受けられる。

一方、《兒女英雄傳》では“敢情”と“敢自”の用例が見当たらず、“敢則”と“敢是”が用いられている。それぞれの用例が 28 例、30 例となり、使用頻度がほぼ同じである。

例 291. 敢則你都打扮得这么光梳头净洗脸儿的了。(《兒女》-38)

例 292. 那么说，这俩钱儿敢則花的不冤，到底是奴才糊涂。(《兒女》-39)

例 293. 众人齐说：“那敢是求之不得！只不知这位老爷现今在那里？”(《兒女》-21)

例 294. 他才知敢是太太也有这番恩典。(《兒女》-40)

“敢則”、“敢是”、“敢情”、“敢自”の使用差異について、太田氏(1975:10)は「《敢情》《敢則》この2語は同義語で文字はいろいろに書かれる。『兒女英雄傳』では「敢則」が用いられ、また同じ意味で「敢是」ということが多い。(中略)『小額』には「敢情」はあるが「敢自」などは無く、『北京』には「敢情」はなく、「敢則」が見える。これは北京語内部の小方言のちがいであろうか。」と指摘している。

(2) “管”組語氣副詞

金氏教科書と《兒女英雄傳》に用いられた“管”組語氣副詞は“管保”、“保管”、“管取”、“管情”、“管定”の5つとなり、何も“必ず”という意味を表す。周一民(1998:207)は“管保”を“肯定语气副词”に分類しており、“管保”は現代北京口語に属する副詞であると判断できる。

太田氏(1975:6)は「北方では「管保」を用い、南方では「保管」(保管)を用いるが意味は同じ。また動詞のごとくにもとれる。この「管」は、古白話の「管」「管取」「管情」「多管」などに同じく、かならずの意。」と指摘している。

金氏教科書では“管保”だけが用いられ、用例が9例ある。《兒女英雄傳》では“管保”、“保管”、“管取”、“管情”、“管定”の5つが全部用いられ、それぞれの用例が15例、1例、8例、1例、1例となる。それぞれの用例を以下に示す。

例 295. 我管保您一路上平平安安的到牛莊，決沒失閃的。(《談論》-70)

例 296. 我管保三天之内，準可以把那個拐子拿來。(《今古》十三郎)

例 297. 那件事你可以應承給他辦，可不必說是管保準行，總要留個退身步兒。(《便覽》-31)

例 298. 不論多少萬兩銀子，我管保萬無一失的。(《便覽》-97)

例 299. 頂上這兩扇門，管保你就可以放心睡覺了。(《兒女》-40)

例 300. 這件事交給姐姐，保管你稱心如意！(《兒女》-9)

例 301. 这话倘被父母听见，管取大大的教训一场，我看你那时颜面何在！（《兒女》-23）

例 302. 再加上邓九公大敞辕门的一说，管情费了许多的精神命脉说《列国》的说了一天。（《兒女》-19）

例 303. 你管定连门儿也不准他进。（《兒女》-19）

金氏教科書と《兒女英雄傳》において、“管保”の用例が最も多く、それ以外の用例がかなり少ないことから、当時、必ずという意味を表す“管”組語気副詞の中では、“管保”の使用が一番安定していたことが分かる。

(3) “簡直的”、“剪直的”

太田氏（1958：290）は「この語は比較的新しいようで、兒女英雄傳には《剪直的》につくり、必らず《的》をとる。現在では《的》はとることもあり、とらないこともある。現代語の意味は、①率直に、あからさまに、まっすぐに、②いっそ、③まったく、まるで、などがあるが、はじめの意味が基で、②③はそれから派生したものらしい。」と指摘している。《兒女英雄傳》において、“簡直的”の用例がなく、“剪直的”の用例が4つ見られることに対して、金氏教科書においては、“剪直的”の用例がなく、“簡直的”の用例が13例見られる。

例 304. 那條街上新開的大小舖子很多，簡直的成了一個繁華地方兒了。（《便覽》-74）

例 305. 俩人常是這麼惱了好，好了惱的，簡直的是小孩子一樣。（《便覽》-63）

例 306. 後來簡直的連一個理他的人也沒有了。（《談論》-28）

例 307. 簡直的越辦越沒信兒了。（《指南》-3）

例 308. 他簡直的是窓大腦袋。（《撮要》-3）

例 309. 他們說一句聞氏就駁一句，張千李萬簡直的說不過他。（《今古》沈小霞）

例 310. 剪直的我就叫这俩孩子认你作个干老儿，他俩就算你的干儿子。（《兒女》-39）

例 311. 这么着罢，老爷剪直的拿白话说说是怎么件事罢。（《兒女》-40）

例 312. 老爷就给他个一二百也不算少，就剪直的给他三百也不算多。（《兒女》-39）

例 313. 你有甚么好花儿呀、好吃的呀，就剪直的给我带、给我吃，不爽快些儿吗？（《兒女》-29）

《兒女英雄傳》に見られる4例は太田氏が提示した「②いっそ」と訳すが、金氏教科書において、全13例の“簡直的”の意味は太田氏が提示した「③まったく」に当たり、①と②に当たる用例は見当たらない。「③に相当するものは清代にはない。」⁷²という論説があるが、少なくとも清末の金氏教科書には③に相当する用例がある。

3.2.5 情態副詞

金氏教科書において、情態副詞“白”の用例が16例あり、語義が2つに分けられる。語義①（賠償を払わないで）ただで、11例ある。語義②（目的をはたせず、効果をあげられず）無駄に、むなしく、5例ある。この2つの語義では現代中国語にも使用されている。

語義①：例 314. 若是不答應他們，不是白叫他們害了麼。（《今古》李汧公）

例 315. 皆因賊多兵少，寡不敵衆，若是真動手，也是白受賊的傷。（《便覽》-

⁷² 太田辰夫 1958、290 頁。

- 例 316. 我無故的白受這一肚子氣。（《撮要》-2）
 例 317. 他算是白叫人惱了一年多，您說冤不冤。（《談論》-57）
 例 318. 你又得一個拾金不昧的名，你又白得一個元寶，你這叫名利兼收。（《華言》-25）

- 語義②：例 319. 儂白聰明了，連這個事都見不透。（《今古》李汧公）
 例 320. 我和他們講了半天理，那算是白說。（《虎頭》）
 例 321. 人若是竟讀書不明理，那個書不是白讀了麼。（《便覽》-41）
 例 322. 這不是無故的白作額疼麼。（《便覽》-30）
 例 323. 一旦有事全不得用，那也不過是白費軍餉。（《撮要》-8）

《兒女英雄傳》では上記した語義①と語義②以外に、もう一つ語義がある。下に示した3つの例文に用いられた「白」の語義については、語義①と語義②どちらも対応しておらず、明らかに異なっている。

- 例 324. 你老白想想，我这话是为我、是为你？（《兒女》-5）
 例 325. 也有说白来看看的，也有说打听任上一向有无家信的，却都不肯明说。（《兒女》-3）
 例 326. 回来你老打了尖，就打那庙头里过，白瞧瞧那烧香的人有多少！（《兒女》-38）

张谊生《近代汉语情态化副词“白”再议——兼论副词“白”的虚化方式和内部差异及联系》（2003：4）は、この“白”の語義を“特意、随意”または“只是、光是”の意味と解釈した。そのため、金氏教科書に用いられた“白”を“白¹”と呼び、用いない語義③の“白”を“白²”と呼ぶ。

“白²”の出どころについて、魏兆惠《清代北京官话特殊副词“白”来源于满语的若干旁证》（2017：129-131）は“从文献来源看，特殊副词‘白’主要分布于三类北京官话文献中，而在同时期的其他方言作品中未见。第一类：满汉合璧、满兼汉或者北京官话教科书。第二类：清代北京官话小说，如《红楼梦》及续书系列、《儿女英雄传》《三侠五义》《绿野仙踪》《白雪遗音》等。第三类：北京说唱文艺作品，如子弟书。”と指摘している。

また、「白²」の由来について、杨杏红（2014：237）は“可在清代方言文献，如《儒林外史》、《西游记》、《歧路灯》、《醒世姻缘传》等中都没有“白²”的用例。这些现象都说明“白²”的产生跟清代满语的接触有很大关系。”と指摘している。

これまでの学術的見解では、“白²”は満洲語との関わりが深いと言われている。また、魏兆惠（2017：131）は“白²”の使用状況について、“从多部北京官话作品的改写版看，‘白’因为意义费解多次被删、改。”と指摘している。このことから、“白²”の使用者と使用範囲は限られ、方言の色彩がかなり濃い言葉だと推測できる。逆に、同じ北京語で書かれた著作でも、《兒女英雄傳》の方が金氏教科書より方言の色彩が色濃く残っていると判断できる。金氏が編纂した教科書では、筆者が研究した限り、満州語の痕跡が薄い、それはおそらく金氏が教科書を編纂する際に「官話」でない言葉を慎重に取り扱っていたためと考えられる。

3.2.6 結論

本節では、金氏教科書を中心に、用いられた副詞を取り上げ、黄伯荣、廖序东の《现代汉语》、太田辰夫《北京語歴史文法》、周一民《北京口语法》（词法卷）の副詞分類に基づいて、7類に分類し、計254個副詞を抽出し、それぞれの用例を挙げた。さらに、分類した副詞の中で北京語の特徴が鮮明な副詞と、《兒女英雄傳》に用いられた副詞との比較分析を行い、同じ副詞における使用上の差異とその成因を突き止めた。

程度副詞については、11個の単音節程度副詞を考察した結果、金氏教科書では、最も使われているのが“很”で、“太”が次になる。一方、《兒女英雄傳》では最も使われているのが“更”で、“深”が次になる。《兒女英雄傳》で使用された“深”、“頗”はやや文語的で、金氏教科書では殆ど使用されていないことが判明した。また、「すっかり」、「ぜんぜん」などの意を表す程度副詞“所”の使用では、金氏教科書には48例が見られるが、《兒女英雄傳》には見当たらない。

範囲副詞について、《兒女英雄傳》では、時間副詞“竟”が範囲副詞“淨”と混用されるようになった一方、金氏教科書では“淨”が清潔という意で、“竟”が時間副詞と範囲副詞として用いられている。

否定副詞について、金氏教科書では“没”も“没有”も、“無”と“未”の意味として両方用いられることに対し、《兒女英雄傳》では“未”の意味を表す際にも“没”と“没有”が両方用いられているが、“没有”は例外である。また、禁止を表す“不要”と“別”では、両書どちらも“別”が優位に用いられているが、《兒女英雄傳》より、金氏教科書における“不要”の用例が少ないことがわかる。

語気副詞について、金氏教科書では“敢情”、“敢自”、“簡直的”が用いられているが、《兒女英雄傳》では“敢情”、“敢自”、“簡直的”の用例が見当たらず、“敢則”、“敢是”、“剪直的”が用いられている。また、金氏教科書では“管保”のみが用いられているが、《兒女英雄傳》では“管保”を含む5つの必ずという意味を表す“管”組語気副詞が用いられていることがわかる。

状態副詞“白”については、《兒女英雄傳》では見られるが、金氏教科書では見られない。この“白”は満洲語との関わりが深いと言われていることから、使用者と使用範囲は限られ、方言の色彩がかなり濃い言葉だと推測できる。

この比較対照を通じて、金氏が自身で編纂した会話教科書には日常で最も使われている北京語副詞が《兒女英雄傳》よりも多く取り入れられていた事実が判明した。また、金氏が北京語の教材を編纂した際に、日本人学習者に理解しやすいように、言葉の混用現象或いは同じ言葉での意味の混用現象を最低限に押さえようとした努力も見受けられた。

3.3 文末語気助詞の比較研究

本節では金氏教科書の中で用いられた文末語気助詞を取り上げ、先行研究を踏まえ使用状況と特徴を分析し、その用法と《兒女英雄傳》の文末語気助詞を比較し、それぞれの相違点を解明したいと考える。また、本節は基本的に北京語言大学中国語コーパス(BCC)を使用し、《兒女英雄傳》に関するデータを統計にかけ、例文を引用する。《兒女英雄傳》に関する一部のデータは邓岩〈《兒女英雄傳》语气词研究——兼与《红楼梦》比较〉(2017)を参考にする。

邓岩 (2017 : 9-11) によると、《兒女英雄傳》の文末語気助詞は2類に分けられる。一種類は文語文の語気助詞“也、矣、耳、焉、乎、哉、欵、者”の、全部で8個あり、その中では“也”と“矣”が使われた頻度が一番高い。もう一種類は現代中国語の語気助詞であり、更に一音節、二音節、三音節に分類できる。一音節の文末語気助詞は“啊、阿、呵、呀、哇、哪、呢、哩、罷、吧、嘍、了、咧、羅/囉、嗎、麼、的、叻、来、拉、价、喂、哪、噓、憐、嚟”で、合計26個である。二音節の文末語気助詞は“而已、罷咧、罷了、也罷、不成、就是、啦阿、着呢”の、合計8個で、三音節の文末語気助詞は“就是了”のみとなる。

金氏教科書に用いられた文末語気助詞は“了、的、罷、呀、哪、啦、麼、嗎、啊、呢、納、來着、就是了、就得了、就結了”で、合計15個あり、“納”を除いて、残りの14個は全て《兒女英雄傳》の現代中国語の語気助詞に含まれている。文末語気助詞の使用状況は、《兒女英雄傳》では文語文の語気助詞を8個使用されることに対して、金氏教科書ではこの8個の文語文の語気助詞が一切使用されていないため、《兒女英雄傳》では白話文の色彩が濃く残っていると分かる。

金氏教科書と《兒女英雄傳》での使用状況比較データを表3-5.に示す。

表3-5. 《兒女英雄傳》と金氏教科書に使われた現代中国語文末語気助詞の使用状況⁷³

項目	《兒女英雄傳》		金氏教科書	
	使用頻度	割合	使用頻度	割合
了	4070	56.68%	4167	58.03%
啦/拉	2	0.03%	8	0.11%
的	885	12.32%	1502	20.92%
麼	113	1.57%	536	7.46%
嗎	213	2.97%	2	0.03%
罷	463	6.45%	365	5.08%
呢	906	12.62%	547	7.62%
啊	115	1.60%	126	1.75%
哪	52	0.72%	279	3.89%
呀	299	4.16%	112	1.56%
納	0	0.00%	15	0.21%
來着	38	0.53%	33	0.46%
就是了	19 ⁷⁴	0.35%	135	2.27%
就得了	3		15	
就結了	3		13	
合計	7181	100%	7855	100%

金氏、文氏は共に北京出身で、金氏教科書と文氏の《兒女英雄傳》は両書ともに北京語で書かれているが、表3-5.から両方で用いられた文末語気助詞の使用状況の相違点が見えてくる。

先ず、《兒女英雄傳》と金氏教科書で用いられた15種類の文末語気助詞の中で最も使用頻度が高いのは“了”であり、両方で使用された“了”が文末語気助詞の半分以上を占めていることから、“了”が主要な文末語気助詞とすることができる。

⁷³ 表3-5.に示している《兒女英雄傳》のデータは邓岩 (2017) より引用。

⁷⁴ 邓岩 (2017 : 45) は“就是了”が2例あると記載されているが、筆者が北京語言大学中国語コーパス(BCC)で19例を検出した。また、“就得了”、“就結了”の用例数が記載されていないため、筆者が(BCC)で各3例を検出した。

次に疑問を表す“麼”と“嗎”の使用について、《兒女英雄傳》に使用された用例はそれぞれ113例と213例あり、使用割合から見ると、“麼”より“嗎”の使用頻度が高いことが分かる。逆に、金氏教科書では殆ど“麼”が使われ、“嗎”の用例が2つしか見当たらない。

更に、金氏教科書に使用された日本明治時代の北京官話教科書にもよく使われる文末語気助詞“納”が《兒女英雄傳》では使用されていないことが分かる。また、金氏教科書では“就是了、就得了、就結了”が163例使用されたことに対し、《兒女英雄傳》それぞれ19例、3例、3例あり、計25例しか見当たらないことが明らかになった。

他にも、《兒女英雄傳》では“哪”の使用率は1%未満だが、金氏教科書では使用率が3.89%に上がる一方で、“呢”の使用率を見ると、《兒女英雄傳》より金氏教科書では下がったことが分かる。

3.3.1 “啊”系

(1) “啊”

孙锡信(1999:172-173)は“‘呵’是‘啊’的前身,‘阿’是‘呵’的异体。(中略)明代开始,又出现了‘啊’。‘啊’和‘呵’是同一个语气词,仅字形不同。”と指摘している。邓岩(2017:19-21)により、《兒女英雄傳》に“呵”、“阿”、“啊”の用例がそれぞれ5例、39例、115例ある。一方、金氏教科書では“啊”のみが使用され、126例ある。金氏教科書では、“啊”が主に感嘆を表す用法と疑問文に添えられ、疑問の語気を強める用法となる。

感嘆：例 327. 雖然死的可憐哪，這也是他默默中的報應啊。(《華言》-17)

例 328. 那要錢的害處，實在不小啊。(《談論》-84)

例 329. 你既是願意留那個貨，你早言語啊。(《便覽》-65)

疑問の語気を強める：例 330. 掌櫃的貴姓啊。(《華言》-1)

例 331. 這個表裏頭有配活沒有啊。(《華言》-2)

例 332. 你的那個鋪子倒過來，怎麼不換字號啊。(《指南》-7)

《兒女英雄傳》に“啊(呵、阿)”の用法は上述した2つの用法以外にも、命令と列挙の用法がある。

感嘆を表す：例 333. 姑娘好眼亮啊！(《兒女》-28)

疑問の語気を強める：例 334. 喜得他一催驴儿，奔到跟前，便开口问道：“那里是东庄儿啊？”(《兒女》-14)

命令：例 335. 他正不解，便听何小姐在屋里咳嗽，叫了声：“来个人儿啊。”(《兒女》-38)

列挙：例 336. 米呀、茶叶呀、蜡呀，以至再带上点儿香啊、药啊，临近了，都到上屋里来取。(《兒女》-34)

(2) “哪”

太田氏(1958:377)は「《哪》」は清代になって用いられた。」と指摘している。杨杏红(2014:144)は“‘哪’在日本明治时期的北京官话教科书中是一个常见的语气词,主要表示感叹。(中略)‘哪’在清代以前,写作‘那’,可以表示疑问和非疑问两种语气,清代以后虽然主要用于感叹语气,但是在日本明治时期的北京官话教材中,‘哪’还可以用来表示疑问语气。”と指摘している。《兒女英雄傳》と金氏教科書に使用された

“哪”は感嘆を表す用例と疑問文に添えられており、疑問の語気を強める用例の両方が見られる。

感嘆：例 337. 提起老伯大人，那還是我們衙門的老前輩哪。（《摺紳》-1）

例 338. 你猜怎麼着，我走了足有六刻的工夫兒還沒到哪。（《撮要》-2）

例 339. 我現在忙着寫信哪，不能見他。（《華言》-10）

例 340. 你老也得一張罷？好齊整白面哪。（《兒女》-14）

疑問の語気を強める：例 341. 你們倆人瞞着這個，背着那個的，又商量什麼發財的事情哪。（《便覽》-70）

例 342. 閣下這一向用甚麼功哪。（《談論》-1）

例 343. 掌櫃的在那兒哪。（《虎頭》）

例 344. 我替你們白出的是甚麼苦力呀！你們給我多少工錢哪？（《兒女》-24）

(3) “納”

太田辰夫（1965：41）は“您納”を北京語の特徴を持つ語で、南京官話には用いられないと指摘している。楊杏紅（2014：146-147）によると、“納”は日本明治時代北京官話教科書に現れた特殊語気助詞であり、二人称と三人称の後ろに添え、“你納”、“您納”、“他納”になるという。

金氏教科書においては、“您哪”とうい書き方はなく、全て“您納”となり、文末に置かれ、計 15 個ある。一方、《兒女英雄傳》には“納”の用例が見当たらない。

例 345. 李勉說我黑下白日總惦記着您納。（《今古》李汧公）

例 346. 房德說多謝義士的高情，我在衙門裏等候着您納。（《今古》李汧公）

例 347. 趕您走的前兩天，告訴我一聲兒，我把信寫得了，交給您納。（《華言》-7）

例 348. 我給五兩銀子賣不賣。五兩銀子，不行您納。（《華言》-1）

例 349. 是那一位。是我呀您納。（《華言》-2）

例 350. 借光您納，這店裏住著的有一位周老爺麼。（《華言》-2）

“您納”の由来について、張卫东の《語言自述集：19 世紀中期的北京話》（2002:129）は“您 nin²，更普遍的是說：你納 ni-na，這又是你老人家 ni lao jên chia 的縮略形式。”と指摘した。この解釈について、楊杏紅（2014：147）は“這一句話的後半句指出了‘你納’的來源，‘你老人家’的縮略形式是‘你老’，而最後發展成為‘你納’很可能是受語音的同化和脫落的双重影響，‘ni-lao’後面的雙元音在口語中‘o’脫落，成為‘ni-la’，而後面一個音節的輔音‘l’受到前面一個音節韻尾‘n’的同化，而最終在口語中變化成為‘ni-na’。”と指摘した。

(4) “呀”

孫錫信（1999：166）は“早在宋代就已出現與‘也’相通的記錄 ia 音的語氣詞‘啞’‘耶’，金元時這個語氣詞又用‘呀’來記錄。它所表示的語氣主要是①反問；②呼喚；③感嘆。‘呀’是個新興的語氣詞書寫形式，在長時期中不能得到普遍運用。”と指摘している。

《兒女英雄傳》では“呀”の用例が 299 個あり、用法はかなり豊富である。

感嘆：例 351. 褚大娘子說：“嗷哟，妈哟！你怎么这么实心眼儿呀！”（《兒女》-39）

疑問の語気を強める：例 352. 那跟的店伙問說：“行李卸不卸呀？”（《兒女》-4）

命令：例 353. 說着，便叫：“來個人兒呀。”（《兒女》-40）

列举：例 354. 独有到了自己的婚姻了，甚么叫英雄呀豪杰呀，只有听天由命。（《兒女》-26）

呼び掛け語：例 355. 列位呀！照这话听起来，你我都错了，错大发了！（《兒女》-21）

金氏教科書には「呀」の用例が 112 例で、感嘆を表す用法と疑問文に添え、疑問の語気を強める用法 2 類になる。

感嘆：例 356. 然而衙門以内公事甚多呀。（《搢紳》-4）

例 357. 這原是海關上的規矩，也抱怨不上你們來呀。（《談論》-13）

例 358. 你若是肯照顧我們，那我們是求之不得的呀。（《華言》-4）

疑問の語気を強める：例 359. 您打算多咱拜客呀。（《搢紳》-11）

例 360. 你打算送他多少東西呀。（《今古》李汧公）

例 361. 掌櫃的你們這個箱子裏頭，是甚麼東西呀。（《虎頭》）

(5) “了”

周一民（1998：268）は“语气词‘了’与时体助词‘了’既有瓜葛又有区别。时体助词‘了’附着在动词之后，表示动作变化的完成或实现。语气词‘了’附着在句子末尾，表示事态发生了变化，并表示不同的语气。在一定条件下，二者可以重合。”と指摘している。

金氏教科書と《兒女英雄傳》で用いられた“了”は、アスペクト助詞“了”と文末語気助詞“了”両方で使用される。本節では文末語気助詞“了”のみ分析する。

《兒女英雄傳》と金氏教科書に用いられた文末語気助詞“了”の用法は 3 種類あり、新状況の発生や変化、感嘆を表し、疑問文に添えられ、疑問の語気を表し、動作或いは状態の完了、実現を提示する。

新状況の発生や変化：

例 362. 因為去年我辦去的貨，在海面上遭了風了。（《華言》-9）

例 363. 這麼着馬掌櫃的給我來了一封信，告訴我說，他現在不願意幹了。（《華言》-8）

例 364. 何老爺來了。（《華言》-13）

例 365. 太太就來的。姑娘早呢，我不等他了。（《兒女》-20）

感嘆：例 366. 寔不敢當，這就感情的很了。（《搢紳》-14）

例 367. 哎，提起來話長了。（《華言》-15）

例 368. 姑老爺，你这么着，你这会子再把你那位程大哥叫进来，你就当着咱们大伙儿，拿起他那根烟袋来，亲自给他装袋烟，我就服了你了了！（《兒女》-37）

疑問文に添えられる：例 369. 這是第幾個戲了。（《搢紳》-19）

例 370. 太太见他来了，说：“你这孩子，怎么又跑出来了？”
（《兒女》-35）

(6) “啦/拉”

《兒女英雄傳》では“啦”を“拉”とも書き、“拉”と書く用例は 1 例しかない。

例 371. 走着逛拉！走着逛拉！要讲究这个，自己家园儿里找间学房讲去！（《兒女》-38）

金氏教科書では“拉”の用例がなく、“啦”の用例が 8 つで、全て“了”と“啦”の組合せとなり、感嘆を表す。

例 372. 他那舖子原先一連賠了好幾年，眼看着是做不了啦。（《便覽》-27）

例 373. 那兩個局差，也兼顧不了啦。（《便覽》-28）

- 例 374. 船壞了，把貨都沉了，所以買賣開不了啦。（《華言》-9）
 例 375. 又怕是天晚了散了關，今兒個可就駭不了啦。（《華言》-14）
 例 376. 過了五天，恐怕就拿這項錢買了木頭了，可就辦不了啦。（《華言》-16）
 例 377. 他說前兩天，已經把那項錢買了木頭了，辦不了啦。（《華言》-16）
 例 378. 若是在城外頭一吃晚飯，就得進夜門了，稿可就畫不了啦。（《談論》-25）
 例 379. 他就花幾個錢打點打點，他的官也就壞不了啦。（《今古》李沂公）

《兒女英雄傳》には“啦”と“阿”の組合せが1例見られる。

例 380. “姑娘，你道如何啦阿？”（《兒女》-10）

上記の例文について、孫錫信（1999:178）は“‘啦’是‘了’与‘啊’的合音，《兒女英雄傳》中有‘啦阿’连用的一例，显然是‘了’与‘啊’合音成‘啦’后，作者为强调该音节的拖音，特意再重複綴以‘a’（阿）。”と解釈している。

3.3.2 “呢”系

周一民（1998：267）は“‘呢’表示疑问可以用在特指问、选择问和正反问几种问句中，一般不能用在是非问中。”と指摘している。

金氏教科書では“呢”は主に疑問文に添えられ、疑問文の語気を強める用法となる。

特指疑問文：例 381. 各衙門學堂公司，都是看甚麼新聞紙呢。（《便覽》-7）

例 382. 那麼您還有甚麼好法子呢。（《談論》-29）

選択疑問文：例 383. 可是打算是在飯莊子還是飯館子呢。（《搢紳》第-17）。

例 384. 還有現在直隸總督，是應當駐在天津啊，還是應當駐在保定府呢。

（《談論》-48）

例 385. 可是熱河地方兒開礦用的是洋法啊，還是土法呢。（《談論》-75）

反復疑問文：例 386. 那麼商量商量，僭們交買賣可以不可以呢。（《華言》-4）

例 387. 您想若是先請他們交出一點兒銀子來，行不行呢。（《談論》-32）

例 388. 那保舉的額數有限制沒有呢。（《談論》-80）

反問文：例 389. 何必那麼費事呢。（《虎頭》）。

例 390. 見了人連一句整話都說不出來，怎麼能應酬買賣呢。（《談論》-27）

また、感嘆を表す用例も見られる。

例 391. 雖說這不是頭生兒，然而得子可是頭一次呢。（《搢紳》-1）

例 392. 掌櫃的說，若是僭們一定要那麼早走，可以請老爺見一見那位參將老爺去，如果他應了，店裏纔敢放走呢。（《談論》-69）

《兒女英雄傳》では疑問の語気を強める用法と感嘆を表す用法以外、承前疑問の用法も見られる。承前疑問について、太田辰夫（1958：363）は「承前疑問はかならず文脈に支えられているもので、問うこと全體は句にあらわれておらず、具體的な内容は文脈によって定める。まえになにかのべられており、それにもとづいて更にまた發問するものである。句の形としてはふつう主要成分が省略されている。」と解釈している。

承前疑問：例 393. 安老爺又問：“第三呢？”（《兒女》-19）

感嘆：例 394. 倒是公子說：“請舅母上船罷，我母親盼舅母呢。”（《兒女》-22）

選択疑問文：例 395. 姑太太在家里招呼媳婦，我跟了外甥去，這放心不放心呢？（《兒女》-40）

反復疑問文：例 396. 然則进场在那万余人面前作不作呢？（《兒女》-34）

反問文：例 397. 怎么倒罰我酒呢？（《兒女》-30）

3.3.3 “麼”系

“麼”は“嗎”の前身であり、太田辰夫（1958：362）は「結局、《麼》が用いられるようになったのは宋代とすべきである。（中略）《嗎》という文字が用いられるようになったのは清代である。」と指摘している。

《兒女英雄傳》に“嗎”の用例が 213 例、“麼”の用例が 113 例あることから、《兒女英雄傳》では“嗎”の使用傾向が強いと考えられる。しかし、金氏教科書には“嗎”の用例が下記の 2 例しか見当たらず、疑問を表すのみとなる。即ち、“麼”が用いられているのが主流であることがわかる。

例 398. 下短他多少，你再給他現銀子就得了嗎。（《華言》-5）

例 399. 丟這三百兩銀子，應當是你賠出來，還有什麼說的嗎。（《華言》-15）

《兒女英雄傳》と金氏教科書に用いられた“麼”の用法は 2 類あり、感嘆を表す用法と疑問を表す用法となる。両書とも、感嘆を表す用例が少ない。また、疑問を表す用法は現代中国語の疑問詞“嗎”と同じく、反問にも使える。

感嘆：例 400. 可不是麼，您聽一聽這個情理有多麼可惡。（《虎頭》）

例 401. 到那個時候兒，是去是不去，不更是進退兩難了麼。（《談論》-8）

例 402. 我看着只怕也是咱們同行的爺們，我見他也背着像老爺子使的那么个彈弓子麼。（《兒女》-17）

疑問：例 403. 您用過飯了麼。（《華言》-12）

例 404. 有一天在路上遇見令姪，我問他令尊大人有信來麼。（《摺紳》-15）

例 405. 他道：“问我麼？我在家里作夢！”（《兒女》-23）

反問：例 406. 若打算發那麼大的財，那不是做夢麼。（《便覽》-8）

例 407. 你们店里不是都有打更的更夫麼？烦你叫他们给我拿进来，我给他几个酒钱。（《兒女》-4）

《兒女英雄傳》には“嗎”の用法が疑問と反問の 2 類あり、何れも“麼”の用法に含まれている。

疑問：例 408. 内中一个年轻的转问他道：“你是问道儿的嗎？”（《兒女》-14）

反詰：例 409. 怎么你也合刘住儿一般儿大的糊涂，难道我在淮上常见的人你会不认得嗎？（《兒女》-38）

3.3.4 “罷”系

“罷”の由来について、太田辰夫（1958：367）は「《吧》という文字が用いられるようになったのは民國以後で、清代以前は《罷》とかいた。」と指摘している。また、“罷”の用法について、孫錫信（1999：164）は“‘吧’代替‘罢’之初，几乎都是用于商量、酌定的语气，随着‘吧’运用的增加，用途也逐渐扩大，以至囊括了‘罢’的所有用法。”と指摘した。金氏教科書に使用されていない“吧”は《兒女英雄傳》に用例が 2 例見られる。⁷⁵

⁷⁵ 邓岩 2017、29 頁。

例 410. 况这程世兄的令政又是个女史，倒是教他们小孩子们画着顽儿去吧。（《兒女》-29）

例 411. “甚吗？你敢打二爷？二爷可是你打得的？照你这样的先生，叫作通称本是教书匠，到处都能雇得来。打不成我先教你吃我一脚！”吧，照着那先生的腿洼子就是一脚，把先生踢了个大仰脚子，倒在当地。（《兒女》-18）

“罷”について、《兒女英雄傳》には命令、勧誘、推測、假定、中頓、肯定文の語気を強めるという 6 類の用法がある。金氏教科書においては、中頓の用例が見当たらない。

命令：例 412. 那個掌櫃的說正辦，你吃完了飯，幹你的去罷。（《華言》-24）。

例 413. 师老爷向来不喝茶，你们快换碗姜汤来罢。（《兒女》-37）

勧誘：例 414. 不錯，僂們也不必謙讓了，就此坐下罢。（《搢紳》-18）

例 415. 要不爷、奶奶也早些歇着罢。（《兒女》-31）

推測：例 416. 我想他或者要在這兒打凍罢。（《便覽》-48）

例 417. 那侉车子只怕老爷坐不来罢？（《兒女》-14）

假定：例 418. 他瞧這光景不妥，一想半路途中的止了工罢，真領疼，往下蓋罢，眼看着錢是接不上了。（《談論》-11）

例 419. 这个长生牌儿不提一句罢，算漏一笔；提一句罢，没处交代。（《兒女》-29）

中頓：例 420. 这样罢，既是先生这等多礼，倒不可不让进上房来。（《兒女》-37）

語気を強める：例 421. 借衆位的吉言罢。（《談論》-80）

例 422. 就是你们老弟兄俩辛苦一荡罢。（《兒女》-11）

3.3.5 その他の文末語気助詞

(1) “來着”

太田氏（1958：391）は「《來着》は北方語で、過去あるいは回憶をあらわす。（中略）《來》は唐五代からあり、《來着》はおそらくそれから出たもので清代になってはじめてみえる。」と指摘している。

また“來着”の由来について、常瀛生（1993：194）は“‘來着’表示動作和状态，过去如此，现在仍如此，来自满语动词过去完成进行时态。现北京话仍用‘來着’。其他汉语方言不见得有这样细致的时态表现法。”と指摘した。

金氏教科書においては、“來着”の用例が 33 例あり、全て過去を表す用例である。そのうち疑問文に添える“來着”が 7 例、反問文に添える用例が 2 例ある。また、“來着麼”の用例が 2 例ある。

例 423. 走在半路上遇見雨了，在雲華寺廟裏避雨來着。（《今古》李沂公）

例 424. 可不是麼，昨天我是忙着寫信來着。（《華言》-10）

例 425. 老弟這兩天幹甚麼來着。（《華言》-26）

例 426. 小少爺不是僂背着他來着麼。（《今古》十三郎）

例 427. 今天人家給你們寶號送那箱子禮物來的時候兒，你們兩位都在櫃上來着麼。（《虎頭》）

《兒女英雄傳》において、“來着”の用例は 38 例あり、金氏教科書と同様に過去を表す。そのうち疑問文に添える用例が 15 例、反問文に添える用例が 6 例ある。また、“來着么”の用例が 3 例、その他、“來着吗”が 1 例、“來着呢”が 6 例、“來着不成”が

1 例ある。金氏教科書に比べ、“来着”の後ろに置く語気助詞の種類が多く、使い方が多様であることがわかる。

例 428. 南屋里亲家太太早睡下了，舅太太才打发人来问来着。（《兒女》-31）

例 429. 我也是这样问他来着， he 说是刘铁嘴告诉他的。（《兒女》-20）

例 430. 我今日一天不在家，你在家作甚么来着？（《兒女》-23）

例 431. 你有此时才催的，早作甚么来着？（《兒女》-36）

例 432. 这书子我不还求大爷你念给我听来着么！（《兒女》-3）

例 433. 可不是叫媳妇儿张罗来着吗，偏偏儿的这么个当儿芒种儿又醒了，赖在他妈身上只下不来。（《兒女》-37）

例 434. 依我们老爷子的主意，还要请你老人家在正房里一块儿住来着呢。（《兒女》-39）

例 435. 守护了这几年了，难道他从那时候就算计我来着不成？（《兒女》-25）

(2) “的”

周一民（1998：271）は“语气词‘的’用在叙述已然事实的句子末尾，表示肯定、确认、强调等语气。普通话允许‘的’用在表示未然事实的句子裡，如‘他要走的’‘我会好的’，北京口语没有此中用法，一概用于过去时。”と指摘したが、《兒女英雄傳》と金氏教科書で用いられた“的”は、過去を表す用法に限らず、近未来を表す用法も見られる。

近未来：例 436. 儻同他去，萬無一失的。（《今古》沈小霞）

例 437. 趕到秋後各處的糧食堆集如山，不愁糧價不往下落的。（《談論》-100）

例 438. 左右到了船上，他爷儿两个也要来的的，在那里的有多少话说不了呢！

（《兒女》-22）

過去：例 439. 他任甚麼事也沒有，不過滿處打牙溜嘴兒的。（《虎頭》）

例 440. 不錯，都是歸巡查拿辦的。（《談論》-95）

例 441. 你的英國話是怎麼學的。（《指南》-14）

例 442. 我全仗着人家大师傅一个月贴补个三吊五吊的。（《兒女》-7）

(3) “就是了”、“就得了”、“就結了”

太田辰夫（1965：55）によると、“就得了”、“就結了”は北方語特有の物で、南京官話では用いられていないという。杨杏红（2014：150）は“‘就是了’出现在句子的末尾，表达的是‘就这样了’的意思。前面通常是说话人的某种选择或者某种结果。”と指摘している。

金氏教科書に“就是了”、“就得了”、“就結了”の用例がそれぞれ 135 例、15 例、13 例ある。一方、《兒女英雄傳》には“就是了”、“就得了”、“就結了”の用例がそれぞれ 19 例、3 例、3 例見られる。両書のどちらも“就是了”の用例数が最も多く、即ち、普遍的であると言える。また、金氏教科書において、この 3 つの文末語気助詞の用例数は《兒女英雄傳》より遥かに多いことがわかる。

例 443. 恩公金玉良言，我終身不忘就是了。（《今古》李汧公）

例 444. 該當先寫信告訴您知道就是了。（《公牘》-69）

例 445. 您把行李交給我們就得了。（《談論》-46）

例 446. 老爷道：“你只给我拿来就是了。”（《兒女》-39）

例 447. 等我告诉你，你只依着我就是了。（《兒女》-24）

例 448. 你们大家都叫我十三妹就是了。（《兒女》-8）

例 449. 老爷道：“你莫管，照我的话弄去就是了。”（《兒女》-14）

例 450. 我走后，倘然他再托人来说，就回复说我没留下话就是了。（《兒女》-2）

例 451. 等回来你大伙儿吃的时儿，给我盛过碗去就得了。（《兒女》-22）

例 452. 叫个人在这里看着就得了，何必这等？（《兒女》-17）

例 453. 妇容讲的不是梳鬃头，甩大袖，穿撒裤脚儿，裁小底托儿就得了，须要坐如钟，例立如松，卧如弓，动不轻狂，笑不露齿，总说一句，便是“端庄”两个字。（《兒女》-27）

3.3.6 結論

以上、先行研究を参考にした上で、金氏教科書と《兒女英雄傳》での文末語気助詞の使用を考察し、使用方法と使用頻度を分析した。その結果、成書年代がかなり近く、同じ北京語で書かれた金氏教科書と《兒女英雄傳》では文末語気助詞の使用に互いに大きな差異があることが分かった。

(1) 金氏教科書では“嗎”の使用が極めて少ないこと

孫錫信（1999：159-162）の主張によると、明代の小説《石點頭》で“嗎”の使用が初めて確認できた、その後“嗎”の使用が徐々に広がり、《兒女英雄傳》に“嗎”の使用頻度が“麼”を超え、20世紀の初期、“嗎”の使用が主流になった。《兒女英雄傳》では“嗎”と“麼”の使用方法が同様であり、“麼”より“嗎”の方の使用頻度が高い。しかし、金氏教科書で“嗎”の用例は2例だけで、主に“麼”が用いられ、疑問の意を表す。日本明治時代の北京官話教科書での“麼”と“嗎”の使用状況について、楊杏紅（2014：141）は“但是在日本明治时期的北京官话教材中，情况并非如此，通过考察，我们发现这些北京官话教科书中基本上都写作‘麼’，只偶尔见‘吗’的用例。（中略）这样看来，在日本明治时期的北京官话课本中，基本上都在使用‘麼’，‘吗’并没有取得主体的地位。”と指摘している。金氏教科書の、“麼”と“嗎”の使用状況により楊氏説が検証され、日本明治時代の北京官話教科書では“嗎”より“麼”が主流で使用される特殊性を表している。

(2) 金氏教科書での“納”の使用

“納”について、楊杏紅（2014：148）は“从词的构造来看，认为‘你呐’‘您纳’是尊称代词并不合适，把‘呐’看作是一个新兴的语气词更为合适，特别是到了明治后期‘纳’的字形逐渐固定为‘哪’和‘呐’，以及今天北京话中的‘呐’都应该看作表尊敬义的语气词。只是和其他的语气词相比，‘呐’的使用范围很窄，而且正在逐渐萎缩，很可能不久就消失在北京话中。”と指摘している。

《兒女英雄傳》では“納”の使用例が見当たらないことに対して、金氏教科書では“納”が15例使用されることから、“納”は明治時代の北京官話教科書に現れた新たな文末語気助詞であると考えられる。しかし、金氏教科書では、“納”が他の文末語気助詞と比べると使用例が比較的少ない。そのため、必ずしも当時の北京語では“納”の使用がまだ普及していなかったことが推測できる。

(3) 金氏教科書では異体字を使用されない

《兒女英雄傳》には文末語気助詞“啊、罷、啦”の異体字の使用例があり、“啊”を“呵、阿”と書き、“罷”を“吧”と書き、“啦”を“拉”と書き、特に“啊、阿”の混用が多く使用方法の区別がない。孫錫信（1999：173）は“在‘啊’使用初期，往往是

‘啊’ ‘呵’ 和 ‘阿’ 错杂混用。”と指摘している。それに対して、金氏教科書には異体字の混用が見当たらない。《兒女英雄傳》は小説であり、異体字の混用は閲読に影響がない。一方で中国語教科書は中国語を習得する際に使用する語学教材であり、字の使用上には統一性が必要である。したがって、異体字の混用がないことから金氏の教科書の方が緻密であるとも言え、また当時は“啊、罷、啦”が正字と見做されたことも窺がえる。

(4) 金氏教科書に使用された文末語気助詞の用法の明確性の強さ

《兒女英雄傳》に使用された文末語気助詞“呀”と“啊”は用法が豊富で、各用法が5類と4類があることに対して、金氏教科書には“呀”と“啊”の用法がそれぞれ2類、2類に限定され、使用範囲が限られている。一つの文末語気助詞に関して、用法が少なければ少ないほど、用法の明確性或いは単一性が強いと言える。また、このような使い方によって、学習者が習得しやすくなっていることも考えられる。

(5) 清末北京語語気助詞の使用差異

《兒女英雄傳》に使用された文言文語気助詞は金氏教科書では一切使用されていないことから、金氏教科書に当時日常で使用されていた新しい口語の文末語気助詞を限定して取り入れたことがわかった。両方ともに使用された文末語気助詞の中では“了”の使用頻度が一番高く、用法も豊富で、“了”は当時北京語の主流の文末語気助詞と言える。一方で、両方共に“啦”の使用は極めて少ない。杨杏红 (2014 : 144) は“从《歧路灯》到《儿女英雄传》的100多年的时间里, ‘啦’并没有得到广泛的使用, 随着‘了’读音从‘liao’变为‘la’, 因为语义和发音相似, ‘啦’也被大量地使用, 这大概跟19世纪后期口字旁语气词的迅速发展有关。我们在明治时的北京官话教科书中很少发现‘啦’的用例, (中略) 而同时期的清末小说, 如《小额》和《老残游记》中已经大量使用语气词‘啦’ (孙锡信1999)。”と解釈している。

第四章 構文論：《兒女英雄傳》との比較

北京語においては、特別な性格を持っている構文が多く存在する。その中で、特に注目されているのが“叫”構文、“讓”構文、“給”構文の3つとなる。

“叫”構文、“讓”構文、そして“給”構文の繋がりは強く、丁声树等（1999：103）は“‘給’字可以当‘被’字用，这一点和‘教、讓’一样。”“‘給’字又可以和“把、被、教、讓”照应，‘教、讓’都不能这么用。”と指摘している。

本章は“叫/教”構文、“讓”構文、“給”構文の3構文に焦点に当て、金氏教科書における、それぞれの使用状況を考察することを通して、3構文の内部関連を明らかにするのが主旨である。その上で、成書時期が近く、かつ北京語で書かれた白話小説《兒女英雄傳》との比較対照を行い、3構文において、両書の言語差異を浮かび上がらせ、使用対象、使用頻度、使用傾向などの問題を考察する。

本章では、分析方法として、木村英樹の「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」（2000）に提示された指示使役文、誘発使役文、許容使役文という使役文の3分類を基準とする。

指示使役文とは、主語に立つ人物Xが人物Yに、動作・行為Vを遂行させようとしむける事態を述べる構文であり、放任使役文とは、人物Yが動作・行為Vを遂行することを人物Xが許容する、ないしは放任するという構文である（木村, 2000：20）。

誘発使役文は、Yに何らかの状態または変化が生じる状況をXが誘発するという事態を述べる構文であり、（中略）指示使役文や放任使役文が意志的な動作を意味する表現、すなわち<スル>的表現な述語にとるのは対照的に、誘発使役文は無意志的な状態や変化を意味する表現、すなわち<スル>的表現を述語にとることを特徴とする（木村, 2000：22）。

本章は北京語言大学中国語コーパス（BCC）を使用し、《兒女英雄傳》に関するデータを統計にかける。

4.1 “叫”構文の比較研究

4.1.1 “叫”と“教”

史料によると、“教”は“叫”より早く使用されていた。汪维辉《东汉-隋常用词演变研究》（2000：195-196）によると、東漢時代の著作には、すでに使役の意味を持つ“教”もある。“从总体上说，汉魏以前‘教’作‘使令’讲的例子很少。这种‘教’字真正在文献中较多地使用是在晋代以后。”と言及した。太田辰夫（1958：240-241）は、「古くは《教》とかいた。教唆の意から転じて使役になったものとおもわれる。（中略）《叫》はもともと呼ぶ意味の動詞である。これが兼語句に用いられ、<……を呼んで……させる>意に用いられ、のち純然たる使役の意味となった。《叫》は去聲であるので、この語が多く用いられるようになると《交》は用いられなくなりがらに去聲のある《教》の字が残った。しかし《教》もだんだん《叫》におされて用いられなくなってきたが、最近はまだ《教》を用いることが多くなった傾向もみえる。」と指摘している。

“叫”が“教”に代わり、広く使用されるようになった時期について、江藍生《近代汉语探源》（2000：222）は“历史上‘教’最常用，‘教’作使役动词读平声，这从唐代以来的文献中‘教’常写作‘交’可以知道。‘叫’本为呼喊义动词，后来（明代以后）才用作使役动词，并逐渐取代了‘教’。”と述べている。また、李焱の博士論文《醒世姻缘转》语法研究》（2003）は、唐、宋、元、明、清、五つの時代、合計11冊の著作における、“叫/教”の使用状況を考察し、“‘教’字句的发展主要是在明代以前，在明代之后就基本开始走向式微之路，而‘叫’字句的发展主要是在明代之后，并且用法日趋完善，逐渐占据主流地位。由此可见，这两种句式之间有继承关系，‘叫’字句是在吞并了‘教’字句的基础上发展起来的。‘叫’字句之所以可以替换‘教’字句，一方面是因为二者用法相近，另一方面是因为二者在语音上也是相近的。”という結論を導いた。

卢小群（2017：463）は“‘叫/教’字句也是老北京土话中常用的特殊句式。”と指摘している。金氏教科書において、“叫⁷⁶”が使役文と受身文に用いられている用例が大量に存在し、合計533例ある。それに対して、“教”が用いられている用例はない。そのため、本節で考察の対象とするものは“叫”構文のみである。

《北京官話 今古奇觀》（1904、1911）は金氏が中国明代末期の白話文小説《今古奇觀》を手本として改編した中国語教科書であり、原作は明代の言語の特徴を持ち、当時は“教”を使っていた。《北京官話 今古奇觀》では、“教”を“叫”に改編した用例が見られる。本研究の第一章での詳述の参考にする。

清末期の《北京官話 今古奇觀》では“叫”に書き換えられたため、“教”は使役動詞の役割が徐々に失われてきたことが分かる。

4.1.2 “叫”構文の使役表現

杨杏红（2014：177）は“使用‘叫’来表示使役义，大概是‘叫’诸多用法的类推，在日本明治时期的北京官话教科书中，‘叫’的使役义运用较为普遍。”と指摘している。

“叫”を用いる使役文の分類について、朱德熙《语法讲义》（2009：179）は“致使”“听任”“容许”の3つに分類している。丁声树等《现代汉语语法讲话》（1999：100）は“‘教’字和‘讓’字都有‘被’‘允許或听任’‘使’三个意思。”と指摘している。郭姝慧の博士論文《现代汉语致使句式研究》（2004：50）は“‘使令’重在行为，是作出指使和命令，只有生命度高的人或由人组成的团体机构才有可能作出指令。（中略）

‘致使’重在结果，是由于某种原因而产生某种结果。引起‘致使’结果的原因可以是具体的，也可是抽象的，可以是个体，也可以是事件，致事成分是十分复杂的。但不管怎样，‘致使’是有结果的。所以，‘致使’不同于‘祈使’。”と論述し、“使令”と“致使”の語彙の範疇を明確にした。卢小群（2017：465）は“表致使义的叫/教字句又可细分为使令义、致使义、容许义和任凭义几种。”と論述している。

金氏教科書において、“叫”を使役表現として用いている例は、全部で477例見られる。そこで木村英樹（2000）を基準とし、上述した分類を参考に、金氏教科書における“叫”使役文の使用状況と合わせて、指示使役文・誘発使役文・許容使役文の3分類に分け、考察を行う。

⁷⁶ 金氏教科書において、“叫”は“叫”とも書いている。

4.1.2.1 指示使役文

指示使役文は「A+叫+B+VP」の構文で、主語に立つ使役者Aが被使役者Bに動作・行為VPを遂行させようとしむける事態を述べる構文である。

金氏教科書において、“叫”を指示使役文に用いている用例は、全部で368例見られる。《兒女英雄傳》においては、439例見られる。

① 使役者Aの構成

a. 人称代名詞

例1. 這麼着他就叫陳顏支成，把禮物擺在桌子上。 (《今古》李汧公)

例2. 隨他叫他嫁人就是了。 (《今古》沈小霞)

例3. 你叫夥計們先回去罷。 (《談論》-15)

例4. 你硬叫人多加房租。 (《談論》-56)

例5. 长姐姐，你叫他们倒罢。 (《兒女》-29)

例6. 这是他来的那年，我叫了个瞎生给他算命。 (《兒女》-20)

例7. 我叫人把那个角门儿给你们开开了，俩媳妇儿都跟过去。 (《兒女》-37)

例8. 回头我就叫人盘银子去。 (《兒女》-15)

b. 名詞

例9. 賈石也叫他家裏的人出來，把沈太太迎接裏頭去安置。 (《今古》沈小霞)

例10. 王太說老爺叫我辦這個事，我不敢不遵。 (《今古》李汧公)

例11. 房德又叫人出去傳話。 (《今古》李汧公)

例12. 小的們就叫他打開包袱給我們瞧瞧。 (《華言》-23)

例13. 左右闲着没事，老爺为甚么不叫他们说说？ (《兒女》-33)

例14. 谁想那些盗伙一见他的头领吃亏，十三妹定要叫他戴花擦粉。 (《兒女》-16)

例15. 安老爺便叫他看个吉日，先请安陞辞。 (《兒女》-40)

例16. 安太太便叫媳妇过来见过舅母。 (《兒女》-22)

c. 名詞フレーズ

例17. 小的的主人就叫小的出去了。 (《華言》-27)

例18. 我們家兄就叫那俩衙役，進那個棚子裡去。 (《華言》-23)

例19. 我們東家叫我告訴您說，他現在忙着寫信哪。 (《華言》-10)

例20. 我們年兄就叫衙役把那個孩子帶進來。 (《華言》-27)

例21. 我夫妻就当面叫玉格在上屋给他行个礼，倒显得是一番亲近恭敬之意。 (《兒女》-37)

例22. 那时候你家老太太连忙叫人给我收拾。 (《兒女》-19)

例23. 张姑娘笑着只看婆婆的眼色，安老夫妻便叫他快给干爹行礼。 (《兒女》-32)

例24. 站起来要接，见没茶盘儿，摸了摸那茶碗又滚烫，只说：“你老人家叫他们倒罢。” (《兒女》-37)

d. 主語+述語

例25. 我努嘴兒是叫他拿開那個東西，他沒瞧見。 (《撮要》-3)

例26. 那麼我若是有甚麼事情叫夥計們辦，總得告訴他們掌櫃的好罷。 (《談論》-15)

e. 動詞+目的語

例 27. 有人叫他遞一個稟帖。（《便覽》-28）

例 28. 我只愁他這位夫人，倘然有別人叫他陪酒，他可去不去呢？（《兒女》-32）

f. 使役者 A の省略

例 29. 臨走的時候兒我擱在桌子上了，叫你拿著，你沒聽見麼。（《虎頭》）

例 30. 皆因我現在接着我們行裏來了一個電報，叫我快回去。（《指南》-2）

例 31. 到了船上往艙裏抬的時候，叫他慢着點兒，別摔了。（《華言》-3）

例 32. 我想着借一百兩銀子，把房摺子交給他，每月叫他們拿摺子去取十兩銀子。（《華言》-12）

例 33. 答应一声，只叫他那孩子送了水壶來。（《兒女》-37）

例 34. 那就巧极了，牲口也有了，就叫你們姑爺騎上，跟着一伙同行。（《兒女》-10）

例 35. 如今就給你開了臉，叫你服侍了他去。（《兒女》-40）

例 36. 那女子焦躁道：“叫你走，怎的倒坐下來了呢？”（《兒女》-6）

② 被使役者 B の構成

a. 人称代名詞

例 37. 只可買付船家，叫他趁著夜靜的時候，把屍首埋了。（《今古》懷私怨）

例 38. 主人叫我給你這一錠銀子，不叫你外頭告訴人說。（《華言》-27）

例 39. 並沒留下話，叫你們賒給我家裡東西。（《華言》-21）

例 40. 你父親很明白，叫你來告訴我說，我一定不能露出是你說的來。（《華言》-27）

例 41. 都怪香兒的么，叫我丟下那件呢？（《兒女》-15）

例 42. 你就叫我看篇文章，也得先有個題目。（《兒女》-36）

例 43. 又何必一定叫你嫁到安家許配玉郎呢？（《兒女》-26）

例 44. 我想此後叫他們不分彼此，都是一樣。（《兒女》-28）

b. 名詞

例 45. 賈石也叫妻子出來見禮。（《今古》沈小霞）

例 46. 暗中叫將官把避難的良民殺了些個。（《今古》沈小霞）

例 47. 又故意的叫李萬回來。（《今古》沈小霞）

例 48. 劉氏就叫人雇了一頂小轎子。（《今古》懷私怨）

例 49. 怎么叫新郎自己拿來？（《兒女》-27）

例 50. 這兩樁事都不用老爺費心，公館我已經叫晉升找下了。（《兒女》-13）

例 51. 正是，我也想到這裡，才叫柳條兒瞧去了，也來不了了。（《兒女》-35）

例 52. 便陪那先生到了書房，立刻叫紀獻唐穿衣出來拜見。（《兒女》-18）

c. 名詞フレーズ

例 53. 沈鍊就叫三箇兒子，拜賈石為盟叔。（《今古》沈小霞）

例 54. 這麼着我們家兄就叫那兩個打更的回去了。（《華言》-23）

例 55. 我們老夫子就叫那個婦人先買棺材裝殮起來。（《華言》-24）

例 56. 吃完了早飯，就叫一個底下人把衙門裏的一匹驢備好了。（《華言》-24）

例 57. 叫我們親家評一評，咱們倆倒底誰比誰大？（《兒女》-33）

例 58. 改日我再親去奉拜，先叫我小子登門道乏去。（《兒女》-36）

例 59. 那麼着，我就在家里服侍婆婆，叫我妹妹跟了他去。（《兒女》-40）

例 60. 真要到了没人儿了，就叫你们俩打发我梳梳头，又能甚么使不得的呢。（《兒女》-40）

d. 定語＋中心語

例 61. 有人出了這麼一個主意，叫願意包辦的這幾個公司各遞一個單子。（《指南》-18）

e. 被使役 B の省略

例 62. 知縣就叫站住了轎子。（《華言》-25）

例 63. 就叫把田保帶上堂來了。（《華言》-27）

例 64. 被那地方稅局子，把船扣下了，一定叫上稅。（《公牘》-34）

例 65. 知州就叫拿夾棍來。（《今古》沈小霞）

例 66. 临走又怎的千叮万嘱，叫務必等合他见面然后动身。（《兒女》-12）

例 67. 这个当儿，又听老爷叫取师老爷的烟袋荷包去。（《兒女》-37）

例 68. 我到了他屋里，他就闹着不兴我吃我的烟，只叫吃他的。（《兒女》-37）

例 69. 安公子便预先吩咐了厨房预备了一桌盛饌，又叫备了桌午酒。（《兒女》-29）

表 4-1. 指示使役文における使役者 A と被使役者 B の構成状況

作品	A/B	非省略						省略	合計
		名詞	名詞フレーズ	人称代名詞	主＋述	動＋目	定＋中		
金氏	使役者 A	58	12	21	4	1	0	272	368
	被使役者	145	52	164	0	0	1	6	
《兒女》	使役者 A	52	23	53	1	2	0	308	439
	被使役者 B	172	58	179	0	0	0	30	

《兒女英雄傳》において、被使役者 B が人称代名詞“他”、名詞“人”となる用例がそれぞれ 155 例、72 例あり、両方合わせて全用例数の 5 割を占めている。また、金氏教科書において、“叫他”、“叫人”の用例数がそれぞれ 131 例、16 例あり、全用例数のほぼ 4 割を占めている。したがって、両書における被使役者 B は“他”と“人”を優位に使用する傾向が窺える。

金氏教科書と《兒女英雄傳》においては、使役者 A を省略した用例がそれぞれ 272 例、308 例で、全体の 7 割を占めているが、その理由は両書の形式が関係していると思われる。金氏教科書、《兒女英雄傳》、いずれも当事者間の会話を記載している場面が多く、会話中で人々は言葉の経済性を求めるため、使役者 A が省略されることが多いからだ。

また、金氏教科書で使役者 A が非省略の場合は、最も多いのは名詞が用いられている用例である。一方、《兒女英雄傳》の場合は、名詞と代名詞が用いられている用例がほぼ均等である。被使役者 B について、両書のどちらも名詞フレーズが用いられている用例は最も少ない。

指示使役文における使役者 A について、郭姝慧（2004：50）は“只有生命度高的人或由人组成的团体机构才有可能作出指令。”と論述している。金氏教科書において、下記の 1 例のみの他は、全て人を表す名詞である。

例 70. 朝廷叫各省督撫查明情形覆奏。（《談論》-38）

また、使役者 A の指示を実行する被使役者 B も“生命度高い人や由人组成的团体机构”でなければならない。金氏教科書において、下記の 4 例の他は、全て人を表すものである。

- 例 71. 是叫那個公司辦好呢。（《指南》-18）
例 72. 說完了就叫店裡傳藍貴去了。（《華言》-29）
例 73. 只有櫃裏頭拐櫃外頭的，別叫櫃外頭拐櫃裏頭的。（《虎頭》）
例 74. 到了那兒，就快叫車回來，別悞了我的事。（《便覽》-87）

上記の用例では、例文 70. ~73. の使役者 A と被使役者 B は、“朝廷”、“那個公司”、“店裡”など命のない物だが、どちらも“～に属する人”を指しているため、生命度のある物とすべきである。また、例文 74. の被使役者 B が“車”であるが、“車夫に車を帰らせる”と解釈すべきだろう。即ち、例文 74. の被使役者 B も生命度のある物とすべきである。

③ 述語 VP の構成

a. 動詞

- 例 75. 他媳婦兒攔他不叫他去。（《華言》-17）
例 76. 我們年兄就叫了兩個衙役來。（《華言》-27）
例 77. 另外再故設一問，叫他們對答。（《搢紳》-36）
例 78. 叫李萬半夜裏下手。（《今古》沈小霞）
例 79. 坐下又思索了半天，便叫梁材、华忠两个來。（《兒女》-39）
例 80. 那女子焦躁道：“叫你走，怎的倒坐下来了呢？”（《兒女》-6）
例 81. 只是不得父亲的话，不好就定。还叫儿子请示。（《兒女》-12）
例 82. 张姑娘道：“那么问着你那是谁，只摇头儿不言语，偏叫你说！”（《兒女》-37）

b. 動詞+目的語

- 例 83. 指出一段洋字的新聞紙來，叫他們講解意思。（《搢紳》-36）
例 84. 這麼着就叫吩咐動刑，叫那群賊招認寃情。（《今古》十三郎）
例 85. 暫且叫某國領事官代辦通商事情。（《公牘》-51）
例 86. 叫他挑選有材幹的差人。（《今古》沈小霞）
例 87. 我也不吃潮烟，我就不会吃烟，我也没叫你装烟，想是你听错了。（《兒女》-4）
例 88. 便派人跟了公子，叫他穿上孝服，向十里外迎接何太太的灵。（《兒女》-23）
例 89. 金凤媳妇是个细腻风光，便叫他料量盐米。（《兒女》-33）
例 90. 仍叫他守着他父母的灵，也算依了他‘约法三章’的话了。（《兒女》-23）

c. 動詞+補語

- 例 91. 趕緊的叫跟着的人都站住了。（《今古》李沂公）
例 92. 昨天都是個極力的攛掇，叫他進城來。（《今古》沈小霞）
例 93. 就叫衙役打了他四十板子。（《華言》-29）
例 94. 叫他們雇人送到火車站去。（《談論》-45）
例 95. 我那里有给媳妇包下的馄饨，里头单弄的菜，回来叫人送过来。（《兒女》-27）
例 96. 金、玉姊妹两个见了，满心欢喜，便叫他站起来，带他给老爷、太太磕了头。（《兒女》-40）
例 97. 原想着河工上还有几个着实受过我些好处的旧日属员，打算叫他们帮助几千金，交

了台费便好还乡。（《兒女》-39）

例 98. 心病难医，自己洗一回又叫人闻一回，总疑心手上还有那股子气息，他自己却又不肯闻。（《兒女》-37）

d. 連動文

例 99. 這麼着就叫底下人去到內堂取十兩銀子來。（《華言》-27）

例 100. 房子漏了，夥計們叫他拿錢收拾，他也不管。（《華言》-30）

例 101. 情願意給他一百兩銀子，叫他去辦這件事。（《華言》-27）

例 102. 賈石也叫妻子出來見禮。（《今古》沈小霞）

例 103. 便告诉褚大娘子叫个人进去道喜。（《兒女》-39）

例 104. 说着，便叫了那人来叩见。（《兒女》-2）

例 105. 说着便站起来，叫人拿了灯到西屋里去。（《兒女》-34）

例 106. 等自己见过十三妹，再叫人来送信。（《兒女》-17）

e. 状語+中心語

例 107. 萬不可以叫他們隨便在外散居。（《搢紳》-36）

例 108. 別叫孩子們在院子裏這麼吵嚷。（《便覽》-57）

例 109. 倘或他辦事有不合體的時候兒，叫我務必的要規勸的。（《搢紳》-4）

例 110. 我也屢次的說他，叫他專意的在詩文上用功。（《搢紳》-10）

例 111. 可将那天人宝镜放在案前，叫他各人一照，然后发落。（《兒女》-0）

例 112. 那头乌云盖雪的驴儿便交给华忠，叫他好生喂养。（《兒女》-23）

例 113. 亲家，可叫他多吃点儿，闹了这半天了。（《兒女》-27）

例 114. 所以指称着托他二位照看行李，且请来，叫在店里听信。（《兒女》-21）

f. “把”

例 115. 我們老爺現在是有點兒緊用項，叫我們把這箱子皮衣服拿來當幾個錢。（《虎頭》）

例 116. 暗中叫將官把避難的良民殺了些個。（《今古》沈小霞）

例 117. 這麼著就叫底下人把那倆解差都打出去，把大門關上。（《今古》沈小霞）

例 118. 就趕緊的叫底下人把他攙進去。（《今古》懷私怨）

例 119. 便同先生来到箭道，叫了许多家丁把些兵器搬來。（《兒女》-18）

例 120. 珍姑娘接着就说：“那么说，还得叫他们把数珠儿袱子带上呢。”（《兒女》-40）

例 121. 褚一官也叫人把他家的帮箱的妆奁摆在西边。（《兒女》-27）

例 122. 便叫人把箱子打开，一件件的收清。（《兒女》-24）

g. “給”

例 123. 可以叫夥計給您預備飯罷。（《談論》-14）

例 124. 先叫人給您打臉水沏茶來罷。（《談論》-46）

例 125. 叫我非給他們再找補一錢來銀子不給東西。（《虎頭》）

例 126. 說是叫我這兒給您撥兌六百塊錢，是不是。（《談論》-47）

例 127. 烦你叫他们給我拿進來，我给他几个酒钱。（《兒女》-4）

例 128. 张姑娘笑着只看婆婆的眼色，安老夫妻便叫他快給干爹行礼。（《兒女》-32）

例 129. 却说安太太见他给舅太太磕过头，便叫他給公子磕头。（《兒女》-40）

例 130. 只是我得张罗姐姐去了，你叫嬷嬷給你梳罷。（《兒女》-28）

表 4-2. 指示使役文における述語 VP の構成状況

作品	VP	動詞	述語節			合計
			動詞述語節	把	給	
金氏	数量	25	249	74	20	368
	割合	6.8%	67.7%	20.1%	5.4%	100%
《兒女》	数量	47	342	26	24	439
	割合	10.7%	77.9%	5.9%	5.5%	100%

指示使役文において、VP の種類が豊富で、両書共に動詞述語節の使用が最も多く、また、“把”と“給”が多数用いられている。金氏教科書において、VP にあたる“把”の用例数は“給”の4倍であることに対して、《兒女英雄傳》の“把”と“給”の用例数はほぼ同じであることがわかる。

4.1.2.2 誘発使役文

誘発使役文は「A+叫+B+VP」の構文で、被使役者 B に何らかの状態・変化・結果 VP が生じる状況を使役者 A が引き起こすという事態を述べる構文である。

金氏教科書と《兒女英雄傳》において、“叫”を誘発使役文に用いている用例は、それぞれ 84 例、137 例見られる。

① 使役者 A の構成

a. 人称代名詞

例 131. 依我說僂們先別叫夫人知道。（《今古》十三郎）

例 132. 您不知道，我是叫這件事把我鬧迷惑了。（《虎頭》）

例 133. 你叫他從那裏知道你，又怎的配知道呢？（《兒女》-31）

例 134. 只這膝前一拜，你叫他那雙父母看着怎的不樂！（《兒女》-36）

例 135. 你也曉得後悔？我索性叫你大悔一悔。（《兒女》-8）

例 136. 倘若不肯，我也不叫你過於為難。（《兒女》-15）

b. 名詞

例 137. 姑娘却不可叫我白花钱。（《兒女》-24）

c. 名詞フレーズ

例 140. 過獎過獎，幾句拙言叫衆位見笑。（《搢紳》-9）

例 141. 這個理真叫人難明白。（《便覽》-83）

例 142. 你，你，你，你這人叫我走到那裏去？（《兒女》-6）

d. 主語＋述語

例 138. 我有甚麼本事叫人聽著不笑話麼。（《虎頭》）

例 139. 大妹子，你可不許借著這事叫我們姑娘受委屈。（《兒女》-26）

e. 使役者 A の省略

例 143. 叫嚴府知道，那可不是頑兒的。（《今古》沈小霞）

例 144. 如今因為我在這兒住着，就悞了足下好些個公事，倘或叫上司知道了，倒不妥當。（《今古》李沂公）

- 例 145. 叫您分心受累。（《談論》-43）
 例 146. 叫掌櫃的能知道自己有多大本領。（《華言》-20）
 例 147. 果然如此，好叫人不得明白。（《兒女》-7）
 例 148. 叫人家大爷脸上怎么拉得下来呢？（《兒女》-34）
 例 149. 这些日子了也没个回信儿，真叫人怎的不着急呢！（《兒女》-12）
 例 150. 敢是这桩事挤住了，竟自叫人没法儿！（《兒女》-28）

f. 指示代名詞

- 例 151. 這豈不是叫我難乎為情麼。（《搢紳》-8）
 例 152. 這實在無故的叫您分心受累。（《虎頭》）
 例 153. 這可真叫人問得怪臊的！（《兒女》-38）
 例 154. 你说這可不是叫人没法儿的事吗？（《兒女》-40）

g. 動詞+目的語

- 例 155. 據令親說，印度這幾年不但種茶，而且能用機器叫茶葉變出好滋味兒來。（《談論》-93）

② 被使役者 B の構成

a. 人稱代名詞

- 例 156. 這豈不是叫我難乎為情麼。（《搢紳》-8）
 例 157. 叫您分心受累。（《談論》-43）
 例 158. 特意叫僎們刨着這罈子銀子。（《華言》-23）
 例 159. 你喝點兒茶，畧微的歇一歇兒，今兒個實在叫你受累了。（《談論》-15）
 例 160. 你们可看着些，莫要错过去，叫他們空跑一蕩。（《兒女》-20）
 例 161. 姐姐，你叫我怎样个说法？（《兒女》-9）
 例 162. 倒是我作老家兒的不曾荫庇到你，转叫你为我先受了累了。（《兒女》-12）
 例 163. 你娘儿们先不必急着问，横竖不出三日，一定叫你们见着十三妹，如何？（《兒女》-14）

b. 名詞

- 例 164. 若是叫人知道了，那可了不得。（《華言》-27）
 例 165. 叫主人受等，恕我来遲。（《搢紳》-18）
 例 166. 遇見鬧天氣犯潮的的時候兒，該挪的挪，該晾的晾，總不要叫貨物受了潮濕。（《華言》-20）
 例 167. 叫掌櫃的能知道自己有多大本領。（《華言》-20）
 例 168. 又叫那燕北闲人怎生收这一笔？（《兒女》-27）
 例 169. 姐姐不信，不耐烦，不往下听了么，可叫公公有甚么法呢！（《兒女》-26）
 例 170. 倘然追究起来，不免倒叫安家受累，此外并无一毫私意。（《兒女》-26）
 例 171. 这话说来真真叫人怒发冲冠，泪珠满面！（《兒女》-11）

c. 名詞フレーズ

- 例 172. 就叫那有錢的人，把僎們看輕了。（《虎頭》）
 例 173. 叫我們沈家不至於絕後。（《今古》沈小霞）

例 174. 據那茶行的朋友說，印度製茶是用機器，能叫那茶葉變出好滋味兒來。（《談論》-92）

例 175. 為得是叫家裏的人來好報仇。（《今古》懷私怨）

例 176. 就这样撂下走了，叫你们两家四个无依无靠的人怎么处？（《兒女》-9）

例 177. 也叫我那老妈安乐几日，再不当这强盗了！（《兒女》-21）

例 178. 请问这一咕噜串儿，叫安老爷一家怎生见人？（《兒女》-25）

例 179. 一番话说得言言逆耳，字字诛心，叫那安公子怎样的开口？（《兒女》-5）

表 4-3. 誘発使役文における使役者 A と被使役者 B の構成状況

作品	A/B	非省略						省略	合計
		名詞	名詞フレーズ	人称代名詞	指示代名詞	主+述	動+目		
金氏	使役者 A	0	7	2	2	1	1	71	84
	被使役者 B	40	34	10	0	0	0	0	
《兒女》	使役者 A	1	14	16	2	1	0	103	137
	被使役者 B	38	30	69	0	0	0	0	

誘発使役文において、両書共に使役者 A を省略する用例が多く、それぞれ約全体の 8 割を占めている。逆に、使役者 A より被使役者 B を省略する用例がどちらにも見当たらない。その理由は誘発使役文が被使役者 B に何らかの状態・変化・結果 VP が生じる状況を使役者 A が引き起こすという事態を述べる構文であり、状態・変化・結果に当たる被使役者 B が省略されると、文意が不明確になる可能性があるからだ。

また、金氏教科書において、使役者 A に名詞フレーズが用いられている用例が一番多く、名詞が用いられている例は見当たらない。一方、被使役者 B に名詞が用いられている用例が一番多いことがわかる。《兒女英雄傳》において、使役者 A と被使役者 B のどちらも人称代名詞が最も用いられている。尚、被使役者 B にあたる主体が 3 種類であるのに比べ、両書共に使役者 A にあたる主体の種類が多く、どちらも 5 種類ある。

使役者 A について、金氏教科書に無生命の用例が 3 例しか見られないが、《兒女英雄傳》には 15 例見られる。

例 180. 這個理真叫人難明白。（《便覽》-83）

例 181. 這豈不是叫我難乎為情麼。（《搢紳》-8）

例 182. 這實在無故的叫您分心受累。（《虎頭》）

例 183. 這句話却叫他怎的个答应法？（《兒女》-40）

例 184. 這可真叫人問得怪臊的！（《兒女》-38）

例 185. 今日這一天的悶葫蘆可叫人怎么打呀！（《兒女》-35）

例 186. 這事叫人怎生耐得！（《兒女》-16）

例 187. 這話说来真真叫人怒发冲冠，泪珠满面！（《兒女》-11）

例 188. 这大米饭老天可不是叫人白吃的。（《兒女》-13）

例 189. 他那贴身儿的事情可叫我怎么好哇？（《兒女》-40）

例 190. 姑娘你這番救命恩情叫他何处答报？（《兒女》-17）

被使役者 B について、両書どちらも名詞、名詞フレーズ、人称代名詞の 3 種類だけ用いられている。その中で、金氏教科書には無生命の用例が 4 例見られるが、《兒女英雄

傳》には見られない。例 191. の“嚴府”だけは命のない物だが、“～に属する人”を指しているため、生命度のある物とすべきである。

例 191. 叫嚴府知道，那可不是頑兒的。（《今古》沈小霞）

例 192. 據那茶行的朋友說，印度製茶是用機器，能叫那茶葉變出好滋味兒來。（《談論》-92）

例 193. 可是有機器還得仗着人工，那人工不在熟悉輪機，是在能叫茶葉變滋味兒。（《談論》-92）

例 194. 據令親說，印度這幾年不但種茶，而且能用機器叫茶葉變出好滋味兒來。（《談論》-93）

例 195. 遇見鬧天氣犯潮的的時候兒，該挪的挪，該晾的晾，總不要叫貨物受了潮濕。（《華言》-20）

③ 述語 VP の構成

a. 動詞

例 196. 怎麼能叫我不關心呢。（《搢紳》-21）

例 197. 過獎過獎，幾句拙言叫衆位見笑。（《搢紳》-9）

例 198. 如今又有人挑唆他，叫他返悔。（《便覽》-82）

例 199. 不可以有一點兒錯悞，叫人家犯疑。（《華言》-20）

例 200. 褚一官道：“好叫二叔得知，今日不是作寿……。”（《兒女》-39）

例 201. 好叫你得知，就是你感激不尽的那两个騾夫。（《兒女》-8）

例 202. 便是这桩事，也得叫我寨主知道。（《兒女》-21）

例 203. 再就是不叫我这班乡邻受累，就算你大家的好处了。（《兒女》-21）

b. 形容詞

例 204. 無奈他不說理，真叫人難受。（《談論》-62）

例 205. 說出話來，又要叫買主兒喜歡。（《華言》-20）

例 206. 倘若不肯，我也不叫你过于為難。（《兒女》-15）

例 207. 一则是个热闹兒，再者，一个小孩子中了会子，也叫他兴头兴头。（《兒女》-36）

例 208. 我叫你称心如意便了。（《兒女》-24）

例 209. 列公，你看，这老头儿这一愣，愣的好生叫人不解！（《兒女》-40）

c. 動詞+目的語

例 210. 叫你知道我的利害。（《今古》懷私怨）

例 211. 特意叫你撿着這麼一個元寶。（《華言》-25）

例 212. 寧叫父母缺兒女，不叫兒女缺父母。（《撮要》-4）

例 213. 據令親說，印度這幾年不但種茶，而且能用機器叫茶葉變出好滋味兒來。（《談論》-93）

例 214. 老天怎么也不可憐可憐你，叫你受这个样儿的苦哟！（《兒女》-20）

例 215. 不想他不愛这个好看兒，叫我有甚么法儿呢？（《兒女》-36）

例 216. 倘或道儿上有个甚么事儿，到底有个仗胆兒的，也叫你干老儿放点儿心。（《兒女》-40）

例 217. 这班儿发落他阎浮人世去，须得先叫他明白了前因后果，才免得怨天尤人。（《兒女》-0）

d. 動詞+補語

- 例 218. 這麼着小婦人就趕緊的出去，把地方找來，叫他看明白了。（《華言》-27）
例 219. 裏頭萬不可用擋眼的字，文理還要通順，別叫人看着費解。（《便覽》-58）
例 220. 倘或叫人拿住了，性命可就結了。（《今古》李沂公）
例 221. 你喝點兒茶，畧微的歇一歇兒，今兒個實在叫你受累了。（《談論》-15）
例 222. 替我女孩儿家作一个证明师傅，好叫世人知我母女不是来历不明。（《兒女》-25）
例 223. 只怕我这三间小小茆檐，任你闯得进来，叫你飞不出去！（《兒女》-17）
例 224. 列公，你看只安太太这一拜，叫普天下作儿女的看着好不难过！（《兒女》-40）
例 225. 谁知他才两来的月就掉了呢，倒叫我空喜欢了一场。（《兒女》-39）

e. 連動節

- 例 226. 叫您分心受累。（《談論》-43）
例 227. 何苦叫朋友疑惑我惱我。（《談論》-57）
例 228. 叫他又傷財又受驚。（《虎頭》）
例 229. 他自己先破小財，叫人信他重他。（《搢紳》-39）
例 230. 還得給百姓開養生之道，叫本地的民安居樂業。（《便覽》-54）
例 231. 好叫你上路趨程，早早的图一个父子团圆，人财无恙。（《兒女》-8）
例 232. 我吃上箸子就算开了斋了，还用叫姑爷、姑奶奶这么花钱费事？（《兒女》-29）

f. 狀語+中心語

- 例 233. 叫我們沈家不至於絕後。（《今古》沈小霞）
例 234. 又得叫人一看，立刻就明白。（《談論》-54）
例 235. 這個理真叫人難明白。（《便覽》-83）
例 236. 只是我安驥有数的七尺之軀，你叫我今世如何答报！（《兒女》-9）
例 237. 你也晓得后悔？我索性叫你大悔一悔。（《兒女》-8）
例 238. 便是安公子不受骡夫的赚，不肯动身，又叫他一人怎样的登程？（《兒女》-5）
例 239. 这段缘故，叫人实在不能不疑。（《兒女》-9）

g. 主語+述語

- 例 240. 還管保叫他們連一個也跑不了。（《今古》李沂公）
例 241. 如今可以一同把那兩口靈都帶回去，叫他們父子魂魄相依。（《今古》沈小霞）
例 242. 舅太太这话是要叫姑娘心里过得去，无奈姑娘自己觉得脸上磨不开。（《兒女》-27）

h. 副詞+形容詞

- 例 243. 方才我原因他说不认得邓九公这句话，其实叫人有些不平。（《兒女》-32）

i. “把”

- 例 244. 在雲華寺廟裏避雨來着，叫這群強盜把我誑了去。（《今古》李沂公）
例 245. 能叫人把行路的難處都忘了。（《談論》-40）
例 246. 您不知道我是叫這件事把我鬧迷惑了。（《虎頭》）
例 247. 就叫那有錢的人把僭們看輕了。（《虎頭》）
例 248. 我只问你，我是个管作甚么儿的，怎么会叫你们把我的模样儿画了来了。（《兒女》-29）

例 249. 如今两个媳妇既这等求你向我说，我要苦苦的不给他，却叫他两个心里把我这个公公怎生战兢？（《兒女》-40）

g. “給”

例 250. 好好兒的一個人，就怕是叫窮給擠壞了。（《便覽》-51）

例 251. 到底是寡不敵衆，叫人家給打躺下了好幾個人。（《今古》李汧公）

例 252. 甚至不用另支使人，叫他自己就給他自己作成了。（《兒女》-26）

表 4-4. 誘発使役文における述語 VP の構成状況

作品	VP	動詞	形容詞	述語節				合計
				把	給	形容詞述語節	動詞述語節	
金氏	数量	5	3	4	2	0	70	84
	割合	5.9%	3.6%	4.8%	2.4%	0%	83.3%	
				90.5%				100%
《兒女》	数量	4	5	2	1	1	124	137
	割合	2.9%	3.7%	1.5%	0.7%	0.7%	90.5%	
				93.4%				100%

誘発使役文に用いられている VP は、両書共に形容詞の用例が見られる。これは誘発使役文ならではの使い方となり、指示使役文と許容使役文には用いられない。最も用例数が多い VP は動詞述語であり、金氏教科書では 8 割以上を占めており、《兒女英雄傳》では 9 割を占めている。

誘発使役文において、《兒女英雄傳》には“好叫……”が用いられている用例が 12 例あり、金氏教科書には見られない。

例 253. 好叫人无从猜度。（《兒女》-14）

例 254. 好叫老爷得知，俩媳妇儿都有了喜了。（《兒女》-40）

例 255. 更仿佛是我想着他才把他配合他，好叫他周旋我。（《兒女》-22）

例 256. 管取他一片雄心侠气立地化成宛转柔肠，好叫他向那快活场中安身立命也！（《兒女》-16）

例 257. 这日正遇无事，便要当面嘱咐他一番，再给他定出个功课来，好叫他依课程功准备来年乡试。（《兒女》-33）

尚、“讓”構文の誘発使役文において、《兒女英雄傳》に“好讓……”が用いられている用例が 12 例見られ、“讓”構文の誘発使役文の 5 割を占めていることに対して、金氏教科書には見られない。誘発使役文では、金氏教科書より《兒女英雄傳》の方が“好叫/讓……”多用されていることが明らかになった。

4.1.2.3 許容使役文

許容使役文は「A+叫+B+VP」の構文で、被使役者 B がある動作・行為 VP を遂行することを使役者 A が許容する、ないしは放任するという事態を述べる構文である。

金氏教科書において、“叫”を許容使役文に用いている用例は、全部で 21 例見られ、《兒女英雄傳》においては、7 例見られる。それぞれの全用例を以下に示す。

例 258. 為甚麼房德不叫那些個底下人們跟進去呢。（《今古》李汧公）

例 259. 所以他不叫他們跟進去。（《今古》李汧公）

- 例 260. 可以叫他去要這個銀子。（《今古》沈小霞）
- 例 261. 可就直擺手兒，不叫大家嚷他，就慢慢兒的問真珠姬。（《今古》十三郎）
- 例 262. 知縣就吩咐叫他們回家去罷。（《今古》懷私怨）
- 例 263. 他媳婦兒攔他不叫他去。（《華言》-17）
- 例 264. 不叫他下去救去。（《華言》-17）
- 例 265. 總要設法多少叫他買點兒東西走，不能叫他空出去。（《華言》-20）
- 例 266. 我剛要往裏走，他不叫我進去。（《華言》-23）
- 例 267. 他就要進去，小的不叫他進去。（《華言》-23）
- 例 268. 求太爺把這個元寶叫小的領去罷。（《華言》-25）
- 例 269. 叫他可以拿這個錢去，置幾畝地。（《華言》-27）
- 例 270. 主人叫我給你這一錠銀子，不叫你外頭告訴人說。（《華言》-27）
- 例 271. 小的的主人不叫小的在客廳裡伺候着。（《華言》-27）
- 例 272. 可就攔他，不叫他去。（《華言》-30）
- 例 273. 等家父回信來，叫兄弟可以領收。（《搢紳》-8）
- 例 274. 萬不可以叫他們隨便在外散居。（《搢紳》-36）
- 例 275. 每年不過叫他坐食俸祿而已。（《搢紳》-45）
- 例 276. 可又不能不叫他們快收的。（《談論》-68）
- 例 277. 地方官怎麼敢違例叫他們開賭呢。（《談論》-68）
- 例 278. 那件事，通國的人，沒不知道的，能握得住誰的嘴，不叫傳說呢。（《便覽》-97）
- 例 279. 一个玉格要上淮安，就没把我急坏了，叫他去，又不放心。（《兒女》-22）
- 例 280. 不叫他去，又怕他愁出个病来。（《兒女》-22）
- 例 281. 到了第二年，他留了头了，连个溺盆子都不肯叫他拿。（《兒女》-40）
- 例 282. 甚至洗个脚都不叫他在跟前。（《兒女》-40）
- 例 283. 赶到过来，难道不叫他三口儿一处住吗？（《兒女》-23）
- 例 284. 岂有不叫他们一处之理！自然两个人就在他那屋里分东西间住。（《兒女》-23）
- 例 285. 不想闯了个没对儿的姑娘，才听得一声锣响，唬了个两手冰凉，只叫娘拉着。（《兒女》-27）

表 4-5. 許容使役文における使役者 A と被使役者 B の構成状況

作品	A/B	非省略			省略	合計
		名詞	名詞フレーズ	人称代名詞		
金氏	使役者 A	5	1	2	13	21
	被使役者 B	4	1	15	1	
《兒女》	使役者 A	0	0	0	7	7
	被使役者 B	1	1	5	0	

許容使役文において、《兒女英雄傳》は使役者 A が省略される用例が全てだが、金氏教科書は 13 例あり、全 21 例の 6 割を占めている。金氏教科書は使役者 A と被使役者 B の両方が省略される用例が例 278. の 1 つしか見られない。また、両書においては、使役者 A と被使役者 B のどちらも無生命の用例がない。さらに、被使役者 B の使用では、両書共に人称代名詞を使用する頻度が高いことがわかる。

表 4-6. 許容使役文における述語 VP の構成状況

作品	VP	動詞	述語節		合計
			名詞述語節	動詞述語節	
金氏	数量	3	0	18	21
	割合	14.3%	0%	85.7%	100%
《兒女》	数量	3	1	3	7
	割合	42.9%	14.2%	42.9%	100%

許容使役文において、VP の種類が少なく、両書共に“把”構文と“給”が用いられている用例が見当たらない。《兒女英雄傳》には名詞フレーズが VP に来る用例が 1 つ見られる。後の文脈を確認すると、この用例は“一處之理”の前の動詞“住”が省略されたことがわかる。

例 286. 岂有不叫他们一處之理！自然两个人就在他那屋里分东西间住。（《兒女》-23）

4.1.3 “叫”構文の受身表現

太田辰夫（1958：248）は、「被動の《教》は唐代より、また被動の《叫》は清代から用いられた。」と指摘している。

受身文は「A+叫+B+VP」の構文で、主語に立つ受動者 A が行為者 B によって影響を受け、何らかの状態・変化・結果 C が生じたという事態を述べる構文である。

金氏教科書において、“叫”を受身文に用いている用例は、全部で 57 例見られる。また《兒女英雄傳》においては、10 例見られる。

①受動者 A の構成

a. 人称代名詞

例 287. 恐怕他是真叫人害了。（《華言》-30）

例 288. 小的也不知道他是叫雨隔在甚麼地方了。（《華言》-30）

例 289. 方才他老人家要在跟前儿，到底也知道我是叫人逼的没法儿了。（《兒女》-27）

例 290. 是呀，真真的，我也是叫你们唬糊涂了！（《兒女》-12）

b. 名詞

例 291. 他聽見說房德叫人殺了。（《今古》李汧公）

例 292. 首飾全叫人搶了去了。（《今古》十三郎）

例 293. 就連臣也差一點兒叫他們害了。（《今古》沈小霞）

例 294. 房德叫他數落了這幾句，臉上羞愧的了不得。（《今古》李汧公）

例 295. 连姐姐都叫人家娶了来了，姐姐也是一年之久直到今日才知道哇！（《兒女》-29）

c. 名詞フレーズ

例 296. 他的臉叫熊舐了去了。（《撮要》-3）

例 297. 你的丈夫是叫一個趕驢的王牛子害了。（《華言》-24）

例 298. 他的男人叫人殺了。（《華言》-27）

例 299. 他兄弟喬林是叫蕭豹害了。（《華言》-30）

例 300. 其实这二位都算叫人家装在鼓里了！（《兒女》-23）

d. 数量詞

例 301. 內中有一個叫火槍打死了。（《華言》-26）

e. 省略

例 302. 一定是去年沒叫人打死。（《今古》懷私怨）

例 303. 叫一個糧船上的水手搶了去了。（《華言》-26）

例 304. 不知道又叫甚麼事情絆住了。（《便覽》-43）

例 305. 若不是我腿快，也就叫人給拿住了。（《今古》十三郎）

例 306. 公子斷沒想到從城裏頭憋了這麼個好燈虎兒來，一進門就叫人家給揭了！（《兒女》-38）

②行為者 B の構成

a. 人稱代名詞

例 307. 全都叫他買了去了。（《便覽》-85）

例 308. 我總得先想個法子，把我的帽子藏起來，別叫他搶了去。（《今古》十三郎）

例 309. 叫他們聽見，傳出去叫人恥笑。（《今古》李沂公）

例 310. 負心賊已經叫我給開膛破肚了。（《今古》李沂公）

例 311. 我們費了不是容易的事，把姑娘請來，算叫你搶了去了。（《兒女》-22）

例 312. 虧是有個對證在跟前兒，不然叫你這一辨文兒，倒像我這兒照着說評書也似的，現抓了這麼句話造謠言呢。（《兒女》-40）

b. 名詞

例 313. 小的就聽見說，有一個水手是叫火槍打死了。（《華言》-26）

例 314. 走到十字路口，叫打更的拿住了送了縣了。（《華言》-23）

例 315. 可不免常偷主人的銀錢東西甚麼的，叫主人查出來了。（《談論》-83）

例 316. 把當初怎麼叫人拐來的話，都說出來了。（《今古》十三郎）

例 317. 不想這着棋可又叫安老爺先料着了！（《兒女》-18）

例 318. 連你那拉青屎的根子都叫人家抖翻出來了，別的還有甚麼怕說的！（《兒女》-20）

c. 名詞フレーズ

例 319. 像私貨叫海關上搜出來，不過加幾倍罰銀子。（《談論》-14）

例 320. 我的父親和倆兄弟，都叫楊路倆個奸賊給害了。（《今古》沈小霞）

例 321. 你的丈夫是叫一個趕驢的王牛子害了。（《華言》-24）

例 322. 不知道又叫甚麼事情絆住了。（《便覽》-43）

例 323. 公子，你我今日相逢，三生有幸！只是叫‘禮’字兒管住了我們。（《兒女》-11）

表 4-7. 受身表現における受動者 A と行為者 B の構成状況

作品	A/B	非省略				省略	合計
		名詞	名詞フレーズ	人稱代名詞	数量詞		
金氏	受動者 A	7	8	3	1	38	57
	行為者 B	41	6	10	0	0	
《兒女》	受動者 A	1	3	2	0	4	10
	行為者 B	6	1	3	0	0	

受身表現において、金氏教科書では受動者 A が省略される用例が多く、全用例の 6 割以上を占めている。一方、《兒女英雄傳》は受動者 A が省略される用例が全用例の 4 割を占めている。両書共に行為者 B が省略される用例は見当たらない。さらに、行為者 B の使用では、両書共に名詞を使用する頻度が高いことがわかる。

受動者 A について、金氏教科書は無生命の用例が 3 例見られ、《兒女英雄傳》は 2 例見られる。例 324. の“一個”は“1 人”にあたり、生命度のある物とすべきである。
例 324. 内中有一个叫火槍打死了。（《華言》-26）
例 325. 像私貨叫海關上搜出來，不過加幾倍罰銀子。（《談論》-14）
例 326. 他那件舊夏布大褂兒，叫涼風兒一吹，颼颼的響。（《今古》李沂公）
例 327. 首飾全叫人搶了去了。（《今古》十三郎）
例 328. 不想這着棋可又叫安老爺先料着了！（《兒女》-18）
例 329. 連你那拉青屎的根子都叫人家抖翻出來了，別的还有甚么怕說的！（《兒女》-20）

行為者 B について、《兒女英雄傳》では無生命の用例は見当たらないが、金氏教科書では動物の用例が 2 つあり、無生命の用例が 8 例見られる。例 340. から例 344. において、“海關上”、“關上”、“天泰棧”は命のない語彙だが、“～に属する人”を指しているため、生命度のある物とすべきである。

例 330. 他的臉叫熊銜了去了。（《撮要》-3）
例 331. 成天家打雁，叫雁鴉了眼了。（《撮要》-16）
例 332. 内中有一个叫火槍打死了。（《華言》-26）
例 333. 小的就聽見說，有一個水手是叫火槍打死了。（《華言》-26）
例 334. 小的也不知道他是叫雨隔在甚麼地方了。（《華言》-30）
例 335. 那個時候大家都當是叫火燒死的了。（《今古》李沂公）
例 336. 不知道又叫甚麼事情絆住了。（《便覽》-43）
例 337. 沒想到叫事情絆住了。（《便覽》-4）
例 338. 好好兒的一個人，就怕是叫窮給擠壞了。（《便覽》-51）
例 339. 他那件舊夏布大褂兒，叫涼風兒一吹，颼颼的響。（《今古》李沂公）
例 340. 叫關上查出來，可是累贅。（《便覽》-13）
例 341. 叫關上查出來，是要罰我們的。（《談論》-13）
例 342. 若是私自裝運軍火來，叫海關上查出來，船貨一併入官的。（《談論》-60）
例 343. 像私貨叫海關上搜出來，不過加幾倍罰銀子。（《談論》-14）
例 344. 河裏通共有四五十隻船，全叫天泰棧雇了去了。（《談論》-90）

③ 述語 C の構成

a. 動詞

例 345. 傳出去叫人恥笑。（《今古》李沂公）

b. 動詞+目的語

例 346. 倘或叫人聽見這話，連我都連累上了。（《今古》李沂公）

例 347. 成天家打雁，叫雁鴉了眼了。（《撮要》-16）

例 348. 公子，你我今日相逢，三生有幸！只是叫‘礼’字儿管住了我們。（《兒女》-11）

c. 動詞＋補語

- 例 349. 全都叫他買了去了。(《便覽》-85)
 例 350. 叫關上查出來，是要罰我們的。(《談論》-13)
 例 351. 他算是白叫人惱了一年多，您說冤不冤。(《談論》-57)
 例 352. 他的男人叫人殺了。(《華言》-27)
 例 353. 是呀，真真的，我也是叫你们唬糊塗了！(《兒女》-12)
 例 354. 不想这着棋可又叫安老爷先料着了！(《兒女》-18)

d. 状語＋中心語

- 例 355. 他那件舊夏布大褂兒，叫涼風兒一吹，颼颼的響。(《今古》李沂公)

e. “給”

- 例 356. 若不是我腿快，也就叫人給拿住了。(《今古》十三郎)
 例 357. 現在若不快打發人把小少爺找回來，可恐怕叫人給害了。(《今古》十三郎)
 例 358. 又叫解差在路上給謀害了。(《今古》沈小霞)
 例 359. 公子斷没想到从城里头憋了这么个好灯虎儿来，一进门就叫人家給揭了！(《兒女》-38)

表 4-8. 受身表現における述語 VP の構成状況

作品	VP	動詞	述語節		合計
			動詞述語節	給	
金氏	数量	1	48	8	57
	割合	1.8%	84.2%	14.0%	100%
《兒女》	数量	0	9	1	10
	割合	0%	90%	10%	100%

受身表現において、両書共に VP が動詞述語節にあたる用例が極めて高く、それぞれの全用例の 8 割以上を占めている。また、両書に“把”構文が用いられず、“給”が用いられていることがわかる。

4.1.4 結論

本節は金氏教科書と《兒女英雄傳》に用いられている“叫”構文に対象を絞って考察を行った。そして両書において、“叫”は使役義・誘発義・許容義・受身義の 4 種類に用いられていることを明らかにした。各義は文型によって、それぞれの使用状況が異なり、以下のような事実を指摘した。

表 4-9. 両書における 4 類義の“叫”構文使用状況

項目	指示義	誘発義	許容義	受身義	合計
金氏	368	84	21	57	530
割合	69.4%	15.8%	4.0%	10.8%	100%
《兒女》	439	137	7	10	593
割合	74.0%	23.1%	1.2%	1.7%	100%

《兒女英雄傳》の文字数は約 60 万字ある。筆者の統計によると、全 11 冊の金氏教科書の文字数は約 28 万字で、《兒女英雄傳》の半分の文字数である。それぞれの全書において、《兒女英雄傳》より、金氏教科書の方が“叫”構文が用いられている頻度が高い。したがって、金氏教科書において、“叫”構文の使用が《兒女英雄傳》より活発であると考えられる。

また、両書の“叫”構文において、最も用いられているのが指示義であり、誘発義がその次になる。どちらも使用上には偏りが見られるが、《兒女英雄傳》の方がその差が激しいことがわかる。

表 4-10. 4 類義における A と B が無生命にあたる使用状況

作品	指示義		誘発義		許容義		受身義	
	A	B	A	B	A	B	A	B
金氏	-	-	+	+	-	-	+	+
《兒女》	-	-	+	-	-	-	+	-

また、表 4-10. から、《兒女英雄傳》より、金氏教科書の方が“叫”構文の A と B にあたる無生命の使用範囲が広く、誘発義と受身義にあたる使役者 A と受動者 A 以外、被使役者 B と行為者 B にも用いられることも可能であったことがわかる。しかし、《兒女英雄傳》では誘発義と受身義にあたる使役者 A と受動者 A しか用いられていない。

4.2 “讓”構文の比較研究

現代中国語において、“叫”の他、“讓”も使役・受身の機能を持ち、基本的に“叫”とはほぼ同じものとして扱われることが多い。“叫”と“讓”は共通の機能を表す使役・受身のマーカーとして一括して呼ばれることが多く、共通の機能を持つことが示唆されているが、同じ様に使用されているのかを実証的に調査した研究は多くない。

卢小群 (2017: 475) は“‘让’字句在老北京土话中也是一个具有鲜明特色的句式, 与‘叫/教’字句有着相同的语义特点, 其句型在北京土话的特殊句式里占有重要地位。”と指摘していることから、“讓”は北京語でも重要な位置を占めていることがわかる。

4.2.1 “讓”の基本用法

金氏教科書において、“讓”が用いられている用例が 34 例ある。そしてその中で使役表現として用いられている用例が 6 つしか見当たらない。ここでは使役表現に用いられている 6 つの用例を除き、残りの 28 例を意味別に分類し、以下に示す。

① 便宜・利益を讓る

例 360. 沒法子事事就都讓着他。(《今古》李汧公)

例 361. 我是久已仰慕閣下忠義, 如今可喜, 光臨敝處, 就讓給您這幾間草房住處。(《今古》沈小霞)

例 362. 勝要相讓敗要相救。(《撮要》-9)

例 363. 讓行不讓力。(《撮要》-10)

例 364. 沒那麼坐的, 該當讓別位纔是的。(《搢紳》-8)

例 365. 俗言讓行不讓力, 就是這個意思。(《搢紳》-46)

例 366. 今兒這個賬, 也不能寫您也不能寫他, 得賞臉讓我。(《便覽》-23)

例 367. 共總是多少錢，大家公攤，省得彼此讓賬。（《便覽》-24）

② 飲食物を勧める

例 368. 俗們可以隨便談談倒好。那麼就遵命不讓了。（《搢紳》-12）

例 369. 就是不吃飯何妨喝兩盅酒呢。酒喝的也不少了，不必讓了。（《搢紳》-12）

例 370. 您別讓了，我們都喝過了。（《搢紳》-18）

例 371. 滿滿的斟了一杯酒，就讓嚴世蕃說，馬給鍊蒙老先生賜酒，已經醉了，不能回敬。
（《今古》沈小霞）

③ 案内する・招き入れる

例 372. 趕房德把李勉讓進書房去了。（《今古》李沂公）

例 373. 在半道兒上遇見房德了，把他讓到衙門去。（《今古》李沂公）

例 374. 見完了禮，就把他讓在板凳上坐下了。（《今古》李沂公）

例 375. 李勉此時走路也覺着乏了，又見他讓的很寔在，就答應說，既承雅情，我就到衙門裡談一談就是了。（《今古》李沂公）

例 376. 沈鍊看見他讓的很寔在，就同他去了。（《今古》沈小霞）

例 377. 馮主事心裏明白，就把他讓到書房裡去了。（《今古》沈小霞）

例 378. 那馮主事聽見說知州來拜，就趕緊的出來迎接，讓到客廳裏去坐。（《今古》沈小霞）

例 379. 有一個老者，從裏頭出來，就把他讓進去了。（《今古》沈小霞）

例 380. 如今聽他這麼說，可就放了點兒心了，就把他讓到屋裏去。（《今古》懷私怨）

例 381. 王大人謝了恩，然後把旨意請過來，這纔讓坐敘談。（《今古》十三郎）

例 382. 請進來，讓到書房裏見。（《搢紳》-3）

例 383. 樓上屋子窄，讓那麼些位客，不大合式。（《便覽》-16）

例 384. 這麼着，我把他讓在書房裏，陪着他談了半天。（《談論》-34）

④ 値引きする

例 385. 就是讓一點兒價錢，總要亮出這個情面來。（《華言》-20）

⑤ 所有權を他人に譲る

例 386. 因為他表兄朱玉恆包妥了那個工程之後，忽然有要緊的事上福建去，就把那個工程讓給他做。（《談論》-78）

例 387. 他不明說要用我那塊地，他可繞着灣子，叫我讓給他那塊地。（《便覽》-85）

以上で示した用例では、①便宜・利益を譲るという語義に用いられているのが8例、②飲食物を勧める語義に用いられているのが4例、③案内する・招き入れるという語義に用いられているのが13例、④値引きするという語義に用いられているのが1例、⑤所有權を他人に譲るという語義に用いられているのが2例ある。卢小群（2017：476）が提示した“表示避开、躲閃”という義の用例が見当たらない。

4.2.2 “讓”構文の使役表現

冯春田《近代汉语语法研究》（2000:639-640）は“‘让’の使役用法可能是由它的‘予让’‘让给’义转化而来的。（中略）‘让与’犹单用‘让’（让给），是一般动词；

虚化为‘使让’，就成了使役动词。这种用法大约始见于元代，明清时期用例较多，后来成为现代汉语常用的使役句。”と指摘しており、《朱子语类》⁷⁷から下記の用例をあげた。例 388. 又有一般人说此事难理会，只恁地做人自得，让与他们自理会。

“讓”の使役表現について、前節で考察した“叫”と同じ様に指示使役文・誘発使役文・許容使役文を3分類にし、考察を行う。

李焱（2003：10）は“从《水浒传》到《金瓶梅词话》再到《醒世姻缘传》，‘让’字句中大量出现的动词有三类：居坐类、行进类、餐饮类这不是偶然的。是受到中国传统文化传统的影响。中国是一个讲求礼仪的国家，在居坐、行进、餐饮方面的礼仪要求非常严格。”と指摘した。即ち、李焱は“讓”が兼語式に用いられている場合 VP にくる動詞の多くが“居坐”類、“行进”類、“餐饮”類に属するものであるとする。また、今村圭の「明清白話小説における使役表現の変遷：“让”を中心に」（2012）は李焱が挙げた3つの種類に“担当”類を加え、『金瓶梅詞話』、『水滸伝』、『三言』の3冊の小説の“讓”構文を考察し、この4つの類の動詞が“讓”の兼語式のVPに多く用いられる動詞であることを実証した。

本節は李焱（2003）と今村（2012）が提示している特徴に着目して、金氏教科書と《儿女英雄傳》における“讓”構文のVPに用いられる4種類の用例数を統計にかけ、確認する。

4.2.2.1 指示使役文

指示使役文は「A+讓+B+VP」の構文で、主語に立つ使役者Aが被使役者Bに動作・行為VPを遂行させようとしむける事態を述べる構文である。

江藍生（2000：222）は“‘让’本为谦让、把好处给别人之义，直到清代的文献里还没有见到用作使役义的例子，‘让’表示使役是很晚近的事。”と指摘しているが、金氏教科書において、“讓”を指示使役文に用いている用例は5つ見られ、以下に示す。

例 389. 所以我們對天禱告，願意找這麼一個足智多謀的好漢，讓他做個大哥。（《今古》李汧公）

例 390. 不大的工夫兒就擺上酒席了，就讓房德坐在首座。（《今古》李汧公）

例 391. 那箇人一定讓到他家裏去。（《今古》沈小霞）

例 392. 這麼着他就又出去，打了有一斤酒來，他就讓那個客人儘量兒一喝。（《華言》-30）

例 393. 那個客人就讓我男人和他一塊兒喝酒。（《華言》-30）

上記の用例において、使役者Aの省略は2例あり、被使役者Bの省略は見当たらない。使役者Aと被使役者Bどちらも有生命である人となり、名詞、名詞フレーズ、人称代名詞の3類から構成されている。

また、VPに関して、例389.は“担当”類にあたる“做”がVPに用いられている。例390.は“居坐”類にあたる“坐”がVPに用いられている。例391.は“行进”類にあたる“到”がVPに用いられている。例392.と例393.は“餐饮”類にあたる“喝”がVPに用いられている。

⁷⁷ 『朱子語類』は、中国の宋代、同時代の儒学者である朱熹がその門弟たちと交わした言葉を、その没後に集成し門類に分類した書物である。咸淳6年、黎靖徳編、全140巻。

《兒女英雄傳》において、“讓”を指示使役文に用いている用例が94例ある。使役者Aの省略が64例あり、被使役者Bの省略が8例ある。使役者Aと被使役者Bどちらも有生命である人となり、名詞、名詞フレーズ、人称代名詞の3類から構成されている。

また、VPに関しては、李焱（2003）と今村（2012）で提示されている4つの種類にあたるVPが全部で65例見られる。“居坐”類が27例、“餐饮”類が14例、“行进”類が23例、“担当”類が1例あるが、紙幅の関係上、用例の引用は控える。

例 394. ～例 400. は“居坐”類にあたる“坐”がVPに用いられている。

例 394. 便回头向安太太道：“太太，快让大姑奶奶归坐去。”（《兒女》-32）

例 395. 舅太太便叫把桌子横过来，让大娘子坐了上首，自己下首相陪。（《兒女》-27）

例 396. 却说安老爷见一切礼成，才让师老爷归坐，请升了冠。（《兒女》-37）

例 397. 安老爷不好还礼，只以揖相答。便让他上坐，他那里肯。（《兒女》-38）

例 398. 邓九公便让安老爷在中间北床坐下，公子在靠南窗坐下。（《兒女》-15）

例 399. 况又是奴才的主儿，不比寻常人，岂有让在外头坐着的理？（《兒女》-14）

例 400. 却说张老让他三个坐下，便高声叫道：“大舅妈，拿开壶来！”（《兒女》-37）

例 401. ～例 407. は“餐饮”類にあたる“吃、喝”がVPに用いられている。

例 401. 不禁点头叹息了一声，默然不语，便让他吃茶。（《兒女》-39）

例 402. 他又忙道：“我的姑奶奶！我可不知道吗叫个挑礼呀！你只管让他娘儿们吃罢。（《兒女》-21）

例 403. 一面叫人要了点心汤来，让新人吃。（《兒女》-28）

例 404. 要了双筷子，便自己端到玉凤姑娘跟前，蹲身下去，让他吃些。（《兒女》-21）

例 405. 说着，让他喝茶吃烟。（《兒女》-36）

例 406. 自己端着碗，送到他口边，让他喝两口热茶。（《兒女》-20）

例 407. 弄了一壶茶，跟了个衙役，亲自送来让家丁们喝。（《兒女》-13）

例 408. ～例 413. は“行进”類にあたる“走、进去、来到、进、出”がVPに用いられている。

例 408. 女子让他走后，一脚踏进门去，只见里面原来是个夹墙地窖子。（《兒女》-7）

例 409. 他到底让太太先进去才罢。（《兒女》-12）

例 410. 邓九公又去应酬了一番程相公，便照旧让安老爷来到正房。（《兒女》-39）

例 411. 公子让先生进了屋子，才转身步入二门。（《兒女》-36）

例 412. 便让老爷出了正房，从西院墙一个屏门过去。（《兒女》-15）

例 413. 比及到门，他到底让太太先进去才罢。（《兒女》-12）

例 414. は“担当”類にあたる“作”がVPに用いられている。

例 414. 又那里给他找荣国府送进枕翠庵，让他作“槛外人”去呢？（《兒女》-23）

例 415. ～例 419. はその他の用例である。

例 415. 安老爷便让程师爷加墨。（《兒女》-34）

例 416. 安老爷肃整威仪的献了两爵酒，退下来，便让邓九公行礼。（《兒女》-24）

例 417. 忙着先让程相公回避过了，自己料是一时换不及衣服，只换了顶帽子。（《兒女》-39）

例 418. 邓九公便让大家前厅歇息。（《兒女》-21）

例 419. 就让你在悦来店呆等，不致遭骡夫的毒手，你又怎生的到得淮安？（《兒女》-8）

4.2.2.2 誘発使役文

誘発使役文は「A+讓+B+VP」の構文で、被使役者Bに何らかの状態・変化・結果VPが生じる状況を使役者Aが引き起こすという事態を述べる構文である。

金氏教科書において、“讓”を誘発使役文に用いている用例は見当たらないが、《兒女英雄傳》には24例が見られる。使役者Aと被使役者Bはどちらも名詞、名詞フレーズ、人称代名詞の3種類から構成されている。その中で、使役者Aの省略が21例あるが、被使役者Bの省略は見当たらない。また、使役者Aが無生命となる用例が1例、被使役者Bが無生命となる用例が1例ある。

例 420. 这个地方儿要让安公子积伶了。（《兒女》-8）

例 421. 让那白光儿从头顶上扑空了过去，然后腾出身子来再作道理。（《兒女》-6）

VPは指示使役文と異なり、許容使役文において、李焱（2003）と今村（2012）で提示されている4つの種類にあたるVPは僅か1例しか見られない。“行进”類にあたる“过来”がVPに用いられている用例である。

例 422. 我过那边儿帮他们归着归着东西去，早些儿弄完了，好让戴奶奶他们早些过来。（《兒女》-24）

その他、VPが形容詞となる用例は3つある。

例 423. 却一片肝胆照人，不让英雄袞袞。（《兒女》-27）

例 424. 这里头可得让我比你们爷儿们通精儿了。（《兒女》-31）

例 425. 这个地方儿要让安公子积伶了。（《兒女》-8）

残りの17例では、全て動詞述語節がVPに用いられている。その中には動詞の重ね方「VV」も見られる。

例 426. 好让那作书的借此歇歇笔墨，说书的借此润润喉咙。（《兒女》-9）

例 427. 我们外面歇歇，好让他娘儿们说说话儿，各取方便。（《兒女》-20）

例 428. 再说这尹先生他受人之托，必当终人之事，也得让他交得过排场去。（《兒女》-17）

例 429. 咱们到那院里坐去，好让人家拾掇屋子。（《兒女》-32）

例 430. 纵让他知些进退，不敢再来了。（《兒女》-31）

例 431. 好让他不着一丝牵挂流连，安心北上。（《兒女》-21）

4.2.2.3 許容使役文

許容使役文は「A+讓+B+VP」の構文で、被使役者Bがある動作・行為VPを遂行することを使役者Aが許容する、ないしは放任するという事態を述べる構文である。

太田辰夫（1958：242）は「《讓》はその原義からして婉曲な意味をもっているので、許容の意味に用いることも多い。（中略）また、許容の意味から少しく轉じて自分の意志をあらわすこともある。」と指摘している。

金氏教科書において、“讓”を許容使役文に用いている用例は1例しか見られない。使役者Aが省略され、被使役者Bが名詞で、生命度が高い人となる。また、“行进”類にあたる“過去”がVPに用いられている。

例 432. 就囑咐王太別言語，把臉兒掉過來，讓他過去罷。（《今古》李沂公）

《兒女英雄傳》において、“讓”を許容使役文に用いている用例が46例ある。使役者Aの省略が38例あり、被使役者Bの省略は見当たらない。使役者Aと被使役者Bどちらも有生命である人となり、名詞、名詞フレーズ、人称代名詞の3類から構成されている。VPに関して、李焱（2003）と今村（2012）で提示されている4種類のVPが全部で7例見られる。

例433. が“居所”類、例434. ～例436. が“餐飲”類、例437. ～例438. が“行進”類である。また、例439. の“行進”類＋“餐飲”類の連動用法が1例見られる。

例 434. 里张姑娘便让公子在靠妆台一张桌儿上首坐了，他姊妹两个对面相陪。（《兒女》-28）

例 434. 我这位把弟，他有个不醉的量，今几个屈尊你四位，让他多喝几盅。（《兒女》-39）

例 435. 问问他两个如今可好让我吃杯酒。（《兒女》-38）

例 436. 褚大娘子便叫人端去，让姨奶奶吃完，散给那些孩子们了。（《兒女》-15）

例 437. 他们既到了这里，不好不让他们进来。（《兒女》-21）

例 438. 待说不让他过来，又好像我拒绝了他。（《兒女》-31）

例 439. 亲戚礼道的，咱们怎么好不让人家进来喝碗茶呢？（《兒女》-15）

《兒女英雄傳》に“讓”を許容使役文に用いている用例において、VPが李焱（2003）と今村（2012）で提示されている4種類の他、“说”類が用いられている用例は8つ見られる。

例 440. 就让你说，你把你是怎样一桩事情，也说来我听听！（《兒女》-7）

例 441. 老爷子！你老别打，让我说。（《兒女》-31）

例 442. 我的好小爷，你且莫伤心！让我说话要紧。（《兒女》-3）

例 443. 你老人家可千万莫要性急，索兴让我们二叔先说。（《兒女》-16）

例 444. 你老人家先别打岔，让人家说完了。（《兒女》-19）

例 445. 张金凤便向他们道：“你们先躲躲儿，让我们说话。”（《兒女》-26）

例 446. 我因他只一句话便不肯让人先说，所以笑他。（《兒女》-39）

例 447. 你就不肯出去，也让我回太太一句去呀。（《兒女》-40）

残りの33例では、全て動詞或いは動詞述語節がVPに用いられている。その中には“把”、“给”、動詞の重ね型“V-V、VV”も見られる。

例 448. 索兴让我们把这点儿事料理完了，咱们好说闲话儿。（《兒女》-36）

例 449. 老爷受这场热窝，心下里也不让那长姐儿给程师老爷点那袋烟的窝心！（《兒女》-38）

例 450. 姑奶奶，我好容易见着他了，你让我合他多亲香亲香！（《兒女》-20）

例 451. 忙了这一程子了，也该让他老公母俩歇歇儿。（《兒女》-29）

例 452. 你同师爷走走去，我竟不能奉陪了，让我在这里静一静儿罢。（《兒女》-38）

例 453. 是安老爷再三不肯让他在外住。（《兒女》-24）

例 454. 再者，女婿今日也没回来，倒让他老人家早些睡罢。（《兒女》-31）

例 455. 且把帽子摘下来，让我打你几个脑瓜子再讲。（《兒女》-28）

例 456. 张老道：“姑爷，你让我拿着灯罢。”（《兒女》-10）

4.2.3 “叫”構文との比較

金氏教科書において、“叫”構文が全部で530例あり、“讓”構文が6例ある。また、《兒女英雄傳》においては、“叫”構文が全部で593例あり、“讓”構文が164例ある。どちらも“讓”構文より“叫”構文の用例数をはるかに多い。さらに、“讓”構文が受身表現に用いられていないことから、両書において、“叫”構文に比べ、“讓”構文の方は使用範囲が狭いと言える。

表4-11. 金氏教科書と《兒女英雄傳》における“叫”構文と“讓”構文の使用状況

作品	種類	使役表現			受身表現	合計
		指示義	誘発義	許容義		
金氏教科書	叫	368	84	21	57	530
		473				
	讓	5	0	1	0	6
		6				
《兒女英雄傳》	叫	439	137	7	10	593
		583				
	讓	94	24	46	0	164
		164				

卢小群 (2017:476) は“老北京土话表示致使的基本句式除了上文提及的叫字句，让字句也是表示致使的重要句式之一。在日常口语中让字句是使用频率最高、最普遍的典型致使句式。”と指摘している。

使役表現について、金氏教科書における“叫”構文が全部で477例あり、“讓”構文が6例ある。また、《兒女英雄傳》における“叫”構文が全部で583例あり、“讓”構文が164例ある。したがって、両書共に“叫”構文の使用頻度が“讓”構文をかなり上回っていることが明らかである。両書において、“叫”構文は各使役文の用例数によって、指示>誘発>許容という変化が見られる。一方、“叫”構文とは異なり、“讓”構文は各使役文の用例数によって、指示>許容>誘発という変化が見られる。この異なりについて、太田辰夫 (1958 : 242) が指摘した許容の意味は“讓”の原義に派生されたと解釈できるとしており、“讓”が誘発使役文に用いられるようになったのは指示使役文・許容使役文より遅れているからであると考えられる。

“讓”構文の使役表現において、使役者Aと被使役者Bのどちらも名詞、名詞フレーズ、人称代名詞の3類の構成からとなる。それに対して、“叫”構文の使役表現の使役者は名詞、名詞フレーズ、人称代名詞の他、指示代名詞、短文、数量詞などで構成されている。即ち、両書において、“讓”構文における使役表現の使役者Aと被使役者Bに来るものが限られており、“叫”構文ほど豊富でないと言える。

4.2.4 結論

本節は金氏教科書と《兒女英雄傳》において、使役動詞“讓”がどのように用いられているのかを指示使役文・誘発使役文・許容使役文の3種類に分けて明らかにした。冯田春 (2000 : 640) は“大约到明末清初，‘让’字使役句也出现了表示被动意义的例子，

(中略) 这样的例子当时不只罕见, 而且还带有‘使让’ (抽象使役; 容忍) 的意思。到现代汉语北方话里, ‘让’ 字使役句、被动句都是比较常见的。”と指摘しているが、禁止教科書と《兒女英雄傳》においては、受身義の“讓”は見当たらない。

まず使役者Aにおいて、金氏教科書は全6例のうち、3例が省略されている。《兒女英雄傳》は全164例のうち、7割以上の123例が省略されている。各使役文における省略割合は《兒女英雄傳》が68.1% (指示使役文)、87.5% (誘発使役文)、82.6% (許容使役文) となり、金氏教科書が40% (指示使役文)、0% (誘発使役文)、100% (許容使役文) となる。

次に、被使役者Bにおいて、金氏教科書では省略されている用例がない。《兒女英雄傳》では全164例のうち、8例のみ省略されており、全て指示使役文に属する。

表4-12. 金氏教科書と《兒女英雄傳》における使役文に用いられる“讓”構文のA/B

作品	種類	A/B	非省略			省略	合計	
			名詞	名詞フレーズ	人称代名詞			
金氏	指示義	使役者A	0	2	1	2	5	6
		被使役者B	1	2	2	0		
	誘発義	使役者A	0	0	0	0	0	
		被使役者B	0	0	0	0		
	許容義	使役者A	0	0	0	1	1	
		被使役者B	0	0	1	0		
《兒女》	指示義	使役者A	18	7	5	64	94	164
		被使役者B	40	22	24	8		
	誘発義	使役者A	1	1	1	21	24	
		被使役者B	6	5	13	0		
	許容義	使役者A	2	1	5	38	46	
		被使役者B	10	6	30	0		

さらに李焱 (2003) と今村 (2012) が指摘している“讓”が使役表現として用いられている場合、VP にくる動詞の多くが“居坐”類、“行进”類、“餐饮”類、“担当”類である特徴を検証した。

表4-13. 金氏教科書と《兒女英雄傳》における使役文に用いられる“讓”構文のVP

作品	種類	“居坐”類	“餐饮”類	“行进”類	“担当”類	その他	合計
金氏	使役	1	2	1	1	0	5
	誘発	0	0	0	0	0	0
	許容	0	0	1	0	0	1
	合計	1	2	2	1	0	6
	割合	6					0%
《兒女》	使役	27	14	23	1	29	94
	誘発	0	0	1	0	23	24
	許容	2 ⁷⁸	3	2	0	39	46
	合計	29	17	26	1	91	164
	割合	73					55.5%

⁷⁸ うち1例が“行进”類+“餐饮”類の連動用法である。

表4-13. から金氏教科書と《兒女英雄傳》で“讓”が用いられている使役表現において、李焱（2003）と今村（2012）で提示されている4種類にあたるVPの使用状況に差が見られることがわかる。

まず、金氏教科書は使役文に用いられる“讓”のVPが6例あり、全て4種類に当てはまる。一方、《兒女英雄傳》では使役文に用いられる“讓”のVPが164例あり、4種類に当て嵌まる用例数が73例、全用例数の4割以上を占められていることがわかる。

そして、使役表現の種類によって、4種類のVPの使用状況も異なる。4種類のVPにおいて、用例数が最も高いのが両書共に指示使役文となり、それぞれの用例数が5例と65例である。使用割合から見ると、金氏教科書が10割、《兒女英雄傳》が4割近くを占めている。逆に、用例数が最も低いのが両書共に誘発使役文となる。金氏教科書において、“讓”が誘発使役文に用いられている用例自体がなく、《兒女英雄傳》は24例あるが、そのうち4種類のVPにあたるVPは僅か1例しかない。許容使役文に関しては、4種類のVPにあたるのは金氏教科書で1例、《兒女英雄傳》で7例ある。

したがって、金氏教科書と《兒女英雄傳》で“讓”が用いられている3種類の使役文において、指示使役文は誘発使役文、許容使役文より4種類のVPが優勢に用いられていることが明らかである。《兒女英雄傳》では、許容使役文にも用いられているが、誘発使役文には1例しか使われていないことがわかる。また、4種類のVPの各種類の用例数において、最も少ないのが両書共に“担当”類であり、それぞれ1例しか見当たらない。《兒女英雄傳》において、“居坐”類と“行進”類の用例数はほぼ同じであり、“餐饮”類の用例数より少し多いことがわかる。対比の対象である金氏教科書の用例数が少ないため、各種類に関する使用上の特徴はまだ不明確であるが、“讓”が用いられている3種類の使役文において、今村（2012）が指摘したVPに来る動詞に制限がかかっているとは言え、それは“讓”の原義が強く残されていることからだと考えられる。

4.3 “給”構文の比較研究

4.3.1 “給”の基本用法

“給”は複数の文法機能を持っている。卢小群（2017:500）は“‘给’在老北京土话中也是一个多义词，兼具动词、介词和助词的词性。”と指摘した。

《兒女英雄傳》に用いられている“給”構文については、山田忠司の「北京語における「給」の発達について—『红楼梦』、『儿女英雄传』、老舍作品をめぐって—」

（1998）、「『三侠五義』の言語について」（2001）、「“給”の解釈に関する若干の考察」（2003）には論述されている。

本節は卢小群が提示した北京語に用いられている“給”の3類の文法機能に基づいて、山田氏の諸研究を参考に、金氏教科書に用いられている“給”の用法を考察する。

4.3.1.1 動詞の文法機能

卢小群（2017:500-501）は動詞に用いられる“給”が4種類の使い方を備えるとした。①使对方得到(相手に何かを与える)；②使对方遭受到(相手に不利なことをする)；③表示容许、致使(～させる、～することを許す)；④用在动词后，构成表示给予义的复合动

詞(動詞の後に置き、与える意味の複合動詞を構成する)。金氏教科書は、卢小群が提示した4種類の使い方に全て当て嵌まる。

まず、“V+給”の複合動詞では、金氏教科書において、Vにあたる単音節動詞は交(55例)、賣(42例)、送(19例)、賞(15例)、借(13例)、遞(9例)、勻(9例)、供(8例)、說(8例)、賒(7例)、發(6例)、放(6例)、加(5例)、指(4例)、租(4例)、撥(3例)、讓(3例)、分(3例)、支(3例)、還(2例)、教(2例)、轉(2例)、賜(2例)、找(1例)、籌(1例)、換(1例)の26個ある。また、Vにあたる二音節動詞は交代(3例)、轉賣(2例)、行文(2例)の3個ある。したがって、“V+給”のVにあたる動詞は単音節動詞が主であることがわかる。それぞれの用例を1つ挙げ、以下に示す。

例 457. 賈石滿口應許，就拿下來交給沈家兄弟了。(《今古》沈小霞)

例 458. 我看他給的價錢合式，就賣給他了。(《今古》懷私怨)

例 459. 皇后很捨不得南陔，就拿出好些個東西來賞給他。(《今古》十三郎)

例 460. 只要我們能勻得出來，還能不借給你麼。(《便覽》-87)

例 461. 倘若有東西，倘自己送給他罷，別和我說甚麼。(《今古》李沂公)

例 462. 這麼着我就把包袱遞給他了。(《華言》-23)

例 463. 他說沒法子，勻給你們十五隻就是了。(《談論》-90)

例 464. 你若是肯供給我貨，我就可以開那個買賣。(《便覽》-10)

例 465. 請您可以說給我聽一聽。(《談論》-95)

例 466. 這麼着我們就把鑊子和鉗子賒給他了。(《華言》-21)

例 467. 那猪店再把猪賣給湯鍋裏，宰得了發給猪肉舖裏，賣給大家用。(《便覽》-20)

例 468. 票莊所辦的是匯兌銀子的事情，還給人存銀子，也放給人使銀子。(《便覽》-20)

例 469. 到了光緒初年，因為京官萬分支絀了，就有人條奏，請另加給京官津貼。(《摺紳》-55)

例 470. 小的可以帶他們去，指給他們那個寶局就是了。(《華言》-29)

例 471. 前後有六十多間房子，租給一個廣東人，開洋貨鋪帶棧房，已經有十幾年了。(《談論》-56)

例 472. 這一回由戶部撥給十萬兩銀子，下餘那十五萬兩銀子，由外頭籌辦。(《談論》-79)

例 473. 他不明說要用我那塊地，他可繞着灣子，叫我讓給他那塊地。(《便覽》-85)

例 474. 每年算下帳來，分給他一股利。(《華言》-8)

例 475. 除了滿關本季的俸祿之外，還加恩支給故員家屬半俸一年。(《摺紳》-52)

例 476. 這是您那個金表，這是那個墨鏡，這是找給您的那五兩銀子。(《華言》-2)

例 477. 我們找沈襄去，還給聞氏就是了。(《今古》沈小霞)

例 478. 聞氏教給他念書五經都會了。(《今古》沈小霞)

例 479. 還盼望您給回信，我們好轉給江蘇巡撫行文去，告訴他知道辦理。(《公牘》-67)

例 480. 給你這是三兩銀票，找給我罷。(《虎頭》)

例 481. 這也是天賜給我一場小富貴兒。(《今古》懷私怨)

例 482. 請在這額定經費之外，另籌給津貼多少，以補辦公所不足。(《摺紳》-54)

例 483. 你可以換給我二十兩，十兩，五兩，四兩的幾張零的麼。(《便覽》-98)

例 484. 請我快回去，好把帳目交代給我。(《華言》-10)

例 485. 後來我們已經行文給南洋大臣，商量這件事。(《公牘》-67)

例 486. 若是家裏人口少，用米不多，也可以把米票轉賣給米商。(《摺紳》-52)

次に、卢小群が提示した“①使对方得到；②使对方遭受到；③表示容许、致使”について、③の使い方は本章の4.3.3“給”構文の使役表現で考察するため、まず①と②の用例をあげる。

例 487. 我可以多給些個酒錢。（《今古》十三郎）

例 488. 這個表，您給四十兩銀子罷。（《華言》-1）

例 489. 您就給八百四十五圓就行了。（《指南》-9）

例 490. 幸虧恩公把我救出來，又給我盤費逃跑到這兒來。（《今古》李沂公）

例 491. 找了一個說像聲兒的來，給他一間屋子。（《談論》-53）

例 492. 難道是我應當給這利錢麼。（《談論》-62）

例 493. 都立了攬單，給了定銀了，誰也不用打算再雇了。（《談論》-90）

例 494. 他們給存主一個存條。（《談論》-98）

例 495. 但願老天爺，一連給幾年的好年成兒。（《談論》-100）

例 496. 可是您得單給電報費。（《指南》-9）

例 497. 又問他，韓雲到你湯鍋裡買豬頭，你為甚麼給他一個人頭呢。（《華言》-23）

例 498. 他昨天一見我，先給我一個雷頭風，他想就把我麻住了，他沒想到我更不怕他。（《撮要》-1）

例487.～例497.は“①使对方得到”にあたる用例である。金氏教科書はビジネスに関連する内容が多いため、述語にあたるものが殆ど金銭類となる。“②使对方遭受到”にあたる用例は例498.のみである。“使对方遭受到”より“使对方得到”が優勢に用いられていることが明らかである。

4.3.1.2 介詞の文法機能

卢小群（2017:501-502）は介詞に用いられる“給”が6種類の使い方を備えたとした。①引进交付、传递、介绍的接受者（受け手を導く=～に）；②引进动作的受益者（受益者を導く=～のために）；③引进动作的受害者（被害者を導く=～に…してしまう）；④“给”表示“朝、向、替、为”（～に対して）；⑤表示处置义，“给”后介引支配的对象（处置文=～に…させる）；⑥表示被动义（受け身を表す=～に…される）。“给”同“被”。⑤と⑥の使い方は本章の4.3.4“給”構文の处置表現、4.3.5“給”構文の受身表現で考察するため、まず金氏教科書に用いられている①～④の用例を以下に示す。

例 499. 就把詩和祭文都抄好了，暗中給楊順送去了。（《今古》沈小霞）

例 500. 還囑咐我到湖州去，給他家裏送信去。（《今古》懷私怨）

例 501. 你快給他寄一封信去，先止住他別動身。（《便覽》-26）

例 502. 他說他要買點兒要緊的東西，給他們令兄帶到任上去。（《談論》-62）

例 503. 你可以挑那平常交情靠得住的一兩位朋友，給他們去一封信。（《談論》-10）

例 504. 你幹甚麼下通州去呀。我是給人說合事情去。（《華言》-8）

例 505. 可以由我那鋪子給你出保單作保，問他們是願意不願意。（《談論》-10）

例 506. 我有法子給您出這口氣。（《虎頭》）

例 507. 爾又是他的屬員倘或叫他滿河北地方，一給爾傳說，那個工夫兒，爾就是連着夜起身躲開，還怕晚了呢。（《今古》李沂公）

例 508. 這個銀子墊了有七八個月，也沒給我們歸。（《談論》-42）

例 509. 不能憑空裡人就給他造這個謠言。（《撮要》-1）

例 510. 你切記着，凡人有不願意人知道的事，若是給他洩漏了，直比當面兒罵他一頓，他恨的還利害。（《談論》-57）

- 例 511. 我們老爺走路乏了，快給我們催催酒飯，吃完了好睡覺。（《今古》李沂公）
 例 512. 房德拜完了站起來，又給王太作揖道了謝。（《今古》李沂公）
 例 513. 房德說我受了您那麼大的恩，就是生生世世給您執鞭隨鐙，也不能報答萬一呀。
 （《今古》李沂公）
 例 514. 如今怎麼連衣服，都得我給備預備。（《今古》李沂公）
 例 515. 這是我預備的一點兒薄禮，請給令郎收下，作個紀念兒罷。（《今古》十三郎）

例499.～例503.は“①引进交付、传递、介绍的接受者”にあたる用例である。例504.～例506.は“②引进动作的受益者”にあたる用例である。例507.～例510.は“③引进动作的受害者”にあたる用例である。この使い方が最も少ない、全部で7例しかない。例文511.～515.は“④‘給’表示‘朝、向、替、为’”にあたる用例である。

4.3.1.3 助詞の文法機能

卢小群（2017:502-503）は助詞に用いられる“給”が3種類の使い方を備えるとした。①表示处置义（処置義）；②表示被动义（受身義）；③表示虚义；构成“给我……”的格式，表示某种语气（語気を強める）。①と②の使い方は本章の4.3.4“給”構文の処置表現、4.3.5“給”構文の受身表現で考察するため、金氏教科書に用いられている③の用例を以下に示す。

- 例 516. 都是怎麼個情形，全要給我寫來。（《便覽》-50）
 例 517. 把價錢問明白了，給我開來。（《華言》-5）
 例 518. 你叫夥計給我拿一壺酒拿一碗燉肉來，再給我烙半斤餅。（《華言》-24）
 例 519. 勞你駕你給我撿起那個包袱來罷。（《華言》-24）
 例 520. 那麼就求您分心，給我辦辦罷。（《指南》-10）
 例 521. 勞您駕，給我催他一聲兒，叫他快々的出來。（《今古》沈小霞）

③の用法について、卢小群（2017:502-503）は命令と相談の2種類の語気を提示した。例516.～例518.は命令を表す語気にあたり、例519.～例521.は相談を表す語気にあたる。

また、卢小群が提示した③の用法以外、金氏教科書における一部の下記に示している“給”構文では、後ろの名詞が省略されており、動詞のすぐ前に置かれる“給”は助詞とすべきだろう。

- 例 522. 如今索性這麼辦罷，我再給添上十疋絹，備快快兒的打發他起身就結了。（《今古》李沂公）
 例 523. 若是有知道小少爺下落的，也就肯給送信來了。（《今古》十三郎）
 例 524. 我這兒可以先給湊出一半兒貨銀來，你給他們這一邊兒送了去。（《談論》-29）

ここでは、金氏教科書に用いられている介詞“給”と助詞“給”について、検討する。

- 例 525. 通共算在一塊兒是多少，給我開個賬來。（《華言》-16）
 例 526. 不知道您的意思怎麼樣，請快給回信。（《公牘》-27）
 例 527. 又搭着大家輪流着給他斟酒。（《今古》李沂公）
 例 528. 新近還有個朋友來說，今年還有換外洋欵差的信哪，打算還要給我謀個洋差出去。
 （《談論》-8）

例525. と例526. に用いられている“給我”と“給”はいずれも語気を強める役割で、削除してもその文意に影響しない。一方、例527. は“給他斟酒”、彼にお酒を注ぐという意で、お酒を注ぐ対象が彼である。そのため、“給他”を削除すれば文意が不完全になる。例528. は例525. と同じく“給我”が用いられているが、友人が私のために仕事を探しに行くという意で、“給”が動作の受益者である“我”を導く。“給我”を削除すれば、動作の受益者である“我”がなくなり、友人が仕事を探しに行くという意に変化し、動作の受益者が不明確になる。これも語用論的な観点から、聞き手の理解に影響を与え、即ち、文意の変化が生じる。

したがって、“給我”或いは“給”を削除しても、文構造的な観点から文の整合性に影響を与えず、語用論的な観点から聞き手の理解に影響を与えず、文の意味を正確に表現することができるのであれば、“給”を助詞と判断すべきだと考える。

4.3.2 “給”構文の授与表現

現代中国語における“給”構文にはいくつかの意味があるが、一番重要なのは「授与」の意味であり、“給”構文の典型的な文型は授与表現に用いられている“給”構文である。

太田辰夫（1958：237）は「この語が用いられるようになったのは清代からで、それ以前には用いられない。ただ稀に異なる表記法によってあらわされている。（中略）《歸》《饋》《己》と文字はちがうがいずれも《給》と同じ語である。（中略）唐宋元明を通じ一般に古い白話では《給》を用いず《與》を用いる。」と指摘している。蔣紹愚の《“給”字句、“教”字句表被动的来源——兼谈语法化类推和功能扩展》（2002）の考察によると、授与義の“給”が《紅樓夢》において、大量に用いられている。その前に太田辰夫が提示した“饋”が授与義のある動詞として、《朴通事諺解》と《老乞大諺解》に14例用いられているという。

朱德熙の《与动词“给”相关的句法问题》（1979:82）は授与義に用いられている“給”構文の文型を① $N_s + V + 给 + N' + N$; ② $N_s + V + N + 给 + N'$; ③ $N_s + 给 + N' + V + N$; ④ $N_s + V + N' + N$ の4つに分けた。さらに、文型①と文型②は授与義の特定文型であり、文型③は授与義と非授与義の両方を含み、文型④は文型①の緊縮式であることを指摘している。

卢小群（2017:502-521）は朱德熙が指摘した4つの文型に基づいて、北京語の特有表現を取り入れ、4つの文型から21種類の文型まで拡大した。本節は金氏教科書と《兒女英雄傳》に用いられている授与義の“給”構文の使用状況をベースにし、卢小群が提示した21類の授与義の文型を組み合わせ考察を行う。

金氏教科書と《兒女英雄傳》において、授与表現に用いられている用例を文型によって、基礎文型を4種類、派生文型を9種類に分ける。それぞれの用例を以下に挙げる。

① $(N_s) + V + 给 + N' + N$

例 529. 他說只要有妥實的保家，他就能供給你貨。（《便覽》-10）

例 530. 不能按日子給他們錢的，不過可以賞給他們些個錢。（《談論》-19）

例 531. 若是百姓願意借給國家錢，自然還得另外預備足色紋銀交庫纔行哪。（《談論》-88）

例 532. 或是有那有錢的長隨，願意借給本官盤費，跟隨到任上去，謀個事情，這也是一舉兩得的法子。（《搢紳》-58）

- 例 533. 罢呀，你疼你妹子还疼的不够喂，还给他这东西！（《儿女》-10）
 例 534. 我先透给你个信儿，昨日听出你们那块瓦来的就是他。（《儿女》-31）
 例 535. 你跟我吃些东西，等到寅正出去，发给你题目。（《儿女》-34）
 例 536. 又交给我父亲一块砚台。（《儿女》-14）

a. (N_s) + V + 给 + N'

- 例 537. 請王爺大人們，行文给江蘇巡撫，告訴他知道辦理。（《公牘》-68）
 例 538. 這是您的三把鑰匙，交给您，請您點一點行李的件數兒對不對。（《談論》-15）
 例 539. 就拿包袱把那個豬頭兜上了，拿出去開開了門，就遞给韓雲了。（《華言》-23）
 例 540. 說話之間就遞给那個人了。（《華言》-25）
 例 541. 至于他说的那座庙，我倒底要找还给他，才圆得上那句话。（《儿女》-23）
 例 542. 我告诉给你，我等他那天有了婆家，齐家得过了，我才开这斋呢！（《儿女》-21）
 例 543. 女子道：“这屋里那个人，你交给我了吗？”（《儿女》-6）
 例 544. 只管交给我，万无一失，五日后来取回信。（《儿女》-14）

b. (N_s) + V + 给 + N

- 例 545. 應賞给世襲一等輕車都尉。（《摺紳》-15）
 例 546. 現在打算在城裏頭立個事，請他們棧裏供给點兒貨。（《談論》-10）
 例 547. 承这十三妹救了性命，贈给盘缠，又把这张弹弓借与他护送上路。（《儿女》-14）

c. (N_s) + 把 + N + V + 给 + N'

- 例 548. 您把行李交给我們就得了。（《談論》-46）
 例 549. 請我快回去，好把帳目交代给我。（《華言》-10）
 例 550. 這麼着我們就把鐮子和鉗子賒给他了。（《華言》-21）
 例 551. 陳顏他們倆人，把鞭子和繮繩遞给那倆家人了。（《今古》李沂公）
 例 552. 把庄头佃户兑给本宅的少爷。（《儿女》-2）
 例 553. 姑娘走到跟前，太太把烟袋递给那丫鬟。（《儿女》-28）
 例 554. 说着，把手里的烟袋递给柳条儿。（《儿女》-38）
 例 555. 我为甚么把个眼前姻缘双手送给个萍水相逢素昧平生的张金凤？（《儿女》-25）

d. N' + V + 给 + N

- 例 556. 这些零碎事儿索兴都交给我，不用姑太太管了。（《儿女》-40）
 例 557. 那头乌云盖雪的驴儿便交给华忠，叫他好生喂养。（《儿女》-23）

両書において、派生文型d.のみ、金氏教科書には用例が見当たらないが、他は全て用例が見られる。文型①によく用いられている動詞について、朱德熙(1979:81-82)は“送、卖、还、递、付、赏、奖、嫁、交、让、教、分、赔、退、输、补、发、拨、赠、赐、传、献、捎、带、寄、汇、留、扔、踢、找~钱、塞~给我一块糖、写~信、打~电话、许~给他一个女儿、撵~菜、舀~汤、借_a②、租_a②、换_a②、介绍、推荐、分配、遗传、传染、过继、转交、移交、交还、归还、退还、赠送、转送、转卖、告送”があり、いずれも授与義が持つ動詞であると指摘している。

② (N_s) + V + N + 给 + N'

- 例 558. 除了我寫信给那兵船，管帶官替道謝之外，應當回覆衆位知道。（《公牘》-43）

朱德熙(1979:82)は文型①と文型②には互換性があり、さらに文型②に多く用いられている動詞が“买、抢、偷、骗、娶、赢、赚、扣、拐、罚、收、要、借_レ、租_レ、换_レ”の“取得”類動詞であることを指摘している。《兒女英雄傳》において、文型②の用例は見当たらない。またその一方で、金氏教科書においては、文型②の用例は1例だけ見られる。卢小群(2017:505)は“从出现频率来看S₂句式在语料中出现次数极少,在1465例给予句中仅仅只有14例。”と述べている。したがって北京語においては、文型②の使用が主流でないことは明らかである。

③ (N_S) + 给 + N' + V + N

例 559. 新近還有個朋友來說，今年還有換外洋欵差的信哪，打算還要給我謀個洋差出去。
(《談論》-8)

例 560. 你可以挑那平常交情靠得住的一兩位朋友，給他們去一封信。(《談論》-10)

例 561. 明兒個我給你寫個摺子拿來。(《華言》-4)

例 562. 心里纳闷道：“怎么才来就走，也不給人碗茶喝呢？(《兒女》-27)

例 563. 又见天气冷了，給他作了几件轻暖细毛行衣。(《兒女》-32)

例 564. 给张姑娘装了袋烟，回身又給何小姐倒过碗茶来。(《兒女》-29)

例 565. 安太太也給他送了许多吃食果品糖食之类。(《兒女》-24)

文型③は授与義と非授与義の両方が含まれている。朱德熙(1979:83-84)は“从意义上看，由动词‘给_V’组成的句子表示给予，由介词‘给_P’组成的句子表示服务。”と論述している。また、“給_V”と“給_P”の違いは、“給_V”が文型③から文型②に書き換えられると述べている。例えば、例565.が“安太太也送了许多吃食果品糖食之类给他。”書き換えても、文意は変わらない。金氏教科書でも《兒女英雄傳》でも、文型③の用例に“給_V”が大量に存在するが、非授与義のある‘給_P’は少ない。

④ (N_S) + 給⁷⁹ + N' + N

例 566. 可就給了小的些個銀子東西。(《今古》懷私怨)

例 567. 你如今給我松江銀子。(《便覽》-81)

例 568. 您若是給我們洋錢。(《便覽》-88)

例 569. 給您這一包銀子和這八塊錢。(《華言》-3)

例 570. 他会大把的給人銀子，他自己倒不得话。(《兒女》-39)

例 571. 公子給了他一串钱。(《兒女》-4)

例 572. 烦你叫他们給我拿进来，我给他几个酒钱。(《兒女》-4)

例 573. 找了他们来，接着短工給他工钱。(《兒女》-33)

文型④は“給”の後に間接目的語と直接目的語の両方を置く用例が多く見られる。李焱(2003:28-29)はこの使い方を持つ用例が《醒世因縁伝》から大幅に増加したと主張する。文型④にあたる用例は、直接目的語のほとんどが具象的なものだが、抽象的なものも見られる。それぞれの用例は以下に示す。

例 574. 可有起他的背後，給了他一拳頭。(《華言》-24)

例 575. 说了半日，姑娘却也不着恼，也不嫌烦，只是给你个老不开口。(《兒女》-28)

例 576. 早打算到姑娘临起身的时候，给他个斩钢截铁，不垂别泪。(《兒女》-21)

⁷⁹ 朱德熙(1979:87)は文型④を N_S+V+N' +N と定義し、Vにあたる動詞によって、“給”が消えることもあるとした。しかし本節では文型④のVを“給”に限定する。

例 577. 他既满口的讲礼，你我便合他讲礼，等他讲不过礼去，再给他个利害不迟。（《兒女》-17）

例 578. 只等张金凤过来说话，打算等他一开口，先给他个下马威。（《兒女》-25）

a. (N_s) + 給 + N

例 579. 我可以多給些個酒錢。（《今古》十三郎）

例 580. 請衆位給一張護照。（《公牘》-3）

例 581. 我給二十五兩銀子怎麼樣。（《華言》-1）

例 582. 都立了攬單，給了定銀了，誰也不用打算再雇了。（《談論》-90）

例 583. 因为踢球，一个输了钱，一个不給钱，两个打了个热闹喧阗。（《兒女》-17）

例 584. 余外又給了个五钱重的小银铤儿。（《兒女》-34）

b. (N_s) + 給 + N'

例 585. 你若一定不給我，偌們倆立刻到衙門打官司去。（《華言》-25）

例 586. 我現在就是和你要定了那一個元寶了，你總得給我纔行哪。（《華言》-25）

例 587. 生員就告訴他說，不用找了，是生員撿着了，這麼着就給了他了。（《華言》-25）

例 588. 你就給我罷，又何必转大爷一个手？（《兒女》-35）

例 589. 他道：“我給那大爷好不好？”（《兒女》-15）

例 590. 你妹妹磕头那天给了他一枝，也有这样一对镯子。我照样又打了一对，如今給你。（《兒女》-28）

例 591. 比小子倒大着好几岁，可怎么給他呢？（《兒女》-40）

c. (N_s) + 給

例 592. 貨銀你們先不能給也可以。（《便覽》-42）

例 593. 不論誰給，倒不要緊。（《談論》-62）

例 594. 所有外頭該人家欠人家的，將來給不了，總不免要打官司告狀的。（《指南》-8）

例 595. 現在已經五個月了，利也不給，本也不歸，這是怎麼個交情呢。（《便覽》-45）

例 596. 那个当儿，我家敢说不給吗？（《兒女》-40）

d. 給 + N'

例 597. 正在看着，仆妇们端上茶来，姑娘忙道：“給我。”（《兒女》-24）

e. N' + 給 + N

例 598. 剩下的吃食都給了号军。（《兒女》-34）

卢小群（2017:506）は文型④では間接目的語と直接目的語が“給”の後に来て、緊密性が強いため、“給”が典型的な授与動詞であると論述している。両書においては、文型④の使用が最も一般的である。しかし、主語が消える使い方と、文型①の派生文 d. と同様、直接目的語が前置する使い方の両方とも、金氏教科書には見られない。

金氏教科書と《兒女英雄傳》において、両書共に授与義に用いられている“給”構文の用例数は多く、文型も豊富であることから、当時の北京語のなかでは授与義を表す“給”構文が最も常用的で、典型的であると言える。

4.3.3 “給”構文の使役表現

“給”の使役義の由来について、蔣紹愚（2002：206）は“在红楼梦中除了表示‘给予’的意思外，‘给’可用来表示‘让’、‘叫’的意思。‘给₂’（让、叫）是从‘给₁’（给予）发展来的。”と指摘している。

使役義に用いられる“給”構文の文型について、卢小群（2017：509-511）は4つを提示した。金氏教科書と《兒女英雄傳》に見られる用例を文型別に、下記の2類にまとめる。

①使役者A+給+NP+VP

例 599. 這又不定誰給他借着銀子了。（《談論》-62）

例 600. 那也不用你託咐，我們自然要想法子，給你擇脫的。（《虎頭》）

例 601. 我先給你們二位見一見，這是渡邊先生，這是楊掌櫃的。（《華言》-18）

例 602. 若是自己是當跑外的夥計，能給櫃上一年比一年多賣貨物，把買賣要越做越寬，並且不給櫃上丟帳。（《華言》-20）

例 603. 轉告訴順天府，吩咐催他們，快把那些犯人拿住，把贓要出來，為得是給本主兒領去。（《公牘》-38）

例 604. 這些話我們按這個現在派差，把銅錢五吊，皮衣一件，送交您看一看，給那個文士收下就是了。（《公牘》-39）

例 605. 一找那個人頭，可就找不着了，小的就怕是扔在那個木盆裏，當猪頭給韓雲拿了去了。（《華言》-23）

例 606. 爷这一回来，奴才们要再不作个样子給他们瞧瞧，越发了不得了。（《兒女》-22）

例 607. 你只依着师傅这话，就算給师傅圆上这个脸了。（《兒女》-25）

例 608. 这里见催着給亲家太太摆饭。（《兒女》-12）

例 609. 让那母女二人在那张木床上坐下，说道：“姑娘少坐，等我请个人来給你见见。（《兒女》-7）

例 610. 不但这样，还要給他立命安身。那时才算当完了老哥哥的这差，了结了我的这条心愿！（《兒女》-16）

例 611. 你老给我拿着这把子花儿，等我给你老掸掸哦！”说着，就把手里的花儿往安老爷肩膀子上搁。爷待要不接，又怕給他掉在地下，惹出事来，心里一阵忙乱，就接过来了。（《兒女》-38）

②使役者 A+讓/叫/教+NP+給+VP

例 612. 他不答應，叫人家總得給加十兩銀子的房租。（《談論》-56）

例 613. 短多少先叫號商給墊上。（《便覽》-96）

例 614. 若是中國鎖，一定叫他給擰開了。（《便覽》-71）

例 615. 下剩那八個股子，叫我給招入股的商人。（《談論》-66）

例 616. 起来，舅太太便让他摘帽子，脱褂子，又叫人給倒茶。（《兒女》-37）

例 617. 你就回太太，无论叫那个姨奶奶給拴好了拿出来罢。（《兒女》-40）

《兒女英雄傳》において、使役義に用いられる“給”構文の用例は8つあり、文型①にあたる用例が6つ、文型②にあたる用例が2つある。金氏教科書において、文型①と文型②の用例数はそれぞれ7つと、4つ見られ、どちらも用例が少ないことがわかる。文型①の“給”が動詞で、文型②の“給”は卢小群（2017：510-511）によると、使役の機能を持たず、語気を強める役割を果たす助詞である。

卢小群が提示した4つの文型で、金氏教科書と《兒女英雄傳》の両方共に用例が見られないのは文型③「N_s+讓+NP+給+NP+NV」と文型④「使役者A+把+NP₂+給+NP₁+VP」である。

文型③が見られない理由として、金氏教科書では“讓”構文の使用例自体が少なく、僅か6例しか用いられていないためであろう。また、《兒女英雄傳》において、“讓”構文が全部で164例あり、その中にも“讓……給”の文型にあたる“讓”構文がない。そのことから、両書においては、“讓”構文の使用については消極的であることがわかる。

文型④は“把”が用いられている文型で、卢小群(2017:510)はこの文型が極めて少ないとし、“‘在北京口语语料库’中仅出现上述4例。据近代北京话如《红楼梦》的相关研究,该用法出现的例句也仅4例。笔者对老舍作品中‘把……给’句式进行了搜索,没有出现1例‘给’表示使役义的例句。”と述べている。金氏教科書と《兒女英雄傳》のどちらもこの文型にあたる用例はない。

4.3.4 “給”構文の処置表現

卢小群(2017:507-509)は処置義に用いられる“給”構文の文型を5つ提示した。金氏教科書と《兒女英雄傳》において、処置義に用いられている“給”構文を文型別に、下記の4類にまとめる。

①行為者A+給+受動者NP+VP

例 618. 有別的耍錢的人給他們勸開了。(《華言》-26)

例 619. 有傍邊兒別的耍錢的人就過來給我們勸開了。(《華言》-26)

例 620. 我可以同着他，到那個大夫那兒去瞧瞧，若能給他治好了呢，那不好麼。(《華言》-15)

例 621. 闲人作起书来，也一定照孔夫子删《诗》《书》、修《春秋》的例，給他删除了去。(《兒女》-28)

例 622. 张金凤便要去倒那盆子。十三妹道：“那还倒他作甚么呀？給他放在盆架儿罢。”(《兒女》-9)

山田氏(2001:96)によると、例 621. が《兒女英雄傳》における唯一の処置義に用いられている“給”構文である。筆者は例 622. も処置義に用いられている“給”構文だと考える。例 622. については“他”は“盆子”を指すものと解釈できる。即ち、“給”を“把”に置き換えられ、処置義に用いられている“給”構文とすべきだろう。

②行為者A+給+VP

例 623. 多謝多謝，實在全仗您分心給辦了。(《談論》-47)

例 624. 我們舍弟也沒法子分辯，直過了一年多，他們纔查出來是別人給洩漏的。(《談論》-57)

例 625. 我昨兒個買的那個表，您給帶來了麼。(《華言》-2)

例 626. 沒別的，先得求你到縣裏給報了，請太爺來相驗罷。(《虎頭》)

例 627. 他就在縣裏遞了一個稟帖，昨兒知縣給批駁了。(《便覽》-44)

例 628. 我和他要定了錢了，他所不肯給，所以我來告他，求老爺給判斷。(《華言》-21)

例 629. 請您先給打聽明白了，辦那麼一分兒全副的機器，實價是多少銀子。(《便覽》-90)

例 630. 這麼着小的就拿着那個銀子，到清水鎮悅來居去，託那個掌櫃的給收着。(《華言》-24)

例 631. 小的怕是銀子在小的手裡，就隨便胡花了，這麼着就拿到悅來居去，打算求那個掌櫃的給收起來。（《華言》-24）

金氏教科書において、文型①の用例が3例、文型②の用例が18例ある。《兒女英雄傳》において、文型②の用例がなく、文型①の用例が2つある。文型②は文型①の受動者NPが省略したものである。NPが省略できる条件について、石毓智《兼表被动和处置的“給”的语法化》（2004：18）は“要么上文已经提到了有关的受事, 要么受事是语境中不言而喻的。”「前述されたものについてNPは省略できる」と論述している。また、石氏によると、同じ用法では“把”の後ろの受動者NPの省略はできないという⁸⁰。ここでは、石氏が指摘した点について、語義論の面から検討してみる。

“給”の本義について、周紅《动词“给”的语法化历程》（2009:108）は“‘给’在古代典籍中最初的主要义项为‘供给’，《说文》：‘给，相足也。’其实这是给予义的一种，表达的是‘给予某人某具体事物’或者‘是某具体事物位移至某人’。因此，‘给’最初的意义是‘具体物体传递的实际给予动作’，具有很强的‘致移性’‘物理空间性’与‘方向性’。”と論述している。つまり、“給”の本義は“授与”で、何かを誰に与える意味を持つ。動詞“給”の動詞としての役割が徐々に弱まり、虚化(文法化)し、介詞になったとしてもその“授与”という本義は保持されており、VPの方向性は失われてはいないのである。

例632. 甲：不是，您这屋里有了她呀，这环境……

乙：她就给收拾收拾了。

石毓智（2004:18）は“上述例中划线的部分就是‘给’后省略的受事，完整的说法为‘她就给环境收拾了’。”と解釈している。筆者は“給”が用いられている処置文はVPの動作の方向性が明確であるから、介詞“給”の一つの役割が動作の方向性を明確にすることだと考える。例632.の動詞“收拾”は受動者NP“环境”にのみ与えたと考える。そのため、石氏が論述した、既に前述されているかまたは文脈から自明であるかのいずれかの場合、受動者NPの省略が可能で、文意も変わらない。

一方、“把”の本義について、黄晓雪《“持拿”义动词的演变模式及认知解释》

（2010：48）は“‘持’‘取’‘捉’‘将’‘把’‘拿’等动词都发展出用以构成处置式和引进工具语的用法。这几个动词可以叫做‘持拿’义动词，‘持拿’义是这几个动词演变的共同语义基础。”と論述している。即ち、“把”の本義は「手に握る、持つ」であり、方向性を持たない。介詞に虚化(文法化)されても、方向性を持たないことは変わらない。そのため、動作方向性が不明確であるがゆえに、前後の文脈に受動者NPがあっても、その受動者NPは省略できない。

③行為者 A+把+受動者 B+給+NP+VP

例 633. 沈鍊就揪住他的耳朵，把酒給他灌下去了。（《今古》沈小霞）

例 634. 您等我把這兒的用項都給您核算出來。（《談論》-47）

例 635. 他把論旨大概的意思給我寫來了。（《談論》-50）

例 636. 託朋友把近來新出來的要緊的話條子給您買幾本帶來。（《指南》-5）

例 637. 把駝絨樣子給我拿來。（《華言》-5）

例 638. 女孩儿，你倒是揭起炕毡子来，把那席篋儿給我搬一根来罢。（《兒女》-29）

例 639. 索兴把那小杌子給他姐儿俩搬过去。（《兒女》-26）

例 640. 如今要先把这件东西給他赶出来，临时好用。（《兒女》-16）

⁸⁰ 石毓智 2004、18 頁。

例 641. 来把你们姑爷的被套、行李、银两给他装在车上。（《兒女》-10）

例 642. 你可好生的看着那包袱，等我把这门户给你关好。（《兒女》-6）

文型③の“給”が介詞で、処置の役割を果たすのが“把”である。金氏教科書は文型③にあたる用例が15例、《兒女英雄傳》は23例見られる。卢小群（2017:509）は“上式中，‘给’后介引出一个代词，这个代词是动词的与事，并且限于是指人代词，这就使动词VP动作会有一个明确的方向。”と指摘している。

④行為者 A+把+受動者 B+給+VP

例 643. 聞氏就說，據爾這麼說，實在沒有把我丈夫給害了。（《今古》沈小霞）

例 644. 他那幾個親戚就隨便濫支濫用，就把買賣給花虧空了。（《指南》-8）

例 645. 或是把孩子的眼睛給弄瞎了，或是把兩隻脚給砍掉了。（《今古》十三郎）

例 646. 偏偏兒的我回來，也沒贖下甚麼錢，不能捐指省分發，可就把我給分發廣西了。（《談論》-8）

例 647. 会把老爺隨身的東西給丟了！（《兒女》-38）

例 648. 怎么怪得把我們這個沒籠頭的野馬給惹惱了呢！（《兒女》-37）

例 649. 不想二位老人家今日這等高興，把我們倆這麼出好戲給先點了。（《兒女》-37）

例 650. 把個天王殿穿堂門兒的要路口兒給堵住了。（《兒女》-38）

文型③“給”の後の NP が省略されたのが文型④である。金氏教科書において、文型④の用例が 23 例見られ、4 つの文型の中で最も用例数が多い文型である。《兒女英雄傳》において、文型③と同数で、共に 23 例ある。文型④は“把”が処置の役割を果たすため、“給”は助詞で、省略できる。石毓智（2004：19）の考察によると、《紅樓夢》の時代では NP の省略ができず、現代中国語における NP の省略用法は、後に発展したものである。《紅樓夢》より成書時期が遅い《兒女英雄傳》と金氏教科書にこのような使い方が見られることで石氏の論説を実証できた。

4.3.5 “給”構文の受身表現

蒋绍愚（2002：209）は“給”の受身義は使役義から派生したものだと言っている。

卢小群（2017：511-513）は受身義に用いられる“給”構文の文型を4つ提示した。金氏教科書と《兒女英雄傳》に関しては、文型を下記の2類にまとめる。

①受動者 A+給+行為者 NP+VP

例 651. 就是天，也是给气运使唤着，定数所关，天也无从为力。（《兒女》-3）

例 652. 我不像你这等怕死贪生，甘心卑污苟贱，给那恶僧支使。（《兒女》-7）

山田氏（1998：53）によると、《兒女英雄傳》において、受身義に用いられている用例は2つしか見られないとした。上記の例 651. と例 652. である。一方、卢小群（2017：525）は、例 652. は使役義に用いられている用例としている。筆者は山田氏の分類を支持する。

卢小群（2017:511）は文型①が典型的な受身義の“給”構文であると指摘している。文型①にあたる受身義の“給”構文は金氏教科書には見られないのに対して、《兒女英雄傳》には2例見られる。

②受動者 A+讓/叫/教+行為者 NP+給+VP

例 653. 到底是寡不敵衆，叫人家給打躺下了好幾個人。（《今古》李沂公）

例 654. 負心賊已經叫我給開膛破肚了。（《今古》李沂公）

例 655. 現在若不快打發人把小少爺找回來，可恐怕叫人給害了。（《今古》十三郎）

例 656. 沈襄就跪在地下哭著說，我的父親和倆兄弟，都叫楊路倆個奸賊給害了。（《今古》沈小霞）

例 657. 好好兒的一個人，就怕是叫窮給擠壞了。（《便覽》-51）

例 658. 若不是我腿快，也就叫人給拿住了。（《今古》十三郎）

例 659. 我看馮主事很怕嚴府的樣子，他怎麼敢收留沈襄呢，或者沈襄真叫解差給謀害了，也未可知。（《今古》沈小霞）

例 660. 因為家裏遭了禍，父子三口都死于非命，就剩了小婦人的丈夫沈襄一個人了，又叫解差在路上給謀害了。（《今古》沈小霞）

例 661. 公子斷沒想到从城里头憋了这么个好灯虎儿来，一进门就叫人家給揭了。（《兒女》-38）

《兒女英雄傳》に文型②の用例が1つあり、金氏教科書には8つある。全て“叫”構文の受身表現に属する。使役義の文型②に用いられている“給”と同じく、受身義の文型②の“給”も助詞で、省略しても文意には影響しない。

4.3.6 結論

本節は金氏教科書と《兒女英雄傳》に用いられている“給”構文を対象を絞って考察を行った。そして、両書において、“給”は授与義・使役義・処置義・受身義の4種類に用いられていることを明らかにした。各義は文型によって、それぞれの使用状況が異なり、以下のような事実が明らかになった。

まず、授与義の“給”構文について、文型②「(N_s) + V + N + 給 + N'」の使用が稀で、金氏教科書にだけ1例見られる。また、直接目的語が前置し、主語が消える派生文型「N' + 給 + N」と「N' + V + 給 + N」の用例は、《兒女英雄傳》にだけ見られ、金氏教科書には見られない。

次に、使役義にあたる“給”構文は、文型①「使役者A + 給 + NP + VP」に属する用例は金氏教科書で7例あり、《兒女英雄傳》では複数見られる。文型②「使役者A + 讓/叫/教 + NP + 給 + VP」に属する用例は金氏教科書で4例あり、《兒女英雄傳》で2例ある。つまり、定量的に見れば両書の使用状況は似ていることがわかる。さらに、授与義・使役義・処置義・受身義の4類で、用例数が最も少ないことから、両書において、受身義の“給”構文の使用が普遍的でないと言える。

そして、処置義にあたる“給”構文で、両書の使用状況が最も異なるのが文型②「行為者A + 給 + VP」である。文型②は文型①「行為者A + 給 + 受動者NP + VP」の受動者NPが省略されたものである。《兒女英雄傳》に用例が見られない文型②は、金氏教科書には18例見られる。両書共に文型①の用例が見られ、金氏教科書で3例、《兒女英雄傳》で2例ある。文型③「行為者A + 把 + 受動者B + 給 + NP + VP」と文型④「行為者A + 把 + 受動者B + 給 + VP」に当たる用例は金氏教科書で15例、23例あり、《兒女英雄傳》で23例、23例ある。文型④は文型③のNP（代名詞）が省略されものであり、この用法は《紅樓夢》には見られない。また、処置義を表す際に、両書共に“把……給”が使用された傾向にあると判断できる。

最後に、受身義にあたる“給”構文の典型的な文が、文型①「受動者A+給+行為者NP+VP」となるが、金氏教科書には用例が見当たらず、《兒女英雄傳》には文型①の用例が2例ある。また、文型②「受動者A+讓/叫/教+行為者NP+給+VP」において、金氏教科書には用例が8例見られるのに対し、《兒女英雄傳》には用例が1例しかない。そのため、金氏教科書においては、受身義を表す際に、“給”より“叫”構文を使用することが好まれたと言える。

“給”は複数の機能が持つが、本節の考察により、金氏教科書と《兒女英雄傳》においては、文型と用例数が最も多いのは授与義にあたる“給”構文であることが判明した。即ち、“給”構文においては、授与義を表すものが主であることが明らかになった。

下編結論

本編は語学の視点から金氏教科書と《兒女英雄傳》における形容詞、副詞、文末期機助詞、“叫”構文、“讓”構文、“給”構文の6部分に焦点を当て、詳細な考察を展開した。整理分析を通して、考察成果を以下に総括する。

(1) 形容詞の比較研究

朱德熙《現代漢語形容詞研究》(1956)に基づいて、金氏教科書に用いられている形容詞を性質形容詞と状態形容詞の2類に分類し、それぞれ用例数を605個と、46個抽出した。さらに、比較対照を通じて、金氏教科書と《兒女英雄傳》の両書における形容詞の使用状況を考察し、使用差異を明らかにした。まず、文法機能に関しては、《兒女英雄傳》では、金氏教科書に用いられている文法機能が全て当て嵌まる。一方、語彙の使用は異なり、《兒女英雄傳》には用いられていない単音節性質形容詞が金氏教科書には7個あり、用いられていない二音節性質形容詞が金氏教科書には147個ある。そして、用いられていない状態形容詞が金氏教科書には18個あることを判明した。

(2) 副詞の比較研究

金氏教科書に用いられている副詞を程度副詞、範圍副詞、時間副詞、否定副詞、情態副詞、語氣副詞、頻度副詞に分け、計254個副詞を抽出した。その上で、程度副詞、範圍副詞、否定副詞、情態副詞の4類において、北京語の特徴が鮮明な副詞を取り上げ、《兒女英雄傳》と詳細な比較対照作業を行なった。その結果、《兒女英雄傳》よりも金氏が自身で編纂した会話教科書の方に日常で最も使われている北京語副詞が取り入れられていた事実が判明した。また、金氏が編纂した教科書では、満州語の痕跡が薄いことから、おそらく金氏が教科書を編纂する際に「官話」でない言葉を慎重に取り扱っていたと推察される。

(3) 文末語氣助詞の比較研究

金氏教科書と《兒女英雄傳》での文末語氣助詞の使用を考察し、使用方法と使用頻度について、詳しく分析した。その結果、《兒女英雄傳》に使用された文語文語氣助詞は金氏教科書では一切使用されていないことから、金氏教科書には当時日常で使用されていた口語文末語氣助詞に限定して取り入れられていたことが分かった。両書ともに使用した文末語氣助詞の中では“了”の使用頻度が一番高く、用法も豊富で“了”は当時北京語の主流の文末語氣助詞であったと言える。一方で、両方共に“啦”の使用は極めて少ない。また、《兒女英雄傳》に使用された文末語氣助詞“呀”と“啊”の用法が豊富で、各用法が5種類と4種類があることに対して、金氏教科書では“呀”と“啊”の用法がそれぞれ2種類、2種類に限定され、使用範囲が狭まっていることがわかる。また、北京語の特殊語氣助詞である“納”の用例は《兒女英雄傳》に見当たらない。

(4) “叫”構文では、《兒女英雄傳》より、金氏教科書の方が“叫”構文が用いられている頻度が高く、最も用いられているのが指示義であり、誘発義がその次になる。どちらも使用上に偏りが見られるが、《兒女英雄傳》の方が、差が大きいことがわかる。また、《兒女英雄傳》より、金氏教科書は“叫”構文の使役者Aと被使役者Bにあたる無

生命の使用範囲が広く、誘発義と受身義にあたる使役者 A と被使役者 B の両方に用いられることが可能であった。しかし、《兒女英雄傳》では誘発義と受身義にあたる使役者 A しか用いられていない。したがって、金氏教科書においては、“叫”構文が《兒女英雄傳》より多用されていることが判明した。

(5) “讓”構文では、重点的に李焱(2003)と今村(2012)が指摘している“讓”が使役表現として用いられている VP にあたる動詞を考察した。考察の結果として、金氏教科書と《兒女英雄傳》で“讓”が用いられている 3 種類の使役文において、指示使役文は誘発使役文、許容使役文より 4 つの種類の VP が優勢に用いられていることが明らかであった。許容使役文にも用いられているが、誘発使役文には 1 例しか使われていない。また、4 つの種類の VP にあたる各種類の用例数において、最も少ないのが両書共に“担当”類であり、それぞれ 1 例しか見当たらない。《兒女英雄傳》において、“居坐”類と“行进”類の用例数はほぼ同じであり、“餐饮”類の用例数より若干多いことがわかった。

(6) “給”構文では、両書において、文型と用例数が最も多いのは授与義にあたる“給”構文であり、用例数が最も少ないのは受身義にあたる“給”構文であることが判明した。そして、受身義にあたる“給”構文について、金氏教科書において、“給”より“叫”構文を積極的に使用していると見られる。最後に、処置義の“給”構文について、文型③「行為者A+把+受動者B+給+NP+VP」と文型④「行為者A+把+受動者B+給+VP」に当たる用例は金氏教科書が15例、23例あり、《兒女英雄傳》がどちらも23例あることから、処置義を表す際に、両書共に“把……給”を使用する傾向が強いと判断できる。

終 論

1. 本研究の成果

近代日本における北京官話資料は、膨大な数である。これらの貴重な資料は、日本の中国語教育史においても、語学研究においても、大変価値の高い研究対象である。その中で、北京官話教科書は、当時用いられていた口語の用例が中心であるため、特に注目されている。

本研究は日本の中国語教育草創期に多大な功績を残した中国語教師金國璞を研究対象として取り上げ、金氏により執筆・編纂された北京語教科書についての考察を行った。

ここまでの各章で、金氏教科書の文法研究、語彙研究、著者関連研究、金氏教科書と《兒女英雄傳》の品詞比較研究、そして金氏教科書と《兒女英雄傳》の構文比較研究を中心に、詳細な考察を通して、以下の結論と成果を導き出した。

一 語彙研究

① 北京語語彙

金氏教科書に用いられた北京語語彙を徹底的に検討するため、傅民・高艾軍《北京話詞典》(2013)をはじめ、9冊の北京語辞典と対照しながら、金氏教科書に用いられた北京語語彙の全調査を行った結果、北京語辞典で検索できた北京語語彙が585個を抽出し、製表した。抽出した語彙から、金氏教科書の際には基礎的な北京語語彙を使うことが編纂方針であったと考えられる。また、金氏教科書の用例には北京語の特徴が強く表れていることが認識できた。

② 「アル化」語

金氏教科書に用いられた「アル化」語は合計2808例、異なりで474種類ある。即ち、約100文字に1例の割合で出現し、大量の「アル化」語が使われていることから、金氏教科書は北京語教科書として会話性が強いと言える。また、金氏が教科書に用いた「アル化」語において個別の「アル化」語の用例数には偏りがあり、上位10例の“那兒”“時候兒”“一點兒”“地方兒”“這兒”“工夫兒”“一塊兒”“點兒”“今兒個”“今兒”だけで1305例あり、「アル化」語全用例の46.5%を占めていることから、金氏が教科書を編纂する際に、口語性の高い語彙を選ぶべく留意していたと考えられる。

③ 歴史語彙

金氏教科書には大量の歴史語彙が記録されている。これらの歴史語彙を考察する際に、まず、《清代典章制度辞典》(2011)を参照した上、清代典制用語を15類に分け、計381個抽出した。次に、生活用語を6類に分け、計158個抽出した。最後に、軍事用語を27個抽出し、歴史語彙を合計566個抽出した。これらの歴史語彙は清末の北京の経済状況、日常生活、社会風情なども如実に反映しており、当時北京の各階層の生活実態を垣間見ることができる。

④ 慣用語

金氏教科書に用いられた慣用語を成語と諺に分け、リファレンスとして成語辞典と俗語辞典をそれぞれ5冊利用した。綿密に照合した結果、成語を472個、諺を381個、慣用語を合計853個抽出し、それぞれ製表した。数多くの慣用語が用いられていることから、金氏の北京語教科書の編纂方針が窺える。金氏教科書の対象は中級レベルの中国語学習者であり、中国語の特徴である慣用語をある程度覚えておかないと、日常のコミュニケーションや文献の読解に支障をきたす恐れがあると考え、「官話」だけでなく、慣用句も多く取り入れたのであろう。

二 文法研究

① 太田辰夫氏による諸論説との比較研究

北京語文法研究の権威である太田辰夫（1950、1965、1969）の論説に基づいて、計58項目を取り上げ、逐一全面的に比較対照を行い、金氏教科書における文法表現を詳しく考察した。

まず太田氏が提示した「北京語における7項目の特徴」との対照を通じて、金氏教科書が使用した言語では、7項目の特徴を全て有することが判明した。さらに、“來着”と“多了”以外、5項目における用例がそれぞれ100を超えることがわかった。次に、太田氏の「北京語に独特と思われる12語」に提示された8語との比較対照を行い、金氏教科書では“～的慌”と“罷咱”は用いられていないものの、他の6語全てを用いていることが明らかになった。最後に、太田氏の「清代の北京語について」で挙げられている項目に基づいて、代名詞、数詞・量詞、形容詞、動詞、介詞、副詞、助詞の7類に分け、計39項目を考察した結果、取り上げた39項目に提示された北京語特徴に殆ど当て嵌まることが明らかとなった。

太田辰夫氏による諸論説との比較研究の結果、金氏教科書における文法表現は太田先生が提示した53項目の北京語特徴にほぼ当てはまった。したがって、当時北京語で書かれていると判断でき、北京語の文法特徴が極めて強い教科書であることが実証できた。

② 《兒女英雄傳》との比較研究

1. 品詞の比較研究

品詞の比較研究において、形容詞、副詞、文末語気助詞の3類を取り上げた。

形容詞の比較研究では、朱德熙（1956）の論説に基づいて、金氏教科書に用いられている形容詞を状態形容詞と性質形容詞の2類に分類し、それぞれの用例数を605個と、46個抽出した。その上で、単音節性質形容詞を203個、二音節性質形容詞を402個洗い出した。したがって、二音節性質形容詞の数量は単音節性質形容詞の2倍用いられていることがわかった。また、両書における語彙の使用状況は異なり、《兒女英雄傳》に用いられていない単音節性質形容詞が金氏教科書には7個あり、用いられていない二音節性質形容詞が金氏教科書に147個ある。そして、用いられていない状態形容詞が金氏教科書に18個あることが判明した。最後に、張斌（2010）の論説を参考にし、金氏教科書と《兒女英雄傳》の両書における形容詞の文法機能を考察し、使用差異を突き止めた結果、《兒女英雄傳》では、金氏教科書に用いられている文法機能を全てが存在することを明らかにした。

副詞の比較研究では、黄伯荣、廖序东（2017）、太田辰夫（1958）、周一民（1998）に副詞の分類に基づいて、金氏教科書における副詞を程度副詞、範囲副詞、時間副詞、

否定副詞、情態副詞、語気副詞、頻度副詞の7類に分け、それぞれの用例を29個、26個、54個、12個、36個、82個、15個、合計254個の副詞を抽出した。さらに、分類した副詞の中で北京語特徴が鮮明な副詞と同じく《兒女英雄傳》に用いられた副詞の比較分析を行った結果、両書において一部副詞の使用が異なり、《兒女英雄傳》よりも金氏が編纂した会話教科書に日常で最も使われている北京語副詞が取り入れられた事実が判明した。また、“特意、隨意”の語彙義を持つ副詞“白”は、満州語からの伝来だというが、金氏教科書にはこの“白”の用例が見当たらない。筆者が分析した限りでは、金氏教科書には満州語の痕跡は薄く、おそらく金氏は教科書を編纂する際に「官話」でない言葉を慎重に取り扱っていたと考えられる。

文末語気助詞の比較研究では、金氏教科書と《兒女英雄傳》での文末語気助詞の使用を考察する際に、“啊”系、“呢”系、“麼”系、“罷”系とその他の文末語気助詞の5種類に分け、計15個の文末語気助詞の使用法と使用頻度を詳しく考察した。その結果、“納”を除き、残りの14個文末語気助詞は全て《兒女英雄傳》の現代中国語の語気助詞に含まれていることが明らかになった。また、両書とも使用した文末語気助詞の中では“了”の使用頻度が一番高く、用法も豊富で、“了”は当時の北京語の主流の文末語気助詞であったと言える。次に、《兒女英雄傳》には文末語気助詞“啊、罷、啦”の異体字の使用例があることに対し、金氏教科書には異体字の混用がないことが判明した。最後に、《兒女英雄傳》に比べ、金氏教科書では一つの文末語気助詞の使用範囲が限られていることから、金氏教科書では文末語気助詞の用法に明確性或いは単一性が強い傾向があると言える。

2. 構文の比較研究

構文の比較研究において、北京語の特殊構文である“叫”構文、“讓”構文、“給”構文の3類を対象として考察した。分析方法として、木村英樹の「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」(2000)に提示された指示使役文、誘発使役文、許容使役文という使役文の3分類を基準とし、考察を展開した。

まず、“叫”構文では、朱德熙(2009)、丁声树等(1999)、卢小群(2017)を参考にし、指示使役文・誘発使役文・許容使役文・受身文の4分類に分け、考察を行った。まず、それぞれの全書において、《兒女英雄傳》より、金氏教科書の方が“叫”構文が用いられている頻度が高いことが判明した。次に、両書の“叫”構文において、最も用いられているのが指示義であり、誘発義がその次となり、許容義と受身義の用例が少数見られた。また、郭姝慧(2004)の論述を参考に、“叫”構文における使役者A/受動者Aと被使役者B/行為者Bの生命度を考察した結果、金氏教科書の方は使用範囲が広く、誘発義と受身義にあたる使役者Aと受動者A以外、被使役者Bと行為者Bにも用いられることが可能であることがわかる。したがって、金氏教科書において、“叫”構文の使用が《兒女英雄傳》より広範囲にわたるといえよう。

次に、“讓”構文では、金氏教科書と《兒女英雄傳》における用例が少数見られ、それぞれ6例と164例あり、指示使役文・誘発使役文・許容使役文の3種類に分け、李焱(2003)と今村(2012)が提示した“讓”を使役表現に用いられているVPにあたる動詞について、重点的に考察を行った。李氏と今村氏によると、“讓”を使役表現に用いられている場合、VPにくる動詞の多くが“居坐”類、“行进”類、“餐饮”類、“担当”類である。考察結果、金氏教科書と《兒女英雄傳》で“讓”を用いる3種類の使役文において、指示使役文は誘発使役文、許容使役文より4つの種類のVPが優位に用いられていることが明らかである。許容使役文にも用いられているが、誘発使役文には1例しか

使われていないことがわかる。また、4つの種類のVPにあたる各種類の用例数において、最も少ないのが両書共に“担当”類であり、それぞれ1例しか見当たらない。《兒女英雄傳》において、“居坐”類と“行进”類の用例数はほぼ同じであり、“餐饮”類の用例数より少し多いことが判明した。

最後に、“給”構文では、卢小群(2017)と山田氏の諸研究を参考にした。まず、文法機能に基づき、金氏教科書における動詞“給”、介詞“給”、助詞“給”を考察した。その上で、“給”構文を授与義・使役義・処置義・受身義の4義に分け、金氏教科書と《兒女英雄傳》に用いられている“給”構文の比較対照を行った。その結果、両書において、文型と用例数が最も多いのは授与義にあたる“給”構文であることが判明した。即ち、“給”構文においては、授与義を表すものが主であることを明らかにした。また、受身義の“給”構文は、授与義・使役義・処置義・受身義の4類のうち、用例数が最も少ないことから、両書において、受身義の“給”構文の使用が普遍的でないと言える。受身義にあたる“給”構文について、金氏教科書において、“給”より“叫”構文を積極的に使用していると見られる。最後に、処置義を表す際に、両書共に“把……給”を使用する傾向が強いと判断できた。

三 教科書の研究と著者関連研究

① 金氏により執筆・編纂された13冊の教科書

金氏により執筆・編纂された13冊の教科書の版本及びそこから派生した教科書の精査を行い、内容構成を整理し、各版本を比較した。また、メインとなる13冊の教科書におけるその版本、構成、内容、特徴などの方面から考察を行い、結果をまとめた。これらの作業を通して、金氏教科書の使用対象は中級或いは中級以上レベルの上流階層の日本人中国語学習者であることが推測できた。

② 3冊の教科書の改編研究

本研究は《支那交際往来公牘 北京語直譯附》及び《北京官話 今古奇觀》の改編を対象に絞って、両書における編纂目的と改編過程を解明した。

《直譯附》は明治時代の中国語教科書の中で初めて公文を改編した著作であり、新たな教科書の形式を創出した。そこで選ばれた70件の公牘原文はそれぞれ内容が異なり、「啓牘」と「照會」2種類に分けられている。金氏と呉氏は当時の日清往来に欠かせないもの「公牘」の格例部分を削除し、原文内容に忠実な北京語に改編し、世に提供した。金氏と呉氏は《直譯附》を編纂しただけではなく、それに併せて使う《訓譯》も編纂し、公牘原文に使用された単語の説明と公牘原文の和訳を提供し、《直譯附》の使用附加価値を高めた。セットとなった二冊の著作は次の世代の編纂者達にも参考にされ、貴重な規範的な教科書となっている。

《北京官話 今古奇觀》(1904、1911)は原作《今古奇觀》から4つの物語を選んで、原作に用いられている明末清初の白話文を北京官話の口語文に改編した。金氏は改編にあたって、原作を非常に尊重しており、原作の“墙上題詩”と“入話”を削除した以外、内容の骨格は原作をほぼ残したものの、言葉や単語の使い方は原作を大幅に変えている。改編において、金氏は北京語に最も特徴的な「アル化」語を140個増やした。さらに、物語をよりスムーズに読むためだけでなく、文章の表現に一貫性とより高い完成度を持たせるため、主語、挿入語、接続詞、助詞“的”も数多く加えた。語彙の書き換えにお

いて、金氏は1種類のみを用法を主に使用し、ほかの同義語の使用を控える傾向があったと考えられる。

③ 3名の著者関連研究

金氏教科書の共編者は計6名で、鄭永邦、呉啓太、呉泰壽の生涯については、先行研究の考察が詳細であるのに対し、平岩道知、瀬上恕治、鎌田弥助に関する記述は少ない。先行研究の不足を補充するためにも、三人の経歴を調査することによって、金氏の人物像を一層明らかにできると考え、アジア歴史資料センターの資料に基づいて三人の生涯を考察した結果、金氏との関わりが推測できた。

1. 平岩道知

平岩道知は京都生まれで、明治31年(1898)12月に金氏と共編で《北京官話:談論新編》を出版した。平岩道知は明治12年(1879)11月に陸軍参謀本部に支那語学生徒として採用され、12月に文部省漢語官費生として清国へ留学に行き、当時日本人に中国語を教える専門機関が北京公使館にしかなかったため、平岩道知は鄭永邦、呉啓太と同じく、北京公使館で金氏に中国語を教わった可能性があると考えられる。

2. 瀬上恕治

瀬上恕治は陸軍清語通訳官であり、金氏と共に清語同学会に勤務したことが確認できた。また、明治40年(1907)に金氏と共編で《華言分類撮要》を刊行したほか、中国語教科書を4冊出した。そのうちの2冊《北京官話万物声音:附・感投詞及発音須知》(1906)と《日文対照:官話問答新編》(1907)で、それぞれの「例書」と「例言」に2冊の教科書の校閲を金氏に依頼していたと言及したことから、瀬上恕治は金氏と良好な関係を築いていたことが推測できる。

3. 鎌田弥助

鎌田弥助は東京外国語大学清語科の学生であり、明治40年(1907)に金氏と共編で《摺紳談論新集》を出版したが、それ以外の出版物は見当たらなかった。明治43年(1910)1月13日に「清國三等第二雙龍寶星勲六等」を授与された。その後、長年に渡り、満鉄奉天公所に務めていた。鎌田弥助は東京外国語学校別科清語科の学生であったことが確認でき、金氏は明治30年(1897)から明治36年(1903)まで、高等商業学校附属東京外国語学校(現東京外国語大学の前身)の清語講師として勤務していたことから、おそらく鎌田弥助も金氏の教え子であったことが推測できる。

2. 今後の課題

本研究は金氏により出された北京官話教科書に焦点を当て、可能な限り、多角的な、かつ詳細な考察をした。そして一定の成果を得たが、金氏教科書において、さらに探求を進めていく余地は以下のように数多く残されている。

①金氏教科書において、介詞、動詞、助詞など今回の研究で触れていない部分か幾つか残っている。金氏教科書の言語性格をより明確に分析するため、これらの部分についての研究は不可欠である。

②金氏教科書と《兒女英雄伝》における“叫”構文、“讓”構文、“給”構文の使用状況と相違点を考察し、多少の結論は得たが、3つの構文における歴史変化をより一層明確にするため、両書の成書時代より早く、または遅く出された北京語資料との関連研究を更に行う必要がある。

③文末語気助詞「啊、呀、哪」については、いずれも感嘆を表すもので、「啊」を基幹として前音節の音声特徴によって変化する文末語気助詞である。「啊、呀、哪」についての内部関係、変化過程などの関連分析を音声学の側面から考察する必要がある。

引用文献

一 資料類

(1) 教科書

(中国語)

- 金國璞 平岩道知 1898《北京官話 談論新編》 文求堂書店
金國璞 1901《士商叢談便覽》(上卷) 文求堂書店
金國璞 1902《士商叢談便覽》(下卷) 文求堂書店
金國璞 吳泰壽 1902《支那交際往来公牘 北京語直譯附》 泰東同文局
金國璞 吳泰壽 1903《支那交際往来公牘訓譯》 泰東同文局
金國璞 1903《華言問答》 文求堂書店
金國璞 諸岡三郎編 1903《虎頭蛇尾》 諸岡三郎
鄭永邦 吳啓太合著 金國璞改訂 1903《改訂官話指南》(第一卷) 文求堂書店
金國璞 1904《北京官話 今古奇觀》 文求堂書店
金國璞 1907《北京官話 虎頭蛇尾》 德興堂印字局(北京)
金國璞 鎌田弥助 1907《摺紳談論新集》 文求堂書店
金國璞 瀬上恕治 1907《華言分類撮要》 文求堂書店
金國璞 1911《北京官話 今古奇觀(第二編)》 文求堂書店

(2) 小説

(中国語)

- 抱甕老人 1957《今古奇觀》 人民文学出版社

(3) 伝記資料

(日本語)

- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「日清通商航海条約締結ニ際シ彼我全権委員間ノ照会」 請求番号：A01200847900
アジア歴史資料センター所蔵 件名：「清国語学生徒旅券の義其筋へ照会の件」 請求番号：C04028651900
アジア歴史資料センター所蔵 件名：「属村上傭吉外1名家族御用船便乗お願の件」 請求番号：C03027047000
アジア歴史資料センター所蔵 件名：「11_13 支那語学生徒採用伺(柴田晃他11名)」 請求番号：C07080181200
アジア歴史資料センター所蔵 件名：「文部省漢語学生徒11名清国語学生徒中付に付通報方申入」 請求番号：C04028651700
アジア歴史資料センター所蔵 件名：「12_28 関口長之当省御用掛申付他」 請求番号：C07080589300
アジア歴史資料センター所蔵 件名：「瀬戸晋外1名雇員2採用の件」 請求番号：C06080715300
アジア歴史資料センター所蔵 件名：「4月16日 平岩書記、末吉書記休職を命じたる上は陸軍通訳採用方移牒」 請求番号：C09122001600
アジア歴史資料センター所蔵 件名：「5月14日 陸軍通訳草場謹三郎外1名関東洲民政署通訳に任命方移牒の件」 請求番号：C09122126800

- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「陸軍中将寺内正毅以下四名外国勲章記章受領及
佩用ノ件」 請求番号：A10112508300
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「陸軍大佐野村房次郎外四名叙位ノ件／関東都督
府翻訳官平岩道知、大阪府警視福原全吉、台湾総督府法院判官安保忠毅、農事試験
場技師理学博士三宅恒方」 請求番号：A11112536800
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「関東庁翻訳官平岩道知外十六名叙位ノ件○朝鮮
総督府検事内田守蔵外十二名」 請求番号：A11112933300
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「駐屯軍 平林1等計手以下2名賞与の件」 請
求番号：C08010304100
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「外務省月報（明治四十年一月分）／職員進退
（外・報3）」 請求番号：B13091306000
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「外務省月報（大正二年七月分）／発著（外・報
4）」 請求番号：B13091333700
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「9. 杭州（B-3-4-2-50_4_002）」 請求番号：
B11100168500
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「外務省月報（大正六年十一月分）／職務進退
（外・報5）」 請求番号：B13091357100
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「外務省月報（大正七年一月分）／職務進退
（外・報5）」 請求番号：B13091358000
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「93. 在外帝国総領事、領事、副領事（15名）の
現任地問合 海軍省経理局 出納」 請求番号：B15100882800
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「102. 在外帝国領事館並びに現任官氏名問合 海
軍省経理局出納」 請求番号：B15100883700
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「典獄有馬四郎助外三十七名叙位ノ件」 請求番
号：A11112620800
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「特命全権大使男爵林権助六名」 請求番号：
A10112865100
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「拓殖局、臨時防疫本部、満鉄、朝鮮総督、其他
自明治四十四年三月／分割2」 請求番号：B12082374400
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「牛心山『マグネサイト』鉱石」 請求番号：
B09041923900
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「奉天兌換停止問題（営口西義順破産ヲ含む）」
請求番号：B11090661300
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「奉天主要官民」 請求番号：C13032538600
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「奉天市政公所ノ乗合自動車経営ニ関スル件」 請
求番号：B12081089500
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「在外日本人学校教育関係雑件／学校調査関係 第
三巻 5. 奉天）」 請求番号：B04011676000
- アジア歴史資料センター所蔵 件名：「海軍少将黒井悌次郎外十三名外国勲章記章受領及
佩用ノ件」 請求番号：A10112704800
- 波多野太郎 編 1988『中国文學語學資料集成』（第一篇第二巻） 不二出版
- 六角恒廣 編 1991『中国語教本類集成』（第一集第四巻） 不二出版
- 波多野太郎 編 1995『中国語文資料彙刊』 不二出版社
- 日外アソシエーツ株式会社 編 2011『明治大正人物事典 I 政治・軍事・産業編』 日外
アソシエーツ
- 大場高志 2014「神田乃武文庫について」『一橋大学附属図書館研究開発室年報』第2号

日外アソシエーツ株式会社 編 2019『新訂増補 人物レファレンス事典 明治・大正・昭和（戦前）編Ⅲ』 日外アソシエーツ

（4）辞典

（中国語）

- 金受申 1964《北京话语汇》 商务印书馆
宋孝才 马欣华 1982《北京话词语例释》 铃木出版
陈 刚 1985《北京方言词典》 商务印书馆
徐世荣 1990《北京土语辞典》 北京出版社
陈 刚 宋孝才 张秀珍 1997《现代北京口语词典》 语文出版社
任继愈主编 1998《宗教大词典》 上海辞书出版社
齐如山 2008《北京土话》 辽宁教育出版社
王子光 王薇 2008《老北京方言土语》 北京燕山出版社
陈壁耀主编 2009《新编成语大辞典》 宁夏人民出版社
董树人 2010《新编北京方言词典》 商务印书馆
朱金甫 张书才主编 2011《清代典章制度辞典》 中国人民大学出版社
张鲁原 2011《中华古谚语大辞典》 上海大学出版社
温端政主编 2011《中国谚语大辞典》（辞海版） 上海辞书出版社
温端政主编 2011《中国俗语大辞典》（新一版） 上海辞书出版社
翟建波 2013《中国古代小说俗语大辞典》 上海辞书出版社
高艾军 傅 民 2013《北京话词典》 中华书局
温端政主编 2015《俗语大词典》 商务印书馆
商务印书馆辞书研究中心编 2015《新华成语词典》（第2版） 商务印书馆
中国社会科学院语言研究所词典编辑室编 2016《现代汉语词典》（第7版） 商务印书馆
郑微莉 周谦主编 2016《中华成语大词典》（第2版） 商务印书馆国际有限公司
宋永培 端木黎明主编 2017《汉语成语词典》（第7版） 四川辞书出版社
《成语大辞典》编委会编 2020《成语大辞典》（最新修订版 单色本） 商务印书馆国际有限公司

二 著述類

（日本語）

（1）著書

- 瀬上恕治 1906『北京官話万物声音:附・感投詞及発音須知』 徳興堂印字局
瀬上恕治 1907『日文對照:官話問答新篇』 東京 東亜公司
青柳篤恒 1907『評釈支那時文軌範』 博文館印刷所
太田辰夫 1958『中国語歴史文法』 江南書院
六角恒廣 横山宏 1975『中国語への道』 大修館書店
六角恒廣 1984『近代日本の中国語教育』 不二出版
六角恒廣 1985『中国語関係書書目:1867~1945』 不二出版
六角恒廣 1988『中国語教育史の研究』 東方書店
六角恒廣 1989『中国語教育史論考』 不二出版
六角恒廣 2001『中国語関係書書目:1867~2000（増補版）』 不二出版
六角恒廣 2002『中国語教育史稿拾遺』 不二出版

内田慶市 氷野善寛 2016『文化交渉と言語接触研究 官話指南の書誌的研究 付影印・語彙索引』 好文出版

(2) 論文

- 太田辰夫 1950「清代の北京語について」『中国語学』第34号 日本中国語学会
太田辰夫 1965「北京語の文法特点」『中国研究：経済・文学・語学 久重福三郎先生坂本一郎先生 還暦記念』 久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念行事準備委員会
太田辰夫 1969『中国語学新辞典』「近代漢語」(太田辰夫執筆) 中国語学研究会編
太田辰夫 1974「『兒女英雄傳』の言語」『日本中國學會報』第26集 日本中国学会
太田辰夫 1974「『兒女英雄傳』雜考」『神戸外大論叢』第25卷 第3号
太田辰夫 1974「『離婚』(老舍)の語法と語彙」『神戸外大論叢』第25卷 第1号
太田辰夫 1975「『兒女英雄傳』の副詞」『神戸外大論叢』第25卷 第1号
山田忠司 1998「北京語における「給」の発達について—『紅樓夢』,『兒女英雄伝』,老舍作品をめぐって」『大阪産業大学論集・人文科学編』 第96号
木村英樹 2000「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」『中国語学』 第247号
山田忠司 2001「『三俠五義』の言語について」『中国語学』 第248号
山田忠司 2003「“給”の解釈に関する若干の考察」『中国文化』第61号
山田忠司 2004「『北京官話 今古奇觀』の言語について」『文学部紀要』18(1) 文教大学文学部中国語文学科
黃漢青 2007「支那語研究舎の変遷及びその実態：支那語研究舎から北京同学会語学校までを中心に」『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』39号 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
今村圭 2012「明清白話小説における使役表現の変遷：“让”を中心に」『中国語学』第259号
楊鉄錚 2017『明治期中国語教育における伝統継承と近代化：金國璞、張廷彦と「官話指南」』東京学芸大学博士論文
鱒澤彰夫 2019『新しい時期区分による明治以降中国語教育史の研究』 早稲田大学博士論文
孫云偉 2020『明治期北京官話教科書「官話指南」及び学習補助教科書の総合研究』大東文化大学博士論文

(中国語)

(1) 著書

- 胡明扬 1987《北京话初探》 商务印书馆
罗常培 1989《语言与文化》 语文出版社
常瀛生 1993《北京土话中的满语》 北京燕山出版社
周一民 1998《北京口语语法・词法卷》 语文出版社
孙锡信 1999《近代汉语语气词》 语文出版社
丁声树等著 1999《现代汉语语法讲话》 商务印书馆
江蓝生 2000《近代汉语探源》 商务印书馆
冯春田 2000《近代汉语语法研究》 山东教育出版社
裴燕生 何庄 李祚明 杨若荷编 2003《历史文书(21世纪档案学系列教材)》 中国人民大学出版社
张卫东译 2002《语言自述集：19世纪中期的北京话》(英)威妥瑪著 北京大学出版社

- 石昌渝主编 2004《中国古代小说总目》（白话卷） 山西教育出版社
- 朱德熙 2009《语法讲义》 商务印书馆
- 张 斌 2010《现代汉语描写语法》 商务印书馆
- 张美兰 2011《明清域外官话文献语言研究》 东北师范大学出版社
- 杨杏红 2014《日本明治时期北京官话课本语法研究》 厦门大学出版社
- 蒋绍愚 2015《汉语历史词汇学概要》 商务印书馆
- 汪维辉 2017《东汉-隋常用词演变研究》（修订本） 商务印书馆
- 卢小群 2017《老北京土话语法研究》 中国社会科学出版社
- 黄伯荣 廖序东 2017《现代汉语》（增订六版） 高等教育出版社

（2）論文

- 朱德熙 1956《现代汉语形容词研究》《朱德熙文集 第二卷 汉语语法论文》商务印书馆
- 朱德熙 1979《与动词“给”相关的句法问题》《方言》第2期
- 陆俭明 1989《说量度形容词》《语言教学与研究》第3期
- 丁 锋 2000〈《官话萃珍》所见清末北京话儿化现象——兼谈儿化的语体、语法和语义功能〉《汉语教学研究》第3号
- 蒋绍愚 2002《“给”字句、“教”字句表被动的来源——兼谈语法化类推和功能扩展》
《语言学论丛》第二十六辑
- 张谊生 2003《近代汉语情态化副词“白”再议——兼论副词“白”的虚化方式和内部差异及联系》《乐山师范学院报》第18卷第1期
- 李 焱 2003〈《醒世姻缘传》语法研究〉厦门大学汉语言文字学博士学位论文
- 石毓智 2004《兼表被动和处置的“给”的语法化》《世界汉语教学》第3期（总第69期）
- 郭姝慧 2004《现代汉语致使句式研究》北京语言大学博士研究生学位论文
- 周 红 2009《动词“给”的语法化历程》《殷都学刊》第4期
- 王 静 2010〈《儿女英雄传》儿化词浅析〉《安庆师范学院学报（社会科学版）》第29卷第4期
- 黄晓雪 2010《“持拿”义动词的演变模式及认知解释》《语文研究》第3期（总第116期）
- 赵质群 2011〈《儿女英雄传》副词研究〉宁波大学硕士专业学位论文
- 李无未 杨杏红 2011〈清末民初北京官话语气词例释——以日本明治时期北京官话课本为依据〉《汉语学习》2011年第1期
- 陈明娥 李无未 2012〈清末民初北京话口语词汇及其汉语史价值——以日本明治时期北京官话课本为例〉《厦门大学学报》2012年第2期
- 朱 洪 2013《晚晴海关洋员汉语学习初步研究》南京大学 硕士研究生学位论文
- 杨杏红 2013〈日本明治时期北京官话课本中的儿话词〉《长春师范学院学报（人文社会科学版）》第32卷第6期
- 陈 晓 2013〈清末民初北京话里的程度副词“所”〉《中国语文》2013年第2期 总第353期
- 山田忠司 2015〈北京话的特点——围绕太田博士提出的七个特点——〉《现代汉语的历史研究》
浙江大学出版社
- 山田忠司 2016〈太田辰夫的北京话研究〉『中国語研究』第58号
- 邓 岩 2017〈《儿女英雄传》语气词研究——兼与《红楼梦》比较〉黑龙江大学硕士研究生学位论文
- 魏兆惠 2017〈清代北京官话特殊副词“白”来源于满语的若干旁证〉《中央民族大学学报（哲学社会科学版）》2017年第4期 第44卷（总第233期）

既発表論文と各章関係

- 第1章 「《北京官話：今古奇觀》對於《今古奇觀》所作字句增刪之研究」 『語学教育研究論叢』第36号 大東文化大学語学教育研究所 2019 pp. 123-142
- 「《北京官話：今古奇觀》改編による語彙の書き換えから見た清末北京語文法」 『東アジア国際言語研究』第3号 2022 pp. 142-152
- 「金国璞『支那交際往来公牘—北京語直譯附』（1902）の原文改編と北京語表現」 『中国言語文化学研究』第8号 大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻 2019 pp. 89-102
- 第2章 「金国璞北京語会話教科書における清末北京語の特徴」 『中国言語文化学研究』第11号 大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻 2022 pp. 149-160
- 「金国璞の中国語教科書における北京語語彙研究」 『中国言語文化学研究』第9号 大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻 2020 pp. 43-52
- 第3章 「金国璞北京語会話教科書における副詞の使用——《儿女英雄传》との比較」 『中国言語文化学研究』第10号 大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻 2021 pp. 62-71
- 「金国璞北京語会話教科書における文末語気助詞の使用——《兒女英雄伝》との比較」 『東アジア国際言語研究』第2号 2021 pp. 171-181

付録：金氏教科書における「アル化」語種類別で使用頻度と使用割合一覧表

番号	語彙	頻度	割合	番号	語彙	頻度	割合
1	那兒	234	8.33%	238	打價兒	1	0.04%
2	時候兒	212	7.55%	239	打鳴兒	1	0.04%
3	一點兒	180	6.41%	240	打頭兒	1	0.04%
4	地方兒	174	6.20%	241	打戰兒	1	0.04%
5	這兒	131	4.67%	242	大鞍兒車	1	0.04%
6	工夫兒	86	3.06%	243	大號兒	1	0.04%
7	一塊兒	86	3.06%	244	大腦門兒	1	0.04%
8	點兒	77	2.74%	245	大小兒	1	0.04%
9	今兒個	65	2.31%	246	大卸八塊兒	1	0.04%
10	今兒	60	2.14%	247	大宗兒	1	0.04%
11	有點兒	58	2.07%	248	帶理不理兒	1	0.04%
12	昨兒個	50	1.78%	249	單張兒	1	0.04%
13	媳婦兒	45	1.60%	250	當中間兒	1	0.04%
14	那邊兒	40	1.42%	251	地兒	1	0.04%
15	門口兒	39	1.39%	252	地面兒	1	0.04%
16	昨兒	36	1.28%	253	地名兒	1	0.04%
17	傍邊兒	34	1.21%	254	地皮兒	1	0.04%
18	這樣兒	31	1.10%	255	地主兒	1	0.04%
19	各樣兒	29	1.03%	256	燈節兒	1	0.04%
20	兩樣兒	25	0.89%	257	燈市口兒	1	0.04%
21	一半兒	25	0.89%	258	店兒	1	0.04%
22	頭兒	22	0.78%	259	東頭兒	1	0.04%
23	一樣兒	22	0.78%	260	動不動兒	1	0.04%
24	明兒個	21	0.75%	261	肚兒	1	0.04%
25	一邊兒	19	0.68%	262	肚臍眼兒	1	0.04%
26	幾樣兒	17	0.61%	263	多兒錢	1	0.04%
27	明兒	16	0.57%	264	方兒	1	0.04%
28	慢慢兒	15	0.53%	265	房架兒	1	0.04%
29	那樣兒	14	0.50%	266	放出兒	1	0.04%
30	一會兒	14	0.50%	267	浮面兒	1	0.04%
31	差一點兒	13	0.46%	268	復原兒	1	0.04%
32	村莊兒	13	0.46%	269	該班兒	1	0.04%
33	這邊兒	13	0.46%	270	蓋碗兒	1	0.04%
34	好好兒	12	0.43%	271	趕情兒的	1	0.04%
35	人群兒	12	0.43%	272	高點兒興	1	0.04%
36	多一半兒	11	0.39%	273	各斷兒	1	0.04%
37	前兒個	11	0.39%	274	個個兒	1	0.04%
38	東邊兒	10	0.36%	275	拱手兒	1	0.04%
39	聲兒	10	0.36%	276	瓜子兒	1	0.04%
40	西邊兒	10	0.36%	277	卦攤兒	1	0.04%
41	細細兒	10	0.36%	278	拐灣兒	1	0.04%
42	天天兒	9	0.32%	279	官帽兒	1	0.04%

43	一個人兒	9	0.32%	280	逛青兒	1	0.04%
44	故事兒	8	0.28%	281	規模兒	1	0.04%
45	漸漸兒	8	0.28%	282	鬼臉兒	1	0.04%
46	鳥兒	8	0.28%	283	櫃房兒	1	0.04%
47	外面兒	8	0.28%	284	蝸蝸兒	1	0.04%
48	一聲兒	8	0.28%	285	過兒	1	0.04%
49	這麼樣兒	8	0.28%	286	還價兒	1	0.04%
50	跟前兒	7	0.25%	287	寒鴉兒	1	0.04%
51	價兒	7	0.25%	288	漢仗兒	1	0.04%
52	快快兒	7	0.25%	289	好兒（形容詞）	1	0.04%
53	兩邊兒	7	0.25%	290	好些樣兒	1	0.04%
54	女孩兒	7	0.25%	291	河沿兒	1	0.04%
55	滋味兒	7	0.25%	292	黑道兒	1	0.04%
56	納悶兒	6	0.21%	293	猴兒	1	0.04%
57	輕輕兒	6	0.21%	294	蝴蝶兒	1	0.04%
58	人家兒	6	0.21%	295	會齊兒	1	0.04%
59	俗語兒	6	0.21%	296	活話兒	1	0.04%
60	一家兒	6	0.21%	297	活路兒	1	0.04%
61	一所兒	6	0.21%	298	火碗兒	1	0.04%
62	遠遠兒	6	0.21%	299	吉利兒	1	0.04%
63	左邊兒	6	0.21%	300	幾步兒	1	0.04%
64	大褂兒	5	0.18%	301	擱條兒麵	1	0.04%
65	哥兒倆	5	0.18%	302	幾天兒	1	0.04%
66	胡同兒	5	0.18%	303	家常兒	1	0.04%
67	件數兒	5	0.18%	304	家做兒	1	0.04%
68	臉兒	5	0.18%	305	價碼兒	1	0.04%
69	買主兒	5	0.18%	306	賤賤兒	1	0.04%
70	起頭兒	5	0.18%	307	薦主兒	1	0.04%
71	童兒	5	0.18%	308	餃兒	1	0.04%
72	味兒	5	0.18%	309	叫大小起兒	1	0.04%
73	些兒	5	0.18%	310	叫起兒	1	0.04%
74	顏色兒	5	0.18%	311	街儘溜兒	1	0.04%
75	班兒	4	0.14%	312	借主兒	1	0.04%
76	帶肚兒	4	0.14%	313	儘量兒	1	0.04%
77	當面兒	4	0.14%	314	景致兒	1	0.04%
78	隔壁兒	4	0.14%	315	酒舖兒	1	0.04%
79	官座兒	4	0.14%	316	舉動兒	1	0.04%
80	街面兒	4	0.14%	317	炕琴兒	1	0.04%
81	老頭兒	4	0.14%	318	口兒（名詞）	1	0.04%
82	略節兒	4	0.14%	319	口話兒	1	0.04%
83	門礮兒	4	0.14%	320	塊兒（量詞）	1	0.04%
84	那一半兒	4	0.14%	321	老爺兒	1	0.04%
85	旁邊兒	4	0.14%	322	籬笆門兒	1	0.04%
86	前邊兒	4	0.14%	323	連襟兒	1	0.04%
87	這個樣兒	4	0.14%	324	涼風兒	1	0.04%
88	這一邊兒	4	0.14%	325	兩股兒	1	0.04%
89	坐一坐兒	4	0.14%	326	兩下兒鐘	1	0.04%
90	擺渡口兒	3	0.11%	327	翎毛兒	1	0.04%
91	半道兒	3	0.11%	328	卵子兒	1	0.04%

92	北邊兒	3	0.11%	329	落脚兒	1	0.04%
93	本主兒	3	0.11%	330	綠葉兒	1	0.04%
94	鼻樑兒	3	0.11%	331	蘇楷棍兒	1	0.04%
95	步行兒	3	0.11%	332	貓兒	1	0.04%
96	村兒	3	0.11%	333	沒信兒	1	0.04%
97	打牙涮嘴兒	3	0.11%	334	門戶帖兒	1	0.04%
98	道兒	3	0.11%	335	面龐兒	1	0.04%
99	對面兒	3	0.11%	336	那一樣兒	1	0.04%
100	古時候兒	3	0.11%	337	那莊兒	1	0.04%
101	櫃面兒	3	0.11%	338	男兒	1	0.04%
102	過兩天兒	3	0.11%	339	年頭兒	1	0.04%
103	後半天兒	3	0.11%	340	念頭兒	1	0.04%
104	後門兒	3	0.11%	341	娘兒們	1	0.04%
105	就手兒	3	0.11%	342	拍手兒	1	0.04%
106	嚼過兒	3	0.11%	343	平帳房兒	1	0.04%
107	看熱鬧兒	3	0.11%	344	起名兒	1	0.04%
108	拉手兒	3	0.11%	345	棄主兒	1	0.04%
109	路數兒	3	0.11%	346	前兒	1	0.04%
110	模樣兒	3	0.11%	347	前兩篇兒	1	0.04%
111	那點兒	3	0.11%	348	前門兒	1	0.04%
112	那一邊兒	3	0.11%	349	前面兒	1	0.04%
113	南邊兒	3	0.11%	350	強盜頭兒	1	0.04%
114	跑堂兒	3	0.11%	351	窮樣兒	1	0.04%
115	偏偏兒	3	0.11%	352	人兒	1	0.04%
116	取笑兒	3	0.11%	353	人影兒	1	0.04%
117	人緣兒	3	0.11%	354	三病九痛兒	1	0.04%
118	神情兒	3	0.11%	355	三兩天兒	1	0.04%
119	說話兒	3	0.11%	356	三下兒	1	0.04%
120	歲數兒	3	0.11%	357	三下兒多鐘	1	0.04%
121	偷偷兒	3	0.11%	358	三下兒鐘	1	0.04%
122	外號兒	3	0.11%	359	喪帖兒	1	0.04%
123	碗兒	3	0.11%	360	嗓子眼兒	1	0.04%
124	像聲兒	3	0.11%	361	山頂兒	1	0.04%
125	歇一歇兒	3	0.11%	362	上班兒	1	0.04%
126	一段兒	3	0.11%	363	上面兒	1	0.04%
127	早早兒	3	0.11%	364	繩兒	1	0.04%
128	這點兒	3	0.11%	365	時不常兒	1	0.04%
129	中間兒	3	0.11%	366	實地兒	1	0.04%
130	暗記兒	2	0.07%	367	事兒	1	0.04%
131	擺手兒	2	0.07%	368	收條兒	1	0.04%
132	便帽兒	2	0.07%	369	書本兒	1	0.04%
133	便衣兒	2	0.07%	370	書本兒	1	0.04%
134	趁早兒	2	0.07%	371	拴馬椿兒	1	0.04%
135	出花兒	2	0.07%	372	爽爽快快兒	1	0.04%
136	打盹兒	2	0.07%	373	水坑子邊兒	1	0.04%
137	大前兒個	2	0.07%	374	水牛兒	1	0.04%
138	等一等兒	2	0.07%	375	四下兒來鐘	1	0.04%
139	等一等兒	2	0.07%	376	四至兒	1	0.04%
140	段兒（名詞）	2	0.07%	377	松鼠兒	1	0.04%

141	對過兒	2	0.07%	378	隨手兒	1	0.04%
142	多半天兒	2	0.07%	379	聽信兒	1	0.04%
143	古兒詞	2	0.07%	380	妥當樣兒	1	0.04%
144	官兒	2	0.07%	381	瓦塊兒	1	0.04%
145	官面兒	2	0.07%	382	玩兒	1	0.04%
146	好年成兒	2	0.07%	383	頑兒	1	0.04%
147	後兒	2	0.07%	384	五下兒鐘	1	0.04%
148	後手兒	2	0.07%	385	杌欌兒	1	0.04%
149	候一候兒	2	0.07%	386	戲法兒	1	0.04%
150	夥伴兒	2	0.07%	387	戲名兒	1	0.04%
151	紀念兒	2	0.07%	388	下巴頰兒	1	0.04%
152	家當兒	2	0.07%	389	下班兒	1	0.04%
153	解悶兒	2	0.07%	390	下場門兒	1	0.04%
154	金剛鑽兒	2	0.07%	391	下場門兒	1	0.04%
155	酒盅兒	2	0.07%	392	下房兒	1	0.04%
156	客座兒	2	0.07%	393	閑話兒	1	0.04%
157	空手兒	2	0.07%	394	現成兒	1	0.04%
158	面兒	2	0.07%	395	響動兒	1	0.04%
159	那家兒	2	0.07%	396	小鞍兒車	1	0.04%
160	年年兒	2	0.07%	397	小點兒	1	0.04%
161	努嘴兒	2	0.07%	398	小富貴兒	1	0.04%
162	悄不聲兒	2	0.07%	399	小官兒	1	0.04%
163	蝻蝻兒	2	0.07%	400	小買賣兒	1	0.04%
164	雀鳥兒	2	0.07%	401	小女孩兒	1	0.04%
165	人人兒	2	0.07%	402	小人兒科	1	0.04%
166	三樣兒	2	0.07%	403	小聲兒	1	0.04%
167	沈重兒	2	0.07%	404	小事兒	1	0.04%
168	甚麼樣兒	2	0.07%	405	小說兒	1	0.04%
169	手式兒	2	0.07%	406	小意思兒	1	0.04%
170	書香人家兒	2	0.07%	407	小姪兒	1	0.04%
171	數兒	2	0.07%	408	笑容兒	1	0.04%
172	耍貨兒	2	0.07%	409	行次兒	1	0.04%
173	耍貨兒	2	0.07%	410	行兇兒	1	0.04%
174	頭目人兒	2	0.07%	411	尋宿兒	1	0.04%
175	頭生兒	2	0.07%	412	嚴嚴兒	1	0.04%
176	土物兒	2	0.07%	413	眼兒	1	0.04%
177	退身步兒	2	0.07%	414	眼犄角兒	1	0.04%
178	外樣兒	2	0.07%	415	眼圈兒	1	0.04%
179	戲單兒	2	0.07%	416	眼珠兒	1	0.04%
180	像篇兒	2	0.07%	417	羊羔兒	1	0.04%
181	小兒	2	0.07%	418	樣數兒	1	0.04%
182	小賣兒	2	0.07%	419	樣樣兒	1	0.04%
183	笑話兒	2	0.07%	420	夜班兒	1	0.04%
184	笑臉兒	2	0.07%	421	一般兒	1	0.04%
185	歇歇兒	2	0.07%	422	一個樣兒	1	0.04%
186	眼色兒	2	0.07%	423	一股兒	1	0.04%
187	樣兒（名詞）	2	0.07%	424	一禮兒	1	0.04%
188	要路口兒	2	0.07%	425	一連串兒	1	0.04%
189	一撥兒	2	0.07%	426	一兩天兒	1	0.04%

190	一分兒	2	0.07%	427	一溜兒	1	0.04%
191	一氣兒	2	0.07%	428	一頭兒	1	0.04%
192	一竅兒不通	2	0.07%	429	衣兒	1	0.04%
193	右邊兒	2	0.07%	430	意見兒	1	0.04%
194	早晚兒	2	0.07%	431	陰涼兒	1	0.04%
195	帳房兒	2	0.07%	432	銀滴珠兒	1	0.04%
196	這麼點兒	2	0.07%	433	影兒	1	0.04%
197	姪兒	2	0.07%	434	用主兒	1	0.04%
198	主麻兒	2	0.07%	435	油漆門兒	1	0.04%
199	準準兒	2	0.07%	436	有空兒	1	0.04%
200	岸邊兒	1	0.04%	437	魚兒	1	0.04%
201	八字兒	1	0.04%	438	玉簪棒兒	1	0.04%
202	把兒缸子	1	0.04%	439	原封兒不動	1	0.04%
203	把兒拿子	1	0.04%	440	原告兒	1	0.04%
204	白兔兒	1	0.04%	441	圓墳兒	1	0.04%
205	半截兒	1	0.04%	442	遠處兒	1	0.04%
206	半天兒	1	0.04%	443	雜樣兒	1	0.04%
207	包兒	1	0.04%	444	災病兒	1	0.04%
208	被告兒	1	0.04%	445	早半天兒	1	0.04%
209	本兒	1	0.04%	446	棗兒紅	1	0.04%
210	並排兒	1	0.04%	447	怎麼樣兒	1	0.04%
211	不遠兒	1	0.04%	448	眨眼兒	1	0.04%
212	布碟兒	1	0.04%	449	站人兒	1	0.04%
213	蒼蠅刷兒	1	0.04%	450	賬房兒	1	0.04%
214	草帽兒	1	0.04%	451	兆頭兒	1	0.04%
215	茶碟兒	1	0.04%	452	這撥兒	1	0.04%
216	茶几兒	1	0.04%	453	這面兒	1	0.04%
217	岔道口兒	1	0.04%	454	這一半兒	1	0.04%
218	差不多兒	1	0.04%	455	這一步兒	1	0.04%
219	產業兒	1	0.04%	456	這宗晚兒	1	0.04%
220	長法兒	1	0.04%	457	這宗樣兒	1	0.04%
221	長方形兒	1	0.04%	458	整宗兒	1	0.04%
222	長辛店兒	1	0.04%	459	姪女兒	1	0.04%
223	常常兒	1	0.04%	460	指甲草兒	1	0.04%
224	唱本兒	1	0.04%	461	紙截兒	1	0.04%
225	唱咄兒	1	0.04%	462	置主兒	1	0.04%
226	沉重兒	1	0.04%	463	中等兒	1	0.04%
227	成衣兒	1	0.04%	464	中路兒	1	0.04%
228	尺頭兒	1	0.04%	465	珠寶巷兒	1	0.04%
229	翅膀兒	1	0.04%	466	竹杆巷兒	1	0.04%
230	熾爐兒	1	0.04%	467	住房兒	1	0.04%
231	出息兒	1	0.04%	468	準兒	1	0.04%
232	春捲兒	1	0.04%	469	桌兒	1	0.04%
233	聰聰明明兒	1	0.04%	470	總碼兒	1	0.04%
234	躡等兒	1	0.04%	471	租底兒	1	0.04%
235	存主兒	1	0.04%	472	嘴唇邊兒	1	0.04%
236	錯兒	1	0.04%	473	左右兒	1	0.04%
237	打糙兒	1	0.04%	474	座兒	1	0.04%

謝辞

本論文の遂行にあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。

指導教員の大東文化大学外国語研究科中国言語文化学専攻丁鋒教授には終始適切なご指導を賜りました。ここに深謝の意を表します。

同研究科教授大島吉郎先生、並びに元大東文化大学教授瀬戸口律子先生、文教大学文学部中国語中国文学科教授山田忠司先生、元杏林大学特任教授板垣友子先生、そして、筆者の母校である西安培華学院、人文与国際教育学院准教授王増智先生には、本論文の作成にあたり、貴重な提言、ご助言、激励を賜りました。心より感謝申し上げます。

最後に、日々支えてくださった家族、友人、同研究室の先輩と後輩に厚く感謝いたします。

2023年3月